

2012 年度 根力育成プログラム

「プロジェクト実習（スタッフ編）」
活動報告書

2013 年 3 月

茨城大学人文学部

巻頭言

人文学部長 伏見 厚次郎

2010年度に文部科学省の就業力育成支援事業GP獲得によって展開可能となった本学の根力育成プログラムは、5年計画の上記支援事業が2年目で政策仕分けの対象となって打ち切りとなったが、その後「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備プロジェクト」に選定された結果、上記プログラムの安定的継続が可能となった。出だしでこのような予算上の障害に見舞われたとはいえ、本学部における根力育成プログラムは鈴木敦教授を中心として好調なスタートを切ることが出来た。

社会に出て働いていく力、社会人としての基礎的な力を指す「就業力」（これを本プログラムでは「根力（ねぢから）」と称する）を学生の皆さんが身に付けていくのを支援するのがこの根力育成プログラムの主たる目的であるが、この根力を学生の皆さんが自覚的・主体的に、そして計画的に身につけていくことを手助けするのが「人文学部根力育成プログラム」である。

本プログラムの詳細は、本書の第I章「茨城大学根力育成支援事業の概要とプロジェクト実習の位置付け」に譲るが、本プログラムは1年間の試行期間を経て、平成24年度から第一段階の「根力養成プログラム」である1年生向けの「フレッシュマンゼミナール」と2年生向けの「就業力育成ステップアップ系科目」が正式開講された。更に、これと並んで、本プログラムの第二段階である「根力強化プログラム」を構成する科目の一つである2・3年生向けの「プロジェクト実習（スタッフ編）」が試験開講した。今年度は試験開講にもかかわらず人文・教育の両学部から合計20名あまりの学生が4つのチームに分かれて、チームごとに設定したプロジェクトを遂行して、根力強化に取り組んだ。このような形態の授業はPBL（Project Based Learning：課題解決型学習）授業と呼

ばれるもので、いわゆる座学（講義形式の授業）とは一線を画するものである。このようなタイプの授業は今後も増えていくと思われるが、それが成功するかどうかは、まずその運営・管理体制が確立されるかどうか、更にどれ位の教員がこのタイプの授業に進んでコミットするか、にかかっているとと言っても過言ではない。前者に関しては本学部の「根力育成プログラム小委員会」が中心となってその任を担うと思われる。また、今後このプログラムの授業の一部は単位互換協定を結んでいる他大学の学生にも開放されると期待される。

新しいタイプの授業形態の展開には苦勞がつきものである。しかし、この報告書での学生達の生き生きとした報告に目を通すと、今回の授業が如何に実り多きものであったかが明らかである。このプログラムの完成時にどれ位の学生が「根力育成プログラム修了証」を交付されるのか、今から大いに楽しみである。

はじめに

プロジェクト実習担当 鈴木 敦

根力育成プログラムは、平成 23 年度から学年進行で整備中である。今年度はいよいよその第二段階である根力強化プログラムの中核をなすものとして、PBL 技法に基づく「プロジェクト実習（スタッフ編）」が開講された。平成 25 年度からの本格開講に向けた試行的位置づけでの開講のため、学生へのガイダンスは意識的に控えめにしたにも拘わらず、教育学部からの受講生を含めて 20 名余が集まり、4 チームに分かれて意欲的に取り組んでくれた。

本報告書は、一年間の活動の締めくくりとして履修学生自身の手で編集・刊行されたものである。その中核をなす第Ⅲ章「チーム別活動報告」は、各チームがそれぞれ独立の報告書を作成するという気構えで編集され、さながら 4 種の報告書の合訂本の如き体裁をなしている。その分やや統一性に欠ける所もあるが、学生達の意のある所を汲んで戴ければ幸いである。

本報告書には、第一義的に今年度のプロジェクト実習ならびに本学根力育成プログラムの進展に御支援を戴いた皆様へのご報告と御礼の意を込めた。この場を借りて深く感謝申し上げます。

同時に、本報告書には平成 25 年度の「プロジェクト実習（スタッフ編）」並びに同年より開講される根力実践プログラム「プロジェクト実習（リーダー編）」の受講生諸君に種々の参考情報を提供することも企図されている。まだ見ぬ来年度の受講生達が、大いに活用してくれることを期待している。

目次

巻頭言

はじめに

目次

I : 茨城大学根力育成支援事業の概要とプロジェクト実習の位置付け	1
II : 平成 24 年度「プロジェクト実習（スタッフ編）」実施報告	9
III : チーム別活動報告	
1 : 震災チーム	31
2 : 里美 Café チーム	83
3 : 茨大捜査線チーム	151
4 : インターナショナルチーム	183
IV : 学生表彰	253
V : 平成 24 年度の成果と今後の課題	259
おわりに	263
編集後記	

I : 茨城大学根力育成支援事業の概要と プロジェクト実習の位置付け

- 1 : 「根力（ねぢから）」とは
- 2 : 「茨城大学根力育成支援事業」とは
- 3 : 茨城大学根力育成支援事業の実施ロードマップ
- 4 : 「根力育成プログラム」とは
- 5 : 「プロジェクト実習」の構造と位置づけ
- 6 : 平成 24 年度「プロジェクト実習」の実施状況と本書の位置付け

I : 茨城大学根力育成支援事業の概要とプロジェクト実習の位置付け

プロジェクト実習担当教員 鈴木 敦

本事業の全体像に関する詳細については、茨城大学就業力育成支援事業実施委員会編『平成 22・23 年度茨城大学就業力育成支援事業<根力育成プログラム>成果報告書』茨城大学大学教育センター発行（平成 24 年）に譲り、ここではごくかいつまんで記すこととする。

1 : 「根力（ねぢから）」とは

未曾有の就職難ならびに就職後の短期離職率の増大等を背景に、「大学生が卒業時に身につけているべき能力とは何か」が問われるようになって久しい。この問いへの回答として「学士力」「社会人基礎力」「就業力」等の概念が提示されてきたことも周知の通りである。

本学では「茨城大学学生が卒業時に身につけているべき能力」を検討し、これを「根力（ねぢから）」と名付けると共に、「社会人基礎力」を参照しつつ、その構成要素を図 1 のように整理した。

1.基礎的素養 *この素養の上に 「根力」を構築してい	読み	文章読解能力、論理的思考力、分析力
	書き	文章作成能力、論理的思考力、分析力
	ソロバン	基本的な IT 能力
	話す	説明能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力
2. 社会生活力	生活力	自立した生活を実践できる力
	人間関係構築力	生活を送る上で必要な、人間関係を円滑にするための力
	情報収集力	生活を送る上で必要な、情報がどこにあり、どのようにすれば入手できるかを把握する力
3. 行動力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
	対応力	物事に流されず、疑問に思い主体的に対応する力
4. 思考力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	想像力	課題が抱える影響、課題解決方法の影響など、状況をイメージする力
	課題解決力	課題の本質を捉え、適切な解決方法を提示する力
5. チームワーキング能力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

図 1 : 根力の構成要素

2 : 「茨城大学根力育成支援事業」とは

根力を育成する具体的方策として、平成 22 年度より文部科学省の補助金を得て「茨城大学根力育成支援事業」を展開中である (<http://nedikaragp.cue.ibaraki.ac.jp/>)。主な内容は以下の通りである。

- (1) 茨城大学卒業生が最低限有すべき能力を「根力」と規定し、その「根力の構成要素」の定義、それらへの効果的な教育内容・教育方法の展開
- ① 教養教育と専門教育を包括する「根力育成プログラム」の構築
 - ② 「PBL（課題対応型学習：Project Based Learning）技法」の導入
 - ③ 学生同士の相互教育体制（教育体制の循環）を構築するためのステューデントアシスタント制度の構築
 - ④ 学生一人一人の学習過程を教職員・学生自身、更には地理的に分散している部局間でも共有するための「電子ポートフォリオシステム」の導入

(2) 大学教育センターを司令塔とし、従来各センター・各部署が個別に取り扱って来た「根力育成」に関連する諸情報を「体系的に取りまとめた上で、分かりやすく、詳細で当を得た」形で収集・提供する体制の構築

3：茨城大学根力育成支援事業の実施ロードマップ

以下のロードマップに従って諸事業を実施していく。平成24年度末現在、順調に推移している。

	カリキュラム				インフラ				備考
	1年	2年	3年	4年	司令塔	ポートフォリオ	インターンシップ	SA	
22年度	3段階の各プログラムの中から、準備の進んでいる／終わっているものをそれぞれいくつかを試行				司令塔としての大教センター機能強化	設計～動作テスト	制度構築 受入先開拓	制度構築 養成制度試行	初年度は、地固めとしてのインフラ整備に重点
23年度	1年次向け授業 フレッシュマンゼミナールを試行	2年次前期向け授業（リアップ科目群）を試行 2年次後期～4年次向け授業の中から、準備の進んでいる／終わっているものを、それぞれいくつかを試行			司令塔としての大教センター機能強化	システム改善 フレッシュマンゼミナールで供用試行	制度改善 受入先開拓	制度改善 養成制度試行 フレッシュマンゼミナールで運用制度試行	1・2年次向け授業の24年度同時正式開講に向けた試行 インフラ整備の完成
24年度	1・2年次向け授業 正式開講		3年次向け授業で試行未了のものを試行 4年次向け授業の中から、準備の進んでいる／終わっているものをいくつか試行		司令塔としての大教センター運用	正式供用開始	新体制運用開始	1・2年次向け授業で正式運用開始	正式開講開始 学年進行 所定の中間評価実施
25年度	1～3年次向け授業正式開講			4年次向け授業で試行未了のものを試行	司令塔としての大教センター運用	正式供用	新体制運用	1～3年次向け授業で正式運用開始	学年進行
26年度	全授業正式開講				司令塔としての大教センター運用	正式供用	新体制運用	1～4年次向け授業で正式運用開始	完成年度 23年度入学生は、1年次受講科目が試行であるが、実質的に全カリキュラム内容を受容 独自に外部評価を実施
備考					22年度は事務補佐員、23～26年度は任期付教員を採用		受入先開拓の努力は、制度完成後も継続		外部評価を踏まえて27年度に改善し、28年度から第三次中期計画に沿って運用

* 太字は重点項目。必要経費を優先的に配分。

図2：茨城大学根力育成支援事業の実施ロードマップ

4：「根力育成プログラム」とは

根力育成推進事業の支柱となるカリキュラムである。具体的な構造を図3に示す。平成23年度の「フレッシュマンゼミナール」の試験開講を皮切りに、現在、学年進行で順次開講中である。

各段階の全学目標		根力育成プログラム		
第一段階	根力養成プログラム 学生の自発的学びを後押しし、社会で活躍するための基礎となる能力＝根力を育成するための土台を築く ①フレッシュマンゼミナール 高校生から大学生へ ②就業力育成ステップアップ系科目 自らの方向性を確認して次の段階へ	1年	根力養成プログラム ①フレッシュマンゼミナール	
		2年	②就業力育成ステップアップ系科目	根力強化プログラム
第二段階	根力強化プログラム 座学と実地体験を通じて、社会人として要求される能力を理解・養成する スキル養成プログラム 個々の分野で直接求められる基本的スキルを養成し、「資格」としてオーソライズする準備を整える	3年	根力強化プログラム	
		4年		
第三段階	根力実践プログラム 実際の活動を通じて、これまで培ってきた力を確認し、不足点を自覚して、自ら高めていく			

図3：根力育成プログラムの構造

5 : 「プロジェクト実習」の構造と位置づけ

プロジェクト実習は、根力育成プログラムの中核をなすPBL（課題対応型学習：Project Based Learning）技法に基づく科目である。以下の二段階からなる。

(1) プロジェクト実習（スタッフ編）

根力育成プログラムの第二段階「根力強化プログラム」の中核をなす。プロジェクト実習の履修経験が無い者が対象であり、主たる受講者として学部の2・3年次生を想定している。

(2) プロジェクト実習（リーダー編）

根力育成プログラムの第三段階「根力実践プログラム」の中核をなす。プロジェクト実習（スタッフ編）の履修経験者が対象であり、主たる受講者として学部の3・4年次生を想定している。

プロジェクト実習は、スタッフ編受講者とリーダー編受講者が一緒に一つのチームを結成し、自ら設定した課題に対して初心者・経験者それぞれの立場から積極的に取り組み、協働で解決してゆく場として設計されている。

6 : 平成24年度「プロジェクト実習」の実施状況と本書の位置付け

今年度初めて、鈴木敦担当の「プロジェクト実習（スタッフ編）」ならびに蜂屋大八担当の「地域づくりプロジェクト実習1（＝スタッフ編相当）」が開講された。PBL授業は初開講であること、ならびに科目の構造上初年度はスタッフ編のみでの片肺開講にならざるを得ないことを勘案し、安全策を取って小規模での開講を目指すこととした。このため積極的な広報は控えたにも拘わらず、前者には人文・教育2学部から20余名、後者には人文・工学2学部から4名が受講し、積極的に活動した。来年度からは、鈴木担当・蜂屋担当それぞれについて更にリーダー編も開講され、「初心者と経験者の協働による課題解決学習」という形態が完成する予定である。

本書は、この内の「プロジェクト実習（スタッフ編）」に関する報告書である。

Ⅱ：平成24年度 「プロジェクト実習（スタッフ編）」 実施報告

- 1：準備段階
- 2：シラバス
- 3：実施記録

Ⅱ：平成 24 年度「プロジェクト実習（スタッフ編）」実施報告

プロジェクト実習担当教員 鈴木 敦

1：準備段階

(1) 設計

筆者は専門性（中国考古学）の関係もあり、また恐らくは個人的な志向もあって、大学教員一般に比して、PBL<的>な活動を指導することについては比較的経験の蓄積があった方であると認識している。しかし単位を出す正規科目としての開講となると、所詮素人に過ぎない。このため、甚だお恥ずかしい限りであるが、根力育成プログラムの中核として PBL を盛り込んだ時点から、急遽先進事例に学ぶことから始めなければならなかった。

その際、科目設計の理念や枠組みといった部分で最も勉強させて戴いたのが、同志社大学 PBL 推進支援センター（センター長 山田和人先生 <http://ppsc.doshisha.ac.jp/index.html>）が開講している「プロジェクト科目」（<http://pbs.doshisha.ac.jp/index.html>）であった。

同じく、担当者としての履修学生との関わり方や地域との連携といった部分では、聖泉大学で「学びのフリーマーケット」（http://www.seisen.ac.jp/gakusei_seminar.html）を主催されている、有山篤利先生に多くを学ばせて戴いた。

この三年間、各方面から種々の予算的支援を戴きながら、様々な機会を捉えては PBL の勉強のための出張を繰り返してきたが、京都・彦根への出張回数は突出している。お二方から戴いた知識・ノウハウを核とし、書物からの知識や自らの経験等をさながら「おしゃれガラス」の如く組み合わせて、ともかくも今年度の科目設計ができあがった。

(2) 運営への支援要請

初年度は教員も初心者であれば学生も初心者である。加えて、設計上は存在する「リーダーとなる履修経験者」も存在しない。勢い、周囲の方々に様々なご支援を御願ひしなければならなくなる。幸いにして、筆者の無遠慮な支援依頼に皆さんが快く応えて下さったのは、本当にありがたいことであった。以下、実習の運営に直接的にご支援下さった方々のみを記すが、これ以外にも多くの方々のご支援を戴いた。記して感謝申し上げます。

①実習全体

文部科学省の補助金により、昨年 9 月から蜂屋大八先生が赴任された。PBL 技法に関する経験豊富な先生には、学内で実施するコマの全てについて同席して戴けた。

また、各チームの活動に際して直接的にアドバイスや支援をお引き受け戴く「顧問」として、三輪五十二先生（震災チーム）・蜂屋大八先生（里美 Café チーム）・菅谷克行先生（茨大捜査線チーム）・藤原智栄美先生（インターナショナルチーム）にご支援を戴いた。

②先進事例紹介（第 2 講）

今年度は履修経験者がいないことから、筆者自らが多くを学んだ先進事例について紹介する機会を設定したいと考えた。自らの経験に照らして、現地まで足を伸ばしてこそ分かる事柄もあることは間違いない。しかし履修者全員を関西まで送り込もうというのは土台無理な願望である。そこで、有山先生ならびに有山先生の下で中心的に活動して来られた学生さん（2 名）にご無理を御願ひし、遠路水戸までお運び戴くことになった。

③先行事例紹介（第 3 講）

「先進事例」程の完成度は望めないまでも、学生達に本学の先輩の取り組みを紹介し、「自分たちにもできる」という自信を持たせることが必要と考えた。筆者がこれまで指導してきた PBL<的>な>催しについて、在学中に中心的役割を果たした卒業生にも先行事例をお話願ひないかと考え、筆者が担当する中国考古学研究室の OG である、筑波大学大学院生の岡沙織さんに登壇して戴いた。

④チーム結成（第 5 講）

「見ず知らずの集団」を「チーム」に高めるためには、結成直後に適切なアイスブレイクを行うと共に、チームの何たるかを伝えねばならないが、筆者にはその知識・経験共に全く無い。そこで教育学部でコーチングを担当しておられる加藤敏弘先生に御登壇戴き、チーム結成を促して戴けることになった。

(3) 予算確保

プロジェクト実習は、その性質上学生の金銭的負担が否応なく生じてしまうと予想された。「学ぶからには自腹を切れ」と言うのは易い。しかし最低限の予算措置を準備しなければ、意欲はあっても金銭的制約から履修を諦めざるを得ない学生も出て来よう。国立大学法人たる茨城大学で開講する科目として、このハードルはできる限り低くしておかねばならないと考えた。

具体的な金額は、これまでの経験に照らして1チーム当たり5万円と算出した。問題は各チーム分用意しなければならないかということであるが、初開講ということで判断根拠となるデータは皆無である。最後は目をつぶって「履修登録者約20名・1チーム平均5名として4チーム=20万円」という額を算出した（幸いにして後日このヤマカン的中し、過不足のない予算措置を講ずることができた）。また、前記(2)①・②・③については交通費等の確保が必要になる。これらを踏まえて、前年度末に本学の教育改革推進経費の募集に人文学部の申請という形で応募させて戴き、幸いにして総額で60万円弱の予算を配分して戴くことができた。

後日談であるが、実際にチームが立ち上がってみると、震災チームのメンバーは本学学長に直接働きかけて財政支援を戴けることとなった。また国際チームは本学と茨城キリスト教大学との連携事業を担うこととなったため、これまた本部サイドから独自に予算を戴くことができた。これにより2チーム分の予算が浮き、思いがけず予算のやり繰りに一定の余裕を見込めることとなった。開講初年度で不確定要素が殊の外多い今年度の実習運営に当たって、非常にありがたいことであった。

また、茨苑祭における成果発表ならびに本報告書刊行にかかる予算の一部については、本学五浦美術文化研究所のプレゼンス予算から5万円のご支援を戴いた。

さらに、本報告書刊行に当たっては人文学部学部長裁量経費より8万円のご支援を戴いた。

財政状況が逼迫する中、学生の自発的努力と関係各部署の暖かいご支援により、予算上の不安を解消して戴けたことは、担当者として本当にありがたいことであった。記して感謝申し上げます。

2 : シラバス

以上、様々な方々のご好意・ご尽力に支えられて、ともかくもシラバスを書き上げることができた(図1)。それでもなお、実際に動かしてみなければ分からない部分も多かった。かくして「履修上の注意」には「大略上記の内容・順番を計画していますが、実習の展開に応じて順次修正して行きます。」との「言い訳」を加えざるを得なかった。実際の展開については、次節を参照されたい。

授業科目 英 訳 名	担当教員	開講 時期	曜日 講時	備考
プロジェクト実習(スタッフ編) Practical Training Using PBL	鈴木敦	通年	水 4	
概 要	根力強化プログラムの一環として、1年次における根力養成プログラムの履修成果を踏まえて、具体的なプロジェクト(Project)に自覚的に取り組むことをベース(Based)に、根力のさらなる習得(Learning)を目指す実習です。チームで一つのプロジェクトを完成させて行く中で、社会人として必須の種々の素養を実践的に学んでいきます。			
キ ー ワ ー ド	根力強化プログラム PBL プロジェクト スタッフ 実践			
到 達 目 標	1:プロジェクトの完成に向けて、自らの判断で課題を整理し、解決に向けて具体的なプランを立てる能力を身につける。 2:課題解決に向けて、チームの一員として、ルールに則った冷静な議論と積極的な実践ができる能力を身につける。 3:プロジェクト全体を振り返り、成果と課題・評価を文書してまとめる能力を身につける。			
授 業 計 画	(1)ガイダンス (2)先進事例紹介 (3)先行事例紹介 (4)企画プレゼン (5)チーム結成 (6)組織化 (7)構想発表会準備 (8)構想発表会 (9)構想発表会総括 (10)~(13)チーム活動(中間発表会準備を含む) (14)中間発表会 (15)中間発表会総括 (16)~(20)チーム活動(後期初回は「再起動」の会合) (21)~(26)企画直前準備一本番一後始末(他チームの本番参観と評価を含む) (27)報告会準備 (28)~(29)報告会 (30)活動総括			
履 修 上 の 注 意	今年度が初開講です。大略上記の内容・順番を計画していますが、実習の展開に応じて順次修正して行きます。冒頭のガイダンスに、忘れずに出席して下さい。 予習復習と遅刻の扱い:授業の趣旨に鑑みて、責任感を持って対応して下さい。 オフィスアワー:月4を原則としますが、メールでアポを取って貰えれば随時対応します。			
成 績 の 評 価 方 法	所謂「試験」は行いません。実習ならびにプロジェクトへの取り組み姿勢、貢献度を100%として評価します。			
教 科 書 ・ 参 考 書	教科書:なし 参考書:恐竜姉妹となかまたち『学生自主企画<文字をさわろう>展 全記録』2009年 茨城大学人文学部 歴史・文化遺産コース (非売品)			

図1 : 2012年度プロジェクト実習(スタッフ編)シラバス

3 : 実施記録

当初の予想通り、シラバス作成段階での配慮不足や想定外の事柄の発生により、実施内容を順次修正しながらの運営となった。しかし大枠が崩れることはなく、また「チーム活動」についても学生達は予想以上に自発的かつ活発に活動してくれたため、結果的に破綻無く全30講を終えることができた。

シラバスに記した通り、本実習は「全員が一堂に会しての活動」と「チームごとの活動」に大別される。本節では、専ら前者についてのみ時系列に沿って記してゆくこととする。チームごとの活動については、次章「チーム別活動報告」を参照されたい。

第1講：ガイダンス（4月4日・11日）

初開講ということで、某かの混乱を予想して予め同一ガイダンスを二回設定しておいた。果たして4月3日の荒天により2年生以上向けの全体ガイダンスは混乱を極め、4日の本実習のガイダンスも悪影響を被った。二回のガイダンスにより、漸く当初予定していた内容を伝えることができた。

ガイダンスでは、

- (1) 本学根力育成支援事業の概要とプロジェクト実習の位置付け
 - (2) 本実習の流れ（シラバスを再配布）
 - (3) 諸注意（予算関係を含む）
- 等について、時間をかけて説明した。

第2講：先進事例紹介（4月18日）

聖泉大学より、有山篤利教授並びに学生代表として同学4年次木村晃之氏・同3年次片山祐司氏にお出で戴き、聖泉大学におけるPBL活動についてご講義を戴いた。

聖泉大学では、既に早くキャリア教育のためのカリキュラムを構築し、2010年度より毎年の活動の総決算として、地域との密接な連携をベースに学生達の自主企画・運営による「学びベースの学園祭」ともいふべき「学びのフリーマーケット」を開催している。

有山先生からは、従来の「就職試験対策としてのキャリア教育」に対する疑問と、それへのアンチテーゼとしての聖泉大学キャリア教育カリキュラムの設計思想、その集大成としての学びのフリーマーケットに関するお話を戴いた（図3）。

学びのフリーマーケットは学生達による仮想会社組織「聖泉HSJ企画」（図2）が運営するため、総責任者は「代表取締役社長」の肩書きを持つ。木村・片山両氏からは、それぞれ2010年度・2011年度の社長を務められたお立場から、実際の活動に纏わる種々の事柄についてご紹介を戴いた（図4）。

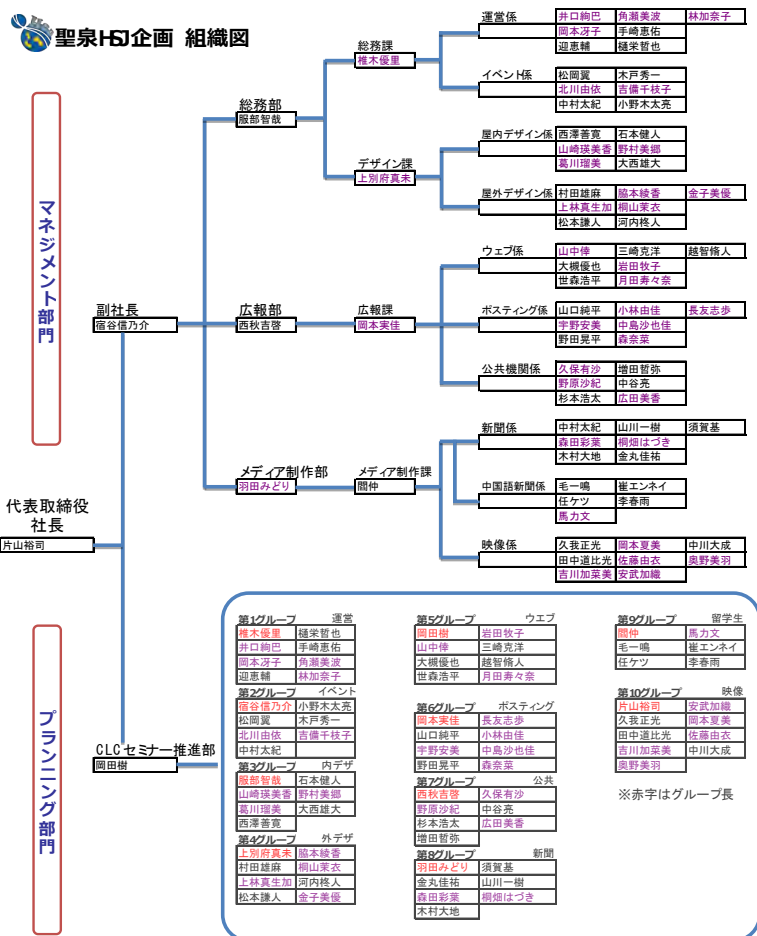


図2：聖泉HSJ企画 組織図

図 3 : 有山先生 PPT


茨城大学 プロジェクト実習(スタッフ編)

学びのフリーマーケット「聖泉CLCセミナー」

先行事例の紹介

「地域力循環型キャリア教育プログラム」
Career learning in Local-power Circulation Program

聖泉大学人間学部 有山 篤 利



1

CLCPにおけるキャリア教育

キャリア教育のゴール 「若者の就職」なのか？

「就職後、よき社会人としてどう生きていくのか」という問いに対して、確信ある答えを見出すこと

若者と職業の接続→社会に対する使命感(役割)の育成

自己実現

地域社会や会社を利用してどんな夢を手に入れるか

地域社会や会社にどんな夢を与えられるのか

(地域)社会に対する役割の自覚=使命感を養うキャリア教育

2

3年間を通したねらいとテーマ

CLCPにおける学習のねらい

「地域に貢献できる人材の育成」

3年間の学習テーマ

「私達は、地域や企業に、どんな夢を与えられるのか」

学生は、他者からの期待や感謝と引き換えに、結果として自己の成長を受け取る。

3

キャリア発達の聖泉モデル

キャリア発達とは…端的に言えば価値の「消費者」から「生産者」へのメタモルフォーゼの過程である

消費者 consumer 生産者 producer

変身 Metamorphose

学生 社会人

行動の原理： 価値の消費 → 価値の供給

行為の対象： 自己 → 他者

学習の構造： 何を学ぶのか → 何を創造するのか

もらう 与える

消費型の学びから再生産型の学びへ

4

オーバーワークの原則

V(value): その人が労働で創り出す価値(物・サービスなど)
S(salary): 給料 = 自分と家族の幸せ
P(profit): 会社の儲け = 会社の幸せ
C(cost): 人件費などのコスト = 仲間の幸せ
T(tax): 税金 = 国民の幸せ

$S = V - P - C - T$ 自己の生産する価値と給料は等価ではない。

$V = S + P + C + T$ 労働は他者の幸せをも創造する行為である。

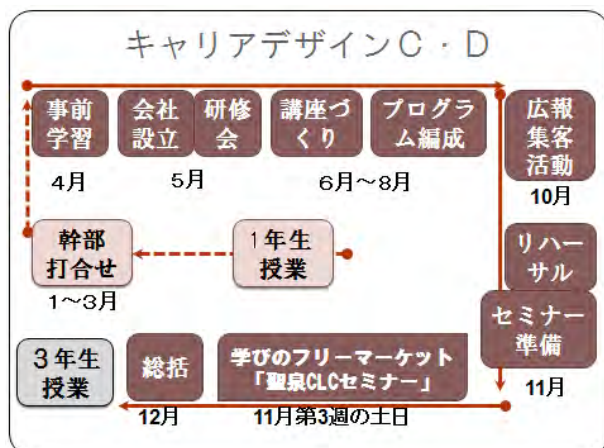
$P = V - S - C - T$ 会社は自分と仲間と国の幸せを創り出す義務を負う。

5

CLCのカリキュラム構成

	1年	2年	3年	4年
キャリア科目	キャリアデザイン A&B	キャリアデザイン C&D	キャリアアップ演習 A&B	就職活動
		インターンシップ		
進路支援		説明会の実施(公務員など)	進路ガイダンス・講座	
			個別面談	
				各種の資格取得

6



7



8

学習による成果（1）

学生の感想文をテキストマイニングによって分類

- 講座のプロデュースや講師交渉が**鮮烈な**学習体験であった
- コミュニケーションは、**マナーとセットでないと機能しない**
- 当事者意識や同じミッションを遂行する仲間意識が**向上した**
- 仕事の組織（会社）というものの**リアルな実感**をもてた
- 仕事は常に相手を想定した**相対的活動**であると気付いた
- 成し遂げたという**達成感**が得られたこと

9

学習による成果（2）

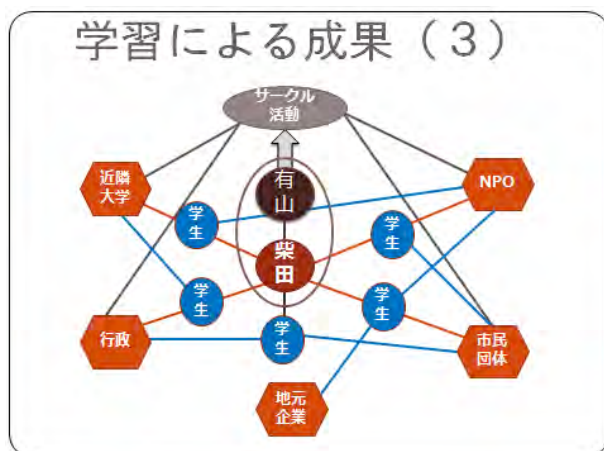
学生の変化

- **学生の自主活動の活性化**
 - ・地域と連携した学生団体、既存サークルの活性化
 - ・ボランティアに参加する学生の急増
- **集団凝集性の向上**
 - ・仲間意識の共有⇒退学者数の減少数傾向
- **職業観・勤労観の確立**
 - ・会社説明会の報告の質的变化

地域の変化

- ボランティアや行事参加の**依頼が増加**
- **地域からの期待を実感**
 - ・「地域のために」を意識した学生の多さ

10



11

滋賀の幸せを支援する団体 (Shiga) (Shiwase) (Shien)

SSS(トリプルエス)

＜活動内容＞
滋賀県産地産地産品を大学が消費し、滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献している。また、SSSは滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献している。

＜活動目的＞
滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献し、滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献する。

＜活動内容＞
滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献し、滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献する。

＜活動目的＞
滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献し、滋賀県産地産地産品を消費する事業に貢献する。

感動！新食感

「カリっとジュース」

感動！新食感

＜出資詳細＞
販売向け量産キット（材料、レシピ）※詳細は別途

滋賀県産地産地産品
近隣大学 NPO 市民団体 行政 地元企業

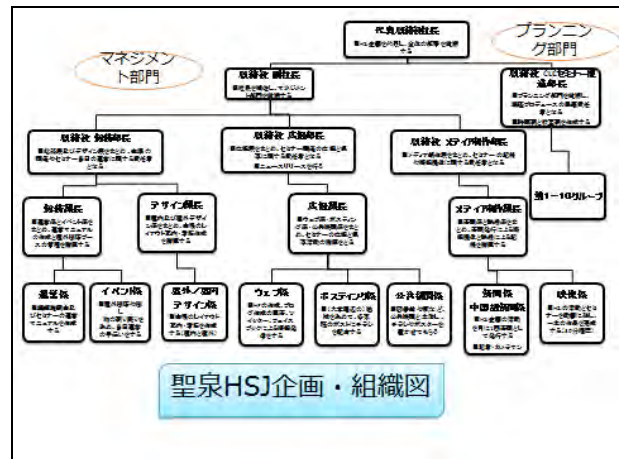
12

図 4 : 片山氏 PPT

毎週の授業の流れ

- ◆水曜昼休み 取締役会議
部長以上が集まって原案作成
- ◆金曜昼休み 戦略本部会議
課長以上が集まって打合せ
- ◆金曜午後 授業
 - ①全体会...学生が運営
(社長のあいさつ、部長からの指示、連絡事項など)
 - ②所属課ごとの打合せ...課長やグループ長が運営
(講座依頼の情報交換、各係の業務打合せなど)

1



2

H S J 新聞

3

授業風景

4

設立式典

5

広報・リハーサル

6

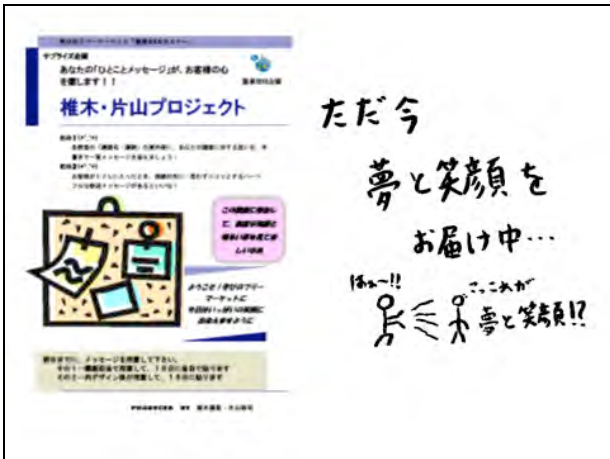
講師認定証



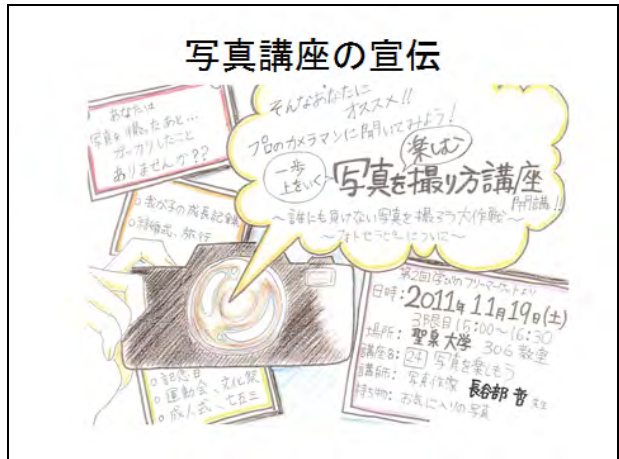
7



8



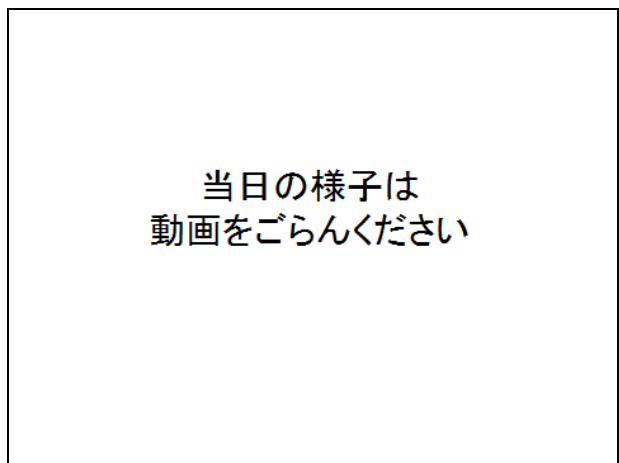
9



10



11



12

第3講：先行事例紹介（4月25日）

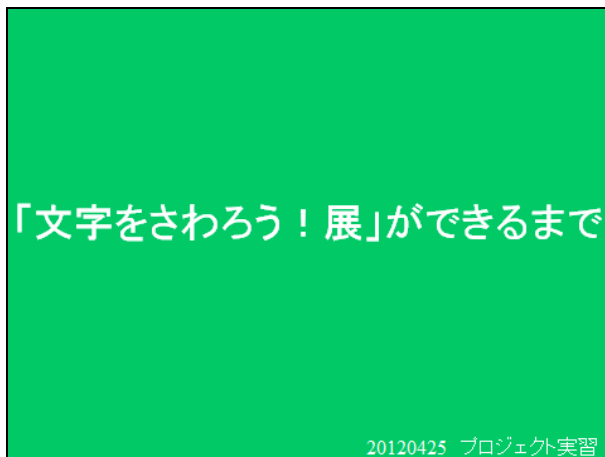
聖泉大学の取り組みは、ベースとなる設計思想・カリキュラムの全体構造・地域連携による学外への広がり・PBL 授業における学生の自発性誘引度と学習効果・催事としての学びのフリーマーケットの完成度等々、全ての面において「先進事例」の名にふさわしい物であった。プロジェクト実習履修生にとっては大いに学ぶ所が多かった反面、彼我の落差のあまりの大きさに、下手をすれば戦意を喪失させかねない。そこで、「本学の先輩にできるのなら自分たちにもできる」という自信を持ってもらうべく、本学卒業生による「先行事例」の紹介を行った。幸い筆者の手元にはいくつもの先行事例の蓄積があったが、今回は最も「身近さ」を実感できる事例として、本学歴史・文化遺産コースの学生たちによって2008年に企画・実施された、学生の自主企画展示会「文字をさわろう！」展を取り上げ、総責任者であった岡沙織氏（筑波大学大学院）に御登壇願うこととした（図5・6）。

なお、シラバスに「参考文献」として掲げている、恐竜姉妹となかまたち編『学生自主企画<文字をさわろう！>展 全記録』茨城大学人文学部歴史・文化遺産コース刊（2009年）は、同活動に関する資料を残らず収載することを目的とした報告書である。



図5：岡氏による先行事例紹介

図6：岡氏 PPT



1



2

① 思いつき 【博物館実習】

② 背景 【茨城大学での授業】

③ 準備

④ 実施

20120425 プロジェクト実習

3

むかしむかし、あるところに・・・



20120425 プロジェクト実習

4

「文字をさわろう！」
展ができるまで

① 思いつき



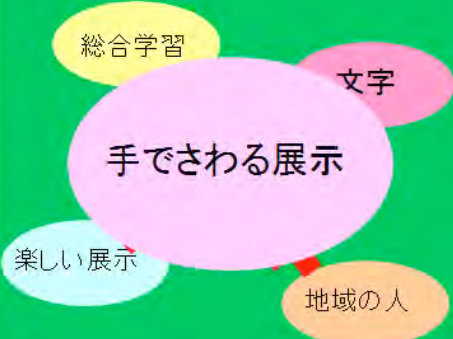
北海道 江別市郷土資料館

20120425 プロジェクト実習

5

「文字をさわろう！」
展ができるまで

① 思いつき



20120425 プロジェクト実習

6

「文字をさわろう！」
展ができるまで

② 背景

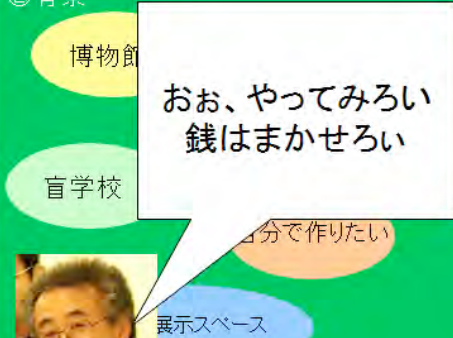

- 鈴木敦先生 中国の出土文字資料
- 田中裕先生 日本の出土文字資料
- 佐々木寛司先生 日本近現代史
- 高橋修先生 日本中世史
- 澁谷浩一先生 ユーラシア史
- ⋮

20120425 プロジェクト実習

7

「文字をさわろう！」
展ができるまで

② 背景

展示スペース

20120425 プロジェクト実習

8

「文字をさわろう！」
展ができるまで

③準備

①思いつき
②背景
③準備
④実施



・展示班 ・広報班 ・記録班


20120425 プロジェクト実習

9

「文字をさわろう！」
展ができるまで

③準備

①思いつき
②背景
③準備
④実施



展示班

記録班

広報班 → スーパー、小学校など


20120425 プロジェクト実習

10

「文字をさわろう！」
展ができるまで

③準備(キャプション)

①思いつき
②背景
③準備
④実施



カッターの先に
神が降りるのを
見せてあげよう。

20120425 プロジェクト実習

11

「文字をさわろう！」
展ができるまで

③準備(展示物)

①思いつき
②背景
③準備
④実施



先生

OB・OG

院生

20120425 プロジェクト実習

12

「文字をさわろう！」
展ができるまで

④実施

①思いつき
②背景
③準備
④実施




20120425 プロジェクト実習

13

「文字をさわろう！」
展ができるまで

④実施

①思いつき
②背景
③準備
④実施



20120425 プロジェクト実習

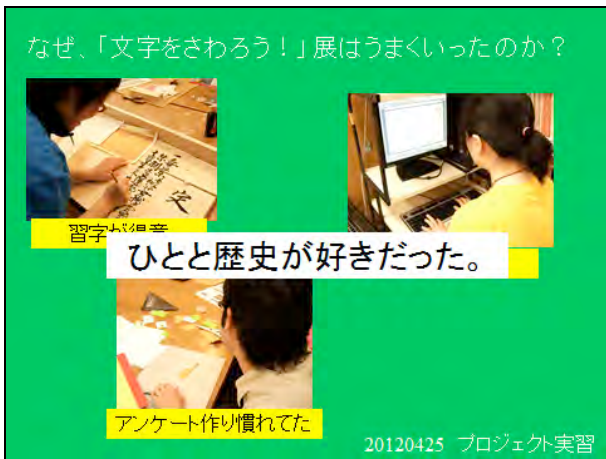
14



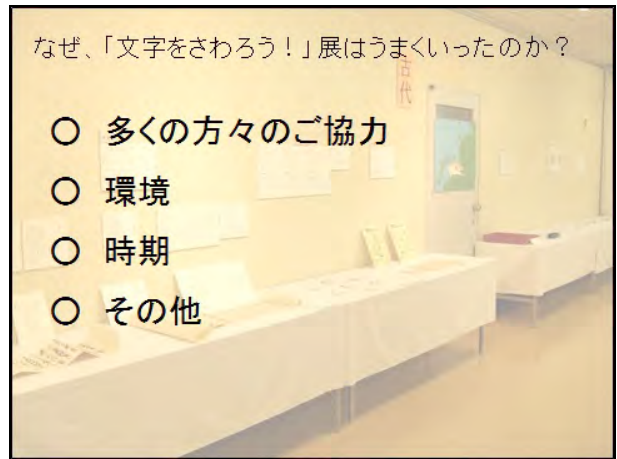
15



16



17



18



19



20

第4講：企画立案（5月2日）

シラバスには「企画プレゼン」として記載していた内容である。主としてリーダー編受講者（＝前年度にスタッフ編を受講した経験者）による、当該年度のプロジェクトの提案を想定していたが、開講初年度にはカリキュラム構造上リーダー編受講者は存在しない。そこで、今年度に限っての措置として、受講生のブレインストーミングによる案出しを行った。

事前にプランニングを指示していただけあって、予想外に次々と多数のアイデアが出された。これを筆者がホワイトボードに書き留めた状態を図7に示す。

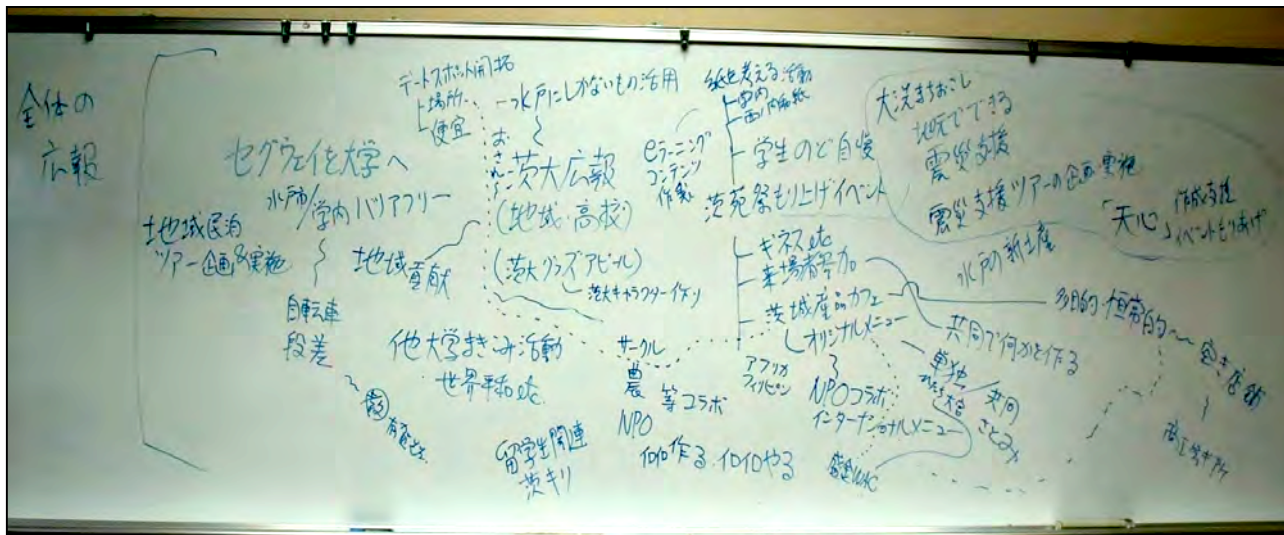


図7：ブレインストーミングの結果

当初計画では、第4講はここまでで終了の予定であったが、アイデア出しならびにその後の集約が予想外に順調に進んだため、第5講に予定していた「チーム結成」の直前＝「グループ化」までが一気に進んだ。具体的には

- (1) 震災ボランティアを志向するグループ（＝後の震災チーム）
 - (2) 地域おこしを志向するグループ（＝後の里美 Café チーム）
 - (3) 茨城大学の魅力発掘を志向するグループ（＝後の茨大捜査本部チーム）
 - (4) 異文化理解・国際交流を志向するグループ（＝後のインターナショナルチーム）
- である（図8）。

その後「グループ」を「チーム」に高め、さらに全体を「組織化」という一連の流れが想定されていることを考えると、第4講における予想外の進捗は大変好都合であった。第5講で加藤先生に御登壇戴く前に、「グループ」としてある程度顔なじみになると同時にプロジェクトについても某かのイメージを共有できているのは、望ましいことだからである。

一方で、学生の自発性を引き出すことを目指すPBL技法に照らしてみると反省も残る。

ブレインストーミングでは、筆者がホワイトボードへの書き留め役を務めた。単なる「書記」ではあるが、次々と出てくるアイデアを、ホワイトボードのどこに・どういう文言で記していくかは（ブレインストーミング本来の手法がど



図8：グループでの意見交換

ういうものであるか、ということとはひとまず措き)、その後の集約に際して無意識の方向性を付与することとなる。アイデアを出すのがブレインストーミング初心者の学生集団であり・某かの経験を有する教員が書記を務めているという構図には、一種の「力関係」が抜きがたく介在してしまう。予想外に早い集約とグループ化は、一面では筆者の PBL 技法への無理解・技量不足の反映と見ることもできよう。次年度に向けての課題である。

第5講：チーム結成・組織化（5月9日）

コーチングの専門家である教育学部・加藤敏弘先生に御登壇戴き、

(1)「チームづくりと組織づくりの違い」「問題解決のためのステップ」を中心とした講義

(2) 剣玉を使ってのアクティビティ

を通じて、既存の「グループ」を「チーム」へと導いて戴いた。各「チーム」を全体としてどこまで「組織化」するのかは、学生たちにとってもさることながら筆者にとって検討すべき課題と認識された。第5講によって最も勉強させて戴いたのは、実習担当者たる筆者自身であったと思う。

第6講：チーム活動

第5講において、当初計画の第6講までの内容を実施できたことを受けて、5月16日分は予定を繰り上げて最初の「チーム活動」とした。チームごとに適宜集まって第7講「構想発表会準備」のそのまた準備を行う、というのが課題である。チーム活動には教員は同席しない。そこで、一つには「活動内容を定着させる」ために、今ひとつには確実に活動したことを示す「エビデンスを残す」ために、今後のチーム活動に当たっては議事録を取り、その都度筆者宛に提出するようアナウンスした。

第7講：構想発表会準備（5月23日）

第7講では、再び一堂に会して構想発表会に向けた最終の話し合いを行うと共に、チームごとにリーダー・サブリーダー・書記・会計等の役割分担を確定した。また次回の構想発表会、並びに今後複数回予定されている全体での相互報告の機会における基本形式（＝パワーポイントを使ったプレゼンと質疑応答）について、確認を行った。

第8講：構想発表会（6月6日）

いよいよ各チームの構想が公式に発表された。チーム名と概要は以下の通りである。詳細については次章を参照されたい。

(1) 震災チーム

被災地へのボランティアバスの運行、並びに茨苑祭での展示を計画。

顧問：本学特命教授（危機管理担当）三輪五十二先生

(2) 里美 Café チーム

常陸太田市里美地区をフィールドに、住民・地域おこし協力隊・常陸太田市と協力して、里美地区の魅力を発見・発信。その一環として月一度の里美地区訪問・水戸市での「あおぞらクラフトいち」出店・茨苑祭での出店等を計画。

顧問：本学大学教育センター准教授 蜂屋大八先生

(3) “いばきやら”制作委員会チーム

茨城大学の公式キャラクター“いばきやら”を制作し、茨城大学・茨城大学のお土産・茨城県全体の広報に貢献することを計画。

顧問：本学人文学部准教授 菅谷克行先生

(4) インターナショナルチーム

茨城キリスト教大学国際理解センターと茨城大学留学生センターの連携事業の具体的な企画・運営を担う。具体的には、両学の留学生・大学生と県内の高校生との交流事業を中心に構想する。

顧問：本学留学生センター准教授 藤原智栄美先生

相前後して、専門性が近い先生方に「顧問」に就任して戴くことが出来た。かくしてプロジェクトが本格的に動き始めることとなった。

第9講：構想発表会総括（6月13日）

構想発表会で明らかになった課題を踏まえ、第一回中間発表会に向けた具体的作業等について、チームごとに検討を進めた。

第10～13講：チーム活動

構想発表会総括の結果を踏まえ、チームごとに活動を進めた。詳細は次章を参照されたい。

第14講：第一回中間発表会（7月11日）

チーム活動を踏まえて、最初の中間発表会を行った。この間、各チームは精力的に作業を進めてきたが、「公式キャラクター制作」を目指した“いばきやら”制作委員会チームは「公式」なるが故の壁に突き当たることとなった。筆者は内心その先行きを大いに心配していたが、「原点に回帰し、そもそもやりたかったことは何かを再度確認した結果、＜茨大生に茨大のことを知って貰う＞ことを目指して」見事にプロジェクトを再構築して来てくれた。チーム名を「茨大捜査本部」と改め、多方面への取材とHPによる情報発信を目指すこととなった。

各チームの発表内容の詳細については、次章を参照されたい。

第15講：中間発表会総括（7月18日）

前期の締めくくりとして第一回中間発表会の総括を行い、「当面の課題の洗い出しと夏季休業中の活動計画」「プロジェクト全体の課題と全般的活動計画」についてチームごとに話し合い、明確化した。併せて、夏季休業明け第二週の第17講において第二回の中間発表会を行うこととし、第16講はその準備のためのチーム活動に当てることとした。

第16講：チーム活動

詳細は次章を参照されたい。

第17講：第二回中間発表会（10月10日）

夏季休業中の活動状況、ならびに休み明けから本格化する各チームの「主要事業」に向けた計画が発表された。概要は以下の通りである。夏季休業中のブランクからの復帰を目指す「再起動の会合」として設定したコマであったが、下記の通り全チームが夏季休業中も活発に活動しており、「再起動」と呼ぶには相応しからぬ熱気のこもった中間発表会となった。

(1) 震災チーム

前半のメインイベント「震災ボランティアバスツアー」を第一期（8月21～24日）・第二期（8月28～31日）の二度に亘って実施した。第一期には24名・第二期には41名が参加し、都合成功裏に終了することができた。引き続き「震災を風化させない」ことを目指して、茨苑祭での成果報告展示に向けて活動してゆく。

(2) 里美Caféチーム

前期から続けてきた里美地区訪問は既に四回を数え、現地との相互理解も深まった。9月15・16日の「あおぞらクラフトいち」出店では、準備した里美産品を全品目完売し成功裏に終了することができた。この間メディアからの取材もあり、活動の周知のみならず同地区の情報発信にも貢献した。後期は里美地区訪問を継続する傍ら茨苑祭での出店、「里美の日 in 水戸」の開催に向けて活動してゆく。

(3) 茨大捜査本部チーム

夏期休業中も会合を重ね、活動方針の詰めを進めた。その結果、当初計画の「授業やゼミについての取材に基づく主として学生向けの学部紹介」と「茨大生が関わる行事の取材に基づく対外情報発

信」の内、後者にエネルギーを集中して取材してゆくこととなった。併せて HP の枠組みをほぼ完成させることができた。後期から取材活動を本格化させる。

(4) インターナショナルチーム

夏季休業中にチームでのミーティングに加えて、茨城キリスト教大学の学生チームとも密接に情報交換を進めた。10月21日に茨城キリスト教大学キャンパスで行われる第一回の連携行事「グローバル教育を語る」への応援態勢を整えると共に、12月9日にインターナショナルチーム主体で茨城大学水戸キャンパスで開催する第二回の連携行事「国際交流学生フォーラム <海外>を近くに感じよう！ー今、新たなマドを開ける時ー」に関する詰めを進めた。後期に入って、高校へのアプローチ等、開催に向けた具体的な行動も本格化している。

いずれのチームも精力的に活動しており、プレゼンで語られるプロジェクト像もくっきりと明確になってきた。今後の展開が非常に楽しみな内容であった。

第 18～26 講：チーム活動（企画直前準備ー本番ー後始末）

10月後半から12月前半にかけての2ヶ月間は各チームの「プロジェクトのメインイベント」と言うべき行事が目白押しとなった。詳細は次章に譲り、ここでは主たる活動を列記する。

10月21日

茨城キリスト教大学講演会「グローバル教育を考える」（インターナショナルチーム）

11月10・11日

茨苑祭「茨城大学震災ボランティアバス活動写真展」（震災チーム）

茨苑祭「里美 Café」出店（里美 Café チーム）

12月9日

茨城大学国際交流学生フォーラム「<海外>を近くに感じよう！」（インターナショナルチーム）

また、茨大捜査本部チームは上記のプロジェクト実習「直営」の行事全てに対する取材に加えて

10月14日

FLEAI マーケット取材

10月21日

茨城大学五浦美術文化研究所 観月会取材

11月4日

鋤耕祭取材

12月1日

茨城大学人文学部地域史シンポジウム「茨城の鎌倉街道」取材

さらには、この間の里美 Café チームの全活動への密着取材等々、文字通り走り回った。

第 27 講：第三回中間発表会（年末総括・評価方法アナウンス・報告書アナウンス）（12月19日）

第 18～26 講に相当する2ヶ月間は、全てのチームのプロジェクトが、正に佳境を迎えた「怒濤の2ヶ月間」であった。最も充実した2ヶ月間であったが、同時に（プロジェクトとして各チームの活動取材に奔走した茨大捜査本部チームを除けば）ややもすれば他チームの活動に目が及ばなくなりがち期間でもあった。シラバスの第 21～26 講は「企画直前準備ー本番ー後始末」に加えて「他チームの本番参観と評価を含む」ことを求めている。そこで年末に第三回の中間発表会を設定し、チーム相互の情報共有を図った。

各チームとも、「大きな達成感と若干の疲労感」を感じさせる発表となった。併せて冬季休業後の最終報告会に向けた連絡、ならびに今年度中の報告書刊行に向けた広報を行った。

第 28～29 講：チーム活動

チームごとにこれまでの活動を取りまとめ、成果と反省点を確認し、「思い」を発酵させる期間とし

た。

第 30 講：活動報告会（1 月 30 日）

1 月 30 日に今年度の活動の総決算として活動報告会を行った。開催に先立ち、学生たちがお世話になった方々は勿論、学内の一般教職員の方々にも広くお知らせして参観を御願ひした。プロジェクト実習は根力育成プログラムの柱をなすものであり、本学の根力育成支援事業を軌道に乗せるためには、今後積極的に学内への普及を図って行かねばならない。しかし、PBL 技法による授業展開は本学ではまだ馴染みも薄く、その普及には多くの困難が予想される。たとえ稚拙な内容ではあっても、まずは「馴染みを持って戴く」ことが普及の第一歩になると考えてのことであった。

年度末にかかる繁忙期での開催ということを考えれば、広報は少しでも早く行わねばならないことは自明であったが、諸事に取り紛れて結局直前の広報になってしまった。それにも拘わらず、学内・学外から予想以上に多くの方々において戴けた。迂闊にも芳名帳を準備していなかったために、全ての方のお名前を記すことができなくなってしまったが、はっきりしている限りのお名前を以下に記させて戴く。お忙しい中お運び戴き、誠にありがとうございました。

常磐大学

副学長

長谷川幸一先生

常陸太田市

政策企画部長

佐藤啓様

政策企画部企画課

山川洋史様

地域おこし協力隊

笹川貴吏子様

地域おこし協力隊

石川明紗様

茨城大学

イノベーション創成機構

園部浩先生

人文学部学部長

伏見厚次郎先生

人文学部評議員

澁谷浩一先生

人文学部根力育成プログラム小委員会委員長

神谷拓平先生

人文学部地域連携委員会大学間連携担当

神田大吾先生

特命教授

三輪五十二先生（震災チーム顧問）

大学教育センター准教授

蜂屋大八先生（里美 Café チーム顧問）

人文学部准教授

菅谷克行先生（茨大捜査本部チーム顧問）

留学生センター准教授

藤原智栄美先生（インターナショナルチーム顧問）

教職員・学生の皆様

これまでの発表会は無理矢理でも 90 分の枠内に収めてきたが、活動報告会は時間を延長してゆったり報告して貰う形をとった。その分、最後まで参加できない学生が出てしまったことは申し訳ないことであった。来年度以降は何らかの対応を考えたい。

遠路常陸太田市からお越し戴いた皆様からは、活動を共にして下さった方々ならではの厳しくも暖かいコメントを戴いた。イノベーション創成機構の園部先生には里美での活動に積極的にご参加戴き、学内での事業拡大にご助力を戴いている。また、常磐大学の長谷川副学長からは、来年度以降の単位互換も視野に入れたお立場からの建設的なご意見を戴いた。お忙しい中、顧問をお引き受け戴いた先生方からのコメントも、（適切な表現ではないと自覚するが）「苦労を共にして下さった」方々ならではのコメントを戴いた。学部長の伏見先生を始めとして人文学部の根力育成事業ならびに大学間連携事業に関係する先生方が、ご多忙な中ご参加戴けたことで、根力育成プログラムの構築ならびに本実習を学部全体として推進して戴けていることを実感することができた。多くの方々に支えられ、学生たちの頑張りが実を結んだことを実感できる発表会となった。

当日の配付資料冊子の表紙と第 1 葉を図 9 に示す。同冊子本文は全 27 葉よりなるが、第 2～4 葉（根

力育成事業とプロジェクト実習の位置づけ)は本書の冒頭に・第5～24葉(各チームのPPT)は次章に・第25～27葉(相互評価関係)は第VI章に収載されているため、ここでは省略する。

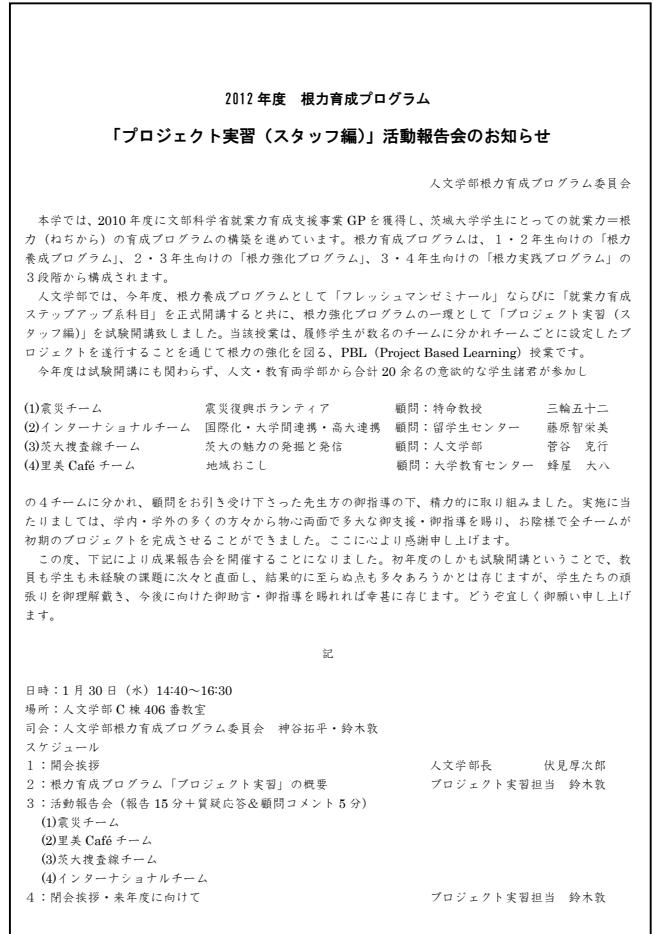
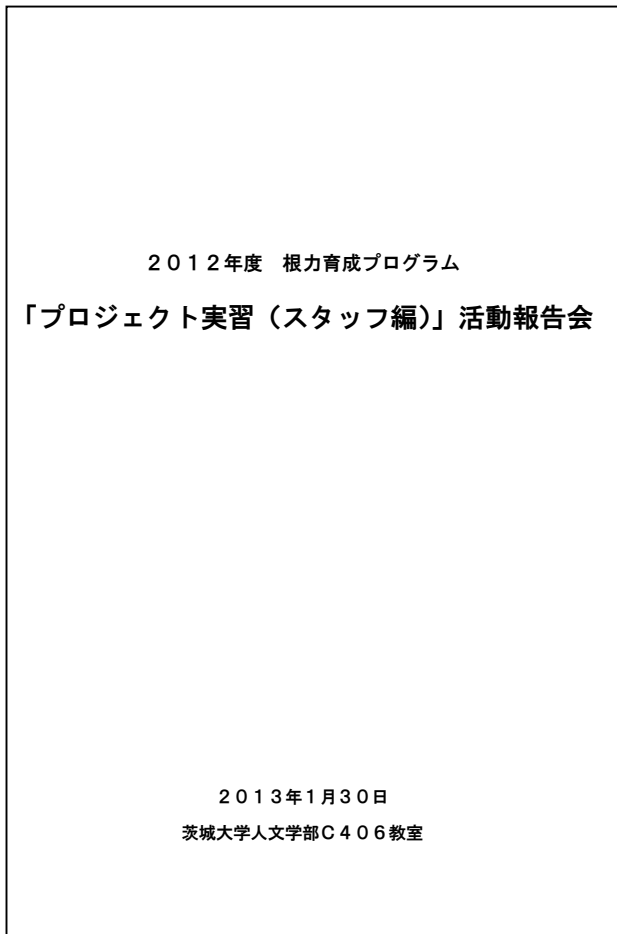


図9：活動報告会配付資料表紙ならびに第1葉

講外：報告書作成

今年度のプロジェクト実習（スタッフ編）は、1月30日の活動報告会を以て終了したが、番外編として報告書の作成作業が続いた。各チームから選出された編集委員により、年度末試験終了直後から作業が始まり、年度末ぎりぎりの3月27日に完成する予定である。当該報告書は、今年度の『文字をさわろう！展 全記録』に代わって、来年度のプロジェクト実習の参考書として後輩たちの参考に供される予定である。

本実習は、通常の講義より遙かに大きな負担にも関わらず、正に「実習」なるが故に通年で僅か2単位にしかない。効率よく単位を集めたいと考える向きには、ただでさえ非効率この上ない科目と言えよう。その上、学期終了後の報告書作成である。よくぞここまで付いてきてくれたものだと、ただ感謝あるのみである。

Ⅲ：チーム別活動報告

- 1：震災チーム
- 2：里美 Café チーム
- 3：茨大捜査線チーム
- 4：インターナショナルチーム

震災チーム

顧問教員

特命教授 三輪五十二

チームメンバー

人文学部社会科学科国際社会コース 3年次 齋藤かおり

人文学部社会科学科地域社会・福祉コース 3年次 塚田千尋

人文学部社会科学科経済・経営コース 2年次 仁木陸

はじめに

塚田 千尋

本プロジェクトは、齋藤が池田学長に、ボランティアバス運行の必要性を訴えたことから始まる。池田学長をはじめとする大学からのバックアップ体制の発足が決定し、人文学部の「プロジェクト実習」で企画提案し仲間を集めて、本格的な企画づくりが始動した。

チームは、人文学部社会科学科3年齋藤かおり（代表）、人文学部社会科学科3年塚田千尋（会計）、人文学部社会科学科2年仁木陸（書記）、計3名であり、少数ながら災害ボランティアバスを運行させる大きなプロジェクトを実行した。

私たちのプロジェクトの使命は、①被災地復興の支援②震災を忘れないということだ。①については、ボランティアバスツアーを夏期長期休暇中に2回運行し、除草作業やがれきの撤去などの活動に従事して被災地の手伝いをすることができた。②については、茨城大学の学園祭「茨苑祭」で、夏期休暇中に行ったボランティアバスの活動報告のブースを設けて茨城大学の学生だけでなく地域の方々に来場していただき、私たちの活動をとおして被災地の状況を知っていただくことができた。また、ボランティアバスツアーに参加した学生の中から、継続して災害ボランティアに携わりたいと考えボランティアグループを発足させた学生もおり、私たちのプロジェクトがボランティアの起爆剤の役割を担っている側面があることに気づいた。

私たちが本プロジェクトを進めるなかで、様々な課題があったが池田学長、三輪先生、茨城大学学生生活課の職員の皆様、茨城大学の先生方、Be-free 石塚観光の皆様、志津川自然の家の皆様、この企画に協力してくださった皆様など、多くの方のご協力・ご支援がありプロジェクトを運営することができた。本当に、筆舌に尽くしがたい感謝でいっぱいだ。個人の力は小さくて弱いですが、様々な分野の方と協力できれば大きなプロジェクトを動かすことができることを本プロジェクトで感じた。

今回の報告では、実際に私たちが行った災害ボランティアの活動の様子など写真を交えて掲載している。私たちの活動を通して皆様には被災地の現状についても見ていただきたいと思っている。

皆様に、私たちが行った災害ボランティアの報告を読んでいただくことも、私たちの重要な役割だ。被災地の現状を伝えて「震災を風化させない」という私たちの使命に、一人でも多くの方が共感して被災地に関心を持ち続けて欲しいと願っている。

—目次—

はじめに	31
目次	32
1. 活動の概要・目的	33
2. 活動の記録①	34
3. 活動の記録②	35
a. 活動。宿泊場所選定の経緯	35
b. 石塚観光×茨城大学学生生活課×運営スタッフ三者ミーティング	36
c. 事前説明会	37
d. 一期 8月21日～8月24日	38
e. 二期 8月28日～8月31日	51
f. 茨苑祭	56
g. 会計報告	57
h. パワーポイント	60
i. 成果物の記録、提示	65
4. 総括	78
5. 顧問教員より	79
おわりに	80

1. 活動の概要・目的

仁木 陸

2011年3月11日、東日本大震災が起こった。被害を受けた人は、死傷者数・行方不明者数・負傷者数を合わせると2万5千人近くにのぼる。この地震は、マグニチュード9.0と揺れ自体も強く、建物の外壁が崩れるなどの被害を生んだが、それによって引き起こされた津波も太平洋側地域に未曾有の混乱を引き起こした。この地震により福島原発も破損し、周辺地域の住民は退去を余儀なくされている。この地震は大きな爪痕を残した。震災から2年が経とうとしているが、今もなおその修復が行われている。

1年と2か月がたった春の頃、震災チーム設立のきっかけとなる根力プロジェクトの講義が始まった。その講義において、各々が企画プレゼンをする機会があった。その企画案の一つとして、震災復興支援ボランティアが出たのだ。

発起人である齋藤かおりは、この講義が始まる前から復興支援ボランティアに興味を持っており、東日本の惨状に問題意識を持っていた。全国大学生協主催の震災ボランティアにも積極的に取り組み自分の力で何とかできないかと暗中模索した。そこで彼女がとった次の行動は、震災ボランティアバス催行のための、池田学長への直接交渉だった。池田学長もその行動力にいたく感激し、特命教授である三輪先生を顧問に任命した。そこから、三輪先生とミーティングを重ねていったのだ。これが、根力プロジェクト開始の1か月前の出来事だ。

企画プレゼンで齋藤の考えに賛同した、塚田千尋、仁木陸の二名が加わり、ボランティアバスツアー催行に向けての本格的な活動が始まった。

リーダーである齋藤は、「茨城大学生を被災地に連れて行き、活動を通して学んだり交流してもらおう」・「震災を風化させない」の2つをこの活動の目的として掲げた。前者は、震災復興ボランティアバスツアーによって達成され、後者は茨城大学の学園祭である茨苑祭で、ボランティアの様子、現地の様子を、写真を通して見てもらうことで達成されると考えた。この2つを達成するために、少なくとも震災復興ボランティアバスツアーを成功させる必要があった。しかし、震災チームの軸である震災復興ボランティアバスツアーを実現させるためには様々な問題をクリアする必要があった。

主な問題として、活動場所、宿泊先、参加費用、参加者が集まるか、参加者の安全があった。これらの詳細については次項から記す。

問題をクリアした私たち震災チームは無事、復興支援ボランティアバスツアー催行にこじつけた。催行震災復興ボランティアバスツアーでの活動の詳細については、「活動の記録②」にて説明する。

8月に復興支援ボランティアバスツアーを行い、誰もけがをすることなく無事に活動を終えた。これで目的の一つを達成できたが、「震災を風化させない」という目的を達成するために、私たちはすぐに茨苑祭の準備に移った。

被災地復興に必要なのは、一時的な強力な支援ではなく、持続的な支援だ。しかし、2013年の今、ニュースで東日本大震災のことが取り上げられることは少なくなってきた。これは震災が風化していることを示唆している。この風化を少しでも止めるには人々の心に被災地のことを思い出してもらうことが必要だ。被災地復興で一番大切なのは、このように被災地を忘れないということなのだ。それを達成するのに何が必要か考えた結果、茨苑祭で、被災地で撮った写真を展示することを決めた。

私たち震災チームは、この二つの目的を達成するべく3人という少数で活動してきた。繰り返しになるが被災地復興に必要なのは、持続的な支援だ。私たちの活動は一過性の物であってはならない。この活動が次の世代に続くこと、そして、この報告書が少しでも次の活動の役に立てることを切に願っている。

2. 活動の記録①

齋藤 かおり

4月25日	齋藤、池田学長に嘆願メール
5月9日	午前：三輪先生と第一回会議 午後：根力プロジェクト 震災チーム発足
5月23日	震災チーム Gmail (volunteerbus.pj@gmail.com) 作成
5月29日	参加者募集ポスター作成
6月3日	塚田、石塚観光ボランティアバス参加
6月9日	参加者募集ポスター訂正
6月13日	三輪先生と第二回会議、ポスター確定版完成
6月22日	石塚観光と第一回会議&見積書受け取り
6月27日	三輪先生と第三回会議
7月17日	宿泊先と日程決定
7月23日	石塚観光×学生生活課×学生 第一回会議
7月27日	工学部小峯先生に参加者募集協力依頼メール
7月30日	参加者募集締め切り
8月8日	石塚観光×学生生活課×学生 最終会議
8月9日	参加者事前説明会、特別講演会 開催
8月21日～24日	震災ボランティア第一期
8月28日～31日	震災ボランティア第二期
9月8日	運営スタッフ反省会
10月5日	第一期メンバーとの懇親会
10月20日	第二期メンバーとの懇親会
11月10日、11日	茨苑祭参加

3. 活動の記録②

a. 活動。宿泊場所選定の経緯

—大学からボランティアバスを運行するなかで発生した課題—

塚田 千尋

【課題1：活動場所の選定】

私たちがボランティアバスを企画した時期（平成24年6月頃）は、東日本大震災から約1年3か月が経過したときであった。被災地では、災害ボランティアの専門家や団体が引き揚げ、住民自治が始まっており、各地のボランティアセンターにおいても仮設住宅での生活援助ができる少数ごとのボランティアが必要とされていた。そのため、チーム内で災害ボランティアは必要なのか、私たち学生が被災地と関わる方法はないのか、考えたこともあった。

しかし、被災地の実情として、ボランティアが数多く入っている地域と入っていない地域があり、被災地において復興格差が発生している問題があった。少ないボランティアで復興活動をしている地域では、数多くのボランティアが必要だろうと考え、粘り強く多数のボランティアセンターやボランティア団体に積極的に連絡を取っていきました。私たちには、「震災を忘れない」という大きな使命があり、学生に被災の実情を知って欲しいと思い、企画づくりを前進させた。

大きな契機になったことは、株式会社 Befree 石塚観光に学生ボランティアバスの企画の協力依頼を要請できたことだった。石塚観光は、普段のツアーの企画運営と合わせて、東日本大震災以後は毎週末宮城県東松島市に災害ボランティアバスを運行している民間企業だ。塚田が石塚観光の災害ボランティアバスに複数回参加させていただいており、根力プロジェクトが始まった6月もボランティアに参加しその折、石塚観光の綿引社長にお会いし、学生バスツアー（本プロジェクト）の企画の協力を依頼した。綿引社長は、その場で快諾してくださり、石塚観光とプロジェクトを進めることができた。石塚観光は週末ボランティアで訪れている東松島市にボランティア登録しており、ボランティア活動場所も石塚観光と協力することで同時に決定した。

【課題2：宿泊場所・費用】

宿泊場所として、石塚観光から民宿を紹介していただいた。

宿泊費用は、1泊2食付で約6千円、3泊4日で約1万8千円、昼食525円を4日分加えると、学生参加費が約2万円。ボランティアに参加する学生の負担額を抑えることはできないかと、私たち学生から石塚観光へ新たに宿泊場所を提案することにした。

チームで話し合い、宿泊費が安価な社会教育施設を宿泊先候補することに決定し、宮城県内の社会教育施設が東松島市付近にあるか調査を開始した。宮城県には、宿泊可能な社会教育施設が3件（松島自然の家・蔵王自然の家・志津川自然の家）があった。おもな活動場所である東松島市の近くに該当するのは「松島自然の家」であったが、当時は震災の影響で宿泊受け入れをしておらず、活動場所から少し離れていたが「志津川自然の家」での宿泊検討を始めた。宿泊にあたり、課題もあったが石塚観光・志津川自然の家と話し合いを重ね、第1期・第2期ともに「志津川自然の家」の宿泊が決定した。

b . 石塚観光×茨城大学学生生活課×運営スタッフ三者ミーティング

齋藤 かおり

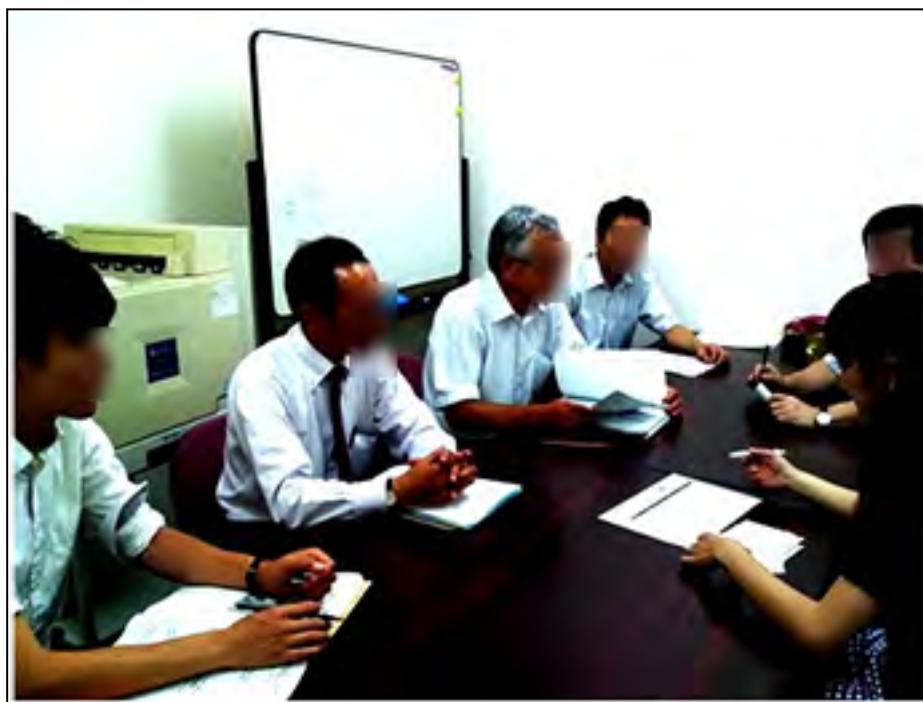
<開催概要>

日時…平成24年8月8日(水) 11時から

場所…共通教育棟1階・なんでも相談室奥会議室

<当日の様子>

- ・立会人は三輪先生(顧問)、池田さん(石塚観光)、永久さん、金田さん、大草さん(学生生活課) 齋藤、塚田(運営スタッフ)(写真1)
- ・それまで運営委員が仲介して行っていた見積もりや行程の確認などを三者集まって最終確認を行う
- ・確認内容としては第一期、第二期それぞれの3泊4日のスケジュール、見積もり額、大学側が援助してくれる物資の内容、ボランティア保険加入のために運営スタッフが参加者から集める情報についてであった



(写真1 ミーティングの様子)

c . 事前説明会

齋藤 かおり

<開催概要>

日時…平成24年8月9日 12:00～13:00

場所…共通教育棟2号館 10番教室

対象…茨城大学震災ボランティア 第一期、第二期参加者

<目的>

- ・運営メンバーの顔合わせと3泊4日のスケジュールを説明する。
- ・震災ボランティア初参加者が多いため、当日の持ち物や注意点を、資料を用いて説明する。

<当日の様子>

- ・参加者の7割が参加し、参加できなかった学生は資料をメールに添付し説明会代わりとした。
- ・三輪先生と学生生活課の担当者様が立会い、説明会に先立って三輪先生に挨拶を頂いた。(写真1)
- ・学生には最後に住所を記入してもらい、こちらでボランティア保険の手続きをした。

<特別講演会>

説明会終了後、希望者を対象に理工学研究科の院生の星将太さんに講演会をして頂いた。

震災時の星さんの出身である福島県や日立キャンパスの様子をお話頂き、ボランティアに先立ち大変勉強になる講演であった。わざわざこの講演会のために水戸キャンパスに足をお運び頂いただけでなく、我々スタッフに激励のお言葉かけて下さった。



写真1 三輪先生のご挨拶の様子

d. 一期 8月21日～8月24日

仁木 陸

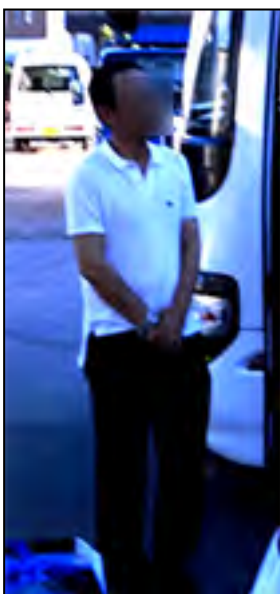
【8月21日 一日目 出発 7:00】



出発の様子

記念すべき第一期の震災復興ボランティアバスツアーの出発の様子だ。茨城大学の講堂前に集合した。この日は快晴で、とても暑く、気温も30℃を超えていたと思う。

一日目は、特命教授である三輪先生に、忙しい中ではあったが同行していただいた。出発の準備が少し手間取ってしまったが、参加者一同の士気は高く、これからの活動に対するやる気も十分だった。



←石塚観光の池田さん

被災地の状況を詳しく説明してくださったり、どういった経緯でボランティアバスツアーを行うようになったのかをお話ししてくれたりした。

今回のツアーにおいて、とても大きな協力をしてくれた。本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

【8月21日 一日目 日和山から 12:30】



日和山の頂上付近から

ここは石巻市の日和山の上から撮った写真だ。目の前が海で、一見すると綺麗な風景写真のようだが、実はこの場所は、震災前は住宅地だった。写真には二件の家屋が写っているが、すでに人は住んでおらず、いつ倒壊するかわからない状態だ。

このあと、バスでこの家の前を通ったのだが、外観はきれいでまだ人が住んでいるのではないかと感じてしまうほどだった。窓は開いており（もしくは窓がなかったのかもしれない）、そこからカーテンがひらひらと翻っていた光景はある種の生々しさがあり、背筋が凍るほど不気味だった。

ちなみに、日和山は標高が 56.4mあり、震災時には多くの被災者が避難し、多くの命を救った場所でもある。

【8月21日 一日目 門脇小学校 13:00】



門脇小学校前

事前の予定には組み込まれていなかったが、急きょある小学校の前でバスを止めた。この写真は門脇小学校前から撮ったものだ。震災によって校舎全体が焼けてしまっていて、いかに被害がひどかったかを静かに物語っている。今は使われておらず、現在校舎を取り壊すかどうかという話し合いが行われている。

この門脇小学校は、2011年の紅白歌合戦で長渕剛が歌った場所として知られている。

下の写真は門脇小学校の近くにある橋の上から撮った写真だ。重機が乗っているこの小高い丘のようなものはすべてがれきだ。この近くにあったがれきがこの場所に集められている。この近くには、津波によって使えなくなった車も山積みになっていた。



門脇小学校付近の橋上からみたがれき集積場



石ノ森萬画館近くの原っぱでの作業の様子

ここは、石巻市にある石ノ森萬画館の先にある広場だ。一日目の主な活動として、この場所での草刈りを行った。この写真はその様子を写したものだ。

草刈りを行った目的として、景観を少しでもきれいにすることが挙げられる。加えて、この広場には神戸から寄付されたアーモンドの苗木が植えられている。アーモンドの花言葉は「希望」で、願いが込められている。その苗木の成長を妨げる雑草を除去するためでもある。

このあたりも津波が押し寄せて、塩害に遭っているはずだが、たくましくも雑草たちはこの場所で深く根をはっていた。雑草が生えている状態は好ましくないが、その姿は勇ましくもあった。

余談だが、第一期では、アーモンドの苗木だと思っていた物が、ただの雑草だったというハプニングもあった。この雑草については、第二期できちんと除草した。

【8月21日 一日目 同場所、草刈り後 15:20】



草刈りの成果

この日は、一時間半ほどをかけてこの場所の草刈りを行った。写真は、草刈りの成果である。一時間半しか活動を行えなかったが、これだけの草を刈れたことに少し感動を覚えた。

後ろに立っているのは、自由の女神像のレプリカだ。津波によって半壊しているが、それでも力強く立っている。そして、この場所にはアーモンドの苗木も植えられている。時が経ちこの石巻の地域が復興を果たした時、この地が復興のシンボルの一つとして語られることを願う。

【8月21日 一日目 志津川自然の家 17:40】



志津川自然の家での食事風景

今回の震災復興ボランティアバスツアーで、第一期・第二期ともにお世話になった、志津川自然の家での食事の風景だ。毎日おいしい食事を提供していただいた。夏場の熱い中で長時間活動をするので大変疲弊したが、この食事があることで頑張れた部分がある。

志津川自然の家があったことで、このボランティアバスツアーを安く提供することができたので、その点でもとても感謝している。

【8月22日 二日目 南三陸町 10:00】



住宅街の側溝 藻で覆われている

志津川自然の家から1時間半ほどのところにある住宅地の側溝である。この日は一日中その住宅地の側溝の清掃と民家の草刈りを行った。この活動を行った理由は、写真が白黒なのでわかりづらいかもしれないが、この側溝は藻のようなもので覆われていてその下にはヘドロなどが溜まっており、側溝が詰まっていたからだ。もしそのまま放置すると、この側溝が悪臭を放ち、住民の精神衛生上あまり良くないうえに、大雨が降るとそれが漏れ出す可能性がありその住宅地の回復にさらに時間がかかってしまうのだ。



休憩中の様子

側溝の泥だしの具体的な作業内容は、スコップで泥を掻き出し、土嚢袋に詰めるという単純なものだ。しかし、この日も雲がない憎らしいほどの炎天下で作業中は汗が止まらなかった。

炎天下の作業だったので、こまめに休憩をとった。大学から支給された飲み物のおかげで安全に作業を行うことができた。

下の写真はこの作業で使われた土嚢の一つだ。「がんばれ」という文字とかわいい絵が描かれている。この土嚢袋は石塚観光が用意してくれたものだ。この絵は茨城の小学生が描いてくれたもので、少しでも被災地の人が元気になればいいなという願いのもとにこれが使われた。土嚢袋をただ積んでいるだけだと殺風景になりがちだが、このちょっとした気遣いはとても心が温まった。



小学生が絵を描いてくれた、土嚢袋

【8月22日 二日目 志津川自然の家 18:30】



志津川自然の家でのレクリエーション

この日も日中の作業を終えて志津川自然の家に泊まった。写真は、参加者同士のコミュニケーションを図るためのレクリエーションの様子だ。やはり、知らない者同士で作業をするのは、作業効率に影響するので、このレクリエーションも大切な活動の一つと言える。

【8月23日 三日目 志津川自然の家 7:00】

三日目の朝だ。実は前日も行っていたラジオ体操の様子を写したものだ。さすがに、疲れが残っているのか参加者は少し眠たそうにしていたが、過酷な作業をするので、準備体操は必要不可欠なものだ。この日もおいしい朝ごはんを提供してもらい、活動場所に向かった。



朝のラジオ体操の様子

【8月23日 三日目 道路沿いの川 15:10】



作業後の川の様子

この日の活動は川のがれき撤去だ。写真のがれき撤去後の川の様子だ。データを紛失してしまったので、作業前の写真がないことをご了承していただきたい。

作業前のがれきによって川の流が滞っていたが、24人とほかのボランティア団体で5時間ほどかけて、やっとのことでこの状態に回復させた。この場所は重機が入れないのでどうしても人の手が必要になる。人が片づけるしかないこの場所を、この状態まで回復させたとき自分たちの力が復興の一つのピースになったのだと実感した。



川から引き揚げたがれき・ガラクタ群

これは、川の中に入っていたガラクタの一部だ。このほかにも、泥や石どこから流れてきたのかわからないコンクリート片や壺のようなものなど様々なものがいっしょくたに川の中に詰め込まれていた。

コンクリート片の中にはとても大きなものもあり、3人がかりで川から引き揚げハンマーで細かくした。重いものを川から引き揚げる作業の繰り返しなので、とても腕や腰に負担がかかった覚えがある。

【8月24日 最終日 松島 11:00】



松島での観光の様子

志津川自然の家の方々にお礼を告げ、私たちボランティアバスツアー一行は、最後の復興支援として松島の観光をした。観光をすることでお金がその地域に落とされる、それによって地元が活気づくのだ。ゆえに観光も立派な復興支援と言える。

松島も海沿いということで津波による被害を受けたが、沿岸に点々とある島々のおかげで波の力が弱まったといわれている。それでも震災直後は泥が大量に打ち上げられて大変だったという。私たちがうかがった時にはすでにその面影はなく、元気な観光名所の姿を取り戻していた。

【8月24日 最終日 茨城大学 17:00】



第一期終了 三輪先生のお話

こうして、私たち第一期の復興支援ボランティアバスツアーは無事に全日程を終えることができた。最後に、特命教授である三輪先生からねぎらいの一言をいただき各自解散となった。

さすがに、参加者全員疲れていた様子だったが、それと同時にどこかやりきったような、充実した表情を浮かべていたのがとても印象的だった。

その日、帰るときにこいだ自転車のペダルの重みが、妙に心地よかったことを鮮明に覚えている。おそらく、その時感じた気持ちは参加者のそれと一緒にあったのだと思う。

e. 二期 8月28日～8月31日

塚田 千尋

【8月28日 1日目 13:00】

第1期目と同様に、石巻市で除草作業を行った。



原っぱでの作業の様子

【8月28日 1日目 15:00】

第2期では、特にレプリカの自由の女神像周辺の除草作業を行った。

自由の女神像は震災前からあるもので、像の右下が津波によって流された様子がわかる。

自由の女神像周辺の花壇は、住民によって花が植えられており、その周辺の除草作業を行った。

【8月29日 2日目 10:00】

東松島市で除草作業を行った。第1期と同じ地域での活動であったが、今回は線路沿いの雑草を刈った。東松島市野蒜地区は駅まで津波が到達し、線路が津波によって流されてしまった場所だ。そのため、線路を挟んで海側は家屋も流されてしまいほぼ何もない状態であり、線路を挟んで山側は浸水したものの家屋は残っており震災以後もこの地域で再建を決めている住民が多くいる状況だ。石塚観光は野蒜地区で活動を続けており、石塚観光のバスを見て住民のかたから私たちに声を掛けて下さることがしばしばあった。学生ができる作業は少ないが、地域に根付いた活動のお手伝いをすることで住民の方が生活しやすい環境づくりに貢献できた。



作業前の様子

【8月28日 2日目 15:00】



作業後の様子

【8月30日 3日目 10:00】

南三陸町ボランティアセンターのお手伝いで、牡蠣の養殖に必要な重りをつくる作業に従事した。南三陸町ボランティアセンターに個人登録している他大学生や地元の漁師さんと、活動をとおして交流することができた。砂利を黒い土嚢袋に入れている作業。



土嚢袋に砂をつめている様子

日差しが暑く、砂埃が舞う中の作業だったが、地元漁師と協力して多くの土嚢袋を作ることができた。土嚢袋を海に運搬している様子。黒い袋がいかだに吊るされ、牡蠣の養殖に使用される。



漁師さんに土嚢袋を運んでもらっている様子

【8月30日 3日目 13:00】

漁師さんのはからいで、午後は作業ではなく、漁師さんが実際に東日本大震災で体験したことをお話して下さった。現地の方から直接お話しを聞く機会は大変貴重なことであり、学生たちは熱心に耳を傾けていた。



漁師さんから、貴重なお話を聞いている参加者たち

三陸町ボランティアセンターから志津川自然の家への帰路



南三陸町防災庁舎 取り壊しが決定したようだ

【8月31日 4日目 10:00】



笹かまぼこを食べている参加者の様子

2日目にお会いした、城里町社会福祉協議会の寺門様より活動補助費として5000円いただきました。ボランティア活動の日程も中盤でありゴム手袋が破れる学生が複数いたため、軍手などの作業に使用する備品を買わせていただきました。残額で、宮城県名物の笹かまぼこを購入し、現地の味に舌鼓を打ちながら活動の疲れをリフレッシュ。



帰りのバスの様子

石塚観光の添乗員岡村さんに震災当時の状況や、復興の現状についてご説明いただく。

学生たちは、石塚観光の今まで行ったボランティア活動のDVDや震災当時の映像を見て、改めてボランティアの意義について考えることができた。

f . 茨苑祭

齋藤 かおり

<開催概要>

日時…平成24年11月10日（土）、11日（日）10時～16時

場所…人文講義棟22番教室

内容…活動写真の展示、石塚観光ボランティアバスの広報、憩いの場

<目的>

・ボランティアをするだけでなく、風化を防ぐという使命を果たすため多くの人が来場する茨苑祭で活動を広め、今の被災地の様子を知ってもらう

<当日の様子>

・前日に連絡したこともあり、池田学長、三輪先生、学生募集の際にご協力頂いた先生方がご来場

・池田学長とは今後のボランティアのあり方を話したり、学生の感想を見て頂く（写真1）

・ボランティア参加者が多く来場し、自分たちの活動を振り返る（写真2）

・その他参加者の家族、一般のボランティア経験者がご来場

<得たもの>

・一般の方とも交流し、今の被災地を知ってもらうきっかけとなった



写真1 学生の感想文を読む池田学長



写真2 活動写真を振り返る参加者

g. 会計報告

塚田 千尋

本プロジェクトは、根カプロジェクトのチーム予算（50,000円）とボランティアバス運営費（大学予算）2つの予算をいただいて、プロジェクトを運営した。

① 根カプロジェクト予算執行状況

茨苑祭の費用を主に根カプロジェクトの予算から支出した。

項目	支出	残額
デジタルカメラ	8,400円	
養生テープ	448円	
のりパネ	1,050円	
インクカートリッジ	5,608円	
写真用紙	2,730円	
茨苑祭参加費	3,000円	
合計	21,236円	28,764円

② ボランティアバス運営にかかる費用

学生自己負担分（食費・宿泊費）以外は、大学の予算から捻出された。

- ・学生生活課貸出物品
- ・学生生活課購入物
- ・石塚観光への支払い
- ・学生自己負担分

各項目については、以下のページに掲載した。

学生生活課貸出物品		
貸出物品	個数	
ウォーターサーバー	2個 (10L 直径34cm×高さ40cm)	学生生活課より貸出
クーラーボックス	2個 縦38cm×横67cm×高さ38cm)	学生生活課より貸出
救急箱		保健管理センターより貸出
マスク	2箱 (1期・2期でそれぞれ1箱ずつ使用)	保健管理センターより支給

学生生活課購入物品				
購入物品		購入物品数	購入金額	備考
スポーツドリンク粉末		20箱	12,280円	
お茶 昼食時に提供 (500ml ペットボトル)		108本	12,960円	1日1本
ミネラルウォーター (500ml ペットボトル)		312本	31,200円	1日2本
熱さまシート		38袋 (6枚入り)	14,744円	
コールドスプレー		20本	13,440円	
レモン飴 (熱中症対策)		30袋 (20個入り)	5,670円	
ひんやりタオル		75枚	29,925円	
紙コップ		4セット (50個入り)	3,360円	
合計			123,579円	

人数の採算 : 第1期参加者26人分、第2期参加者42人分 合計68人

お茶・ミネラルウォーターに関して (96本 (4箱)分) がダイードリンクから寄付のため、
学生にはお茶204本 (1人3本)・ミネラルウォーター408本 (1人6本) 支給された。

石塚観光への支払い (大学負担分)				
項目	単価	1期・2期の合計金額		備考
交通費	199,500円	399,000円		大型バス1台
高速・有料道路代	16,450円	32,900円		
乗務員宿泊費等	18,250円	36,500円		
随行員費用等	18,250円	36,500円		
旅行傷害保険代	300円	20,100円		
ボランティア保険代	490円	30,380円		
合計		555,380円		

第1期・学生自己負担分（人当たりの参加費）		
項目	料金	備考
朝食	1,050円	1食350円
昼食	1,575円	1食525円
夕食	1,890円	1食630円
寝具レンタル代	300円	1泊100円
シーツ等クリーニング代	130円	
施設利用料	1,800円	1泊600円
合計	6,745円	

第2期・学生自己負担分（人当たりの参加費）		
項目	料金	備考
朝食	1,050円	1食350円
昼食	1,050円	1食525円
	430円	1食430円
夕食	1,890円	1食630円
寝具レンタル代	300円	1泊100円
シーツ等クリーニング代	130円	
施設利用料	1,800円	1泊600円
合計	6,650円	

【第1期・第2期で学生負担金額が異なる理由】

第2期3日目の活動場所（南三陸町沿岸部）が、依頼していた弁当屋の弁当配達区域外であり、志津川自然の家の弁当を注文したから。第2期の昼食430円は志津川自然の家に注文したものの。



1

<経緯>

2011年3月 東日本大震災

2011年8月 全国大学生協主宰の震災ボランティア参加

2012年1月 facebookで瓦礫の残る被災地の写真を見る

2012年4月 池田学長に震災ボランティアバス催行の嘆願メールを送る→三輪特命教授が顧問に就任、ミーティングを重ねる

2012年5月 根力PJで震災チームを発足

2

<目的>

「茨城大学生を被災地に連れて行き、活動を通して学んだり交流してもらおう」

「震災を風化させない」

3

<課題>

- ・ 活動場所
- ・ 宿泊先
- ・ 参加費用
- ・ 参加者が集まるか
- ・ 参加者の安全

※学校側の支援体制
食費・宿泊費は学生負担をお願いするが、それ以外は任せてほしい。
HP・校内掲示板などで広報は支援するが、基本的には学生主体で活動すること。

4

活動場所

多くの自治体が県外者からのボランティアを取りやめていた

- ・ 学生
- ・ 宿泊先が未定 → 石塚観光に協力依頼
- ・ 40人という大所帯

宮城県東松島市を活動の拠点として決定

5



6

宿泊先

- 石塚観光から
1泊6千円の民宿を紹介
 - 1万2千円の宿泊費は学生には負担大
- ホテルや民宿ではなく、教育施設を検討
志津川自然の家に宿泊

7

参加費

- バス代・高速道路代・ボランティア保険代など
大学が負担
→学生は宿泊費・食事代のみを負担
- 石塚観光の見積もりでの初期参加費
→約1万3千円
- 宿泊施設変更等による最終参加費
→6千円

8

参加者が集まるか

- 6月中旬・・・ポスター・大学HPによる宣伝
→参加者は数えるほど
- 7月中旬・・・人文学部・工学部の教授に
授業内での宣伝活動を依頼
- 7月下旬・・・第二期の受付終了(人数満了)
- 8月上旬・・・第一期の受付終了

9

事前説明会



8月8日に
事前説明会を
実施



10

茨城大学震災ボランティアバス概要

- 第一期
平成24年8月21日～24日(3泊4日)
参加者24名
- 第二期
平成24年8月28日～31日(3泊4日)
参加者41名

11



草刈り・側溝の泥だし

12



河川のがれき撤去

13



漁業支援

14



現地の方との交流

15



学生同士の交流

16

学生の反響

- ・テレビや写真で見るとはまったく違った
ここに来なければわからないことが絶対にある
- ・人生観が変わった
- ・また被災地に行ってボランティアをしたい
- ・学年、学部を超えて活動ができてよかった

17

「茨城大学生を被災地に」
コンプリート！

18

次なる目標「震災を風化させない」

- ・茨苑祭への参加
「講演会」「募金」「署名」「写真展示」・・・？
↓
ブースに従事できるメンバーが1人だけであったため、出来る範囲での参加を決定

19

茨苑祭に参加



20

茨苑祭参加の概要

- ・茨苑祭の両日も10時～16時まで写真を展示
- ・お茶を用意し、憩いの場としても開放
- ・学長、教授、参加者、参加者の親御さんや一般の来場者にも多数お越しいただきました

21

当日の様子

- ・一般のお客さんに積極的にお声かけ
写真だけでは伝わらない現地の様子を補足
 - ・石塚観光のボランティアバスの告知
 - ・参加者の親御さんに写真をプレゼント
- 震災ボランティアを身近に、そして被災地の今を知ってもらおうきっかけに

22

「震災を風化させない」 コンプリート??

23

NO

継続的な支援しか風化を防げない

そのために今後も活動していく必要がある
今年の夏に向けた活動計画

<課題>

- ・スタッフの増員
- ・催行時期の拡大

24

私たちの活動にはゴールがない

- 「まずは行くこと」が大事
 - 風化させないためにはコンスタントに被災地の現状を知ることが必要
 - そこで参加者がなにを思うか、どう変わっていくかが重要
- 広報活動
 - 行って帰ってくるだけではもったいない
 - 身内やそれ以外の人に伝える使命がある

25

着火材としての存在意義



ボランティア参加者が設立

facebook

(茨城東北ボランティア)開設しました！

(仮) 茨城大学
東北ボランティア

イネ！で情報拡散にご協力ください。よろしくお願ひします。

26

来年度に向けて

- 後輩に引き継ぐ形のチーム活動
- 授業や仲間内でのメンバー増員
- 第二回茨城大学震災ボランティアバスの催行

27

予算執行状況

- デジタルカメラ 8400円
- インクカートリッジ 5608円
- 写真用紙 2730円
- のりパネ 1050円
- 養生テープ 448円
- 茨苑祭参加費 3000円

計(支出) 21236円

残額 28764円

28


i. 成果物の記録、提示

<参加者募集ポスター>


東日本大震災 ボランティアバスツアー

茨大発 →→→ 東北行き

被災地のボランティアのニーズはまだあります。夏休みを使って、震災復興の手伝いに一緒に行きませんか？



参加者大募集！！



*申し込み受付期間 6月15日～7月30日
定員になり次第締め切りますので、希望の方は早めの連絡をお願い致します


日程: 第1期 8.21(火)～8.24(金) 3泊4日
第2期 8.28(火)～8.31(金) 3泊4日

内容: 被災地でのボランティア活動

場所: 宮城県での被災地及び避難所

費用: 6,000円

◇申し込み・お問い合わせは下記まで◇
連絡先→volunteerbus.pj@gmail.com
申し込みの場合は「氏名」「学部」「学年」「連絡先」「希望する時期(第1期・第2期)」を明記してください



<事前説明会の資料>

齋藤 かおり

1、概要

第1期 8月21日(火)～8月24日(金) 3泊4日

第2期 8月28日(火)～8月31日(金) 3泊4日

2、活動場所

宮城県東松島市

3、宿泊先

宮城県志津川自然の家

〒986-0781 宮城県本吉郡南三陸町戸倉字坂本88-1

Tel 0226(46)9044 Fax 0226(46)9045

4、参加費

6500円(食費・宿泊費)(※交通費・保険料は大学が負担)

5、持ち物

3泊4日分の着替え

作業着(上は通気性の良い長袖が安心。半袖でも可。下は安全のため長ズボン)

日避け用の帽子

汗ふきタオル

長ぐつ(なるべくしっかりしたものを。海岸清掃時に使います)

ゴム手袋(軍手不可。海岸清掃時に使います)

雨具

☆マスク

☆その他熱中症対策グッズ

参加費

保険証のコピー

お風呂セット(シャンプーやタオル、ドライヤーは各部屋ひとつ)

なるべく少なくコンパクトにまとめて下さい。

スーツケースなどのハードな容れ物でなく、多少伸縮の効くザックにして下さい。

学校から支給されるもの

・一日、水2本とお茶1本 ・ひんやりタオル

・マスク

・救急箱

・熱中症飴

6、行程（1期、2期とも同じ）

<一日目>

6：30 茨城大学水戸キャンパス 講堂前 集合
7：00 " 出発
↓ （途中2カ所のSAで休憩）
11：30 東松島市 到着 → 昼食（約30分）
↓ 【 東松島市での海岸清掃ボランティア（約2時間） 】
15：00 東松島市 出発
↓ （移動約2時間）
17：00 志津川自然の家 到着 → 入所式
17：30 夕食
19：00 全体ミーティング
20：00 入浴・消灯
（お風呂は21：30までなので注意してください）

<二・三日目>

7：00 起床
7：40 朝食
8：30 志津川自然の家 出発
【 2日目：午前 東松島市の海岸清掃 午後：草刈り作業 】
【 3日目：南三陸市でのボランティア活動 or 車窓より被災地研修 】
↓
15：00 活動場所出発
↓
17：00 志津川自然の家 到着
17：30 夕食
19：00 全体ミーティング
20：00 入浴・消灯
（お風呂は21：30までなので注意してください）

<四日目>

9：30 志津川自然の家 出発
↓
松島周辺散策

18：00 茨城大学水戸キャンパス 到着 → 解散

<茨苑祭のしおり、ポスター>
 【茨苑祭 活動写真展 しおり】

茨城大学
 震災ボランティアバス
 活動写真展 回し



2012年11月10日、11日
 10:00 ~ 16:00
 人文22番教室

第1期 2012年8月21日(火)~24(金)
 男子14名、女子10名、引率三輪先生。
 添乗員は石塚観光の池田さん

- 一日目 石巻市で被災地見学
公園の草刈り作業
- 二日目 東松島で側溝の泥出し
個人宅の草刈り作業
- 三日目 南三陸町で河川のがれき撤去
- 四日目 松島観光J お土産を買ったり、
復興ボランティアを行いました

第2期 2012年8月28日(火)~31日(金)
 男子25名、女子16名。
 添乗員は石塚観光の岡村さん

- 一日目 公園の草刈り作業 @石巻市
- 二日目 東松島市で線路(旧仙石線)の草刈り作業
個人宅の草刈り作業
- 三日目 南三陸町でかき養殖の漁業支援
漁師の方のお話を聞く
- 四日目 松島観光♡
石巻市で被災地見学
地元のかまぼこをみんなで食べる

私たちが
 「茨城大学 震災ボランティアを志す学生の会」
 ぞろ◎

設立のきっかけ

2011年、震災のあった年に代表の齋藤が
 全国大学生協主催の震災ボランティアに参加
 ↓
 多くの学生や被災地での出来事に刺激を受け、
 同じく被災地である茨城大学だけでボランティアバス
 を出そうと決意 → 池田学長先生に直訴 X-1 (2012年4月)
 ↓
 熱意を買われ、全面的な支援と後に顧問となる
 三輪 五十三 特命教授を紹介して頂く
 ↓
 授業内で知り合った塚田、仁木と共に3人で
 「茨城大学 震災ボランティアを志す学生の会」を
 結成。夏休みに向けて準備を進める(2012年5月)
 ↓
 夏休み期間に、2回にかけて計65名の学生と
 宮城県東松島市、南三陸町で復興作業を行った

お世話になった皆様

- ・池田 幸雄 学長先生
- ・三輪 五十三 特命教授
- ・鈴木 敦 人文学部教授
- ・告知どうを配布して下さい、
人文学部の先生方
- ・石塚観光のみなさん
- ・茨城大学 学生生活課
- ・城里町社会福祉協議会 寺門様
- ・志津川自然の家
- ・南三陸町ボランティアセンター

STAFF

- ・齋藤 かおり (人文学部社会科学科3年)
- ・塚田 千尋 (人文学部社会科学科3年)
- ・仁木 陸 (人文学部社会科学科2年)

震災復興関係・もう一つの企画

茨城大学震災ボランティア展

人文講義棟・2Fにて開催中です！

茨城大学 震災ボランティア

2012年夏、茨城大学生を
被災地に連れてくる活動の
震災ボランティアを行いました。
学長先生、大学から多大な
支援を受け、参加者にとって
実りある夏となりました。
是非一度足を運び下さい。

ばしょ ♪ 人文22番

じかん ♪ 10:00～16:00

特典 ♪ 休める。

頼んでないのに茶が出る
活動時の話がきける。

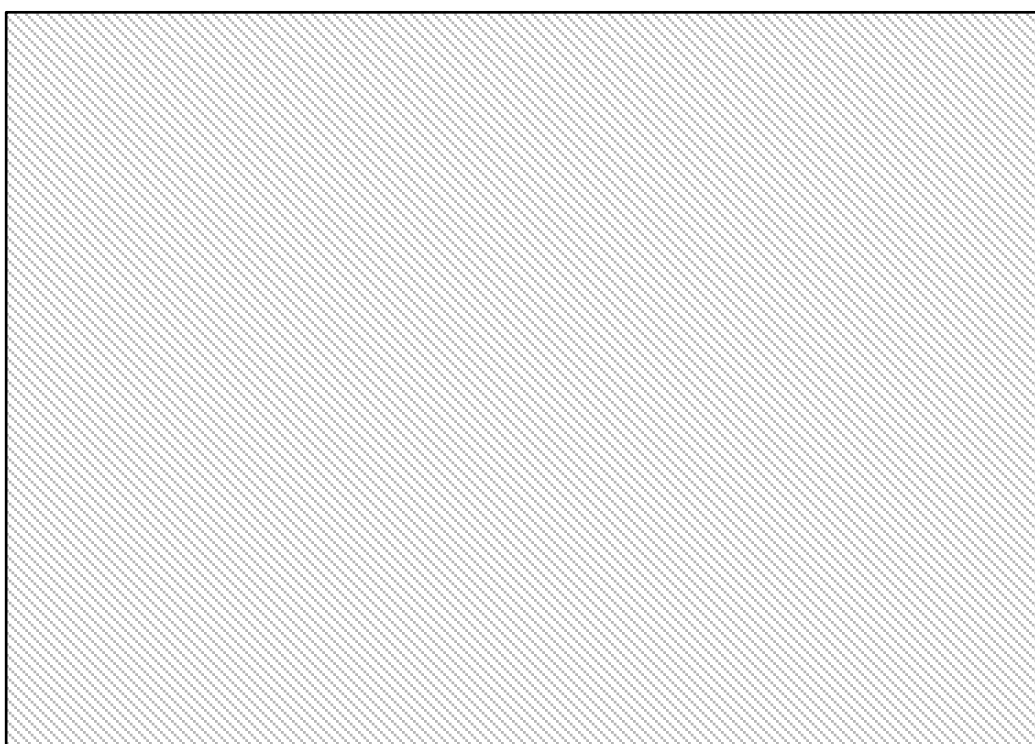


震災復興関係・もう一つの企画

茨城史料ネットによる被災文化財の救出展

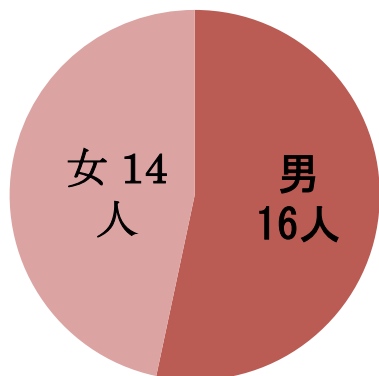
茨苑会館・2Fにて開催中です！

2012年11月9日 読賣新聞



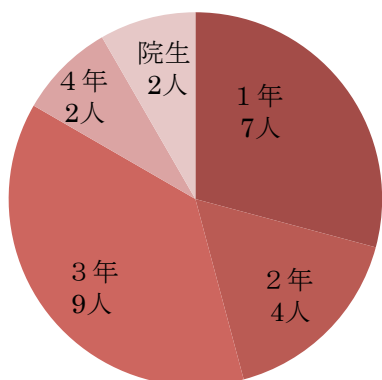
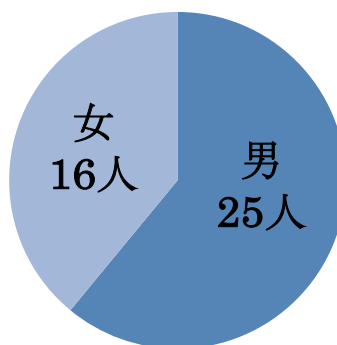
<参加学生の感想文&データ>
参加学生のデータ

第一期

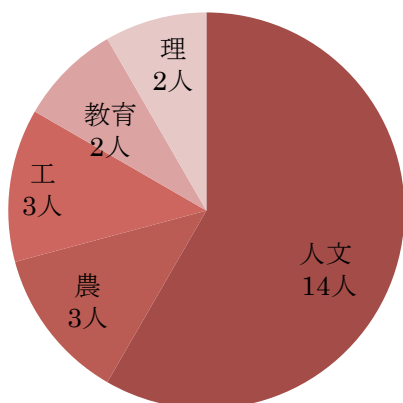
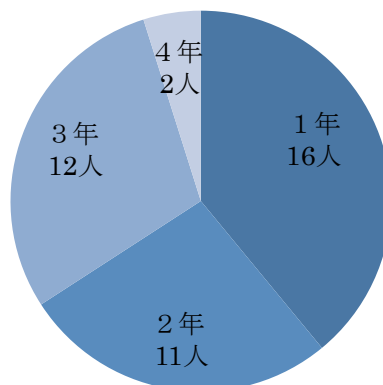


男女別

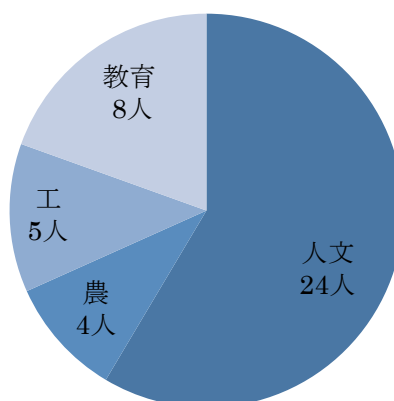
第二期



学年別



学部



○参加学生の感想文

【一期】

・被災地の見学・ボランティアを 6000 円で体験できたことはとても良かった。まだまだボランティアは必要だと思うので、この活動を続けるべきだと思う。

ボランティアの宣伝をもっと大きくやれば、もっと人が集まると思った。

・今回のボランティアを初体験してみて、感じたことは自分が力になれることの小ささでした。三日目の側溝の泥だしを一日かけたのにすべての作業が完了せずに終わってしまった時にそれを感じました。しかし、自分が少しでも復興に携われたことができたなら今回このボランティアに参加してよかったと思います。またこのような企画があればぜひ参加したいと思います。

・とてもたのしかったで

・ボランティアは、参加の仕方や必要なものがあまり分からなかったもので、今回企画してもらってありがたかったです。

運営のみなさんは、ボランティアをしながらの準備・先導で大変だったと思います。お疲れ様です。

土砂で埋まって流れなくなった側溝や川？を目の前にしたときは自然の力のすごさに立ち尽くすばかりでしたが、24 人+ほかの団体や地元の方と力を合わせて、流れたのを見たときはうれしくなりました。チームワークの偉大さに感動を覚える体験でした。

いい経験になりました。ありがとうございます。

・代表の方々、おかげでとてもいい経験をすることが出来ました。ありがとうございました。

私は今回初めて震災ボランティアに参加しましたが、やはり自分の“目”で確かめる、感じるということが一番大切なのだと感じました。テレビや雑誌などでは伝えきれないことがたくさんあります。

そしてこのボランティアを経験として済ますだけでなく、これから自分なりに何か行動をすることも大切なんじゃないかと思いました。どんな小さなことでもいいと思います。私が今回感じたことを行動に変えて何か被災地のためにできれば、と思います。

・震災ボランティアに参加して、生で被災地の現状を見ることができてよかった。被災地の復興に少しだけでも役に立てたと思う。今回のボランティアは本当に良い経験になった。機会があればまた参加したい

資料には荷物はコンパクトに、と書いてあるけど、着替え、ゴム手袋は多めに持って行った方がよいと思う。

・とてもいい経験になったと思います。運営のみなさんありがとうございました。

二期の人に着替えとゴム手袋を余分に持ってきた方がよいということを伝えたほうがよいと思います。

運営のみなさん、大変だったと思いますが、皆さんのおかげで自分にとっても、東北のみなさんにとってもいい活動をすることが出来ました。本当にありがとうございました。お疲れ様でした。

・今回この企画に参加でき、非常に大事な経験が出来てよかったです。また、一日、二日のボランティアでは思った以上にできることが少ないことも学びました。

・自分は、このボランティアのメンバーに知り合いが一人もいなかったもので、不安でしたが、交流の場が多数あったおかげで四日間楽しくすごせました。

ボランティアは、すごく暑くて大変でしたがみんなで助け合い、協力することで達成感を味わうことができたとともに、少しでも復興の力になれていると感じれました。

責任者の方々、いろいろありがとうございました！二期でも頑張ってください。！！！！

・ボランティアとは、いったい誰のためにやっているのかということを考えさせられる四日間でした。始めは自分の経験のためだと思って参加していました。しかし、実際に被災地を見て体を動かすとその地域の方のためにもなっていることが肌で感じれました。もっと長くこの地域にいたいと思いました。

お茶は利尿作用があるので水分補給にはあまり向いていないのではないかと思った。

・被災地ボランティアに興味はあっても、なかなか参加する機会というのは自分では作りにくいものなので、このようにツアー形式のボランティア企画を立ち上げてもらえて、本当に良かったです。

実際に自分の目で見て、自分の手足を使って作業することでいろいろなことを考えるきっかけになりました。

行動しなければ相手に伝わらない、ということを、身をもって学ぶことが出来ました。今回のボランティアに参加して感じたことは、自分にとって確実にプラスになっていると思います。

代表者のみなさんが、明るく盛り上げてくださったおかげで参加者側も積極的に活動に取り組むことが出来ました。ありがとうございます。

しおりの内容が少し物足りなかった点と当日の指示が多少、あいまいだった点は改善の余地がありそうです。(集団を動かすのはとても大変ですね。失礼なことを言ってすみません)

本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

・お疲れ様でした。ずっとボランティアに行きたかったので、今回の企画を知ってすぐ参加を決めました。

実際に被災地を見ると非常にショッキングだった。三日間活動して、少しでも役に立てたならよかったと思う。貴重な体験ができた。茨城に帰ったら誰かに話そうと思う。

かおりちゃんをはじめ、3人の方々にはお世話になりました。2期もファイト！

虫よけスプレーがあるといいかな。

・今回参加してよかった。企画してくれた、齋藤さん、塚田さん、にきくんに感謝したいです。

よかったと思うことは、まず被災地の惨状を見る時間があったこと。そして、現地の人とふれあって直接ためになるようなことができたこと。みんな自主性を持って、何が必要か考えて動けたこと。一体感が持てたこと。(はないちもんめやだるまさんがころんだの効果)

改善点というか、こういうのもあったらいいな、と思うのは、例えば震災の写真館に行くとか、あともう少し活動の時間が長くてもいいなと思った。

とにかくありがとうございました!!!

・ボランティアを行う際の目的を明確にすべきと感じた。例えば、ボランティア二日目の際、いきなり現場に案内され、「ではみなさん、側溝のヘドロをとりましょう」では、はっきり言って意味不明である。何のために、なぜ行う必要があるのかという行動の背景をきちんと説明すべきであると感じた。ボランティアを行う前に、今日の現場は津波により莫大な被害を受けた個所があり、現在でも津波により運ばれたヘドロが悪臭を放ち続けている。したがって、ヘドロを取り出す必要があるとかなんとか、バスで移動する最中にでも一言あれば、よかったと感じた。また、持ち物など、何が必要で何が不必要なのか、わかりづらかった。

・お疲れ様です。企画から当日のお世話まで3人が中心になって大変そうだと思います。現地はまだまだがれきがあってボランティアの必要性を感じました。今回の四日間の活動は本当にたった少しの力だけど、もっとみんなの力が集まれば、大きな力になると思いました。

ぜいたくを言えば、冷たい飲み物とのど飴でなく塩分飴

二期は人数も多いので洗濯機を部屋ごととかグループに分けて順番で効率的に使用できるようにした方がよいかと。

・配布されるペットボトルが毎回冷えているとうれしかった。(セルフ式でクーラーボックスからとれるようにする)

ドライヤーが各部屋一つないこと

シャンプーやボディソープを絶対に持ってくること。

これらの点が改善できればより良い生活が過ごせると考えます。

・ガムテープ名札は作業中にはがれやすかったので、安全ピンの名札を作らせるといいと思う。

一日目のような作業の少ない日は昼食は自由でいいと思う。(残飯がたくさん出てしまうので)

事前説明会に出席できなかったせいだと思いますが、お風呂の詳細と承諾書について良くわかりませんでした。承諾書は誰宛てかはっきりするように、用紙をPCからダウンロードできたらよかった

なと思いました。

・移動中に添乗員さんに震災の跡を紹介していただき、その様子やボランティア活動を通じて、まだボランティアが必要であることを痛感した。

また、活動中現地の方々と交流しながら活動をおこなうことができたことは良かったと思う。

大変な作業ではあったが、メンバー内で交流があって楽しく活動できた。

・荷物を車内に持っていくということを知らなかったのも、事前に教えてもらえるとよかったです。後は特にないです。

運営するのは大変だったと思います。お疲れ様です。ボランティアには行きたい、行きたいと思っているだけでなかなか行動できずにいたので、こういった機会があって本当に良かったです。とても有意義な四日間になりました。本当にお疲れ様です！！ありがとうございました。

・二日目のだるまはいらなかったです。ムヒ支給求む！！

このボランティアに参加して充実というか有意義な時間を過ごしていたと思う。二期は人が多いのもっとそこらへんを考えたプランを立てたほうがいいと思います。

・ボランティア（第一期）を通して

洗濯ができるとはいっても作業員（ジャージ等）は余分に持ってきても問題ないと感じました。

二期では人数が2倍近くになるので集合時間等はしっかり守るようにするべきと感じました。

【二期】

・今回この震災復興支援ボランティアに参加してみて、大変いい経験になったと思う。

今まで不透明であった被災地の現状と被災地の人々の意見を、自分の目や耳でじかに確かめることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。また同時に、同学年だけではなく先輩方とも仲良くなれることができ、とてもうれしかった。

・冷たいポカリはうれしかった。

最近ではテレビでの放送（ニュース）とかがあまりなく、被災地の現状がわからなかったが、いまだ復興の途中段階であることがわかった。実際に自分の目で見てみないとわからないことだらけであるということが改めて思うきっかけとなりました。

最初に配られたスケジュールの変更など重要なことについての連絡がちょっと遅い。しっかりと連絡してほしい。

・ボランティア活動は初めてで、戸惑うことも多少あったが、充実した時間を過ごせたと思う。ほかのメンバーとのコミュニケーションなどのボランティアとは別の貴重な経験もできたのでよかった。

被災地の状況も直接目にする事が出来て、報道とは違った一面を見ることもできた。

・今回の震災ボランティアに参加してとてもよかったです。特に南三陸町の漁師さんの話を聞くことが出来てとてもよかったです。テレビやラジオでは耳に入ることのない話や風景を見ることが出来ました。自分自身にとっては初めてのボランティア活動ということで少し不安でしたが、活動をおこなった後の達成感は何物にも代替できない素晴らしいものがありました。今回でいろいろな話や体験をできたので、地元に戻ったら周りの人に伝えていきたいです。

・この三日間とても充実していました。三日日には実際に震災にあった方々の貴重なお話が聞けたり、作業中に漁師さんたちと世間話が出来たりして交流することができたのでとても思い出に残っています。コールドスプレーやポカリスエットやアメも十分に用意してあってとても助かったし、作業もはかどりました。

昼食の量（特にごはん）が多かったです。

あと宿がやっぱり暑かったです。三日間とても充実していました！このボランティアに参加できたよかったです！

・機会があるなら、また参加したいと思います。とてもいい体験が出来ました。特に漁師の方々から話を聞いたことは、とても貴重な体験となりました。このような活動に参加させていただきありがとうございました。またボランティア活動団の立ち上げよろしくお祈りします。

・今回、震災後初めて東北に来て、やはり、震災から一年以上たっているので片付いているところもあれば、壊れた建物がそのままになっているところもあり様々だということを知った。

テレビなどで被災地の様子を目にすることはあったが実際に現地に行ってみると、震災という現実をリアルに感じられた。やはり、自分の目で確かめることが大事だと思った。

・被災地へボランティアに行くということが、大学生でなければなかった体験であったのでテレビで映像を見ているときはまた違う風景を見たり、現地の人のお話を聞けたりしたのでよかったです。

ボランティアで知り合った人と仲良くなれたこともいい思い出になりました。

・三泊四日で被災地宮城県で過ごして、自分の目で、今の現状を見れて良かった。

このボランティアで出会った被災者の人たちは、私たちのボランティアをとっても必要としていることがわかり、自分も少しだけだったけど、役に立てたと思うし、参加してよかったと思う。

また、被災者の人たちから話をいろいろ聞けたりもして、貴重な経験ができたと思う。だから、帰ったら周りの友達や家族にも自分が見たこと聞いたこと思ったことを伝えようと思う。

・個人でボランティアに来るか、このような団体で来るか、最初は少し悩んでいました。結局、とてもいいタイミングでこのボランティアツアーを知って、参加したわけですが、正解だったかなと思います。

(理由としては)メインのボランティア活動のほかに、バス内から見える景色についての補足を聞けたり、最終日は現地の方々とふれあうことができ、とても有意義でした。

・漁師さんやタカハシさん等地方の方々との交流があつてよかった。

初日と二日目と同じ草刈りだったので別々の行動が出来たらいい

お風呂前のドッチボール等、メンバー全員でいったい感を持つきっかけとなっていたと思う。よかった。

かおりさん面白かった。みんなが仲良くなれたのは、かおりさんのおかげだと思います。ありがとうございます。

参加してよかったです。いい経験が出来ました。3人の代表のみなさんお疲れ様です。ありがとうございました。

・正直、ボランティアに参加したきっかけは自分の意志ではない部分がありました。ですが、実際にボランティアに参加したことで、自分の被災地に対する考え方が変わったり、作業することに楽しさを見出すことが出来ました。ボランティアに対する意識が大きく変わりました。あまり団体でのこのような活動をしていなかったもので、気持ちが引き締まった気がします。また、学年、学科を超えて友人ができたことは、とてもうれしかったです。

スタッフのみなさん、お疲れ様でした。ありがとうございます。

・思った以上に、津波の残した傷跡がはっきりと目に見える形で今も残っていることに驚いた。いかに大きな被害であったかを感じることができた。

一人の大学生として、復興に携わったことはうれしかったし、大きなやりがいを感じた。今後も被災地を支える活動に協力したいと思った。

・三日間のボランティア活動を終えて、自分自身 3.11 後一度として、ボランティアや被災地に訪れたことはありませんでした。

初日は何をやるかはわかっていたつもりですが、いきなり草刈を行いあれれ…って思いましたが、三日後の今日の土嚢づくり後の漁師さんのなどを聞き、ちょっとしたことでもするのがボランティアであり、やることに意味があるのだなあと思いました。

正直、震災後すぐの雑草がなく、また、がれきがあった時の宮城に行ってみたかったです。機会があればまたこのようなボランティアに参加下です。

・なんとなく参加した今回のボランティアでしたが、被災地の現状や被災された方々の生の声に触れることができ、自分の糧となる経験が出来ました。しかし、手際の悪いのが少し目立ってしまったのはとても残念です。

お疲れ様でした!!

・実際に現地の人々の話を聞くことができ、理解を深めることができた。

大学ぐるみでこうやって行くことによって団結することができ、非常にいい経験となった。この東日本大震災のボランティアだけではなく、他のボランティア等も大学単位で募集していけたらいいと思う。

・自分の目で被災地の状況を見ることが出来てよかった。草刈りや土嚢づくりといった小さなことでも、被災地の役に立つということを知れたし、そういうことを現地の人は必要としているのだということがわかったのも大きかった。

また、今日、現地の漁師さんの話を聞いたのはとても良かったし、貴重な体験だった。個人ではできないようなことを体験できていい機会でした。

40人以上をまとめるのは大変だと思いましたが、しっかりまとめられていてスムーズにできたと思いました。

ありがとうございます。

・今回のボランティアバスツアーに参加して、被害が大きかった宮城県に各地の現状や風景、現地の人々の話が聞けたことがよかったです。

また、参加した学生が1～4年とバラバラだったので、学年、学科を超えた交流が出来たのも大きかったです。最初は知らない人ばかりだったので不安でしたが、活動や自然の家での食事、ドッジボールを通じて楽しく触れ合えてとても楽しかったです。

これからも定期的にできればバスツアーを行った方がいいと思います。飲み物の支給はとても助かりました。

・大学側に多くの援助をしていただいたので、金銭的な負担を気にせず、参加することができて、ありがたかった。

ただボランティアに参加するだけではなく、添乗員さんと被災地の現状もいろいろ見て回れたので貴重な体験となった。

・メディアでは今、被災地の様子が伝わってこなかったが、思ったよりも日常な様子もみられた。

初めて宮城を訪れたということもあって、草が生えた土地が前は街だったと言われてもなかなか想像しにくかった。

・ボランティア活動について、思っていたより地道な作業のニーズが多いのかなと感じました。ボランティア活動に参加して、少しでも被災地の人たちの力になれたかなと思いました。

宿に関しては、虫が多すぎて大変でした。

全体的に貴重な体験をすることができ、このような機会を設けていただいたことをありがたく思います。ありがとうございました。

・ボランティアに参加して、私が思ったことは、現在の被災地の現状は思っていたよりも復興されていて驚いた。自分たちが参加したことは草刈りや土嚢づくり等簡単なことだったので被災地の方に役に立っているか疑問だったけど、実際に被災地の方に感謝の言葉をいただいたのでやってよかったと思う。学校が交通費や保険を負担していただいてとても参加しやすかったと思う。

・震災ボランティアということで、活動内容はがれきの撤去などを直感的に考えていたのですが、実際に活動してみて、鉄道運休中の線路の草刈りや個人のお宅のお手伝い、漁港での土嚢づくりなど、ボランティアが必要とされているところは多様であることがわかりました。また、津波被災地ではがれきの片づけがほぼ完了しており、想像していたよりもきれいでした。どれも実際に来てみないとわからないことなので、今回この活動に参加してとても良かったと思います。

・施設の事情もあるでしょうが、風呂と夕食の時間が反対の方が良い。汚れて帰ってくるので。

・ボランティアへの意識が変わった。3日、4日で何ができるのか疑問だったし自分が役に立つのかわからなかった。3日目の漁師さんからの話を聞いて、復興の役に立てたこと、一つ一つ積み重ねていく過程の確実な一つの物となったことがわかり、ここにきて本当に良かった、と思えるようになった。復興は長く長く時間のかかるもので、一部の人がすべて行うというものではない。たくさんの方がかわり積み上げていくものなのだを知ることができた。結果も大事だけれど、感謝してくださる人がいて、自分がちょっとでも参加してみようかなという気持ちになるならすばらしいと思う。

- ・実際に来て、震災の爪痕を目の当たりにして、予想以上の被害に驚いた。
TVのニュースだけではわからなかったことを知れて、良い経験になったと思った。
- ・暑くて大変でしたが、役に立つことが出来て本当に良かったと思いました。
- ・今回は参加してとてもいい経験になりました。ありがとうございます。
- ・無理のない日程と、十分な水分や備品の準備などもして頂いて、この企画にはとても満足しています。三日目には現地の人の話も聞けて、貴重な体験になりました。
齋藤さんのリーダーシップや、いろいろ協力や連携もあり、いいボランティアツアーでした。
- ・バスガイドの方が色々と教えてくれてとても分かりやすかった。
漁師の方々の話が聞けたのがよかった。
土嚢作りは復興を手伝っている感があり充実感があつた。
ドッチボールが楽しかった。
- ・とても疲れたけど、楽しかったです。
いろんな人ともっと仲良くできたらいいと思いました。作業はとても大変でした。
3泊4日で約6500円は安いと思いました。
- ・ボランティアの内容は大変だった。でも、全員が頑張つて作業していたのはすごい。
- ・また機会があったら参加しようと思う。
映像で見るのと実際に見るのとでは感じ方が違った。
良い肉体労働になった。
ただやっぱりしんどかった。
暑さになれるいい機会かと。
- ・「今」の被災地を見ることができてよかった。TVやメディア媒体を通してではない生の体験。
自分の置かれている境遇、微力な手助けにたいして快く対応してくれた漁師の方々、大切な何かに気づくことができたと思う。
改めて、この機会、人々に感謝の意を表しておきます。
- ・何をやるのかを教えてほしかった。がれきの撤去が出来なかったのが残念だった。ボール作り用のガムテープかビニール袋が必要だ。
- ・レイヤさんがかっこよかった。心が豊かになった。
- ・行く前までは、自分が本当に役に立てるのか不安だった。初日は、自分や、一人ひとりの人間のできることのあまりの小ささに無力感やむなしさを感じた。
しかし、2日目、3日目の活動を通し、一人ひとりの力は確かに小さいが、その力を何回も何回も繰り返した時によみがえる場所・終わる作業を目の当たりにして、私たちは無力なんかじゃないのかもしれないと思えた。
一番ダメなのは、無力だと思い込んであきらめることなのかもしれない。
- ・南三陸町・志津川・松島は。震災後ぜひ訪れたいと思っていたので、今回来ることが出来て本当に良かった。

4. 総括



人文学部社会科学科 3 年次 齋藤かおり

たまたまいくつか出したプロジェクト案のうちのこの企画が採用され実行するに至ったが、この授業で出会ったメンバーと活動できて良かったと思う。授業開始初年度であったため他学部他学年とチームを組むことは難しかったが、それでも授業で出会った学生と 1 から関係を築き上げ、1 つの目標に進むことができたのはこの授業だからこそである。また、授業の中でフィードバックやパワーポイントでの発表をしなければならず、苦勞したが結果私たちの使命や理念をチーム内で統一することができた。反省点としてはせっかく同じ授業で活動している他チームとの連携が図れなかったことで、要因としてはただでさえ忙しい 3 人という少数メンバーでは自分たちの活動をまとめるので必死であったことがあげられる。今後は運営スタッフの募集にも尽力し、震災ボランティアがより強いチームで運営することが望まれる。



人文学部社会科学科 3 年次 塚田千尋

私はプロジェクトの企画運営に関して、主に外部交渉を担当した。プロジェクトの立ち上げから運営までに携わった経験はなく、電話応対や書類作成など、将来仕事をするうえで必要となる事務スキルやコミュニケーションスキルを学ぶことができた。外部の方と関わる機会が多かったので、自分もチームの一員・チームの顔として相手方に失礼のないように、かつチームの要望を伝えるため話し合いでは積極的に発言をして、よりよい企画作りを目指すよう心掛けた。その結果が、参加者数という目に見える形で現れたときは達成感があり、参加者も含めてボランティアバス第 1 期・第 2 期という大きなチームを作り、に微力ながら貢献できた。

「経験がないからできない」と思っていたことも、チームのバックアップがあったからこそ積極的に行動できたと感じている。「根力プロジェクト」を通し、自己成長を実感できた 1 年であったと思う。



人文学部社会科学科 2 年次 仁木陸

まず、この講義に出会えたこと、齋藤さんの企画に便乗できたことに感謝しなければならない。私は、東日本大震災が起こった時実家の徳島にいた。茨城大学の合格が決まっていた私は、その時言いようのない不安に襲われた。同時に、自分にできることは何かないかと考えていた。しかし、徳島から被災地までは距離があり、どうすればいいかわからず行動に移せなかった。茨城大学に入学した後も行動に移せず、にいた。そんな私の前に現れたのがこの復興支援ボランティアバスツアーの企画だった。

おそらくこの講義がなかったら、私はボランティアに行けなかったと思う。本当に、この企画に携われたこと、現地の様子を実際に見ることができたことをうれしく思う。実際に見た感想として最初に浮かんだのは、復興はまだ終わってないということだ。この報告書にもある通りこれからも持続的復興支援を意識しなければならない。

5. 顧問教員より

特命教授
三輪 五十二

2011年3月11日の東日本大震災と大津波、それに続く福島第1原発の放射能被害、これまで経験したことのない大被害が東日本を襲いました。茨城大学はすぐに震災復興に対してのさまざまな取り組みを開始しました。まず、県内の被災地に問い合わせたところ北茨城市から学生ボランティアの要請があり、私が特命教授に任命されて対応しました。大学のホームページで呼びかけたところ大勢の参加希望者があり、4月の初めに5日間大学のバスで北茨城に行きボランティア活動を行いました。震災直後の大変な時期でしたが、茨大生の献身的な活動には大変感激しました。

次の年の4月末ごろ齊藤さんから学長に震災ボランティアバス催行に対する支援要請のメールがあり、学長もその行動力と茨大生のためにも必要なこととして賛同し、私が対応することになりました。齊藤さんらに会って企画を聞いてみると細部は未定のところもありましたが、「震災を風化させない」というスローガンの下、多くの茨大生と共に被災地を直に見てボランティア活動を行うという熱い意志が伝わってきました。交通費と保険代などは大学が負担し、宿泊費と食費は学生が負担するということになりました。齊藤さん、塚田さん、仁木君は早速日程や活動内容の決定、安い宿泊先の選定、バス会社との交渉などに奔走しました。日程、行き先、宿泊先等を決めて大学ホームページやポスターで全茨大生に呼びかけました。多くの参加希望者の応募があり8月に2期に分けて石巻市、南三陸町、東松島市に行くことになりました。3人は周到な準備をして参加者に対して説明会を行い第1期が8月21日出発しました。私も都合により1泊だけですが参加させてもらいました。

石巻市に着くと日和山からの一望と被災地の視察、まだ復興は遠い先のように思える姿をみて愕然としました。テレビや新聞では伝わってこない悲惨な状況でした。「百聞は一見に如かず」現場に来ることによって大震災の悲惨さがよくわかります。このことだけでもこのバスツアーの意義があったかと思えます。多くの茨大生もかたずをのんで景色に見入っていました。その後に行われた草取り、背高く伸びた雑草を猛暑の中口数少なく黙々と引き抜いていく茨大生。石巻市は津波の犠牲者が一番多く出たところです。いま作業している場所でも犠牲者の方が出ているかと思うと身の縮まる思いです。齊藤さんをはじめ3人は他のメンバーの面倒をよく見るとともに先頭に立ってボランティア活動にリーダーシップを発揮していました。作業も終わり、宿泊地の志津川自然の家に着くとミーティングにおいてもリーダーシップを発揮して皆をまとめ仲間意識の高揚に努めました。2日目は東松島市の側溝の清掃活動でした。

参加学生の声や感想文を読ませてもらいますと、全員がこの震災ボランティアに参加したことで何かを得たように思います。参加できてよかった、被災地の方に役に立った、ボランティア活動を通して被災地の人との絆が深まった、よい経験でした。人間はよい経験をすることで成長していきます。参加者全員の中の連帯感も深まっていきました。ボランティア活動のことを思い、被災地のことを思うと東日本大震災の惨事は一生忘れないでしょう。被災者のために何か行動したことは将来きっと何らかの形で役に立つことと思います。そして、茨大生がこのような経験を体験できる企画を提供した齊藤さんをはじめ、塚田さん仁木君もこの震災ボランティアバスツアーの経験が大きな宝物として残るものと思います。私自身も短い時間でしたが良い経験をしたと思っています。しかし、東日本ではいまだ避難生活をしている方も多く、復興が止まっているところも多くあり、まだまだボランティアを必要としている所も多くあります。被災者の方々に勇気と元気を感じてもらえるようなボランティア活動の継続が今後とも必要であると思います。

おわりに

齋藤 かおり

東日本大震災から間もなく2年の月日が経とうとしています。私たちが生活している周りは修復も進み、屋根にブルーシートが被せているお宅もほとんど見えず、震災の傷跡を感じません。しかし、未だに残る震災の傷跡を目の当たりにしながらそれでも故郷の土地で暮らしている人々が数多くいます。彼らにとってのこの2年間と私たちの2年間は同じものでしょうか。

月日が経つにつれて一般ボランティアの募集を停止した自治体は多く、また、募集を続けている自治体の募集要項も厳格化されています。全国社会福祉協議会の調べによると、平成25年2月24日現在で県外からのボランティアを募集している自治体は26市町村。内容は体力的活動から生活支援までハード面、ソフト面様々なニーズがあります。福島県では旧警戒区域でのニーズも増えているようで、今後の除染活動の進行次第では益々ボランティアの力が必要となります。私が何故現在の状況を詳細に述べているかというと、今こそみなさんに被災地に行ってほしいと考えるからです。自治体の中にはボランティア経験者のみ受け入れを行っているところもある地域もあり、それは活動場所が「瓦礫が残る土地」ではなく、「この土地を愛する人が失ってしまった思い出が残るまち」だからだと私は考えます。もちろん体力的な面でも経験は必要ですが、活動時の気遣いや考え方を求めて愛する土地を任せられる経験者を求めているのです。

今後わたしたちは災害が起こったときに何ができるでしょうか。震災を知らない子どもたちに何が伝えられるでしょうか。今回のボランティア参加者の声で特に多かったのが、「ここで見て、聞いて、活動しなければわからないことがたくさんあった」という声でした。

最後になりますが、このプロジェクトは池田学長、三輪特命教授をはじめとした茨城大学の先生方や学生生活課職員のみなさん、石塚観光や現地の団体など学外の協力者様、そして参加学生の力によって進めることができました。この場を借りて深く御礼申し上げます。



震災チームの集合写真

里美 Café チーム

顧問教員

大学教育センターキャリア教育部准教授 蜂屋大八

チームメンバー

人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース3年次 鈴木愛実

人文学部人文コミュニケーション学科文芸・思想コース2年次 出口貴仁

人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース2年次 森拓哉

人文学部社会科学科地域社会・福祉コース2年次 板垣里沙

人文学部社会科学科地域社会・福祉コース2年次 伊藤美保子

はじめに

板垣 里沙

茨城県は、れんこんやメロンやはくさい、ピーマンなどの農産物の出荷量が全国1位だということや、筑波山や水戸の偕楽園、大子の袋田の滝などの有名な観光名所がいくつもあり、とても誇れる県であると思います。しかし、他の地域と比較してみると茨城県の良さを外にうまくPRすることはあまりできていないように感じます。そんな茨城県をPRしたい。元気にしたい。何か力になりたい。というような茨城県の地域おこしに携わりたいという熱い意志を持った人文学部の有志の学生が、プロジェクト実習の授業の中でチームを結成しました。そして、私たち里美caféチームは、授業の担当教員であり、顧問教員の蜂屋大八先生に茨城県常陸太田市里美地区の地域おこしをしてみないかという誘いを受け、はじめて里美を知ることになりました。

茨城県常陸太田市里美地区は、茨城県の最北端に位置している地域です。山々に囲まれた自然豊かな土地で、日本の原風景が広がっているのどかどころあたたまる地域です。平成16年に金砂郷と水府村とともに常陸太田市に合併されました。合併により、多くのメリットはありましたが、里美の地域性が失われている現状がありました。そこで私たちは、学生の視点で里美の魅力を発見し、里美を多くの人に行ってみたいと思ってもらえるような地域にすることを目的として、活動することを決めました。また、若い人にも里美に興味を持ってもらえるように、近年流行中のCaféスタイルでPR活動をすることにしました。

私たちがはじめにしたことは里美を知ることです。自分たちの足で里美に行き、自分たちで感じたこと・見たことを吸収し、まずは自分たちで里美の良さを考えてみることにしました。これには継続して里美に行くことが大切だと考え、月に1回里美に訪問し、里美の自然や風景、特産品、里美の方々とおふれあうことで多くの魅力の発見していきました。そして、私たちが感じたもの・見たものをFacebook、Twitterで情報発信し、多くの人に知ってもらおう活動もしました。

Caféの活動としては、水戸の芸術館で開催された「あおぞらクラフトいち」と茨城大学の学園祭である「茨苑祭」の二つのイベントに、月に1回の里美訪問で見つけた魅力の中の農家さんお手製の「ニンジンジュース」、「トマトジュース」、里美の「のむヨーグルト」、木工品、自分たちで育てたにんじんを使った「ニンジンパンケーキ」、「ニンジンのつかみ取り」などを販売しながら里美の魅力を水戸市内の方々にPRしました。

私たちがイベントに出店したことをきっかけに、里美までニンジンジュースを買い求めに来るお客さまもいらっしゃいました。私たちの活動が微力ながら里美に効果をもたらしていることがわかりました。小さな力ではありますが、この活動を継続していくことでさらに里美の魅力を多くの人知ってもらえるようになるとおもいます。そして、私たちの活動から新たな活動が生まれ、里美がもっと元気あふれる地域となっていくように、これからも里美のために頑張っていきたいと思います。

チームが活動するにあたり、様々な問題がありました。しかし、鈴木先生、蜂屋先生をはじめ、常陸太田市里美地区の地域おこし協力隊Reilerの皆様、里美地区の皆様、水戸で協力してくださった皆様など、多くのご協力・ご支援があつて1年間活動を続けることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の報告書では、私たちの1年間の活動の様子を写真や議事録などを交えながらまとめました。私たちがどのような活動をしてきたのかということや、私たちの成長を知っていただくのと同時に、里美の魅力も感じていただけたら幸いです。

—目次—

はじめに	83
目次	84
1. 活動の概要・目的	85
2. 活動の記録①	86
3. 活動の記録②	
a. 里美地区訪問・イベント出店	87
b. 議事録	111
c. 発表用パワーポイント	123
d. 報道記事	141
e. 決算	143
4. 総括	144
5. 顧問教員より	146
おわりに	147

1. 活動の概要・目的

伊藤 美保子

このチームは、常陸太田市里美地区の魅力を学生視点で PR する地域活性化運動を行うプロジェクトである。

里美訪問

PR 材料発見のために、まず私たちは積極的な里美訪問を行った。交通手段に極力公共交通機関を使用するなど、一般の目線に立ち、さらに学生視点から新たな里美の魅力を探っていった。また一年間定期的に里美に訪問することにより、チーム自体のモチベーションアップをはかり、地域住民の方々との交流を繰り返すことによって、よりチームと里美地区の繋がりを強固なものとしていった。

里美 Café 出店

里美 Café とは、里美地区で製作・販売されている飲料を中心とした特産品を販売し、里美地区の PR を行う期間限定ショップのことである。

里美 Café の出店は、今まで常陸太田市内での宣伝が多かったという里美地区の活動範囲を広げるため、イベントが数多く開かれ、一回の出店で多くの人目に触れることの出来る水戸市で行った。

今年度の活動では、9月に水戸芸術館広場で行われた「あおぞらクラフトいち」、11月に行われた茨城大学の学園祭にあたる「茨苑祭」に、里美の魅力伝え隊というチームで出店した。

地域住民の方々にご協力いただき、一軒一軒交渉し、チームメンバー厳選の商品を販売した。里美地区で有機農園を営んでいる木の里農園様、南風農園様にご協力いただき、地元野菜を使用したニンジンジュース、トマトジュースを販売。また、里美地区の水を使用した里美珈琲を夏季にはアイスコーヒーとして販売した。里美地区の直売所に協力していただき、里美のロングセラー商品であるのむヨーグルトの販売も実現した。このように、里美地区に訪れることによって購入することの出来る商品を試飲形式で提供した。同時に、里美地区で活動する木工アーティストである佐々木様、常陸太田市森林組合の荷見様の木工作品も展示販売を行った。そして、里美地区で農家を営む豊田様から畑を借り、実際に里美でニンジン栽培した。収穫したニンジンは、夏季には間引きニンジンをニンジンパンケーキの材料として使用、冬季にはニンジン取り放題の商品とした。里美地区の野菜を加工し目玉となる商品を開発するということは、里美地区の地域おこしにおける問題のひとつであり、私たちがニンジンパンケーキを製作したのもこの問題を解決するというのが理由のひとつであった。その後、里美地区の商品開発は、里川カボチャを使用した商品を開発する授業（地域づくりプロジェクト実習 I）が開講し、今後は開発と販売という協力体制をつくる予定である。

2. 活動の記録①

6月1日 会議
6日 構想発表会
8日 会議
15日 会議
19日 地域参画プロジェクト発表会
20日 会議
23日 第一回里美訪問
会議
25日 会議
27日 会議
29日 会議
7月4日 会議
6日 会議
出品物試作
7、8日 第二回里美訪問
11日 中間発表会
8月11～13日 第三回里美訪問
9月10、11日 第四回里美訪問
12～14日 あおぞらクラフトいち 準備日
14日 茨城新聞 取材記事掲載
15、16日 あおぞらクラフトいち 出店日
10月1日 いばらき高校生新聞 取材記事掲載
10日 中間発表会
13日 第五回里美訪問
17日 会議
11月9日 第六回里美訪問
10日 茨苑祭 準備日
11日 茨苑祭 出店日
12月9日 第七回里美訪問
19日 中間発表会
1月26、27日 第八回里美訪問
30日 最終発表会
2月3日 汁ワンカップ 出場
19日 地域コミュニティインターネットラジオ「あゆカル」出演
3月21日 学生表彰 授賞式

3. 活動の記録②

a. 里美地区訪問・イベント出店

全八回の里美訪問の計画書と活動風景の記録、そして水戸市内での2つのイベントに関わる資料を掲載する。

第一回里美訪問(6月23日)

- ・班員初の里美訪問
- ・常陸太田市里美地区地域おこし協力隊の方々との顔合わせ
- ・ニンジン栽培開始

第二回里美訪問

- ・里美珈琲の出荷準備のお手伝いを通し、同商品のイベント出品を交渉

第三回里美訪問

- ・木工房SEEDS佐々木様の木工品のイベント出品を交渉

第四回里美訪問

- ・木の里農園布施様のニンジンジュースのイベント出品を交渉
- ・パンケーキ作成のため、ニンジンの間引きを行う

あおぞらクラフトいち

- ・水戸芸術館広場にて、初のイベント出店

第五回里美訪問

- ・出品物を提供して頂いた方へお礼

第六回里美訪問

- ・茨苑祭のため、ニンジン収穫
- ・里美産直様にて、飲むヨーグルトのイベント出品を交渉

茨苑祭

- ・茨城大学の学園祭での出店

第七回里美訪問

- ・出品物を提供して頂いた方へお礼

第八回里美訪問

- ・里川コミュニティーセンターにて、地域住民の方々を招き成果発表会を行う

(1) 第一回里美訪問計画表

1. 日程

6月23日(土)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

常陸太田地域おこし協力隊 石川明紗様、長島由佳様、笹川貴吏子様

4. 訪問メンバー

学生：板垣里沙、伊藤美保子、出口貴仁

先生（敬称略）：鈴木敦、蜂屋大八 計5名

5. 訪問手段

レンタカー

6. 活動概要

9:00 茨城大学出発

11:00 里美地区到着

↓昼食、話し合い

13:00 農作業体験開始

長島様の畑にて、ニンジンの種蒔き、草引き

15:00 農作業体験終了

16:00 里美地区出発

18:00 茨城大学到着

(2) 第一回里美訪問 活動風景

1. 地域おこし協力隊の皆さんと初顔合わせ



2. ニンジン種のまき



3. 長島さんの畑の野菜を収穫



(3)第二回里美訪問計画書

1. 日程

7月7日(土)、8日(日)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

NPO法人遊楽 白石智洋様

常陸太田地域おこし協力隊 石川明紗様、長島由佳様、笹川貴吏子様

4. 訪問メンバー

森拓哉、伊藤美保子、板垣里沙 計三名

5. 訪問手段

公共交通機関

6. 活動概要

① 7月7日

12:00 水戸駅改札前集合

12:14 水戸駅出発

JR水郡線・常陸太宮行

12:33 上菅谷駅

JR水郡線

12:47 常陸太田駅

13:02 常陸太田駅 バス停3番乗り場

茨城交通

13:55 大中郵便局 着

14:00 荒薪邸

白石様、常陸太田地域おこし協力隊の方々と対面し、「里美の日」準備、歓談

16:00 くるり

里美珈琲ラベル貼り、夕食買出し

17:00 荒薪邸

夕食準備

19:00 大菅町会所

上深荻大菅町会・市教育委員会によるエコミュージアム活動企画会議に参加

21:00 荒薪邸

夕食準備、夕食、片付け

24:00 話し合い

今日の反省、明日の活動確認、中間発表パワーポイント作成

26:00 就寝

① 7月8日

5:30 起床

6:00 朝食準備、朝食、片付け、準備

8:00 河川清掃

10:00 「里美の日」準備

- 11:00 「里美の日」開始
古民家 café キッチン・ホール手伝い、直売所で里美珈琲販売
- 15:30 「里美の日」お手伝い終了
- 16:00 長島様の畑に訪問
人参の成長を確認、畑見学
- 17:00 里美出発

(4) 第二回里美訪問 活動風景

1. 里美珈琲出荷準備



2. 上深荻大菅町会・市教育委員会によるエコミュージアム活動企画会議に参加



3. 里美の日



4. ニンジン畑の手入れ・農作業のお手伝い



(5) 第三回里美訪問計画書

1. 日程

8月11日(土)～13日(月)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

荒蒔邸、常陸太田市地域おこし協力隊 他

4. 訪問メンバー

鈴木愛実、伊藤美保子、板垣里沙、森拓哉 計4人

*但し、鈴木、板垣は都合につき12日の午後に到着予定

5. 訪問手段

公共交通機関

6. 宿泊先

古民家荒蒔邸 一泊/一名1500円

7. 活動概要

往路 ①8月11日 (森拓哉、伊藤美保子)

12:00 水戸駅改札前集合

12:14 水戸駅出発

JR水郡線・常陸太宮行

12:33 上菅谷駅

JR水郡線

12:47 常陸太田駅

13:02 常陸太田駅 バス停3番乗り場

茨城交通

13:55 大中郵便局 着

②8月12日 (鈴木愛実、板垣里沙)

12:00 水戸駅改札前集合

12:14 水戸駅出発

6駅 JR水郡線・常陸太宮行

12:33 上菅谷駅

5駅 JR水郡線

12:47 常陸太田駅

13:02 常陸太田駅 バス停3番乗り場

茨城交通

13:55 大中郵便局 着

復路 8月13日 (鈴木愛実、伊藤美保子、板垣里沙、森拓哉)

16:28 大中郵便局 発

茨城交通

17:30 常陸太田駅 着
 18:14 常陸太田駅 発
 JR水郡線
 18:47 水戸駅 着

		第3回 里美地区訪問 スケジュール案 2012.08.11-13					
日にち	時間	作業内容(学生)				協力隊の動き	
11日(土)	9:00					水のCAFÉ準備	
荒蒔邸泊	11:00					水のCAFÉオープン	
	14:00	里美地区 荒蒔邸に到着。				* 夏祭りのお菓子準備	
		水のCAFÉ参加					
	16:00	水のCAFÉクローズ 後片付け&食材調達(直売所)					
	17:30	夕飯準備					
		夕飯				* お菓子準備(終わってなかったら)	
		* 翌日に備えて早く寝る(笑)					
12日(日)		起床。朝食など。					
沼田邸泊		大菅ハイキング組		里美の日組		大:石川、笹川 里:長島	
	8:30	大菅着				* 8:15学生ピックアップ(石川)	
	9:00	ハイキング開始					
	9:30					里美の休日準備	
						里美の休日準備(長島)	
	11:00					カフェオープン	
	12:00	ハイキング終了					
	13:00	カフェに合流					
	14:00	ONE-DAY CAFÉ 里美の休日クローズ					
		後片付け&夏祭り準備					
		* 自分の荷物を持って移動する。					
	16:00	さとみ夏祭り					
		* 夕飯は各自、夏祭りを満喫しながら食べる					
13日(月)		起床。朝食など。					
	8:00	畑作業					
	10:00						
	11:00						
	13:00	打ち合わせ*1					
		帰宅	*16:28				

(6) 第三回里美訪問 活動風景

1. 水のc a f eのお手伝い



2. 大菅ハイキングのお手伝い



3. 里美夏祭りのお手伝い



4. ニンジン畑のお手入れ・農作業のお手伝い



5. 木工房 SEEDS 様で催事での出品を交渉



(7) 第四回里美訪問計画書

1. 日程

9月10日(月)、11日(火)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区
常陸太田市里美支所

3. 訪問先

常陸太田地域おこし協力隊 石川明紗様、長島由佳様、笹川貴吏子様

4. 訪問メンバー

鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉、板垣里沙、伊藤美保子 計五名

5. 訪問手段

公共交通機関

6. 宿泊場所

石川様宅

7. 活動概要

往路 9月10日

12:00 水戸駅改札前集合

12:14 水戸駅出発

J R 水郡線・常陸太宮行

12:33 上菅谷駅

J R 水郡線

12:47 常陸太田駅

13:02 常陸太田駅 バス停3番乗り場
茨城交通

13:55 大中郵便局 着

復路 9月11日

16:28 大中郵便局 発
茨城交通

17:30 常陸太田駅 着

18:14 常陸太田駅 発
J R 水郡線

18:47 水戸駅 着

活動内容

- ・あおぞらクラフトいちへの出品物提供者との話し合い及び運搬作業
- ・長島様の畑にてエンジンの収穫
- ・茨城新聞社様からの取材

(8) 第四回里美訪問 活動風景

1. 木工房 SEEDS 様にて、あおぞらクラフトいち出品物の最終調整



2. 木の里農園様のニンジンジュースを出品するため交渉中



3. にんじんパンケーキ用ニンジンの収穫



4. 茨城新聞社からの取材



(9)あおぞらクラフトいち合宿 計画表

1. 日程

9月12日(水)～16日(金)

2. メンバー

鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉、板垣里沙、伊藤美保子 計5名

3. スケジュール

9月12日(水)事前準備一日目

9:00 茨城大学 集合 (鈴木、出口、森、板垣)
9:20 遊び家クロロ様にて にんじんパンケーキ試作
11:30 遊び家クロロ様 解散
11:45 茨城大学 解散

9:00 茨苑会館使用申請 (伊藤)
9:20 パネル作成

13:00 茨城大学 (鈴木、伊藤)
13:20 買い出し、段ボール収集

9月13日(木)事前準備二日目

9:00 茨苑会館 集合
9:20 パネル作成

9月14日(金)事前準備三日目

9:00 茨苑会館 集合
9:20 機材搬入、パネル作成
15:00 石川様からテント等の受けとり
19:30 茨城大学 集合
20:00 ごうたらはっちゃん様で事前調理 (仲田様、鈴木、板垣)
23:00 遊び家クロロ様 搬入

9月15日(土)あおぞらクラフトいち一日目

8:00 水戸芸術館 集合 (鈴木、出口、森、伊藤)
8:30 出店受付 (伊藤)
設営開始 搬入(仲田様、板垣)
設営(他メンバー)
9:00 石川様、笹川様 到着
9:30 設営完了・調理開始
10:00 開店
12:00 笹川様 離脱
17:00 閉店
17:10 道具積み込み、伊藤宅へ搬入
18:30 ジュースのみ販売 (森、石川様)
20:00 片づけ(森、出口)

ぐうたらはっちゃん様にて事前調理(鈴木、板垣)

23:00 遊び家クロロ様 搬入

9月16日(日)あおぞらクラフトいち二日目

8:00 水戸芸術館集合(森、出口、板垣、伊藤)

設営開始

遊び家クロロより生地を芸術館に搬入(鈴木)

9:00 石川様 到着

9:30 調理開始

10:00 開店

17:00 閉店

片づけ

18:00 道具を伊藤宅へ搬入(仲田様、板垣)

19:00 大興飯店にて打ち上げ

20:00 解散

j. あおぞらクラフトいち 活動風景

1. 準備



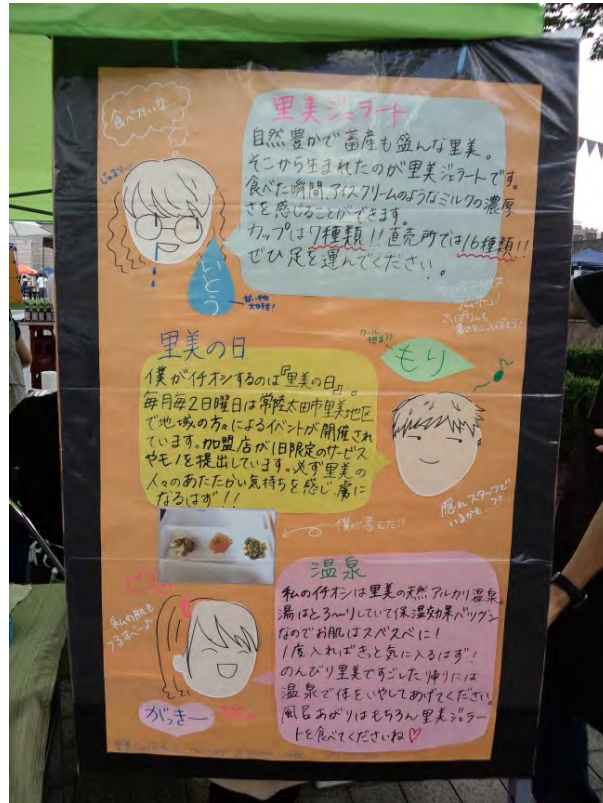
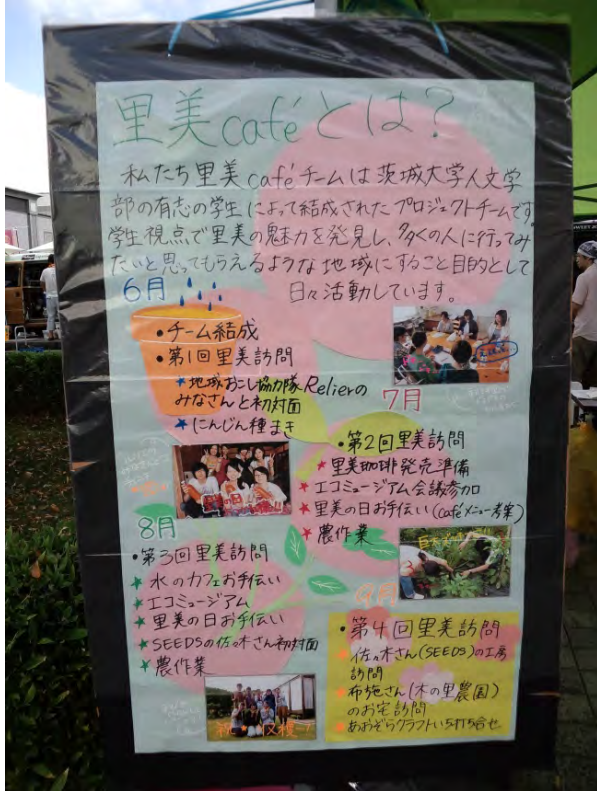
2. 開店



3. お客様とのふれあい



4. 展示物



5. 出品物

にんじんパンケーキ



木工房SEEDS様より木工品



にんじんジュース・里美珈琲



森林組合様より木工品



6. 完売



(10) あおぞらクラフトいち出店者募集

クラフト作家による展示即売会、2日間開催!

作り手と、ユーザーを直接つなぎ、新しいコミュニティを作っていくことを目的に、水戸デザインフェス実行委員会がプロデュースするイベントです。当日は、作家による展示販売のブースの他、DJブースやライブペインティング、アコースティックライブ、など様々な催しを予定しております。私たちと一緒に「あおぞらクラフトいち」を作っていただける方を募集しています。是非ご参加ください。

2012年9月15日(土)・16日(日)10時~17時頃 ※雨天決行

※搬入・準備は9月15日は8:00~10:00、16日は9:00~10:00

場所: 水戸芸術館広場 (〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8) <http://arttowermito.or.jp/>

主催・運営: 水戸デザインフェス実行委員会

Tel&Fax. 029-255-6026 水戸市石川1-3785-1 Email: k5design@k5artworkshop.com

共催: 財団法人 水戸市芸術振興財団

後援: 水戸市 協賛: K5 ART DESIGN OFFICE.

<http://www.aozora-craft-ichi.com/>

■イベント概要

●開催主旨/つくり手と直接交流を持てる場の提供と水戸でのクラフトシーンの創造。

●イベント内容/出店者によるクラフト品の展示販売、各種ワークショップ、カフェ&フードコーナー、DJ、アコースティックライブ、ライブペインティングなど

●出店料/1ブース・5,000円(9月15日・16日両日出店、当日受付にて頂戴いたします。)

1ブーステント一張(3m×3m)が目安。荒天の場合は回廊下にて開催する可能性もあります(その際のサイズは場所により変動)。

●申込方法/エントリーシートにもれなく記入、作品の写真を2枚添付の上、2012年7月15日までに郵送・FAX・Eメールにてお申し込みください。締め切り後委員会にて選考を行い、1週間~10日程度でエントリー全員に結果をご報告します。飲食ブースに関しては、選考後、保健書類などを提出いただきますのでご了承ください。

●準備物/天候に対応するため、テントやタープのご利用をオススメしています。テント・タープ使用時は、強風時の安全対策としてペグやウエイトにて固定ください。また、2日間開催となりますので、各自防犯対策をお願いします。 ※テント・タープ・机などの貸出は行っておりません。

■出店条件

●ものづくりをしている方、作家の方。または手作り品、作品を扱っている店舗の方。(通常のフリーマーケットではありませんので、ユーズド品などを扱う方はご遠慮ください。) ●開催主旨に賛同し、一緒に「あおぞらクラフトいち」という場をつくっていただく方。 ●食料品を扱う方は必ずその旨応募用紙に記入ください。応募選定後、所定書類の提出を依頼します。 ●偽ブランド・コピー商品、著作権等を侵害するもの等の販売はできません。



(11)あおぞらクラフトいちエントリースシート

(フリガナ)	サトミノミリョクツタエタイ
名前・団体名	里美の魅力伝え隊
住所	
(フリガナ)	スズキ マナミ
代表者氏名	鈴木 愛実
連絡先	
携帯電話	※当日連絡がとれる連絡先をお書きください。
テント・タープ	<input checked="" type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし
メールアドレス	
ホームページ 又はブログ	https://twitter.com/satomi_cafe http://www.facebook.com/satomicafe
出店内容 販売する商品・出 店形態・販売方法 などできるだけ詳 しくご記入くださ い。	<p>1. 販売商品</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 飲み物：里美珈琲、にんじんジュース、牛乳、飲むヨーグルト －いずれもコップ一杯に分けて販売し、牛乳はコーヒーと合わせる時のみ使用 ● お菓子：ニンジン、かぼちゃなど常陸太田市里美地区の有機野菜を用いたお菓子。具体的にはパンケーキ、クッキーなどの焼き菓子。 <p>2. 販売形態 Café と展示 －コーヒーやパンケーキなどといったものを座りながら飲み食いしていただき、常陸太田里美地区の方々の工芸品を見て触れてもらう。加えて里美地区に足を運んでももらえるようにPR用のパンフレットや写真を展示する。</p> <p>3. 販売方法 －値段に関しては未定だが、飲み物は100~200円程度、お菓子は200~300円程度と考えている。 また飲み物はすべて常陸太田市里美地区で生産・加工を済ませてある既成品をコップに分けて販売する。 工芸品に関しては購入したい場合スタッフに問い合わせれば購入可能</p>
紹介文・コメント 200字程度でお書 きください。	<p>私たちは里美Caféチームという常陸太田市里美地区のPRを行う茨城大学人文学部プロジェクトチームです。私たちは里美地区の綺麗な景観と豊富な資源に心を奪われ、市外への発信が難しいということから水戸を中心に茨城県全域にPRするモノやコトを学生視点から作り出そうと結成しました。今回はその第一弾として里美地区の方々が作り出した生産物を里美の人々に代わってPR・販売したいと考えております。どうかよろしくお願ひします。</p>

(12) 第五回里美訪問計画書

1. 日程

10月13日(土)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

常陸太田市地域おこし協力隊 石川明紗様、長島由佳様、笹川貴吏子様

常陸太田市里美支所

4. 訪問メンバー

教員：鈴木敦(敬称略)

学生：里美 Café チーム(鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉、板垣里沙、伊藤美保子)

茨大走査線チーム(番場有彩) 計七名

5. 訪問手段

レンタカー

6. 活動概要

往路

10:00 茨城大学 発

11:30 常陸太田市里美支所 着

復路

16:00 常陸太田市里美支所 発

18:00 茨城大学 着

活動内容

- ・地域おこし協力隊、あおぞらクラフトいち出店にご協力くださった方々への挨拶
- ・茨苑祭出品物の確保
- ・地域おこし協力隊の方々とあおぞらクラフトいちの反省と今後の活動についての話し合い

(13) 第六回里美訪問計画書

1. 日程

11月9日(金)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

常陸太田市地域おこし協力隊 石川明紗様、長島由佳様

4. 訪問メンバー

鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉 計三名

5. 訪問手段

レンタカー

6. 活動概要

8:30 茨城大学 発

9:30 常陸太田市里美支所 着

9:30 ニンジン収穫

12:00 ニンジンジュース仕入

13:00 常陸太田市 発

14:00 茨城大学 着

(14) 茨苑祭

水戸市内でのイベント出店の第二弾として、茨城大学の学園祭である茨苑祭への出店を行った。茨苑祭ではあおぞらクラフトいちでの反省を生かし、出品物の見直しなどを行った。二日間行われるうち二日目のみの出店ではあったが、全商品が早々に完売するなど、あおぞらクラフトいち、また新聞等のメディア露出の効果を直に感じる結果となった。

日程

11月11日

出品物

- ・飲むヨーグルト
- ・にんじんジュース
- ・とまとジュース
- ・にんじんつかみ取り

シフト

8:00～準備：鈴木、板垣、伊藤、森

	受付①	受付②	ジュース	ビラ&補充
10～11	伊藤	森	鈴木	板垣
11～12	鈴木	(番場さん)	板垣	伊藤
12～13	板垣	(津嶋さん)	伊藤	鈴木
13～14	伊藤	鈴木	(津嶋さん)	板垣
14～15	鈴木	森	板垣	伊藤
15～16	板垣	伊藤	森	鈴木
16～17	伊藤	板垣	鈴木	森

17:00～片づけ：鈴木、板垣、伊藤、森、出口

◆テント返却：18:45～19:00

◆物品返却：18:00～18:15

(15) 茨苑祭 活動風景

1. 準備



2. 開店



3. お客様との交流



4. 商品



5. 完売



(16)第七回里美訪問計画書

1. 日程

12月9日(日)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

常陸太田市政策企画部企画課 少子化・人口減少対策係 主事 山川 洋史様

常陸太田地域おこし協力隊 石川明紗様、長島由佳様

4. 訪問メンバー

教員：蜂谷大八(敬称略)

学生：里美Caféチーム(鈴木愛実、出口貴仁、板垣里沙)

茨大走査線チーム(番場有彩) 計五名

5. 訪問手段

公共交通機関

6. 活動概要

9:10 水戸駅 集合

9:22 水戸駅 発

9:59 常陸太田駅 着

10:00 山川様と合流

11:00 里美発見団の畑(豊田様へお礼)

12:00 里美直売所(水野様へお礼)

13:00 荒蒔邸(布施様へお礼)

里美の日のお手伝い

15:12 常陸太田駅 発

15:53 水戸駅 着

(17) 第八回里美訪問計画書

※第八回里美訪問は、地域づくりプロジェクト実習Ⅰ第二回訪問と同行する形で行う

1. 日程

1月26日(土)、27日(日)

2. 訪問場所

茨城県常陸太田市里美地区

3. 訪問先

常陸太田市地域おこし協力隊の皆様
里美地区の地域住民の皆様

4. 訪問メンバー

里美 Café チーム
地域づくりプロジェクト実習Ⅰ受講者

5. 訪問手段

マイクロバス

6. 活動概要

① 26日(土)

9:00 茨城大学発

11:00 地域づくりプロジェクト実習 授業

18:00 宿泊農家での暮らしインタビュー等

② 27日(日)

9:00 集合

9:00 地域づくりプロジェクト実習 授業

13:30 成果発表会

16:00 閉会式

16:30 里美発

18:30 茨城大学着

b. 議事録

※議事録として記録が残っているもののみの掲載

① 6月1日

② 6月8日

③ 6月15日

④ 6月20日

⑤ 6月23日

⑥ 6月25日

⑦ 6月27日

⑧ 6月29日

⑨ 7月4日

⑩ 7月6日

⑪ 10月17日

2012年6月1日（金）午前11時～午後2時

図書館共同学習室小

出席者：鈴木愛実 出口貴仁 森拓哉 伊藤美保子 板垣里沙

議題テーマ：6月6日の構想発表について

<チーム名>

里美 café

<事業名称>

里美 café

<目的>

里美の野菜を使って里美を多くの人に知ってもらおう。

<実施期日>

茨苑祭

<達成目標>

新たな里美の魅力を発見する。地域の方と協力しながら新たなものをつくる。里美ブランドをPRする。

<スケジュール>

月に一回、里美に訪問する。11月10日・11日に茨苑祭に出店する。

<予算案>

出店料 11,000 円

支援際資金（雑費）

日時

2012年6月8日（金）午後12時～15時

場所

図書館共同学習室小

出席者

鈴木愛実 出口貴仁 森拓哉 伊藤美保子 板垣里沙

議題

- (1) 前回のプレゼンの反省
- (2) 学生地域参画プロジェクトについて

内容

(1) 前回のプレゼンの反省

- ・里美の人に自分たちの考えを伝えたか？
→伝達不足だった。これからはこまめの連絡を心がける
- ・里美の新たな魅力を発見することが出来るのか、という質問に対する回答
→私たちが活動する意味とは、「学生視点」で地域を見ることが出来るため。現在の里美の現状と、外部からの視点を必要としていることを説明すべきだった。
- ・なぜ里美なのか、なぜ訪問し、農業体験をするのかの説明が足りなかった。

(2) 学生地域参画プロジェクトについて

- ・参加の必要性を確認
→こまめに訪問し、里美を探索し、地域の方と深い交流がしたい。
→交通費、宿泊費の捻出が必要である。
- ・プロジェクト申請書の作成
→計画の意図、目的を明確にする

以下、申請書への記入内容

(1) プロジェクトの概要

常陸太田市地域おこし協力隊と連携し、茨苑祭での出店を行う。

(2) 連携の方法・内容

地域おこし協力隊と話し合い、里美の魅力を発見する。

学生の視点から里美地区のPRポイントを探す。

- ・実際に里美地区の畑で農作業を体験する。
- ・里美のアピールポイントを言語化する。

里美ブランドをつくる。

- ・里美を訪問し、実体験から新たに発見した点をまとめる。
- ・パンフレットを作成し、配布する。

茨苑祭に出店し、里美ブランドをPRする。

- ・里美の製品を使った料理をふるまい、里美に興味を持ってもらう。

(里美の特産品を利用したカフェを開く)

(3) 実施計画

6月→11月 月一回里美地区訪問

11月 茨苑祭出店

12月 里美地区訪問 結果の調査 反省

(4) 期待される成果

学生視点から里美のアピールポイントを発見し、地域振興につなげる。

→里美の知名度拡大と共に、商品の消費拡大、訪問者増加。

日時 6月15日(金) 午前10時～午後2時

場所 図書館共同学習室大

出席者 鈴木愛実 出口貴仁 森拓哉 伊藤美保子 板垣里沙

議題 地域参画プロジェクトのプレゼンテーション練習

あおぞらクラフトいち出店に向けて

プレゼンテーション練習

- ・算申請の再検討
- ・ワーポイントを用いての最終確認

あおぞらクラフトいち

日時 9月15日・16日

出店料 5,000円

企画提出 7月15日

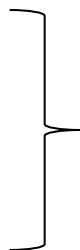
※紹介用写真2枚

場所 3m×3m

※テント・机・いすは自分たちで用意→大学で借りれるか？

出店するにあたり何を出すか

- ・野菜ジュース
- ・野菜スイーツ (クッキー・シフォンケーキ)
- ・乳製品 (ミルクせんべい)
- ・PR (里美のこと、茨苑祭で私たちがやること)
- ・広報 (HP、twitter、Facebook)



あおぞらクラフトいちで里美から何を
提供してもらえるか？

日時 6月20日(水) 午後2時30分～午後4時30分
場所 人文講義棟 25
出席者 鈴木愛実 出口貴仁 森拓哉 伊藤美保子 板垣里沙

議題 地域参画プロジェクトプレゼンテーションの反省
あおぞらクラフトいちについて
6月23日訪問の際に石川さんに聞くこと

プレゼンテーションの反省

- ・パンフレットの内容はどのようなものにするのかを話し合う。
- ・パンフレットの印刷代は市役所に出してもらえないのか聞いてみる。
- ・雑費の内容を詳しくする。

あおぞらクラフトいち

- ・『里美ショップ』をやる。
- ・目的→里美PR
- ・内容→メニュー
里美の特産品
パンフレット(既存のもの+自分たちで作ったもの)

メニュー案

グリーンスムージー、漬物、アイス、シフォンケーキ、牛乳せんべい、クッキー、牛乳プリン、お茶、紅茶のケーキ、水戸納豆とコラボ、れんこん、カレー、黒豆、ジャム茶、乳製品、りんご、工芸品、編み物、わら、木炭(消臭剤)、ポップリ

※網掛け部分は実行したい企画

- ・ボランティアを募集するか。

石川さんに聞くこと

- ・意見のすり合わせ
- ・地域おこし協力隊は市役所との連携は取れているのか。
- ・茨苑祭に物産展として出店するため、茨城大学に電話してもらおう。
- ・あおぞらクラフトいちでどんな協力をしてもらえるのか。
- ・今後のスケジュール

第一回里美訪問会議議事録

日時：2012年6月23日（土）11時～13時30分

場所：常陸太田市役所里美支所

参加者：常陸太田市地域おこし協力隊石川明紗様、長島由佳様、笹川貴吏子様
里美 café 班出口貴仁、伊藤美保子、板垣里沙

要旨：①あおぞらクラフトいち出店について
②茨苑祭出店について
③今後のスケジュールについて

詳細内容：（1）あおぞらクラフトいちについて

① 野菜提供は里美 café 班側から生産者の方に交渉する。人参はほぼ確定。

※里美地区は中間地であり、南北の野菜がなんでも収穫できる。そして、少量多品目の特徴がある。
→どのような野菜があるか調べておく必要がある。

② 販売可能性のある里美の産品として、里美アイスコーヒー、里美のむヨーグルト、里美ジェラート、木彫りのふくろう、檜のチップ、レシピ付きの野菜がある。

→衛生面について確認する必要がある。

③ 出店料、価格設定など金銭的な面で再検討する必要がある。

（2）茨苑祭出店について

① 11月11日は里美の日と同時開催になる。

② 茨苑祭実行委員会に物産展として出店できるように要請する。

（3）今後のスケジュール

① 次回里美訪問日 2012年7月7日（土）、8日（日）

（1）7月7日（土）

昼ごろ里美に到着し、8日に販売する里美アイスコーヒーのラベル貼り手伝いをする。

（2）7月8日（日）

午前は河川清掃の手伝い。午後はあらまき亭にて里美アイスコーヒー販売の手伝い。

第一回里美訪問反省会議議事録

日時：2012年6月25日（月）10時30分～12時

場所：図書館共同学習室（小）

出席者：リーダー鈴木愛実、連絡森拓哉、会計伊藤美保子、書記板垣里沙

要旨：①会議の反省
②PR活動について
③今後のスケジュール

詳細内容：

（1） 会議の反省①社会人としてあいさつ、マナーをしっかりとる。→名刺を作成する。
②会議の内容、順序を事前に決めておく。→レジユメを作成する。
③司会者を決め進行する。→交代制

（2） PR活動について①里美c a f e班でアドレスを作り、twitter, FacebookなどでPR活動する。
→常陸太田市地域おこし隊の方たちとつながる。
②定期的（里美訪問時）に広報誌を出す。→広報誌を出しているサークルと連携できないか。

（3） 今後のスケジュール
6月27日（水）メニュー検討
6月28日（木）メニュー試作会
6月29日（金）第二回里美訪問に向けての会議
7月7日（土）、8日（日）第二回里美訪問
7月11日（水）中間発表
7月14日（土）あおぞらクラフトいちエントリーシート完成
7月15日（日）あおぞらクラフトいちエントリーシート提出締切日

メニュー案と今後のスケジュール会議議事録

日時：2012年6月27日（水）14：30～16：30

場所：図書館共同学習室（小）

出席者：鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉、伊藤美保子、板垣里沙

内容趣旨：

- ① ジュースに使う材料案
- ② PRパンフレット（ビラ）案
- ③ 今後のスケジュール

内容詳細：

- ① ジュースに使う材料案

〈食材〉		〈器具〉
にんじん	バナナ	ミキサー
トマト	スイカ	ジューサー
かぼちゃ	メロン	
ブロッコリー	柿	
セロリ	ゆず	
オクラ	レモン	
小松菜	ヨーグルト	
ほうれん草	はちみつ	
キャベツ	牛乳	

- ② PRパンフレット（ビラ）案

里美をテーマパークのように見立ててマップを作る。

自分たちの活動を載せる。

- ③ 今後のスケジュール

（1）パンフレット

- ・イベントごとにパンフレット（A4）を作成する。8月中に作成予定。

（2）学内広報

- ・ポスター（告知）

（3）ボランティア

- ・あおぞらクラフトいち当日スタッフ（10人）→告知ポスターにて

（4）里美訪問日程

- ・6月29日の会議にて検討

（5）中間構想発表会

- ・7月8日以降に準備

第2回里美訪問スケジュール案会議議事録

日時：2012年6月29日12:00～14:00

場所：図書館共同学習室（小）

出席者：鈴木愛実、森拓哉、伊藤美保子、板垣里沙

内容趣旨：

① 7月7日スケジュール案

② 7月8日スケジュール案

③ 話し合い内容

内容詳細：

① 7月7日スケジュール案

12:00 水戸駅改札前集合

12:14 水戸駅

6駅 JR水郡線・常陸太田行

12:33 上菅谷

5駅 JR水郡線

12:47 常陸太田

13:02 太田営業所 → どのバス停で降りれば良いか。

13:55 小中車庫着

14:00 里美の日準備作業内容・時間等の詳細は要相談。

宿泊先 女子→地域おこし協力隊笹川様のお宅に宿泊予定

男子→あらびき亭のお宅に宿泊予定

宿泊可能か確認する

19:00 夕食

22:00 就寝

② 7月8日スケジュール案

5:00 起床

地域清掃開始・終了時間は何時か。

7:00 朝食

14:00 里美の日終了里美の日は何時からか。

片付け、話し合い

18:00 里美出発

③ 話し合い内容

・あおぞらクラフトいちで出すメニューについて

3種類 オレンジ（にんじん）、緑（ほうれん草）、赤（トマト）

[野菜ジュース材料]（150杯分）

にんじん約20本

ほうれん草約20束

トマト約50個

ヨーグルト17個（900ml）

・販売する工芸品について

・ポストカード（里美の風景）について

・茨苑祭について

・今後の訪問について

あおぞらクラフトいち展示ブース案会議議事録

日時：2012年7月4日 14:30～16:10

場所：人文講義棟 11 番教室

出席者：鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉、伊藤美保子、板垣里沙

内容趣旨：あおぞらクラフトいち出店について

内容詳細：

① 野菜ジュース

- ・ 3種類の野菜ジュースを販売。
- ・ 1種類 100杯の計 300杯分を用意する。

② 工芸品

- ・ 協力者を探す。
- ・ 作品をお借りし、売れた分だけ利益をお渡しする形式。

③ その他

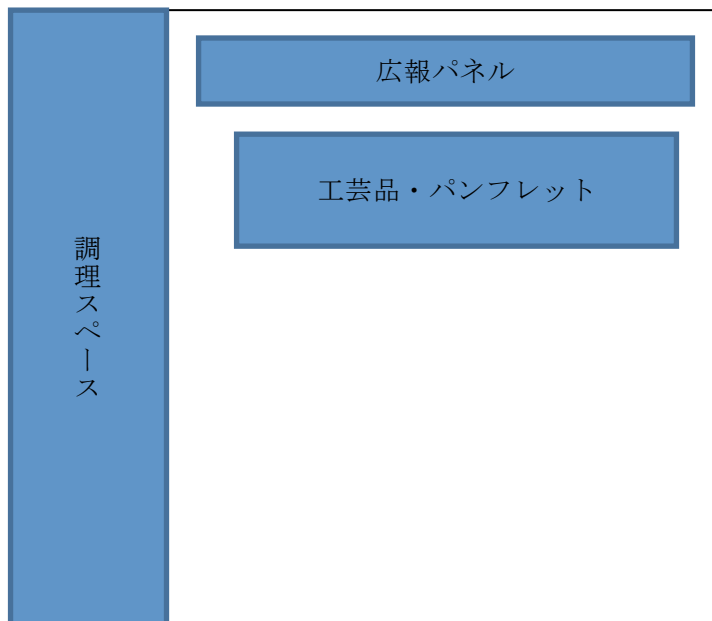
- ・ ビラ作成（学生視点であること）
- ・ 里美アピールポイントをまとめた広報パネル作成

④ 試飲会

日時：7月6日 10:00～

場所：伊藤宅

⑤ 展示ブース案



野菜ジュース試飲会議議事録

日時：2012年7月6日10:00～13:00

場所：伊藤宅

出席者：鈴木愛実、森拓哉、伊藤美保子、板垣里沙

内容趣旨：販売予定の野菜ジュース3種類を調理、試飲する。

内容詳細：

① ほうれん草ジュース（一杯）

材料

ほうれん草 80g, 牛乳 100ml, バナナ 1/2 本, レモン適量, はちみつ適量, 氷適量

作り方

1. ほうれん草は根元を切り、1～2cmに切る。
2. 材料をミキサーにかけ、なめらかになったら完成。
→ほうれん草の苦みが強いのでバナナを入れるとよい。

② にんじんジュース（一杯）

材料

にんじん 1/3 本, 牛乳 100ml, バナナ 1/2, レモン適量, はちみつ適量

作り方

1. にんじんは皮をむき、一口大に切る。
2. 材料をミキサーにかけ、なめらかになったら完成。
→にんじんを生かせるように、他の食材の量は適度にする。

③ トマトジュース（一杯）

材料

トマト 1 個, のむヨーグルト 100ml, はちみつ適量

作り方

1. トマトはヘタ、皮、種を取り除き、一口大に切る。
2. 材料をミキサーにかけ、なめらかになったら完成。
→さわやかでおいしい。トマトの味がよくでている。

茨苑祭出店に向けての会議議事録

日時：2012年10月17日（水）14:40～17:00

場所：人文講義棟24演習室

出席者：鈴木愛実、出口貴仁、森拓哉、伊藤美保子、板垣里沙

内容趣旨：①今後のスケジュール（案）

②広報関係確認

③茨苑祭会議出席者決定

詳細内容：

① 今後のスケジュール（案）

●11月9日（金）にんじん収穫

7:30 茨城大学集合

7:40 赤塚駅にて板垣合流

9:00 里美到着、にんじん収穫

11:00 里美出発

12:30 茨城大学到着

13:30 テント設営

※移動手段は鈴木の子車である。

●11月11日（日）茨苑祭（詳細は次回会議にて決定）

●12月9日（日）もしくは12月16日（日）

里美の日にて里美地区の方に活動報告のプレゼン

→発表可能者2名。開催日時、場所要検討。

●1月〇日（■）里美の日 in 水戸開催

→遊び家クロロにて行う予定だが、変更する可能性がある。（次回以降の議題にする。）

② 広報関係確認

●ラジオジングル参加

出演者3名予定。

●ビラ印刷

枚数30枚。印刷日11月6日予定。

③ 茨苑祭会議出席者決定

10月24日（水）第5回参加者代表者会議

出席者：伊藤

10月31日（水）第2回企画別連絡会

出席者：森

12月5日（水）第6回参加者代表者会議

出席者：板垣

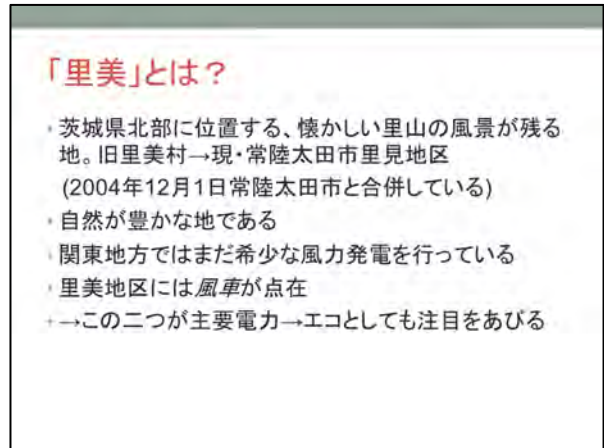
c. 発表用パワーポイント

- ① 構想発表会(6月6日)
- ② 中間発表会(7月11日)
- ③ 中間発表会(10月10日)
- ④ 中間発表会(12月19日)
- ⑤ 成果発表会(1月27日 里川コミュニティーセンター)
- ⑥ 成果発表会(1月30日 茨城大学)

① 構想発表会(6月6日)



1



2



4



3



5



6

里美の特産物③



おみやげや旅の思い出に人気です。里美の特産品は豊かな自然に生まれ村の人たちが手間ひまをかけて心を込めて作ったものばかり。また特産品のほかにも、産直販売されている農産物や山菜なども大変好評です。

7

概要

1. チーム名・事業名称
2. 目的
3. 実施期日
4. 達成目標
5. これからのスケジュール
6. 予算案
7. 近況報告

8

チーム名・事業名称: **里美Café**
(さとみカフェ)

目的: 里美の野菜などを通して、里美を多くの人に知ってもらおう。

実施期日: 平成24年11月10・11日(茨苑祭にてカフェを出店)

9

達成目標

1. 新たな里美の魅力を発見する
2. 地域の方と協力しながら、「新たなもの=里美ブランド」をつくる
3. 里美ブランドをPRし、多くの人々に興味をもってもらおう

10

これからのスケジュール

- ・月に一回里美に訪問
農作業などを通して里美を知る
- ・6月未定
第一回里美訪問
かぼちゃを植えるための手伝い
- ・11月10日・11日
茨苑祭出店



11

予算案

・茨苑祭関連		・パンフレット製作費
出店料 11,000		茨苑祭で配布
材料費 5,000		道の駅などに設置
調理器具 5,000		500部(※仮定)
雑費 1,000		小計 5,000
小計 22,000		
		計 27,000

12

近況報告

◆メールでのやり取り◆

- ・5/27 地域おこし協力隊の石川明紗さんに連絡
- ・5/29、5/31、6/3 第一回目の里美地区訪問について

①訪問候補日と内容

②茨苑祭での希望

地域おこし隊・・・都市住民など地域外の人材を地域社会の新たな担い手として受け入れ、地域力の維持・強化を図るもの(総務省HPより)

13

① 訪問候補日と内容

- ・6月中ならば17日、23日、30日
- ・協力隊の方の畑にて簡単な農作業を行う

② 茨苑祭での希望

- ・PRターゲットを県内に絞り、私達と共に里美地区産の食材を用いたモノを販売する。

その一環として茨城大学の茨苑祭でカフェを出店しPRと出品を行う。

14

画像出典

常陸太田市観光物産協会「里美支部」HPより
<http://www.satomi-kanko.jp/>

15

② 間発表会(7月11日)

里美Café 中間発表

リーダー 鈴木愛実
 副リーダー 出口貴仁
 外部連絡 森 拓哉
 書記 板垣里沙
 会計 伊藤美穂子

1

第一回里美訪問

地域おこし協力隊の方々と会議



2

第二回里美訪問

「里美の日」のお手伝い



4

第二回里美訪問

「里美の日」準備のお手伝い



3

訪問から得たこと

- * 観光資源を地域住民自ら発掘しようとするモチベーションの高さ
- * 今あるものを無理なく使い、新たなものを生み出す
- * 地産旬食の大切さ
- * ヨソモノでも自然と受け入れてくださる里美地区の方々の温かさ

5

茨苑祭

出品物

- * 飲料 (クラフトいちと同様)
- * お菓子 (ホットケーキ等)
- * 工芸品 (クラフトいちと同様)

※生野菜の当日の加工が不可能



6

あおぞらクラフトいち

出品物

- * 飲料(里美珈琲、牛乳、ニンジンジュース)
- * お菓子(にんじん、カボチャ、そば粉、米粉を使用したもの)
- * 工芸品(木工房SEEDSの作品など)

※規制の影響により、
加熱処理された物
のみ出品が可能



7

「里美の日」in水戸

開催場所 「遊び家クロロ」

出品物

- * 飲料(里美珈琲、牛乳、飲むヨーグルトなど)
- * お菓子
(クラフトいちと同様)
- * 里美プレート
※内容未定



8

今後のスケジュール

- 8月 クラフトいち準備
➢ ブース設置準備、広報紙ラシ作成
- 9月 “あおぞらクラフトいち”
➢ 9月15、16日開催(水戸芸術館)
- 10月 “クラフト市”の反省&“茨苑祭”準備
“茨苑祭”
➢ 11月11、12日開催
- 12月 茨苑祭反省&“里美の日in水戸”準備
- 1月 「里美の日」in水戸
- 2月 里美の日反省と今後の活動について
*尚且つ、毎月1度は里美に訪問する。

9

里美訪問予定

- * 8月12日の“里美の日”と“エコミュージアム活動企画”に参加予定
- * また今夏には上記以外に1~2回ほど訪問予定
- * 里美訪問時に行う活動としては里美に住む人々の生み出したモノ・コトに触れること

10

予算

出費

レンタカー代	8,560
名刺用紙代	800
小計	9,360

予算

出店料	
あおぞらクラフトいち	5,000
茨苑祭	11,000
里美の日in水戸	0
パンフレット作製費	9,000(3,000×3)
材料費(雑費含む)	15,000(5,000×3)
小計	40,000

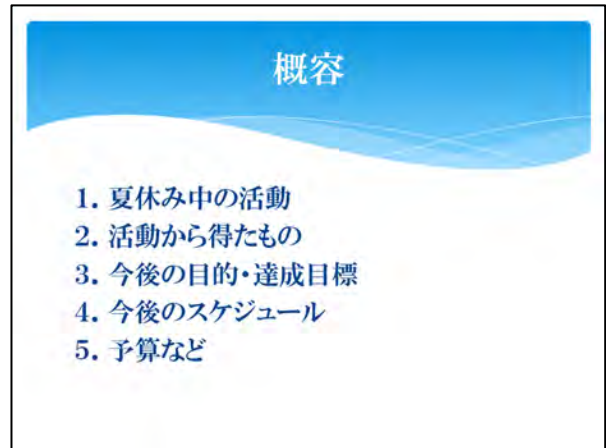
合計 49,360

11

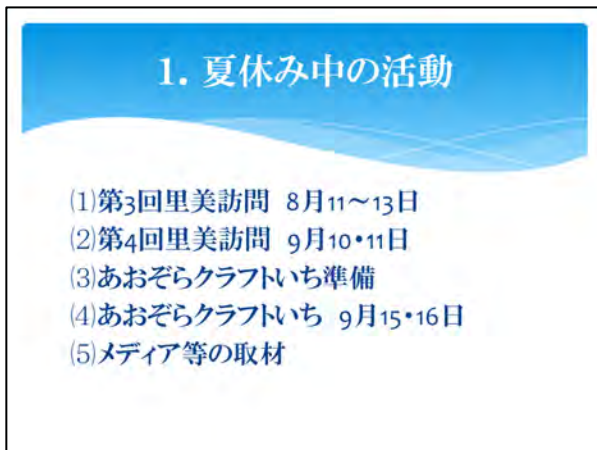
③ 中間発表会(10月10日)



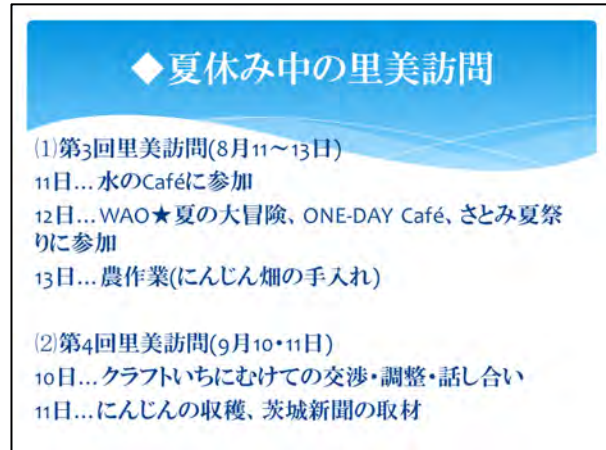
1



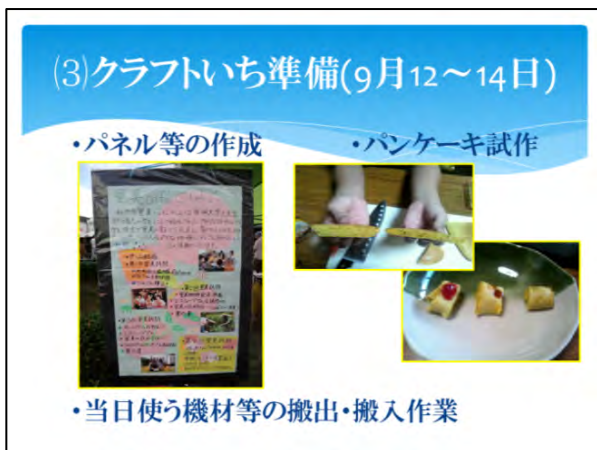
2



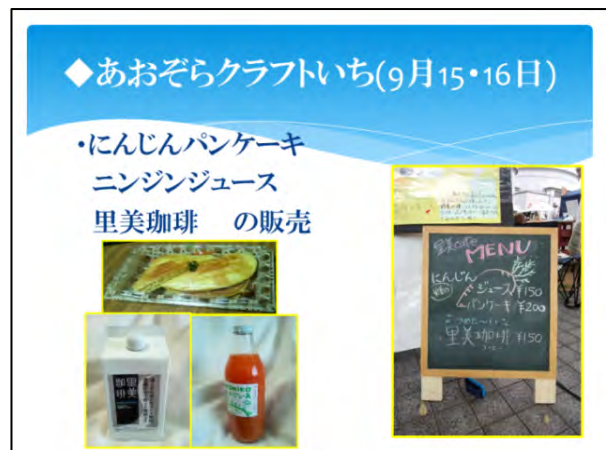
4



3



5



6

(4)あおぞらクラフトいち

- 木工房SEEDSの木工品(スプーンなど)
森林組合の木製ふくろうの販売



7

(4)あおぞらクラフトいち



- 二日間がんばるぞ!!
- いばらき高校生新聞の取材

8

(5)メディア等の取材



9

2. 活動から得たもの

- ①里美地区のイベントに参加することで現地の人々との交流がより深まった。
- ②にんじん畑の手入れや収穫などを通して、現地の自然を五感全てで感じることができた。
- ③水戸市内のイベントに参加することで、里美をより広い地域の人々に感じてもらうことができた。
- ④メディアからの取材を受け、改めて自らの活動を考えるとともに、公共に情報を公開することの重要性を知った。
- ⑤たくさんの人々の協力を得ることで、活動が成り立つことを改めて実感できた。

10

3. 今後の目的・達成目標

目的:里美の産品を通して、より多くの人に里美に対して興味・関心を持ってもらう

達成目標:

- 1.里美を感じることで、新たな魅力を探る
- 2.地域の方(里美や水戸)と協力しながら、県内で里美の魅力をPRする
- 3.県内(主に水戸市内)でのチーム活動等を通し、多くの人々に里美を知ってもらう

11

4. 今後のスケジュール

10月...第5回里美訪問 10月13日(鈴木先生、茶大捜査班1名同行予定)

11月...茨苑祭 11月12日(二日目のみドリンク屋を出店予定)

12月...茨苑祭反省&里美の日in水戸準備

1月...里美の日in水戸 (遊び家クロロにて開催予定)

2月...里美の日in水戸反省&今後の活動について
※毎月1度は、里美訪問を行う

12

④ 中間発表会（12月19日）



1



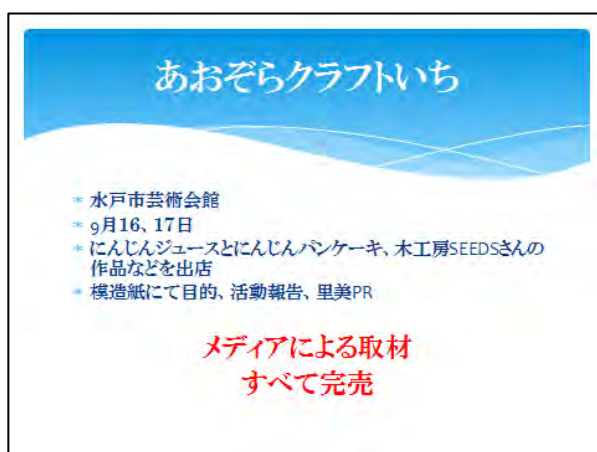
2



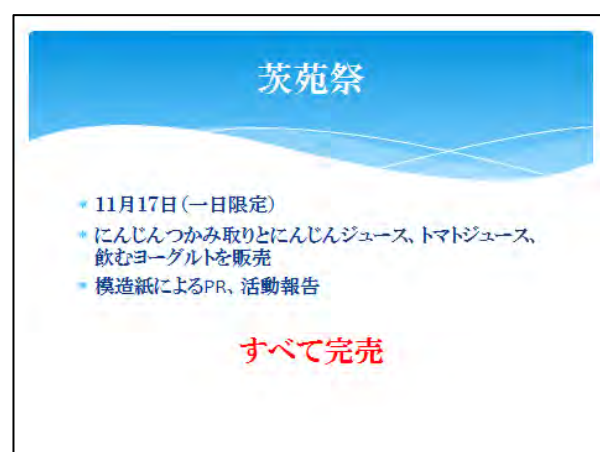
3



4



5



6

今後

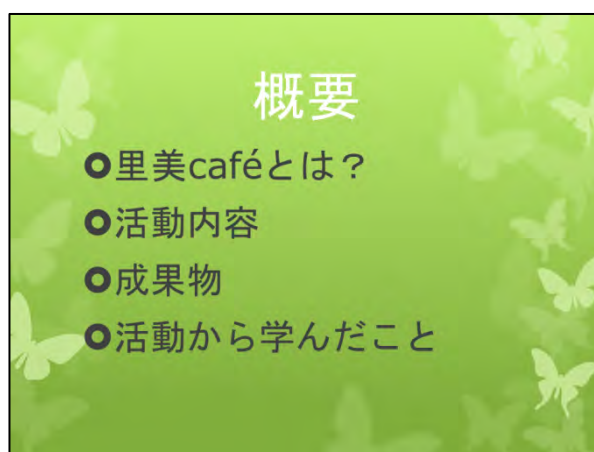
- * 里美でのプレゼン
- * 住民を対象として里美caféの活動報告など
- * 1月27日(日)



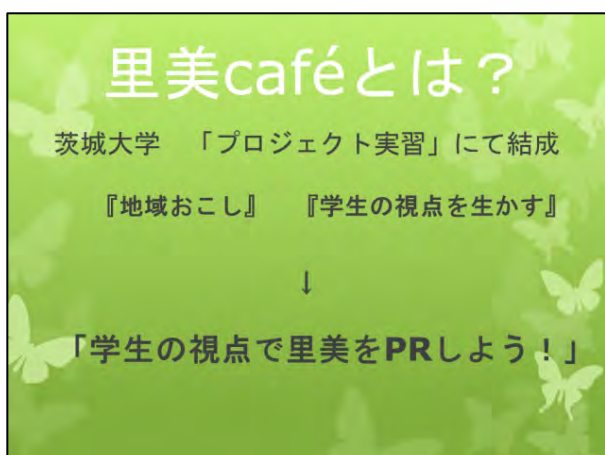
- * 今年度の活動総括 *ワンデーCafé企画は断念



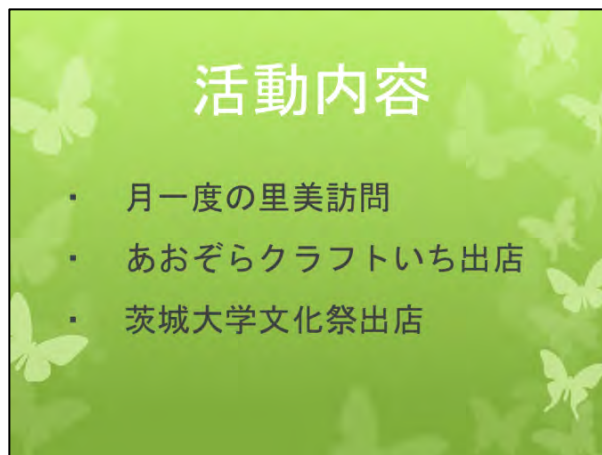
1



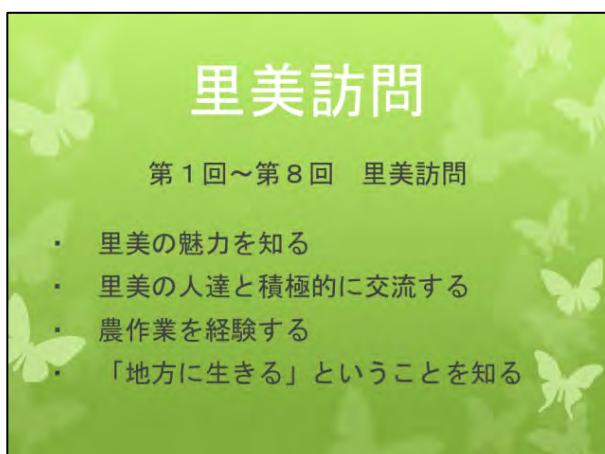
2



3



4



5



6



7



8



9

あおぞらクラフトいち

9月15, 16日 → 「里美café」として出店

メニュー

- にんじんジュース・里美珈琲
- にんじんパンケーキ
- 木工品の展示及び販売

メディアから取材受けました！

10



11



12



13



14



15



16



17



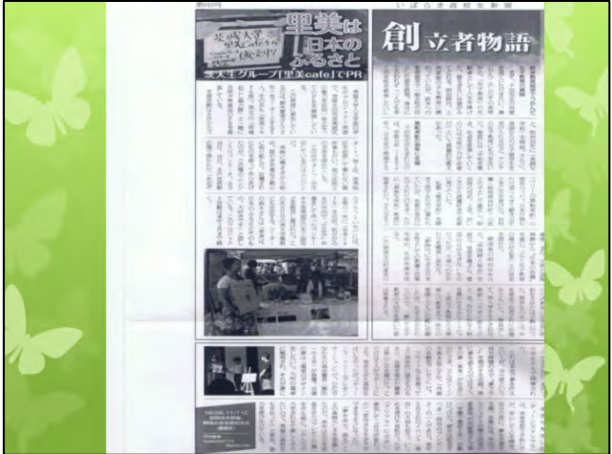
18

成果

1. イベント出店等を通して里美をPRし、多くの人に里美を知ってもらうきっかけを作ることが出来た
2. 茨城大学と里美の連携
3. 水戸を中心にPR活動を継続する可能性

「今後もいろいろな形で
里美をPRしていきたい！」

19



20

茨苑祭

11月11日 茨苑祭に「里美cafe」として出店

メニュー

- にんじん・トマトジュース
- 飲むヨーグルト
- にんじんつかみ取り

「すべて完売！！」

21



22



23

活動から感じたこと

- 地域のつながり
- 地域への愛着
- ひらかれた地域
- 地域の宝物発信
- まとめ

24

里美caféチーム

顧問：蜂屋 大八准教授
メンバー：鈴木 愛実
 出口 貴仁
 森 拓哉
 板垣 里沙
 伊藤 美保子

1

概要

- 里美café
- 活動内容
- 成果物
- 展望
- 決算

2

里美café

『学生の視点から里美をPRしよう!』
↓
里美の魅力を知る
↓
イベントに「里美café」として出店する
↓
『里美の日 in 水戸』開催!

3

活動内容

- ・ 月一度の里美訪問
- ・ あおぞらクラフトいち出店
- ・ 茨苑祭出店
- ・ 里美報告会

4

里美訪問

第1回～第8回 里美訪問

- ・ 里美の魅力を知る
- ・ 里美の人達と積極的に交流する
- ・ 農作業を経験する
- ・ 「地方に生きる」ということを知る

5

あおぞらクラフトいち

9月15, 16日 →「里美café」として出店

メニュー

- にんじんジュース・里美珈琲
- にんじんパンケーキ
- 木工品の展示及び販売

「すべて完売!!」

6

茨苑祭

11月11日 茨苑祭に「里美café」として出店

メニュー

- にんじん・トマトジュース
- 飲むヨーグルト
- にんじんつかみ取り

「すべて完売！！」

7

里美報告会

1月26日、27日 → 里美caféのこれまでの活動を発表
(with 地域プロジェクト実習チーム)

活動内容 → 里川カボチャの商品開発
里美の人達と意見交換

長期的な視点で里美との連携を考える！
商品化及び販売に関して具体的なプランを練る！

8



9



10

成果

1. 里美の魅力をPRすることができた！

- ・イベント → あおぞらクラフトいち、茨苑祭
里美の特産品の販売及びポスター、チラシなどでPR
- ・メディア → 茨城新聞、茨城高校生新聞
メディアを上手く利用して、里美をPR

11

成果

2. 茨城大学と里美との連携の基盤ができた

里美café → 地域おこし協力隊
常陸太田市役所
里美の住民の方々

様々な『つながり』を継続させる
ことが最重要！！

12

成果

3、水戸での里美のカフェ出店の案が浮上！！

→ 水戸の泉町会館にて出店予定
(地域おこし協力隊の方々が奮闘中！)

《里美の日 in 水戸が別の形で実現するかも！！》

里美の魅力を見る、聞く、感じる



里美に魅力を様々な地域に広げていく！

13

反省

『学生の視点から里美をPRしよう！』 → ○

里美の魅力を知る → ○

イベントに「里美café」として出店する → ○

『里美の日 in 水戸』開催！ → △

17

展望

- ・ 里美café、地域プロジェクト実習チームの連携！
→ 商品開発 + 販売促進及びPR
- ・ 積極的に里美PRのアイデアを生み出す！
→ 今年度でたくさんの魅力を知る
そのうえで来年度、自分たちに何ができるのか？
- ・ 里美との『つながり』を継続させる
→ これから何年も茨城大学と里美が連携できるように
里美の魅力を後輩に伝えていく

15

決算

1. 授業内予算 内訳

内容	日付	執行額
レンタカー使用料	2012/6/23	8560
名刺用紙	2012/7/0	511
レンタカー使用料	2012/10/13	11430
床花祭参加費	2012/12/10	11942
合計		32443

2. 出店費用

イベント名	売上	(売上準備)
あおぞら クラフトいち	42400	9698
床花祭	21650	4670
合計		14568

3. 雑費

品名	金額
クラフトいち出店料	5000
調理用具費	3352
パネル準備費	1905
雑費	8150
合計	19457

16

ご清聴ありがとうございました！

「さあ、みんなも
里美に行こう！！」

17

茨城大生「café班」

ニンジンの間引き作業を行う
学生たち＝常陸太田市小菅町



茨城大学の学生たちが、就業力育成支援カリキュラムの一環として開講されている実習の中で、常陸太田市里美地区の魅力を紹介する「里美café班」を立ち上げ、地域住民と交流しながら活動を続けている。

里美café班のメンバーはいずれも人文系の学生で、リーダーを務める3年生の鈴木愛実さんと2年生4人の計5人。「里美地

常陸太田・里美の魅力PR

実習通し住民と交流

区のPRのため、一緒に活動してほしい」という同市地域おこし協力隊の呼び掛けにこたえて、結成された。6月から毎月1回、里美地区を訪れ、農作業を行い、夏祭りに参加するなどしている。

里美café班は15、16の両日、水戸市の水戸芸術館広場で開かれる「あおぞらクラフトいち」に出店。里美地区の食材を生かした手作りパンケーキの販売などを通して、魅力を知ってもらうことにしている。4回目の訪問となった11日は食材の確保を兼ねて、小菅町の畑で育ててきたニンジンの間引き作業を行った。

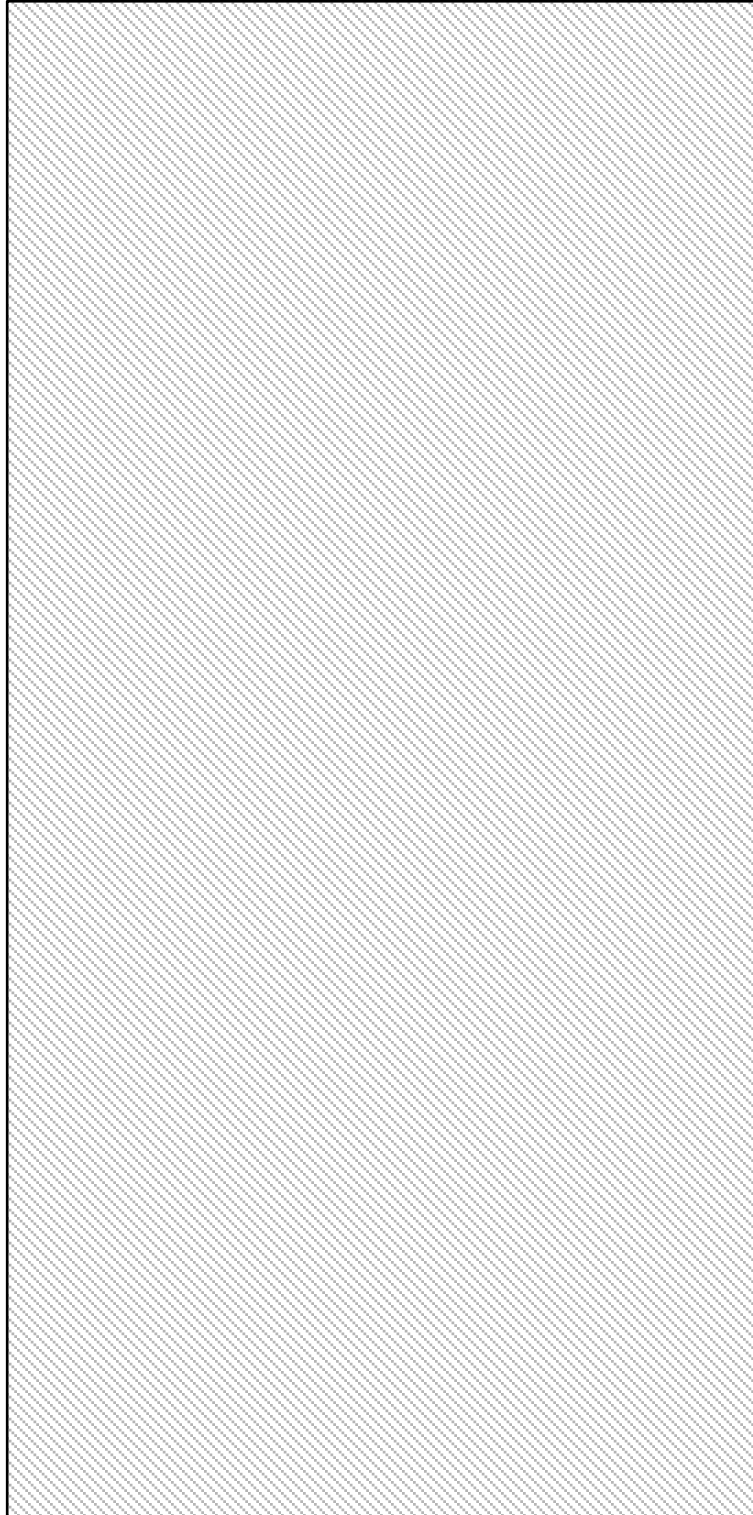
リーダーの鈴木さんは「自然が豊かで、住民の皆さんも温かい。訪れるたびに、若い人たちがもつと里美地区に興味を持ってください、という思いが強くなった」と話し、地域に根差した体験学習について「新鮮で楽しい」と語った。市域おこし協力隊の石川明紗さんは「若者の情報発信力に期待している」と述べた。

里美café班は今後、11月に開かれる茨城大学の学園祭にも出店するなどして、里美地区の食材をはじめとするPR活動を水戸市を中心に進めていく。

(谷津馨)

里美は日本のふるさと
茨大生「里美 Café」で PR

いばらき高校生新聞 第 010 号



e. 決算

里美Caféチーム 支出内訳					
1.授業内予算 内訳					
内容	日付	執行額			
レンタカー使用料	2012/6/23	8560			
名刺用紙	2012/7/10	511			
レンタカー使用料	2012/10/13	11430			
茨苑祭参加費	2012/12/10	11942		合計	32443
2.クラフトいち 売上					
出品商品名	仕入数(個)	販売価格(円)	販売数(個)	売上(円)	原価(円)
にんじんジュース	16	150	124	18600	15400
里美珈琲	6	150	60	9000	4500
にんじんパンケーキ	52	200	52	10400	9442
木工房SEEDS	4	※	4	3600	2600
森林組合	2	400	2	800	560
				総売上	(売上-原価)
				42400	9898
3.茨苑祭 売上					
出品商品名	仕入数(個)	販売価格(円)	販売数(個)	売上(円)	原価(円)
ニンジンジュース(コップ)	5(ビン)	150	19	2850	4600
ニンジンジュース(ビン)		1050	3	3150	
トマトジュース(コップ)	4(ビン)	150	15	2250	3980
トマトジュース(ビン)		1050	2	2100	
飲むヨーグルト	50	200	50	10000	8400
ニンジンつめ放題		100	13	1300	0
				総売上	(売上-原価)
				21650	4670
4.雑費					
品名	金額				
クラフトいち出店料	5000				
調理用具費	3352				
パネル準備費	1955				
雑費	9150			合計	19457

4. 総括



人文学部人文コミュニケーション学科 3 年次 鈴木愛実

私は今回のプロジェクト実習を通して初めて里美地区を訪れ、魅了されました。私が「里美の魅力」と感じているのは、豊かな自然・産物とそこで暮らすウェルカムでアクティブな人々です。それを多くの人々に知ってもらうため、里美地区に足を運んでもらうため、そしてファンになってもらうため、プロジェクトチームの活動を一年間進めてまいりました。そのチーム活動の中には問題察知力、問題解決力が養われる場がたくさんありました。悩みながらも、私たちには何ができるのか、そしてそれを里美地区に住む人々や PR の受け手である人々はどのように感じるのだろうか…を学生視点から考えチームで行動することができたと思います。結果が目に見えてわからないのが地域おこしだと言われますが、こういった小さな積み重ねを継続的に続けていくことが大切だと強く感じました。プロジェクト実習を通して学んだことは人それぞれだと思いますが、自分たちの今後の様々な活動の中でも生きてくる、かけがえのないものだと思います。



人文学部人文コミュニケーション学科 2 年次 出口貴仁

私は里美 café チームで一年間活動した。チーム内では里美を PR することをメインテーマとして掲げ、その目標を達成するために試行錯誤を繰り返してきた。その様々な活動の中で私が一番感じたこと、それは、「地方」に生きるとは何であるのか、ということである。地方は田んぼばかりでデパートなどの店もなく、とても不便だ、というのが世間一般のイメージであろう。私もそのような考えであった。しかし、実際に里美に訪問したり、里美の住民に人達と交流をしたりしていく中で、私はその考えを改めた。里美では住民同士が親密なネットワークを築いており、都会にはない温もりが存在している。里美の人たちは、お互いに協力して生活する、という意識が強く、地域のイベントや隣人の名前すら知らない私にとって、それは衝撃的でもあり、新鮮なものであった。そのような意識こそ、里美の大きな財産であると思うし、私も見習わなければならないと感じた。



人文学部人文コミュニケーション学科 2 年次 森拓哉

今回のプロジェクト実習を通して、プロジェクトチームの作り方から社会人としてのマナー、課題の対処の仕方など多くのことを学ぶことができました。初めて、チームとして会議をした頃は、ただ茨城という地域のためになにかしたい！なにかアピールできるもの作りたい！café で地域を盛り上げたい！などという意欲だけでした。しかし何度となく目標、目的、コンセプトなどをみんなで考えスケジュールを立てることができ、最終的にはほとんどを実現することができました。また里美への訪問方法やおおぞらクラフトいちでの調理場所などの課題が多くでしたが、その都度メンバーみんなで解決することができました。1 年を通してこのような経験ができたことはただサークルやゼミにいただけでは得られない貴重な体験だったと思います。今後も里美の方々とせっかくできた縁を大切に活動継続していきたいと思っています。



人文学部社会科学科2年次 板垣里沙

私は、地域のために何か活動してみたいという思いがあり、里美Caféチームの活動を始めました。里美には地域おこし協力隊のrelierという方々が地域のために活動しています。最初は、地域を活性化するためにrelierの方々は何かすごい活動をしているだろうと思っていました。しかし、実際に一緒に活動してみるとrelierの方々がおこなっていることは、地域の人がちょっとずつ、自分にできることを自分のフィールドで地域のために出来ることをサポートすることでした。そこで、里美のために私たちが出来ることは、今の自分に出来ることで地域を元気にすることだと気付かされました。私たちがこの1年間でやってきた活動は本当に小さなことかもしれませんが、この小さな活動を続けていくことで何か大きなものが生まれるのではないかと思います。これからも私たちの活動が少しでも里美のためになれば良いなと考えています。



人文学部社会科学科2年次 伊藤美保子

私が茨城大学に来たのは、茨城の地域おこしの技術を身に付け、地元を持って帰ろうというのが一番の理由でした。この授業で里美という地域と関わることが出来たというのは、私にとって必然だったのかもしれませんが。岩手の海辺で生まれた私にとって、山間部の里美という場所は、その住民の気質、風土は全くの正反対。何もかもが新鮮で、訪問を繰り返すたびに感心させられてばかりでした。毎度両手で持ちきれないくらいの野菜をくれたり、イベントへの出品要請を快く受け入れてくれたり、田舎＝閉ざされた地域という私の既成概念を、里美は簡単に覆してしまいました。同時に、地域をもっとよくしたい・PRしたいという思いが、机上の空論ではなく実際のプロジェクトとして成り立っているという事に驚かされ、今のほかの地域に足りないものはそこなのだと感じ、この感覚をはじめ、一年の授業を通し、里美から地域おこしの初歩を学ぶことが出来ました。

5. 顧問教員より

里美 café チームのガンバリがもたらしたもの

大学教育センターキャリア教育部准教授
蜂屋 大八

里美 café チームのみなさん、一年間の活動お疲れ様でした。あれは昨年5月のことだったでしょうか。みなさんを里美での地域参画活動に誘った時点では、私自身も里美との関係をようやく作り始めたところでした。大学教員とは言っても、所詮は一人の人間です。初めて入る土地では、一本の糸を紡ぐようにして関係性を結んでいくしかありません。人と人との関係を紡ぐという行為は、簡単なようでとても難しいものです。でも、私はきらいな行為ではありません。その難しさよりも、絆が深まったときの喜びの方が断然大きいからです。里美と茨城大学との絆は、まさにみなさんの活動が紡いできたものです。私は別の科目を後期から里美で開講しましたが、前期からの里美 café チームの活動があったからこそ、後期のプロジェクト実習Ⅰもスムーズに始めることができたのです。ありがとうございました。里美 café チームは、このプロジェクト実習の中でも異色の存在だと言えます。多かれ少なかれ、どのチームも地域社会や社会人との接点を持って活動をしてきたと思いますが、このチームはまるごと地域社会対象の活動でしたから、他の班よりも高いハードルを越えているはず。その点は自信を持って良いと思います。社会との接点を持つということは、学生だからという甘えは通じず、学生の感覚で接することは許されず、常に約束と礼儀に追われていたと思います。ですが、あと1～2年後にみなさんが身を置く場所は、まさにそういった「窮屈」な社会の中にあります。ここでの経験は、いずれ間違いなく身を助けてくれるはず。さ、このプロジェクト実習という授業が Project Based Learning という授業の形態であることは、鈴木先生から何度も伝えられてきたと思います。この授業形態は、一つの企画の立案から、準備、遂行、成果の検証までを受講生が体験することで、社会で求められる素養やスキルを身につけることを目的としています。その中でも、特に私が何度も何度も言い続けてきたことは、チームで達成すべき「目標」とそれぞれの活動の関係性の理解です。特に楽しい学外活動が多い里美 café チームの場合、楽しいが故に、その活動が最終的に目標のどこと結びつくのかを忘れがちになる恐れがありました。例えば、クラフトいちでメニューが完売したということは喜ばしいことですが、それはプロジェクトの目標の達成を意味する訳ではありません。「学生の視点で発見した里美の魅力をより多くの人に伝えたい」という活動の目標との関係性から見れば、小さな出来事かもしれませんが、高校生新聞の取材を受けたことや、クラフトいちで顔なじみになったお客さんが茨苑祭にきてくれたことや、注目してくれた人が里美の日に足を運んでくれたという出来事の方が、実は重要なのです。大きな「目標」の達成に近づくための「手段」として、みなさんのそれぞれの活動があったのであり、また、そのような「イベント」の開催を通して、「目標」に一歩一歩近づいていったのです。おそらく一年間の活動を終えたみなさんは、この「目標」とそれぞれの「活動」の関係性が理解できたことなのでしょう。今振り返ってみれば、一つ一つの活動が、スタートから「目標」の実現にいたる道筋に置かれたマイルストーンであったように感じる事が出来ると思います。最初はこの関係性の意味が分からなかったと思いますが、一年間の活動が、みなさんに成長をもたらしたのです。4月からは、一年前のみなさんと同じ状態の学生が加わります。関係性が見えているみなさんは、良きアドバイザーとして関わってください。茨城大学と里美地域や常陸太田市との関係は始まったばかりですが、かなり早いスピードで絆が深まりつつあります。そして、常陸太田市が学生の力に期待するところはとても大きいものがあります。一月末に里美で行った成果発表会での地域住民の反応を見れば、その一部を感じてもらえたと思います。一方で、若い学生が中山間地域の住民（主にお年寄り）と一緒に地域課題の克服に向かう活動には、マスコミ各社も大いなる関心を寄せています。若いみなさんの力には、各方面からとても大きな期待を寄せられているのです。茨城大学のような地方国立大学は、そのような小さな地域からの要望にも、真摯に答えていく必要があるのです。みなさんは、その最前線にいらっしゃると思います。私は、これからも、学生のみなさんと一緒に、地域からの期待に応えていきたいと思っています。是非、引き続き、力を貸してください。そして、私たちもまた、地域で活動することを存分に楽しんでいきましょう。あの里美のみなさんの喜ぶ笑顔を思い浮かべながら。

おわりに

伊藤 美保子

私たち里美 Café チームは、「里美の魅力伝え隊」という、もう一つの名前があります。この名前は、私たちがあおぞらクラフトいちなど外部のイベントに参加するときに使用していたものです。里美 Café チームは、プロジェクト実習の初期の講義で行われたブレインストーミングによって発足したチームです。その時にこのチームに集まったのは、「地域おこしをしたい」「空き店舗を利用したい」「商品開発をしたい」「なにか大きなことをしたい」「水戸を活性化させたい」「カフェを開きたい」など、バラバラの目的を持ったメンバーで、最初から里美とつながりがあった訳ではありませんでした。私たちチームメンバーに共通していたのは、「何かがしたい」というぼんやりとしたやる気でした。しかし、顧問の蜂屋先生、そして地域おこし協力隊の皆様の導きにより、里美という地を知ることが出来ました。私たちは里美に触れた途端、里美の元来の魅力と可能性に、これだ！とひらめくことが出来ました。里美は訪れるたびに私たちが持っていた田舎の既成概念を覆し、外部発信に熱心な地域住民の方々、文句なしの商品のクオリティーが、チームの背中を押してくれました。そうして、私たちが里美で感じた驚きと喜びを伝えようという決意によって、一年間活動を続けることが出来たのです。「里美の魅力伝え隊」というもう一つの名前は、私たちの里美に対する素直な感動そのものと言えます。

私たちの今年度の活動は、カフェというには程遠いものであったと反省しています。しかし、私たちと里美の関係は、今年度で終わるものではありません。今年実現できなかった水戸での定期的な里美 café 開店という目標は、来年度地域おこし協力隊の皆さんの手によって行われる予定になっています。今年度は、茨城大学と里美地区の出会いの年であったと思います。活動を継続させ、次の世代に引き継いでいくという事は、私たちが里美での活動を通してその重要性を感じ取った一つでもあります。これからもっと多くの学生が里美に興味をもち、より大きい活動へと進化していければ、と考えています。

茨大捜査本部

顧問教員

人文学部人文コミュニケーション学科准教授 菅谷克行

チームメンバー

人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース2年次	大内優花
人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース3年次	番場有彩
人文学部人文コミュニケーション学科歴史・文化遺産コース2年次	天野早苗
人文学部人文コミュニケーション学科文芸・思想コース2年次	坂上智香
人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース2年次	野村 萌
人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース2年次	藤根麻里
人文学部人文コミュニケーション学科メディア文化コース3年次	渡辺紗代

はじめに

大内 優花

このチーム「茨大捜査本部」は、「茨城大学の広報をしたい」という思いで結成した、茨大生主体で行われている行事や活動を中心に茨城大学に関するさまざまなことを取材した記事を Web ページに掲載するホームページ「走れ！茨大捜査線」の制作および運営を行うプロジェクトチームである。

このホームページは、「茨城大学がどのような大学なのか」を発信し、それを多くの学外の人々や「茨大生」に見てもらふことで、「茨城大学の広報」に貢献することを目的としている。

私たちは、「茨城大学に通う『茨大生』である私たちにも、茨城大学について知らないことがたくさんあるのではないか？」という疑問を抱いた。

学部や学科が違えばお互いにどのようなことをしているのか分からない、自分が所属していないサークルが何をしているのか分からない、というようなことが当たり前になっていると私たちは感じていた。多くの「茨大生」に知られていない情報の中には、自分以外の「茨大生」のおもしろい魅力的な活動がたくさん眠っているはずなのだ。

そこで、その疑問に対する 1 つの答えとして、『茨大生』の活動を“学生”が取材し、“学生”の目線で記事をつくり情報を発信することで、大学公式の情報とは異なる角度からの『茨城大学の広報』ができるのではないかと考えたのが、このプロジェクトの背景である。

大学公式の情報では伝えきれないものを発掘することと、「茨大生」にとってよりリアルで親近感のある目線から物事に対してアプローチすることは、“学生”による情報発信だからこそ可能であると考えている。その“学生”であるという強みを生かすことで、『茨大生』が知らない『茨大生』の魅力」を、多くの「茨大生」に知ってもらうことができる。また同時に、「茨大生」ではない学外の人々にとっても、大学公式の情報とは異なる角度からの情報を発信することは、価値のあることだと言える。

このように、“学生”が取材をし、“学生”の目線で記事をつくるということを最大限に生かし、大学公式の情報とは異なる角度からの「茨城大学の広報」を行いたいという考えを踏まえ、茨城大学の公式のものとしてではなく非公式のものとしてホームページを立ち上げた。

“学生”による、大学公式の情報とは異なる情報発信源として、「茨城大学がどのような大学なのか」を多くの学外の人々や「茨大生」に発信することで、このホームページが茨城大学の魅力の新発見ないしは再発見に役立つ存在になること、そして、それを通し、このプロジェクトの目的である「茨城大学の広報」を担えるようになることを目指している。

—目次—

はじめに	151
目次	152
1. 活動の目的・目標と概要	153
2. 活動の記録①	154
3. 活動の記録②	
a. 議事録	155
b. 取材風景	156
c. 発表スライド	160
d. 会計報告	169
e. 特記事項	170
4. 成果の記録/成果物の提示	
a. ホームページ	171
b. フライヤー	174
5. メンバーの総括	175
6. 顧問教員より	178
おわりに	179

1. 活動の目的・目標と概要

大内 優花

当チーム「茨大捜査本部」のプロジェクトは、「茨城大学の広報」を目的とする、ホームページ「走れ！茨大捜査線」の制作および運営を行うというものである。

このホームページは、茨城大学の学生である「茨大生」主体で行われている行事や活動を中心に、茨城大学に関するさまざまなことをチームメンバーが取材を行い記事にしたものを掲載することでもって、「茨城大学がどのような大学なのか」を発信するものだ。

Web ページという媒体を利用することで、スピーディーに広く情報を発信でき、かつ手軽に情報を得てもらえるため、「茨城大学の広報」をより効果的に行えると考えている。また、Web ページに留まらず SNS である Twitter の活用やフライヤーの掲示を行い、ホームページの認知度向上を図っている。

“学生” 目線の情報発信源として

私たちチームが「茨城大学の広報」を行っていくにあたり最も大切にしたいと考えることは、“学生”の目線を生かして情報を発信していくことである。

同じ大学に通っている「茨大生」同士であっても、学部やサークルが自分と異なる「茨大生」のことをあまり知る機会がないのが現状だ。私たちが「茨城大学に通う『茨大生』である私たちにも、茨城大学について知らないことがたくさんあるのではないか？」という疑問を感じたのはそれが理由だった。この現状を変え、自分が知らなかった大学の魅力を「茨大生」が再発見することが可能になれば、それが学部やサークルを越えた交流が広がるきっかけとなり、ゆくゆくは「茨大生」と茨城大学の更なる発展につながるのではないかと考えた。

それには、『茨大生』が知らない『茨大生』の魅力』を発信する必要がある。そこで、このプロジェクトでは、大学公式の情報からだけでは感じるできない「茨大生」の活動について、その魅力をよりリアルに伝えるべく、同じ大学に通う“学生”として取材を行い、大学公式のものとは異なるより親しみやすい角度からアプローチすることや、発信されずにいる「茨大生」の活動を発掘し発信していくことが、『茨大生』が知らない『茨大生』の魅力』の発信につながると考えている。

その“学生”の目線を生かすことを踏まえ、このホームページは、茨城大学の公式ではなく非公式のものとして立ち上げた。

このホームページを見てもらうことによって「茨城大学がどのような大学なのか」を大学公式の情報とは異なる角度から知ることができ、それは「茨大生」に対してだけに留まらず学外の人々にもいえることである。このホームページは、両者どちらにとっても価値のある情報発信源になることができると考えている。


このプロジェクトが目指すもの

プロジェクト1年目である今年度の目標は、活動の基盤であるホームページ「走れ！茨大捜査線」の設立を完了させることを第一とし、それに加え、可能な限り取材記事の数を充実させることである。

取材記事の数と質を充実させていき、最終目標としては、①このホームページが、多くの情報を発信することで「茨城大学がどのような大学なのか」を知ってもらうことを通し、学外の人々や「茨大生」に、茨城大学の魅力を新発見ないしは再発見してもらえる情報発信源となること、②そして、より多くの人々にホームページを見てもらうことで、「茨城大学の広報」に貢献すること、この2点を掲げている。

2. 活動の記録①

天野 早苗

- 5月23日 いばきやら制作委員会の発足
- 6月6日 構想発表(担当:番場)
6月20日 いばきやら制作の挫折
話し合い
- 
- 7月4日 茨大捜査本部の発足
7月11日 第1回中間発表(担当:大内・野村・渡辺)
- 9月~ サイト作り開始
- 10月9日 Twitter開設 @ibadai_sousa
10月10日 第2回中間発表(担当:大内)
10月14日 FLEAI マーケット取材
10月21日 インターナショナルチーム取材①
観月会取材
- 10月~12月 里美チーム密着取材開始
10月~ HOPE取材
- 11月4日 鋤耕祭取材
11月10・11日 茨苑祭取材
- 12月1日 地域史シンポジウム取材
12月4日 ホームページ開設 <http://ibadaisousasen.web.fc2.com/index.html>
12月9日 インターナショナルチーム取材②
12月19日 第3回中間発表(担当:天野・藤根)
12月~ イバダイガーTwitter対談開始
フライヤー制作
- 1月23日 フライヤー掲示
1月30日 最終発表(担当:大内・番場・野村)

3. 活動の記録②

a. 議事録

5月23日(水)	4限	参加者：大内・番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
24日(木)	1限	番場・天野・野村・藤根
29日(火)	1限	番場・天野・野村・藤根
31日(木)	1限	番場・天野・坂上・野村・渡辺
6月5日(火)	1限	大内・天野・野村・藤根・渡辺
6日(水)	1限	大内・番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
13日(水)	4限	大内・番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
20日(水)	4限、5限	大内・番場・渡辺・野村・藤根・坂上・天野
25日(月)	3限	番場・天野・藤根
27日(水)	4限	大内・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
7月4日(水)	4限	大内・番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
5日(木)	3限	大内・渡辺
11日(水)	4限	大内・番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
18日(水)	4限	大内・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
25日(水)	4限	大内・番場・坂上・野村・藤根・渡辺
28日(土)	11：30～	天野・藤根・渡辺
9月12日(水)	11：00～	坂上・野村・渡辺
20日(木)	11：00～	坂上・野村・渡辺
10月3日(水)	1限	大内・番場・天野・野村・藤根
10日(水)	4限	大内・番場・天野・野村・藤根・渡辺
17日(水)	1限	番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
24日(水)	1限	大内・天野・坂上・野村・藤根
31日(水)	1限	大内・坂上・野村・藤根・渡辺
11月7日(水)	1限	大内・番場・天野・坂上・野村・藤根・渡辺
14日(水)	1限	番場・坂上・野村・藤根
21日(水)	1限	番場・天野・坂上・藤根
28日(水)	1限	番場・天野・坂上・野村
12月5日(水)	1限	番場・天野・坂上・野村・渡辺
12日(水)	1限	大内・番場・天野・坂上・野村
1月23日(水)	1限	大内・番場・天野・坂上・野村・渡辺
30日(水)	4限、5限	大内・番場・天野・野村・藤根・渡辺

b. 取材風景

坂上 智香

10月14日 FLEAI マーケット取材



- ・実行委員長 菅井悠香さんにインタビュー
- ・FLEAI マーケットの様子調査

子供連れや学生など多くの来場者でにぎわっており楽しい雰囲気イベントとなっていた。

10月21日 観月会取材



- ・お茶会に参加、小泉晋弥先生にインタビュー
- ・観月会の様子調査、六角堂周辺調査

お茶会ではおいしいお茶とお菓子をいただいた。また、六角堂の傍から見る五浦の海はとてもきれいだった。

10月21日 インターナショナルチーム取材



・サンドラマッケイ博士、留学生 Siti Faridah さん、学生スタッフ代表武田暁人さん(茨城大学)、
飛田亜久里さん(茨城キリスト教大学)にインタビュー
茨城大学と茨城キリスト教大学との連携プロジェクトとしてグローバル教育の講演会や留学生と
の交流会があり良い講演会となっていた。

10月～12月 里美チーム密着取材

「茨大捜査線」チームと「里美 cafe」チーム連動企画「里美日記」

10月13日 茨苑祭話し合い・挨拶回り

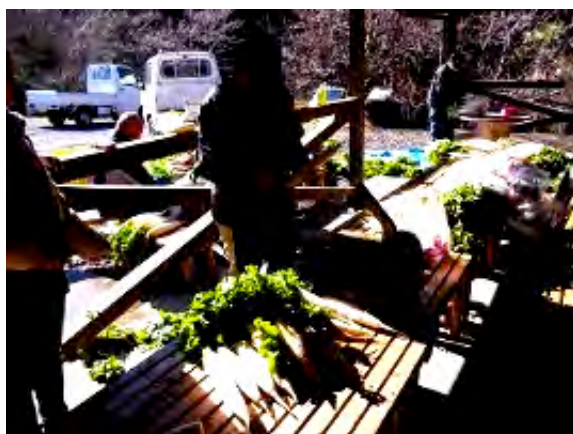
11月9日 にんじん収穫



11月11日 茨苑祭



12月9日 茨苑祭のお礼挨拶回り・里美の日



10月～ HOPE取材



11月4日 鍬耕祭取材



農学部ということで様々な動物に触れ合えたり、野菜の販売が行われていたり農学部ならではの文化祭となっていた。

11月10日・11日 茨苑祭取材



学生や会場を訪れた地域の方々でとても賑わい、中夜祭のステージにも多くの来場があった。

12月1日 地域史シンポジウム取材



雨と雪という悪天候の中でしたが多くの来場者があり、人気のあるシンポジウムだった

12月9日 インターナショナルチーム取材



和気あいあいと楽しい、大学生と高校生、留学生の距離感の近い交流の場となっていた。

各取材担当者

10月14日	FLEAI マーケット	取材担当：天野早苗
10月21日	「グローバル化時代の文化、言語教育」 観月会	取材担当：野村萌、天野早苗 取材担当：坂上智香、藤根麻里
11月4日	鋤耕祭	取材担当：番場有彩、天野早苗
11月10・11日	茨苑祭	取材担当：大内優花、渡辺紗代
12月1日	地域史シンポジウム	取材担当：天野早苗
12月9日	「海外を近くに感じよう」	取材担当：大内優花
10～12月	里見チーム密着	取材・hope 取材担当：番場有彩
12月～1月	イバダイガーTwitter 対談	担当：野村萌

c. 発表スライド

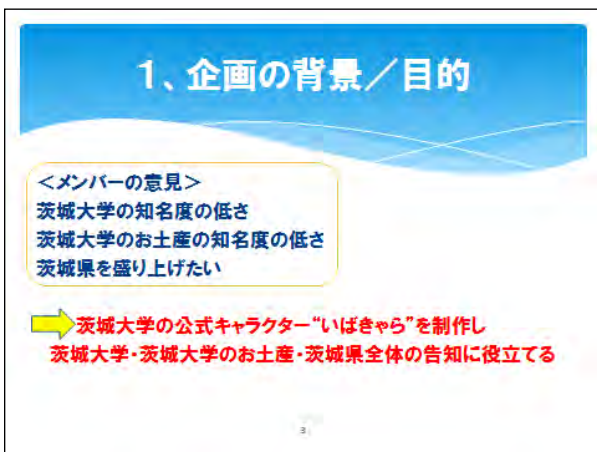
構想発表会（6月6日）



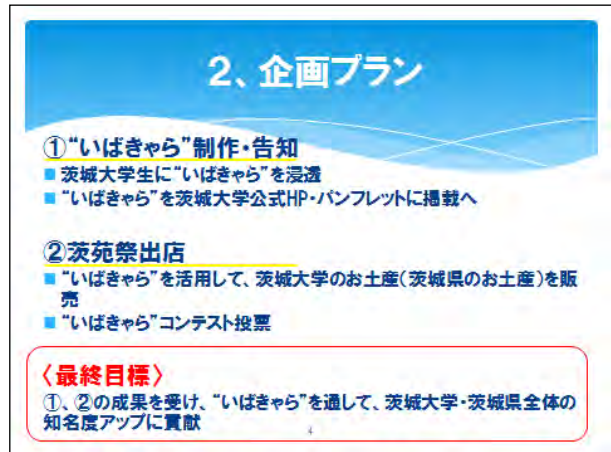
1



2



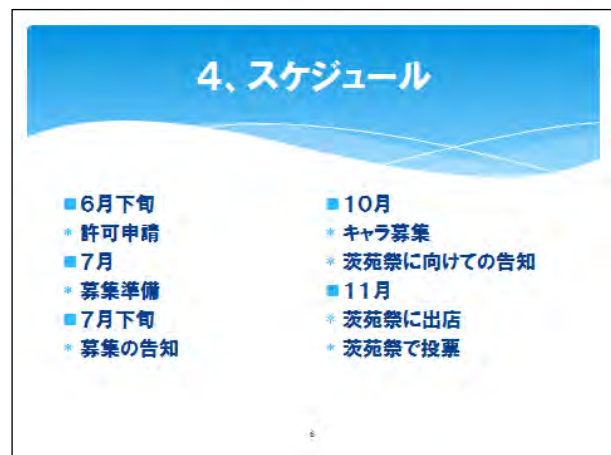
3



4



5



6

5、収支計画

※ 宣伝費(ポスター材料、応募景品)	¥10000
※ 茨苑祭参加費	¥3000
※ 茨苑祭準備費	¥3700
<hr/>	
※ 合計	¥50000

中間発表

プロジェクト名: 走る!茨大捜査線
チーム名: 茨大捜査本部
顧問: 菅谷克行先生

1

1

目次

- ☑ チームの主旨変更
- ☑ キャラ作りに関して
- ☑ 新しい企画に関して
- ☑ 今年度目標
- ☑ スケジュール
- ☑ 予算

2

2

チームの主旨変更

- ☑ 公式キャラクターにすべく、お願いをしにいったところ、難しいと言われ、そこで、人文学部の公式キャラクターはどうかと言われたが、そこでも1年では難しいとのこと。
- ☑ そこで、原点回帰し、私たちがそもそもやりたかったことについて話し合った結果、こうなりました。

3

3

キャラ作りに関して

- ☑ 公式キャラクターを作るのに際して必要なこと
 - ▶ 全学部学年、教員が関わること
 - ☑ プロジェクト実習の授業は人文の専門科目のため、全学部学年という条件を満たしていない
 - ▶ キャラのコンセプトなど細かい設定を練ること
 - ▶ デザイナーに頼むため、ある程度の期間が必要
- ☑ つまり、1年では作ることができない!

4

4

新しい企画に関して

- ☑ **企画主旨**
 - ▶ そもそも、茨大生が茨大の事をよく知らないのではないか
 - ▶ というわけで茨大生に茨大のことを知ってもらおう
 - ▶ あわよくば、受験生にも参考になるような
- ☑ **企画コンセプト**
 - ▶ 「人文学部って何勉強しているの？」に答えられるように

5

5

- ☑ **企画内容**
 - ▶ より多くの情報を伝えるためにHPを作成
- ☑ **HPのコンテンツ**
 - ▶ 学部の紹介
 - ▶ ゼミの紹介
 - ▶ サークルの紹介
 - ▶ キャラまとめ
 - ▶ メールフォームとそれに答えるページ
 - ▶ 座談会ページ

6

6

今年度目標

- ☑HPの作成、コンテンツの充実
- ☑HPをWeb上で公開する
- ☑HPの広報活動

7

7

スケジュール

- ☑7月18日 ゼミのtwitter, HP調査
他大学、企業などのHPを参考にHPのデザイン、
言い回しなどを考える
- ☑28日 オープンキャンパスにて、高校生に質問調
査
- ☑7月中 HPの枠組みを作る
- ☑9月 1度集まり各自の進行状況などを報告
- ☑10月 コンテンツなどを充実させていく
広報ポスター作成
- ☑11月 ポスター発注、HPをWeb上にアップ

8

8

予算

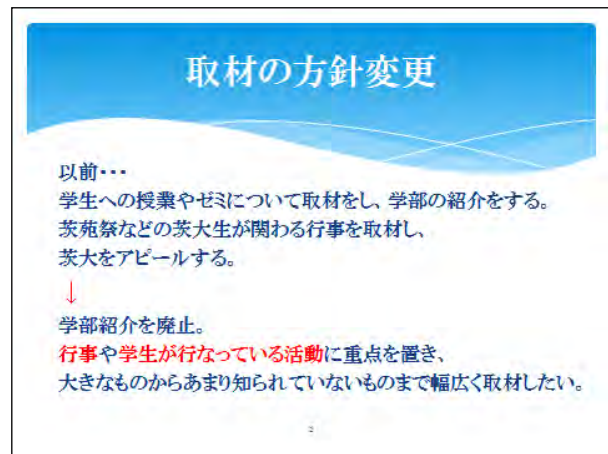
- ☑ポスター発注 2,550円
(プリントパック・A4 100部)

9

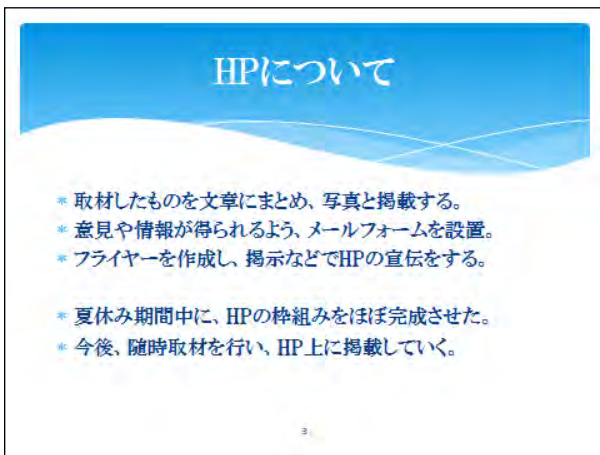
9



1



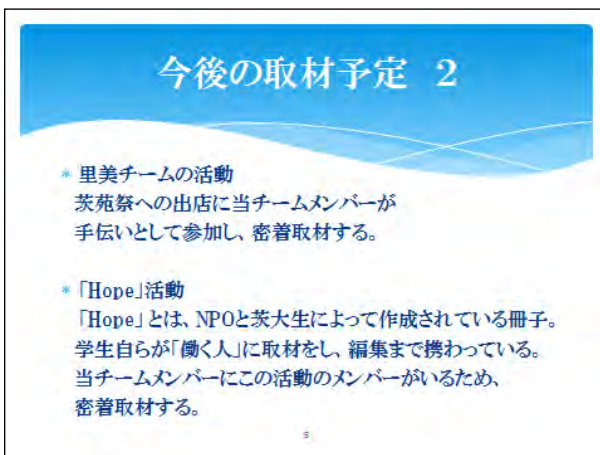
2



3



4



5



6

走れ！茨大捜査線

茨大捜査本部

メンバー：大内優花 番場有彩
渡辺紗代 天野早苗
坂上智香 藤根麻里
野村萌
顧問：菅谷克行先生

①

1

目次

- プロジェクト始動
- 挫折
- プロジェクト再始動
- 「走れ！茨大捜査線」とは
- 活動履歴
- HP(成果物)
- 総括①活動のまとめ
- 総括②今年度の反省
- 総括③来年度へ向けて
- 予算

②

2

プロジェクト始動

茨城大学の広報

↓

茨城大学公式キャラクター

↓

いばきやら制作委員会

↓

デザインの募集(茨城大学生)
投票→キャラ決定
茨苑祭への参加
Web広報
茨城大学グッズとのコラボレーション

親しみやすい
覚えやすい

③

3

挫折

“公式”であるが故に茨城大学からの許可が必要
どこに行けば許可がとれるのか？ } 学務へ
どんな企画書が必要なのか？

↓

許可は出せない

- 1年でできることではない
- 学校と共同で進めなくてはいけない
- “茨城大学”の公式なのに“人文学部生”しかない

茨城大学の広報

④

4

プロジェクト再始動

私たちの知らない茨城大学

↓

捜査・まとめ

↓

走れ！茨大捜査線

いばきやらって誰！？

人文学部って何してるの？

⑤

5

「走れ！茨大捜査線」とは

- 「茨城大学」の魅力を発掘・発信
- HPを作って捜査結果を発表

<捜査の変更点>
授業や学部・ゼミなど学校そのものについて
→イベント、茨大生の活動・活躍について


HPの作成・運営

⑥

6

活動記録


- 10月14日 FLEAIマーケット
- 10月9日 Twitter発足
- 10月21日 観月会
国際ナショナルチーム取材
- 10～12月 里美チーム密着取材
- 10月～ HOPE取材
- 11月4日 鋤耕祭



7

活動記録

- 11月10・11日 茨苑祭
- 12月～ イバダイガー twitter対談
フライヤー制作
- 12月1日 地域史シンポジウム
- 12月4日 **HP開設**
- 12月9日 国際ナショナルチーム取材
- 12月23日 フライヤー掲示



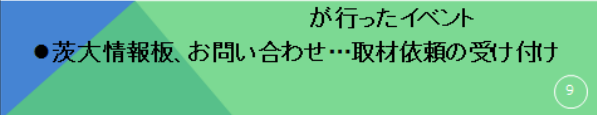
8

HP

<HPという形式にした理由>
より多くの人に見てもらえる
タイムリーな情報発信が行える

<HPの内容>


- 学内活動録…学内で行われたイベント
- 学外活動録…学外で行われたイベント
- プロジェクト実習活動録…プロジェクト実習のチーム
が行ったイベント
- 茨大情報板、お問い合わせ…取材依頼の受け付け



9

HP


- URL
<http://ibadaisousasen.web.fc2.com/index.html>
- Twitter
@ibadai_sousa
<https://twitter.com>
→HPへ簡単にアクセスできる
RTによって拡散してもらえる



10

総括①活動のまとめ

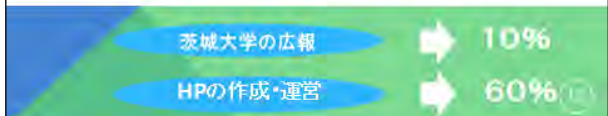
- 取材件数…10件
- 記事アップ数…4件
- Twitter発足(10月19日)
- HP開設(12月4日)
- フライヤー制作・掲示



11

総括②今年度の反省

- HPの仕上がりの遅れ
→HP広報の不足
- 取材のネタ不足
→HPコンテンツの不足
- 記事の確認、許可取りの遅れ
→HPの特性を生かしきれていない



茨城大学の広報	10%
HPの作成・運営	60%

12

総括③来年度へ向けて

- 取材ネタの充実
 - 他学部へ目を向ける、記事の配分改善
 - 他学部メンバーを募集
- 記事確認、許可取りの速度アップ
 - 1記事に担当1人の現状から、複数名担当へ
- HPの広報
 - 「茨大捜査本部」というチーム自体の広報
- HP作成に必要な技術の習得

13

13

決算

●デジカメ	8,400円
●ICレコーダー	4,100円
●SDカード	2,600円
●ネックストラップ	1,575円
●バインダ	441円
●デジカメ用ネックストラップ	871円
●フライヤー	1,845円

計 19,832円

14

14

ご清聴ありがとうございました！



15

15

d. 会計報告

・デジカメ	8,400 円
・ICレコーダー	4,100 円
・SDカード	2,600 円
・ネックストラップ	1,575 円
・バインダ	441 円
・デジカメ用ネックストラップ	871 円
・フライヤー	1,845 円
	<hr/>
合計	19,832 円

e. 特記事項

いばきやら制作委員会としての開始と挫折

天野 早苗・藤根 麻里

まず、私たちのプロジェクトは、「茨城大学の広報をしたい」という思いから始動した。茨城大学を知ってもらうには何をしたらよいかとチームで考えたところ、親しみやすい・覚えやすい茨城大学の公式キャラクター“いばきやら”というものを作れば、茨城大学の広報をすることにつながるのではないかということになった。そこで、チーム名を“いばきやら制作委員会”とし、活動を始めることとなった。

茨城大学の学生にキャラクターの案を公募で募り、茨苑祭でコンテスト形式の投票という形をとって決定し、キャラクターが決定した後はグッズ・茨城大学ホームページ・パンフレットなどにそのキャラクターのイラストを載せて茨城大学の広報に役立てていきたいというのが当初の計画だった。そこで活動の見通しなどを考え、年間の活動計画や顧問の先生を決定した。その際に今年度はグッズ展開、ホームページ・パンフレット掲載などをすることが時間的に厳しい為、「キャラクターの決定」が到達目標であると設定した。まず、公式キャラクターを作るためには、大学側にキャラクター制作の主旨を伝え、許可をもらわなければならなかった。そこで6月に私たちは“いばきやら制作委員会”の企画書を作成した。

そして、私たちは茨城大学の学務部と総務部に行き、茨城大学の公式キャラクターとして“いばきやら”を学生から公募したいという旨を伝え、企画書も見てもらった。しかし、「プロジェクト実習」が人文学部の授業であり、われわれの中には人文学部の学生しかいないために公平性に欠けるのではないかということ、大学側としてもキャラクターを作ろうという動きはあるが、1年という短いスパンでは難しいということの説明を受けた。人文学部の学生だけであることが公平性に欠ける理由として、全学部にも公募を呼びかけるとしても他学部にも茨城大学の公式キャラクターを作りたいと考えている人がいる可能性があり、そのカバーはできるのかということ、日立や阿見のキャンパスにまで情報が行き渡るのかなどが挙げられた。1年という短いスパンでは難しい理由として、手続きなどに時間がかかり、いくつかの会議にかけて承認してもらう必要があるために授業が完結するまでの1年という期間は短いため、メンバーが変わってしまうとまた振り出しに戻ってしまうということが挙げられた。実質的に、茨城大学の公式キャラクター制作への道が途絶えたといっても過言ではなかった。

私たちは悩んだ結果、なぜ茨城大学の公式キャラクターを作りたいと思ったか、初心に立ち返って考えた。私たちの根本的な目標は、「茨城大学の広報」である。公式キャラクターの制作が最もわかりやすい形での広報だと考えていたが、改めて考えてみると、現在茨城大学に通っている私たちも、茨城大学ではどのような行事があつてどのような活動をしているのかをよく知らないことに気がついた。そこで、茨城大学がどのような大学かを学生目線で取材して記事に起こし、Web ページに掲載していくという非公式サイトである「走れ！茨大捜査線」を立ち上げることにした。それに伴い、チーム名も「茨大捜査本部」に変更した。非公式サイトの特徴は、形式にとらわれず、大学の公式サイトとは異なる視点から自由に記事が書けることである。当初は大学で行われるイベントを取材するという方針だったが、非公式サイトであるということを考えて、茨城大学に所属する学生が主体となって開催されているイベントをメンバーが体験的に取材するという方針で活動していくこととなった。

4. 成果の記録/成果物の提示

a. ホームページ

渡辺 紗代

ここでは、私たちが実際に作ったホームページの内容ではなく、ホームページ自体の成り立ちというものを簡単かつ具体的に説明していく。

- ・ホームページの成り立ち
 - ・スタイルシート
 - ・ホームページのデザイン（レイアウト、アイコン、フォントなど）
 - ・HTML ファイル
 - ・ホームページ自体の中身（タイトルとか内容）
- ・使用した編集ツール

スタイルシート…メモ帳

HTML ファイル…TeraPad（無料でダウンロード可）

※HTML ファイルもメモ帳で編集することができる

- ・例) トップページ



・このページのHTMLの記述

<head>は、あまり実際には目に触れないものについてが主である。

検索でちゃんと見つけてもらえるように、このスタイルシートを読み込んでください、などである。

```
<html><head>
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=Shift_JIS">
<meta http-equiv="Content-Script-Type" content="text/javascript">
<link rel="stylesheet" href="samplestyle1.css" type="text/css">
<meta name="author" content="茨城大学 茨大捜査本部"/>
  <meta name="description" content="茨城大学 茨大捜査線 非公式サイト" />
  <meta name="keywords" content="茨大捜査本部, 茨大捜査線, 茨城大学, IbarakiUniversity, 水戸市, イバダイガー, 根力育成プログラム, 茨苑祭, 茨大, イバダイ" />
<!-- [FC2 Analyzer] http://analyzer.fc2.com/ -->
<script language="javascript" src="http://analyzer55.fc2.com/ana/processor.php?uid=2123593" type="text/javascript"></script>
<noscript><div align="right"></div></noscript>
<!-- [FC2 Analyzer] -->
<title>走れ！茨大捜査線</title>
</head><body >
<!-- header -->
<div id="header">
</div><!-- header ここまで -->
```

<navi>は画像では左側に表示されているメニュー部分である。

```
<!-- navi -->
<div id="navi">
<ul style="list-style-image:url(img/jp94kj2.gif)">
<li><a href="index.html">TOP</a><pre></pre>
<li><a href="ibadaisousasen.html">茨大捜査本部とは</a><pre></pre>
<li><a href="cercle.html">サークル月刊</a><pre></pre>
<li><a href="1211110.shiensai.html">文化祭潜入捜査録</a><pre></pre>
<li><a href="gakunai.html">学内活動録</a><pre></pre>
<li><a href="gakugai.html">学外活動録</a><pre></pre>
<li><a href="project-jisshuu.html">プロジェクト実習活動録</a><pre></pre>
<li><a href="http://ibadai-jouhouban.bbs.fc2.com/" target="_blank">茨大情報板</a><pre></pre>
<li><a href="otoiawase.html">お問い合わせ</a><pre></pre>
<li><a href="link.html">リンク</a><br>
</ul>
</div><!-- navi ここまで -->
```

<content>は中身である。具体的な記事の内容や、トップページでは更新履歴が主になっている。

```
<!-- content -->
<div id="content">
<h1>はじめに</h1>
このサイトは、現役茨城大学生が運営する大学”非”公式サイトである。<br>
```

我々、茨大捜査本部のもと独断と偏見によって内容が更新される。

普段知ることのできない茨城大学の一部を紹介するのが我々の使命である。

<h1>特集</h1>

「イバダイガー×茨大捜査本部 Twitter 対談なう！」

※リンクはふきだしからどうぞ

<h1>更新履歴</h1>
<p>13. 2. 5 イバダイガーTwitter 対談掲載
<p>13. 1. 31 学内活動録にて、FLEAI マーケットの記事掲載</p>
<p>13. 1. 22 学外活動録にて、Hope 〈前半編〉の記事掲載</p>
<p>13. 1. 15 茨大情報板、設置しました</p>
<p>13. 1. 15 誤字修正しました</p>
<p>12. 12. 22 プロジェクト実習活動録にて、里美
cafeの記事掲載</p>
<p>12. 12. 21 プロジェクト実習活動録にて、インターナショナル
の記事掲載</p>
<p>12. 12. 14 HP 開設</p>
<!-- /#content --></div>

<footer>は分かりづらいが、2 枚目の文字の書いてあるあたりである。色分けをしていないので
<navi>や<content>との境界が見た目上、ない。

茨大捜査本部が作ったということ、このページの更新された日付を載せている。

<!-- footer -->
<div id="footer">
<p>Copyright © 2012 茨大捜査本部, All Rights Reserved.
Last modified at 2013-1-31</p>
<!-- /#footer --></div>
</body></html>

b. フライヤー

これは、立ち上げたホームページを広報するために私たちが作成したフライヤーである。水戸キャンパス内の各掲示板などに掲示し、ホームページの広報を図った。「捜査線」というイメージに基づき、メンバーがスーツで歩いている写真を使用している。

ついに始動——
茨城大学非公式HP
「 走れ！茨大捜査線 」

あなたは、「イバダイセイって何してるの?」と聞かれたら、答えられますか?
本当のところは、実の茨大生でもなかなか答えられないはず!

しかし、茨大生の知らないところで、日夜、ステキな活動をしている茨大生が沢山いるのです!!
茨大捜査本部は、そんなステキな茨大生の情報を常にキャッチし、突撃レポート!
体当たりでつかんだ捜査結果をwebで公開中。
これを見ればもっと、茨城大学が好きになっちゃうかも☆

捜査員を募集しています!!
興味がある方は、
「メニュー」→「メールフォーム」へ!
学部・氏名、「捜査員希望」と書いて送ってください!

いまずぐHPへ!!

<https://ibada.sousa.web.fc2.com/>

Twitter アカウント
@ibada_sousa

KEEP OUT

5. メンバーの総括



人文学部人文コミュニケーション学科 2年次 大内優花

この1年間は、私にとってさまざまなことを感じ、経験できた、とても大切な時間となりました。今回このプロジェクト実習の授業に参加したことを通して、プロジェクトを成功させるために必要な過程一つ一つの大切さとそれらを達成する大変さを感じました。それは今後の私の大きな糧になると思います。そして何より、当初目指していた目標が閉ざされる苦い過程もあったなかで、負けることなくそれを一人ひとりとチームの力に変えて乗り越えここまで進んできたこのチームは、私にとって1番のチームです。至らないところばかりのリーダーで、メンバーみんなの力強いサポートと優しさに本当に助けられました。このメンバーでチームを結成して、先生方、このプロジェクトに協力して下さったすべての方の温かいご指導とご支援をいただきながら、このメンバーでこの「走れ！茨大捜査線」のプロジェクトを1年間全うできたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



人文学部人文コミュニケーション学科 3年次 番場有彩

私がこのプロジェクト実習を1年間受講して感じたのは、「話し合うことの大切さ」です。この授業は、他の授業とは全く異なり、自分たちで主体的に進めていかなければ何も始まりません。最初は顔も名前も知らないメンバーが7人集まり、一つの目的に向かってゼロから計画・実行していくのは、正直言ってとても大変な作業でした。「茨城大学を広報したい」という根本の想いは一緒でも、それに向かうプロセスにはメンバー各々、様々な意見を持っています。それらを限られた時間の中ですり合わせていかなければならず、面倒に感じることもありました。しかし、それでも私たちは毎週ミーティングを開き、活動の方向性をなるべく話し合って決めるようにしました。その結果、誰かが勝手に進めてしまうのではなく、メンバーがそれぞれ自分の担当分野で力を発揮出来る「全員野球」のチームに成長できたと感じています。ホームページ制作や取材活動に関してほとんど経験のない私たちが、一つのホームページをなんとか開設できたのも、メンバー同士、助け合い励まし合えたからだと感じています。メンバーの皆さんと貴重な経験ができた1年でした。本当にありがとうございました。



人文学部人文コミュニケーション学科 2年次 天野早苗

今回、私はこの授業を通して様々な体験をすることが出来たと思います。特に私たちのグループは茨城大学を知ってもらうというというコンセプトを元にゼロからの出発をし、一度プロジェクトの大きな挫折というものを味わいました。この挫折から、プロジェクトを進めていくということの大変さを痛感しました。プロジェクトを進めていく際にも関係者との連絡がうまく取れないということや、作業に遅れが出てしまったということなど問題点も多くありました。また、連絡を取る際などのマナーなど自分の至らない点も多くあったと感じます。しかし最後までプロジェクトを進めてくれたのはチームのメンバーとの協力があったこそだと思います。たくさん話し合いの時間をとり、みんなで意見を交換して今のプロジェクトを進めていくことが出来ました。このような体験が出来たことは私にとって良い経験となりました。またチームのメンバーには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



人文学部人文コミュニケーション学科2年次 坂上智香

このプロジェクト実習という授業では、多くの貴重な体験をすることができました。そして、自分の至らない点を多く見つけることができました。当初の企画が挫折したとき、「茨大の魅力を発信していくことが目的なのだから、他の方法を考えてみよう」と提案したものの、わたしはwebに強くもなく、取材に行く時間もとれず、あまりチームに貢献することができていませんでした。また、もっとも心残りなのは、観月会に取材には行ったものの、関係者の方々との連絡をうまくとることができず、ホームページにアップすることができていないことです。学生主体の行事とは異なり、大学の職員の方々としっかり連絡をとっていく必要がありました。日々の忙しさにそれができず、気づくといつのまにか時間がたちすぎていました。後悔し、もう、このような失敗はしないと心に誓いました。こんな至らないわたしをしっかりフォローしてくれたチームのみんなには、本当に感謝しています。



人文学部人文コミュニケーション学科2年次 野村萌

プロジェクト実習を通して学んだことは、学生だけで何かひとつの企画をやり遂げるのは難しいということです。特に多くの人に関わるものには、多くの時間と大人の協力が必要だと学びました。私たちのチームは当初考えていた企画と違う企画を進めることになり、企画を生み出すのも大変でしたが、それ以上にその企画を認めてもらうことが大変なのだと思身で学びました。企画を進めていくにあたっては、様々なやりとりの重要さとその大変さを感じました。主にメールでやりとりをすることが多かったのですが、基本的なメールのマナーもあやふやな状態だったので、プロジェクト実習の終盤になっても至らない部分が多かったと思います。先生やグループのみんなに指摘されながら、なんとかやれたという感じでした。最後に、プロジェクト実習ではグループのみんなの協力が必要不可欠だと思います。私たちもたくさん話し合いを重ねて、企画をなんとか形にすることができました。教えてもらったこと、助けてもらったことが多く、グループのみんなには感謝の気持ちでいっぱいです。



人文学部人文コミュニケーション学科2年次 藤根麻里

今年度プロジェクト実習という授業を通して、チームで一つのものを作り上げるこの大変さや、何かをするときには周囲の方々の協力が必要不可欠であるということを知りました。7人というチームでプロジェクトを進めていくにあたって、私たちは毎週会議を重ねてチームとしてどのようなことをやっていくのかということを考えてきました。その中で、メンバーの意見をすり合わせてチームとしての方針を決めていくというのは骨が折れる作業でした。また、取材して記事を制作するという特性上、取材先の多くの方々からご協力いただきました。マナーなどの面に関しては勉強不足であり、取材に協力してくださった皆さまには大変ご迷惑をおかけしたかと思ひます。最後に、チームの皆さんにはたくさん迷惑をかけてしまい、たくさん助けていただきました。本当にありがとうございます。この授業を受けて、このチームで活動できてよかったです。ありがとうございました。



人文学部人文コミュニケーション学科 3年次 渡辺紗代

プロジェクト実習で学んだことは、抽象的な目標を具体的な目標、目的から行動へと落とし込んでいくことの難しさです。私たちのプロジェクトは、本当にゼロからのスタートで何をやるのも自由だけれど、具体的にやろうと思うことができなければ、情報収集しようにも何を調べたらいいか分からないし、行動にも起こせません。私たちは方針がなかなか決まらず、行動に移るのも遅かったです。しかしその分、よりプロジェクト自体の基盤はしっかりできたのではないかなと思っています。また、「ほうれんそう」の大事さを改めて実感しました。報告・連絡・相談がなくては、メンバーの不安を煽ることになります。また、それに関するレスポンスをすることも大事だと思いました。相談しても誰も応えなければ、それは相談の意味がないですし、遅れてもいいから「ほうれんそう」とレスポンスをするということを徹底しなければならないなど、なかなかできてなかったのが自分なりの反省点です。この1年を通して、チームで動くということはどんな些細なことでも情報をこまめに共有し合い、たくさん話し合い、目的、目標に向かっていくものなのだということがわかりました。

6. 顧問教員より

人文学部人文コミュニケーション学科准教授
菅谷 克行

「学生が目線で茨城大学を広報する」という大きな目標に対し、挫折も含め、多くの経験をしながら一つの成果を出せたことは、プロジェクトメンバー各々にとって大きな財産になったことと思います。特に、情報を発信するための全プロセス（企画→情報収集・取材→コンテンツ作成・編集→情報発信）をメンバー内で分担し完結させたことや、複数の方法（Web作成・運営、Twitter、フライヤー）により多角的に広報活動を進めたことは、非常に実践的であり、教室内のみの授業ではなかなか実現できない貴重な経験になったことと思います。これらの経験を、今後、メンバー各々が「自信」に変え、「新たなスキルアップ」に繋げていって欲しいと考えます。

また、本プロジェクト「走れ！茨大捜査線」は、今学期末に複数の記事が次々にWeb掲載・公開され、まさに今始まったばかりとも考えられます（決して終了段階ではありません）。今後、大切なことは、本プロジェクトの目的「学生が目線で茨城大学を広報する」が、どの程度まで実現できたのかを、適切な期間で区切りながら評価・分析することです。そして、その結果をもとに、Webコンテンツ内容やPRの方法に修正を加えていくことです。そこまで実行して、初めてWebページの企画から運営までを一巡させたということになります。つまり、「来期の活動」が非常に重要なのです。

来期の本プロジェクト活動に期待を寄せつつ、現段階（今学期終了時）を「中締め」として、この一年間、努力を惜しまず本プロジェクトを遂行したメンバーの皆さんを称賛したいと思います。また、本プロジェクトの諸活動を支援していただいた皆様に対し、ここに記して感謝の意を表します。

おわりに

番場 有彩

私たち「茨大捜査本部」は、最初からこのチーム名であったわけではありません。前ページで述べたとおり、私たちは「いばきやら」を作る際に大きな挫折を経験し、ゼロからスタートすることを余儀なくされました。

しかし、いま思えば、この経験は私たちにとって重要なターニングポイントだったのではないかと感じています。なぜならば、「いばきやら」の挫折を通して、チームの活動を見つめ直し、「茨城大学の広報をしたい」という本来の想いを再発見することができたからです。

他のグループと比べると、本格的な活動のスタートダッシュは大幅に遅れてしまいましたが、自分たちの活動を冷静に見つめ直す時期があったからこそ、「茨大捜査本部」として再スタートし、チーム一丸となって進むことができました。

本格的な活動スタートの遅れはあったものの、年度内にホームページを立ち上げて記事を掲載することができたのは一つの大きな成果であったといえます。

反面、現在「走れ！茨大捜査線」ホームページに掲載されている記事は、9件と少なく（2月17日現在）コンテンツもまだまだ充実しているとは言えません。

また、ホームページ自体の認知度という点に関しても、まだ不十分と言えます。アクセス数も少なく、広報と呼ぶには、そもそもの認知度、拡散力が足りていません。

来期へ向けては、チームメンバーが1人でも多くホームページ制作に関する知識と技術を身に付けることも必要です。

来期も活動を継続し、より魅力的なホームページへと成長させて、茨城大学の広報として存分に役割を果たしていきたいと考えます。

さらに、twitterなどのSNSを積極的に活用することによって、情報の発信・拡散へとつなげていきたいと考えます。

最後に、「プロジェクト実習Ⅰ」担当顧問の鈴木敦先生、チーム「茨大捜査本部」顧問の菅谷克行先生には、終始適切なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。

また、取材に応じて下さった、インターナショナルチームの皆様、里美Cafeの皆様、常陸太田市・地域おこし協力隊の皆様、観月会関係者の皆様、地域史シンポジウム関係者の皆様、Hope学生レポーターの皆様、雇用人材協会・佐川雄太様、イバダイガー様、FLEAIマーケット責任者の皆様に感謝いたします。

インターナショナルチーム

顧問教員

留学生センター准教授 藤原智恵美

チームメンバー

教育学部学校教育教員養成課程・国語選修 3年次 武田暁人

人文学部人文コミュニケーション学科文芸・思想コース 3年次 芦田真子

人文学部社会科学科・経済経営コース 2年次 海野侍郎

人文学部社会科学科地域社会・福祉コース 3年次 大河由佳

教育学部学校教育教員養成課程・社会選修 3年次 山中健佑

人文学部人文コミュニケーション学科異文化コミュニケーションコース 3年次 川崎奈菜

人文学部人文コミュニケーション学科歴史・文化遺産コース 3年次 井上あゆ美

人文学部人文コミュニケーション学科 1年次 星野由季菜

はじめに

大河 由佳

私たちインターナショナルチームは、茨城大学の就業力育成支援事業「根力強化プロジェクト」の一環として開講される「プロジェクト実習」という授業で、外国や海外の出来事に興味がある学生が集まってできた組織です。

私たちは、2012年12月9日（日）に茨城大学・茨城キリスト教大学連携プロジェクト「国際交流 学生フォーラム『＜海外＞を近くに感じよう！』」を茨城大学で開催しました。本フォーラムは、23名の高校生参加者と、茨城キリスト教大学・茨城大学の学生・留学生が「海外」「留学」をテーマに留学体験談や座談会を行うことで相互の交流を図るものです。

チーム結成当初、メンバーは4人しかいませんでしたが、それでも個人のやりたいことをチームの方針としてまとめたり、実現可能な、地に足のついたプランを立てたりすることができず、初めの1ヶ月は右往左往する日々が続きました。そんなとき、本講義の担当教員である鈴木敦先生から、茨城キリスト教大学の国際理解センターと茨城大学の留学交流課で連携事業を行う予定があるということをお教えいただき、その事業の枠の中で、海外で起きていることや、外国のことについて、より多くの人に知ってもらうためのプロジェクトを行いたいと考えていました。そして、「国際交流」と「地域貢献」を大きな目標の柱とした学生フォーラムを開催することになりました。

フォーラムの内容は、大きく分けて三部構成になっており、第一部では留学経験者の体験談を聞き、第二部では参加者がより親しく情報交換ができるように座談会を行いました。また、第三部では、留学生や、高校生から参加してみたいの感想を発表してもらったり、高校生が自由に大学生に質問できる時間を設けたりしました。これらのプログラムを通じて、高校生と二つの大学の学生、留学生が一つの空間で時間を共有することにより、大学が所有している様々な資源を地域に還元することができ、「国際交流」と「地域貢献」という目標を達成することができたのではないかと考えております。

本企画を立ち上げることは初めての試みであり、思うようにいかないことも多々ありましたが、先生方のご指導や多くの方々の協力を得て、開催まで至ったことを大変うれしく思います。本報告書を通じて、フォーラム開催までの流れや、フォーラム当日の大変にぎわった会場の雰囲気、参加者の感想など、この企画がどのように結実したのかということや、運営チームメンバーの成長を感じていただけたら幸いです。

このような企画を実現できる機会に恵まれ、また、多くの関係者の方々にご理解、ご協力いただいたことを深く感謝いたします。

—目次—

はじめに	183
目次	184
1. 活動の目的・目標と概要	185
2. 活動の記録①	186
3. 記録の記録②	
a. インターナショナルチーム議事録表	187
b. 活動記録(写真)	189
c. PPT資料	190
d. タイムテーブル	198
e. 座談会グループ名簿	199
f. 会計報告	199
g. キャンパスツアー概要	200
h. 参加申込書	200
i. 案内状	201
j. パンフレット	202
【別紙資料1】	207
【別紙資料2】	207
k. チラシ	208
l. スタッフ/ゲスト資料	209
m. 誘導マニュアル	211
n. アンケート	212
o. 高校宛お礼状	223
4. 成果	
a. アンケート分析	214
b. 関係者一覧	225
c. 部門・個人レポート	227
5. 総括	246
6. 顧問教員より	249
おわりに	250

1. 活動の目的・目標と概要

「〈海外〉を近くに感じよう！」

武田 暁人

1. 企画立案の経緯

昨今、新聞等で海外留学数の減少などを踏まえて「日本の若者の内向き志向」と評されることがあります。長引く不況の影響から、また異文化と接触することへのためらいから、日本に留まろうと考える学生が増えているようです。しかし周知の通り、グローバル化が進展している現在、あらゆるものが「世界」という枠でつながっています。このような中で私たちは若者が「内向き」なままであり続けてはいけないと考えます。

茨城大学、ならびに茨城キリスト教大学には現在海外からの留学生や海外への留学経験者、また海外渡航経験者など様々な学生がおります。両大学には「内向き」から「外向き」へ視野を広げる機会があります。この両大学にある「機会」を同じ地域の高校へと還元することによって、これからの将来により多くの人々が海外への視野を広げることができるのではないかと考えるに至りました。

2. 企画目的

本学、茨城キリスト教大学に在籍する海外からの留学生や海外への留学経験者、また海外渡航経験者などとの交流を通して、同じ地域の高校生が海外を身近に感じることで、視野を世界に広げてもらうきっかけとする。

3. 企画コンセプト

「〈海外〉を近くに感じ、そしてつながる。」

言葉の意味には二面性がある。一般的に共有される意味と言葉を使った個人がその言葉に込めた意味である。一般的に共有される「海外」と実際に行った人の使う「海外」という言葉には違いがある。今回、実際に「海外」に行った人の体験を聞き、また座談会という形で直接コミュニケーションすることを通して、「海外に興味を持つ人」とつながることによって、参加者自らの視野を海外へと広げることを目指す。

4. 詳細

- 1) 対象：水戸市内の高等学校、ならびに茨城キリスト教学園高等学校の在籍者
- 2) 開催日時：平成 24 年 12 月 9 日（日）12:30~17:00
- 3) 開催場所：茨城大学 人文学部 A 棟 2F A201（地域連携コラボレーションルーム）
- 4) 定員：先着 50 名

2. 活動の記録①

芦田 真子

- 5月 22日 第1回 MTG (役員選出)
- 6月 5日 藤原智栄美先生(留学生センター准教授)顧問決定、茨城キリスト教大学との連携企画に乗る。実行委員メンバー募集開始
- 6月 19日 第10回定期 MTG (実行委員会(インターナショナルチーム)結成)
- 7月 6日 第14回定期 MTG (取締役・高校・コンテンツ・縁の下の力持ち部門編成)
- 7月 25日 企画案(茨城大学留学生センター主催シンポジウム『海外』を近くに感じよう!)作成・提出
- 7月 23日 茨城キリスト教大学 IC バディとの MTG
- 7月 28日 茨城大学オープンキャンパス参加
- 8月～ ポスター作成、ゲスト・スタッフ募集開始
- 9月 20日 茨城キリスト教大学 IC バディとの MTG
- 9月 23日 第25回定期 MTG(名称を「シンポジウム」から「フォーラム」に変更)
- 9月下旬 HP 開設
- 10月 2日 茨城県立水戸第二高等学校訪問(企画について案内、募集のお願い)
- 10月 10日 中間報告会
- 10月 11日 茨城キリスト教学園高等学校訪問(企画について案内、募集のお願い)
- 10月上旬 ポスター、チラシ完成、各高校に案内状郵送・参加者募集開始、随時広報活動
- 10月 21日 茨城キリスト教大学講演会『グローバル教育を語る』にスタッフとして参加
- 10月 28日 第1回ゲスト・スタッフ MTG (企画趣旨説明)
- 10月 31日 参加者募集締め切り、追加募集開始
- 11月 16日 参加者追加募集締め切り
- 11月 17日 第2回ゲスト・スタッフ MTG (ショートロールプレイング)
- 11月下旬 参加者へ向けて案内状郵送
- 12月 8日 第3回ゲスト・スタッフ MTG(リハーサル)
- 12月 9日 **国際交流 学生フォーラム「<海外>を近くに感じよう！」開催**
- 12月中旬～1月上旬 アンケート分析、反省、各部門&個人レポート作成
- 12月 19日～21日 危機管理シュミレーションについて話し合い、回答
- 1月中 チーム報告書作成、最終報告会に向けてまとめ
- 1月 25日 チーム報告書完成
- 1月 30日 最終報告会
- 2月 7日 第40回定期 MTG (最終 MTG)
- 2月中 プロジェクト実習内報告書作成
- 3月 21日 学生表彰 授賞式

3. 記録の記録②

a. インターナショナルチーム議事録表

芦田 真子

	日時	場所	出席者
第1回	2012年5月22日(水) 14:40~16:10		武田、海野、芦田
第2回	2012年5月28日(月) 18:30~20:00		武田、海野、芦田、大河(~19:00)
第3回	2012年5月29日(火) 12:20~12:55		武田、海野、芦田
第4回	2012年5月31日(木) 18:20~19:00		武田、海野、芦田
第5回	2012年6月2日(土) 17:10~23:30		武田、海野(~17:40)、芦田
第6回	2012年6月4日(月) 17:30~20:00		武田、芦田
第7回	2012年6月5日(火) 18:00~22:00		武田、芦田
第8回	2012年6月10日(日) 14:00~18:00		武田、芦田、山中(新規参加者)
第9回	2012年6月13日(水) 14:40~16:10	人文棟 C406	武田 海野 芦田 大河 山中
第10回	2012年6月19日(火) 12:00~13:00	茨城大学図書館ミ ーティングルーム	武田、海野、芦田、大河、山中、 (以下新規参加者)川崎、井上、 星野(12:30~)
第11回	2012年6月19日(水) 18:00~19:15	藤原先生研究室	藤原先生、武田、芦田
第12回	2012年6月20日(水) 12:00~13:00	茨城大学図書館ミ ーティングルーム	出席者 武田、海野、芦田、大河、 川崎(12:20~)、星野(12:40~)
第13回	2012年7月3日(火) 18:00~19:00	藤原先生研究室	藤原先生、武田、芦田、川崎、井上
第14回	2012年7月6日(水) 12:10~13:00	茨城大学図書館共 同学習室(小)	武田、海野、芦田、大河(12:50~)、 山中、川崎、井上、星野
第15回	2012年7月18日(水) 12:10~12:55	茨城大学図書館共 同学習室(大)	武田、海野(12:35~)、芦田、大河、 山中、川崎、井上、星野
第16回	2012年7月23日(月) 18:00~19:30	茨城キリスト教大 学サテライト	武田、芦田、山中、川崎、鈴木先生、 藤原先生/茨キリ・飛田(~19:05)、 斉藤、上野先生
第17回	2012年7月25日(水) 12:20~12:50	茨城大学図書館共 同学習室(大)	芦田、海野、大河(12:25~)、山中、 川崎
第18回	2012年8月1日(水) 12:10~13:30	茨城大学図書館共 同学習室(大)	武田、海野、芦田、大河、山中、川 崎、井上

第19回	2012年8月12日(日) 14:00~16:00	茨城大学国際交流会館 談話室	武田、大河、海野、山中、川崎、井上、星野
第20回	2012年8月29日(水) 15:00~16:30		藤原先生、武田、山中
第21回	2012年9月2日(日) 14:00~16:45	茨城大学国際交流会館 ラウンジ	武田、芦田、山中、川崎
第22回	2012年9月15日(土) 14:00~16:00	茨城大学国際交流会館ラウンジ	芦田、海野(15:00~)、山中(14:30~)、川崎
第23回	2012年9月20日(木) 13:00~14:00	茨城キリスト教大学サテライト	芦田、海野 茨キリ・飛田、・斎藤・富山・鈴木
第24回	2012年9月20日(木) 15:40~17:00	藤原先生研究室	藤原先生、池田先生、芦田
第25回	2012年9月23日(日) 14:00~17:00	茨城大学国際交流会館	武田、芦田、井上
第26回	2012年10月3日(水) 12:10分~13:20	共通教育棟2号館 21番教室	武田、芦田、大川、山中、井上、川崎、星野(12:30~)
第27回	2012年10月10日(水) 12:15~13:00	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、大河、星野、井上、山中(12:20~)
第28回	2012年10月17日(水) 12:15~13:00	共通教育棟2号館 11番教室	芦田、海野、大河、山中、井上
第29回	2012年10月24日(水) 12:15~13:00	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、大河、山中、井上、星野
第30回	2012年10月31日(水) 12:10~13:05	共通教育棟2号館 21番教室	武田、芦田、大河(12:25~)、山中、川崎、星野
第31回	2012年11月7日(水) 12:20~13:10	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野(~12:50)、芦田、大河、山中、井上、川崎、星野
第32回	2012年11月14日(水) 12:10~13:10	共通教育棟2号館 21番教室	武田、芦田、大河、山中、井上(12:25~)、川崎(12:20~)、星野
第33回	2012年11月21日(水) 12:20~13:15	共通教育棟2号館 21番教室	武田(~13:00)、芦田、大河(~12:55)、井上、川崎(~13:10)、星野
第34回	2012年11月28日(水) 12:15~13:00	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、大河、山中、井上
第35回	2012年12月5日(水) 12:10~14:30	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野(~13:00)、芦田、大河(~13:20)、山中、井上(~14:00)、川崎(~13:20)
第36回	2012年12月19日(水) 12:20~13:30	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、大河(~13:05)、山中、井上、川崎(12:30~13:00)
第37回	2013年1月10日(木) 12:15~12:45	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、大河、山中、井上、川崎、星野
第38回	2013年1月17日(木) 12:15~12:55	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、大河(12:20~)、山中、井上、星野
第39回	2013年1月24日(木) 12:20~12:55	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、大河(30分~)、井上、星野
第40回	2013年2月7日(木) 12:10~13:00	共通教育棟2号館 21番教室	武田、海野、芦田、山中、井上

b. 活動記録(写真)

武田 暁人

①茨城大学留学生センター・茨城キリスト教大学国際理解センター 連携プロジェクト「グローバル教育を語る」(10月21日)



マッケイ教授の講演風景とその後の交流会の風景。

②スタッフ・ゲストミーティング



協力いただいたチーム外での学生スタッフと留学生との打ち合わせの風景。

③フォーラム当日



ミニキャンパスツアー・ゲストスピーチ・座談会の風景と集合写真。

6月(プロジェクト初期案発表)

茨城大学「プロジェクト実習-スタッフ編-」
**インターナショナルチーム
プロジェクト案**

2012/06/04
顧問：藤原智栄美先生
リーダー：武田曉人
記録：芦田真子
会計：海野侍郎
遊撃：大河由佳

1

Index

- ・チーム名
- ・事業名称
- ・目的
- ・企画(案)
- ・実施日程、場所(予定)
- ・達成目標(成果物の有無)
- ・これからのスケジュール(段取り)
- ・予算案
- ・近日の活動予定

2

チーム名・事業名称

- ・ チーム名
インターナショナルチーム
- ・ 事業名称
**茨城キリスト教大学との
連携事業**

3

目的

この事業の目的は…
世界平和 と **地域貢献** です。

そして、この2つの言葉を結ぶキーワードが
グローカライゼーション

4

目的

世界平和

- ・大学、国籍の垣根を越えて、国際交流を深める。
- ・日本人学生と留学生が**相互の情報**を交換することによって、今後の**国際的な活動の活性化**に繋げる。

地域貢献

- ・茨城キリスト教大学と連携することで、大学間の交流を促進し、茨城大学をより地域に開放されたものにする。
- ・国際交流などについての**地域のニーズ**に応え、地域に情報を発信していく。

5

企画(案)

茨城大学における情報交換会

趣旨

- ・日本人学生と留学生の交流を通して、**グローバルな視野の育成**。
- ・留学についての理解を深め、**留学へのモチベーション及び意識の向上**。

参加者

- ・海外留学経験者(日本人学生及び留学生)
- ・海外留学に興味の持つ学生

6

企画(案)

内容:

- ・アイスプレイング
- ・海外留学経験者の体験報告
(茨キリからも3人、ゲストスピーカーを呼ぶ)
- ・留学生活Q&A
- ・留学生の悩み相談
- ・懇親会

※少し知識型の活動を入れるなら、世界における留学の動向などの簡単なインストラクションを入れるという選択肢もあり。

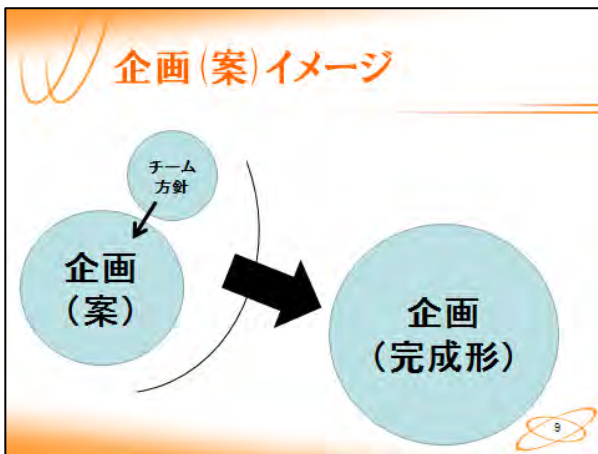
7

企画(チーム方針)

- ・学生主体で企画、広報、準備、運営する。
- ・1年生に参加してもらう。
(留学生やチューターの人たちと交流、
来年からのチューターに参加するきっかけ作り)
- ・内容に海外渡航についての情報を取り入れ、高校生向けの内容を作る。

*** 企画は近日中に立案、完成させる。**

8



9

実施日程、場所(予定)

- ・実施日程
2012年度後学期
(両校での話し合いにより決定)
ちなみに・・・「茨苑祭」11/10・11(土・日)
- ・実施場所
茨城大学
(参加人数によって詳細な開催場所を決定)

10

達成目標(成果物)

来場数 150人

満足度 100% (※)

※アンケート結果の集計から判断

11

これからのスケジュール(段取り)



- 6月 企画案提出
実行委員会結成
(28日 両校の先生の間で打ち合わせ)
- 7月 広報の下準備
企画内容の推進
- 8月 ゲストスピーカーへのアポイントメント
広報開始(大学内、茨キリ、その他学外へ)

12

これからスケジュール(段取り)

9月 運営準備
 10月or11月
 運営準備
 開催(当日の運営)
 12月 活動総括、報告会

* 月に一度ミーティングを行い、
 その都度茨キリと意見交換を行う。






13

予算案

- 広報費 20000円
 (カラーポスター印刷、ビラ代)
- 消耗品費 7000円
 (名刺、張り紙、看板、資料の印刷代)
- ゲスト(3人分)の当日の交通費 5400円
 (日立⇄水戸の電車代、バス代)

計 39400円






14

近日の活動予定

6月10日までに留学生を実行委員に引き込む。
 6月14日前後に企画案提出
 顧問の先生と検討、修正
 6月21日 企画案再度提出
 (6月28日 両大学間で打ち合わせ)

6月中に実行委員会結成(目標10人)

15

茨城大学「プロジェクト実習－スタッフ編－」
中間報告その2
**インターナショナルチーム
プロジェクト企画案**

2012/10/10
顧問：藤原智栄美先生

リーダー：武田曉人 遊撃：山中健佑
記録：芦田真子 遊撃：川崎奈葉
会計：海野侍郎 遊撃：井上あゆ美
遊撃：大河由佳 遊撃：星野由季

1

Index

- ・ 事業名称
- ・ 目的
- ・ 企画概要
- ・ 達成目標
- ・ 予算案
- ・ 部門構成
- ・ 今後の計画

2

企画概要①

【日程】
2012年 12月 9日(日)
12:30～17:00

【場所】
茨城大学 人文学部A棟2F 201号室
→約90名収容可能・机椅子移動可

【対象】
水戸市内高校生＋茨城キリスト教学園
→定員50名(先着締切)

5

企画概要②

【参加者(ゲスト)】(未決)
海外渡航経験者(留学経験者・留学生・海外
長期渡航経験者他)
→計約10名

『内訳』
→茨城大学 学生3名・留学生5名
→茨城キリスト教大学 学生&留学生4名

6

企画概要③

【内容(流れ)】

第一部 ○全体アイスブレイク
○海外渡航の体験談(留学生1名・日本人学生1名)

第二部 ○グループ別アイスブレイク
○座談会

第三部 ○海外生活Q&A
○個別質問タイム

6名ほど 6名ほど

7

予算案



- ・ 広報費 → 20,000円
(カラーポスター印刷、ピラ代)
- ・ 消耗品費 → 7,000円
(名刺、張り紙、看板、資料の印刷代)
- ・ ~~プロジェクター借用費~~ → ~~20,000円~~
- ・ 茨城キリスト教大学学生用当日交通費
→ 120,000円

計 147,000円

8

部門編成



- 高校部門
- 取締役部門
- 縁の下の力部門
- コンテンツ部門

9

今後の課題(前回)



- 高
 - ◆対象(営業)高校の選定。
 - ◆高校営業・広報にあたり、大学との連携。
 - ◆高校生ゲストの検索。
- 取
 - ◆当日スタッフ(司会進行)とゲストの絞込み。具体的な仕事の割り振りや打ち合わせ日程の決定。
 - ◆茨城との具体的連携方法。
- 縁
 - ◆広報の内容と方法の決定。ポスター作成。
 - ◆開催場所の選定。
- コ
 - ◆当日の内容のプランニング。(どんな内容・手立てなら目的を達成できるか。)

10

今後の計画

- 高
 - 水戸二高訪問(済)
 - 茨城キリスト教学園訪問
 - 募集取りまとめ
- 取
 - ゲスト、スタッフの協力依頼
 - ゲスト、スタッフのMTG開催
- 縁
 - シュミレーション設定
 - 備品調達・管理
- コ
 - シュミレーション・MTGによる内容修正

11

茨城大学「プロジェクト実習－スタッフ編－」
最終報告
インターナショナルチーム

2013/1/30
顧問：藤原智栄美先生

リーダー：武田暁人 遊撃：山中健佑
記録：芦田真子 遊撃：川崎奈葉
会計：海野侍郎 遊撃：井上あゆ美
遊撃：大河由佳 遊撃：星野由季菜

1

事業名称

茨城キリスト教大学との連携事業

茨城大学留学生センター・
茨城キリスト教大学国際理解センター
連携プロジェクト
国際交流学生フォーラム
「〈海外〉を近くに感じよう！」

2

目次

- これまでの流れ
ー目的、目標、活動内容
- 国際交流学生フォーラム
～〈海外〉を近くに感じよう！～を終えて…
ーフォーラムの反省(アンケートより)
- 「プロジェクト実習」としての反省
ー目的・目標設定、チーム体制

3

これまでの流れ

報告者：大河 由佳

4

目的

国際交流
→日本人学生と留学生、水戸市内と近隣の高校生との相互交流を行い各々のグローバルな視野を広げるとともに、海外渡航への関心を高める。

地域貢献
→茨城キリスト教大学との連携を図り、大学をより地域に開放したものにす。

5

5月～9月

- ・5月
インターナショナルチーム発足
- ・6月～9月
部門分け、定期ミーティング、ポスター作成、
スタッフ・ゲスト募集等

6

10月～11月 部門別①

- 取締部門**・・・情報の管理、連絡取次、スタッフ
ゲストミーティング開催




- 高校部門**・・・高校訪問、各高校へ文書送付、
参加者の取りまとめ

7

10月～11月

- ・連携プロジェクト第一弾、
茨城キリスト教大学主催
「グローバル教育を語る」
- ・国際ナショナルチーム
がスタッフとして、留学生が
ゲストとして参加



8

10月～11月 部門別②

- コンテンツ部門**
・・・座談会の詳細について話し合い・決定
- 縁の下の力持ち部門**
・・・物品発注等、裏方全ての仕事

9

12月

- ・〈海外〉を近くに感じよう！ 開催



10

「プロジェクト実習」の振り返り

報告者：武田 暁人

11

「プロジェクト実習」の振り返り①

目的設定

- ・チームでの反省の際、「目的」が適切だったのか疑問が
挙がった。
- 目的の内容についてチームで十分な検討・共有が
必要
- 熱意(個々の願望)・実現可能性(資源、自分たち
の能力等)・ニーズ(マーケティング、本当に必要
されるか)、これらのバランスを考えるべき

12

「プロジェクト実習」の振り返り②

目標設定

・参加人数の実質的な数値での目標達成率は46%、半分以上であった。

→どのような「目標」を設定すれば「目的」に近づけるか、十分にチームで検討する必要

→「目的」にある文言を実現するには、実際にどのような状態であるか共有が必要

※コンテンツ(実施内容)に大きく関わる



13

「プロジェクト実習」としての課題

チーム体制

・4部門+個人役割（リーダー・記録・会計・遊撃）
「高校部門」「コンテンツ部門」「縁の下の力持ち部門」
「取締役部門」

→責任の所在が明確化された

→横の繋がりが希薄だったため作業が遅延した

→茨城キリスト教大学の学生と安定したチーム体制を構築することができなかった



14

e. 座談会グループ名簿

国際交流学生フォーラム〈海外〉を近くに感じよう！ 「座談会グループ」名簿			
A	学生会		ゲスト
	会長	副会長	
A	土屋誠治 茨大	東田聖久 茨大	ハートウイ・ティ・フォン 茨大
B	藤田由希 茨大		グエン・フォン・ティ・タン 茨大
C	藤崎新一 茨大	東田アツナ 茨大	アブドゥル・バヤ 茨大
D	若林理央 茨大		前田佐枝 茨大
E	窪山佳苗 茨大	村上あゆみ 茨大	スベ・ヌ・ヌ・ワ (ナムナム) 茨大
F	栗原真英 茨大		チョウ・ハンブン 茨大
G	石田昌悟 茨大	外田希夏 茨大	サイ・ウセン 茨大
H	森谷外樹子 茨大		富山明理 茨大
I	宇野 聖也 茨大		リス・ムスタフ・シロー 茨大
J	藤田彩花 茨大	朝志田希 茨大	リベ・イ・モハメド・ケナブ (モック) 茨大

お話しは 【国産】
 Oグループ (シマ) の中で進行を導きます。各職性がゲストと話せるよ
 うにグループをまとめてください
 O一人の人だけが盛り上がりやすいように、気を配りましょう！
 O自分の体験が話せる場合は、ゲストの経験メインとしつつも、どんどん話
 していきましょう！

お話しは 【国産】
 Oグループ (シマ) の中で国産の話を話しましょう。留学生は日本語が
 分からないので、手取り大、通訳しましょう！
 Oグループが盛り上がることを目指して！盛り上がりになってしまえば、職性
 やゲストにいろいろ話せましょう！

お話しは 【ゲスト】
 O職性がみなさん口を開けてくれます。たくさん話してください
 O国産 (しかり) の人といっしょにたくさん職性と話しましょう。
 Oとさどさ、国産 (話) も使ってみると、たのしみかも！
 留学生とどんどん話しましょう！！

f. 会計報告

備考	執行		
茨城キリスト教大学等との連携事業経費	共同事業準備会	3,240	235,323
	お茶 (2L ペットボトル) *12本	7,500	
	ポスター印刷*40	7,300	
	ポスター印刷*30	4,770	
	チラシフライヤー印刷*500	36,750	
	「グローバル教育を語る」送迎バス (トークセッション参加者、スタッフ学生、教員)	71,400	
	「国際交流学生フォーラム」 消耗品等	34,305	
	「国際交流学生フォーラム」送迎バ ス	63,450	
	関係機関への報告書作成用消耗品等	6,608	

g. キャンパスツアー概要

インターナショナルチーム 縁の下の力持ち部門 教育学部 山中健佑 2012年11月19日
【キャンパスツアー概要】
 (対象) 茨城大学主催 国際交流学生フォーラム『海外を近くに感じよう!』に参加する高校生
 (目的)

フォーラムに参加する高校生の中には大学進学を考え茨城大学への進学を考えている生徒もいると考えられることから、茨城大学に来る高校生に対して茨城大学のキャンパス諸施設の案内をすることによって大学でのキャンパスライフを思い描いてもらい進路選択の参考にしてみようということが目的である。

(日時) 12月9日(日) 12:00~12:20
 (集合場所) 茨城大学生協前

(内容) キャンパスツアーというところで茨城大学水戸キャンパス内を歩いて回り諸施設をめぐります。休日ということですので各学部種内には入ることができないことから基本的には屋外から諸施設を見て回ることにします。

ルート案は以下の図。キャンパスツアーをする際、茨城大学水戸キャンパス内を歩いて回り諸施設をめぐります。休日ということによって、よりキャンパスライフを思い描くことができると考えられることから単なる施設の説明のままでせず茨城大学生はその施設でどのようなことをしているのか、普段の生活の様子をうかがい知ることのできる情報を適宜盛り込んでいく。また大学進学の上で茨城大学への進学を高校生に考えてもらえないように茨城大学の魅力を発信することができるようになっています。

(キャンパスツアー案)



*高校生から要望があればルートを変更しなるべく見たいところを見せたい。

h. 参加申込書

参加者各位 2012年10月吉日
 国際交流 学生フォーラム実行委員会
 申し込み日 平成24年 月 日

国際交流 学生フォーラム「<海外>を近くに感じよう！」

参加申込書

*枠内は必ずご記入ください。

氏名	
学校名	
学年	
住所	
携帯番号	
	※無い場合は自己の電話番号

※記入していただいた個人情報は大切に保管し、本フォーラム以外の目的で一切使用することはありません。

アンケート

この度は茨城大学・茨城キリスト教大学連携プロジェクト国際交流 学生フォーラム「<海外>を近くに感じよう！」に参加を希望していただきありがとうございます。本会をよりよいものにするために、事前にアンケートにご協力ください。

①現在、興味がある(気になっている)国や地域があったら記入してください。

国・地域 / 理由
 ②当日は茨城大学・茨城キリスト教大学の留学経験者・海外渡航経験者、外国人留学生在がゲストリーダーとして参加し、みなさんと交流する場を設ける予定です。

そこで、みなさんが参加するにあたって、どのような話を聞いてみたいですか？

選択肢の枠内に○をしてください。(複数回答可)

海外(留学)に行ったきっかけ	渡航(留学)の手続き	渡航(留学)費用
外国語は話せたのか	留学するまでの勉強内容	留学先での勉強内容
日本と海外の生活	文化の違い	日本、海外の魅力について
渡航(留学)についてのアドバイス	その他(記入)	

12月9日にみなさんに送りますことをスタッフ一同、心待ちにしております！
 以上です。ご記入ありがとうございます。



国際交流 学生フォーラム

「＜海外＞を近くに感じよう！」のご案内

こんにちは！だんだんと寒くなってきましたが元気がお過ごしでしょうか？今回は「＜海外＞を近くに感じよう！」への参加申し込みをさせて頂きありがとうございます。当日お会いできること楽しみにしています。以下当日の詳細等についてご案内いたします。

開催日：平成24年12月9日（日）
会場：茨城大学水戸キャンパス 人文学部 A棟 201号室

参加費：無料

持ち物：筆記用具、メモ帳

当日のスケジュール：

- 10：50 茨城キリスト教大学 11号館前集合、バス乗車
- 11：00 茨城キリスト教大学 11号館前発
- 12：00 ミニキャンバスツアー
- 12：30 開場(受付)
- 13：00 開会

ゲストスピーチ～異文化体験談～

座談会

海外生活 Q&A

16：30 閉会

個別質問タイム

17：00 解散

17：10 茨城大学水戸キャンパス発

18：00 茨城キリスト教大学 高校着予定

なお、当日の内容及び、時間変更がある場合があります。

*キャンパスツアーとは、茨城大学学生による水戸キャンパス内の施設をいくつか回りながら紹介していくツアーです。参加希望者は当日12：00に生協前にお越しください。大人数で移動することが予想されるので時間厳守をお願いします。寒くなることを考えられますので温かい格好をお願いします。

*昼食は開会する13時までに済ませておくようにしてください。当日昼食を持



お待ちしております～！

Ⅰ. 案内状

*当日は座談会終了後ゲストへの個別質問タイムを設けています。事前アンケートでお聞きした下記10個以外で質問がありましたら、ゲストの方々にいろいろ聞いたり、話をしてみたりしてください。

- ・海外(留学)に行ってきたきっかけ
- ・渡航(留学)費用
- ・留学するまでの勉強内容
- ・日本と海外の生活
- ・日本、海外の魅力について
- ・渡航(留学)の手続き
- ・外国語は話せたのか
- ・留学先での勉強内容
- ・文化の違い
- ・渡航(留学)についてのアドバイス

※何か質問がありましたら遠慮なく下記のいずれかに連絡ください。
なお、当日の連絡はスタッフの「芦田真子」へお願いします。

・インターナショナルチーム連絡先
芦田真子(あしたまこ)
TEL 080-6334-1357

・茨城大学留学交流課
〒319-8512
茨城県水戸市文京 2-1-1
TEL 029-228-8993

・茨城キリスト教大学国際理解センター
〒319-1295
茨城県日立市大みか町 6-11-1
TEL 0294-52-321

〈アクセス〉

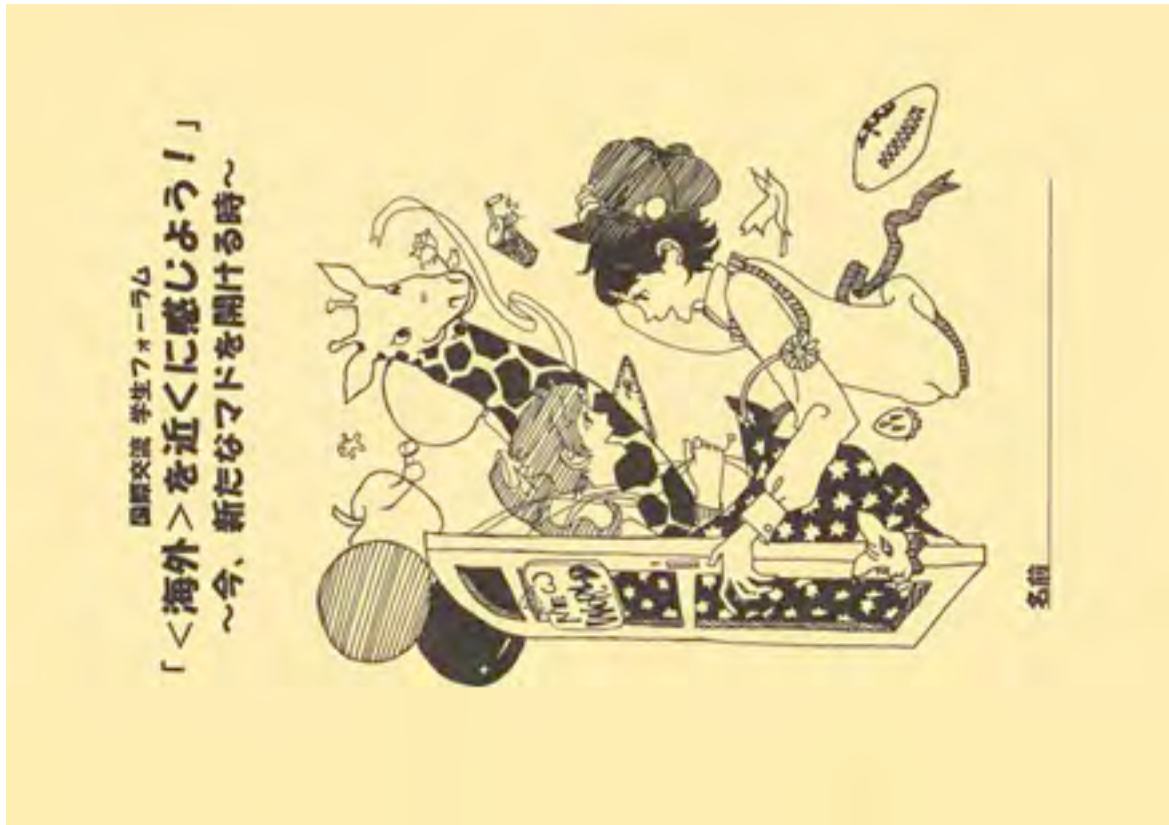


自車で来た方は上の図で指定した駐輪場に停めていただくようお願いいたします。また私たちの活動をホームページで紹介しているのをご覧にきてください^^ ホームページ <http://ibadaiproject2012.blog.fc.com>



✈️ プログラム ✈️

- 12:00 キャンパスツアー (希望者のみ)
 12:30 開場(受付)
 13:00 開会
 ゲストスピーチ～異文化体験談～
 座談会
 振り返りタイム (海外生活 Q&A)
 16:30 閉会
 個別質問タイム
 17:00 解散



留学までの経緯

最後の1週間

- ・一番忙しい時期
- ・細かい仕事（荷造り、買い物、バイトから帰来など）
- ・家族と友達に「サヨナラ」

留学の初感想

- ・何でも書いて最初の1ヶ月はすごく楽しかった
- ・宿題と勉強が重ねて来て、一人ぼっちの時にかしこホームシックとなった

留学の初感想

- ・色んな友達、いっしょにコミュニケーションを作るのは大変!



そろそろ帰国...

- ・来年の2月に帰国する（でも帰りたいくない!）
- ・留学している間にまだ学生だから失敗してもいい、それこそ、ブレイクジャーナリストになる経験だし、すごい心に残る経験だ!



私の留学

シドニー工科大学、オーストラリア 渡辺アツナ



自己紹介

- ・シドニー工科大学の4年生
- ・専攻：ジャーナリズムと国際研究（日本）
- ・留学は自分の学位によって義務的な教育



留学の理由

- ・卒業して外国人記者になりたい
- ・一人暮らしの生活をみて見たい
- ・自分の日本語力も磨きたい



学位コースの構造

学年	履修科目	単位
1年次	英語1、英語2、基礎科目	24
2年次	英語3、英語4、基礎科目	24
3年次	英語5、英語6、基礎科目	24
4年次	英語7、英語8、基礎科目	24

日本にいる間...

項目	内容
1. 生活	一人暮らし、一人ぼっち、一人ぼっちの生活
2. 勉強	英語、日本語、国際研究
3. 友達	日本人、オーストラリア人、日本人
4. 家族	家族、友達
5. 学校	シドニー工科大学

英文で書ける授業の単位が限らないから、自分の大学の課外も書く

留学までの経緯

- ・3年生：
 - ・前期：ハートナー大で留学したい大生を募集する
 - ・後期：最後の1ヶ月、友達と自分の論文の預け方や住所の書き方などについて相談して決めた
- ・4年生：留学したい人は本学の必修のため手続き、保険、費用などの準備をしながら



- 復旦大学**
- 中国の国家重点大学
 - 「志の北星、南の復旦」と表れ、中国有数のエリート校
 - 在学生約15000人、留学生約2500人
 - 数独逸領 水戸キヤンパスの約5倍(個人の感覚)
 - 復旦大学と復旦大学は1988年協定を結ぶ



- 第二の母国としての中国、そして世界の友達
- 留学としての中国語
- 中国文化、日本に対する考えを理解できた
- 中国、上海の経済発展の勢いと各地の姿(中国の多くの地域を旅したこと)
- 日本を外国から眺めることで日本の素晴らしさを改めて知った



- 目次**
- 留学に行こうと思った理由
 - 留学までの手続き・準備
 - 復旦大学と留学中の生活について
 - 日本帰国後に感じたこと
 - 質疑応答 フリートーク



- 留学に行こうと思った理由
- 中国に興味があったから**
- 要するに、行きたかったから行った！

- 留学までの準備・手続き**
- 短期留学(復旦大学)の経験(2010年2月~3月の1カ月間)
 - 中国語検定3級の取得
 - チューター活動を通しての中国人学生との交流
 - 最も大切なことは**心の準備!**



参加してくれた留学生たち

滝田アン

オーストラリアに来たらベジエイトを食べて見てね！フーフ…

リス・ムスタフ・シロ

「チベロロ」という日本スタイルが大好き～インドネシアの海はパラダイスなので、ぜひ一度は行ってみてください。

チョウハンソン

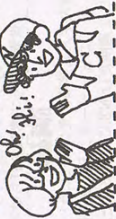
台湾で有名な観光スポットは夜市です。様々な食べ物があって、ぜひ遊びにきてください。

アズカール・バフ

アメリカゆめは世界の国に行つて、新しい友達に出会うことです。最初、日本……

クエン・フオン・ティ・タン

(Nguyen Hong Thi Thanh) ベトナム
茨城キリスト教大学で1年間交換留学生として勉強しています。
Xin chào! (こんにちは)



参加してくれたスタッフたち

村田清貴

茨城大学人文学部
アメリカ フランス
海外旅行大好き！

将来はヨーロッパに住みたい

藤原一

茨城大学人文学部社会科学科
世界を知れば日本がわかる
皆で楽しみましょう！

岩橋優

茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科
オーストラリア、アメリカ、ブラジル
大学生はコミュニケーション力余したくさん話そうぜ！

山本真

茨城大学・養護教諭養成課程
オーストラリアのシドニーで7ヶ月提携大学に通ってホムステイしていました

好きな言葉・明日は明日の風が吹く(〇〇)
日本もおススメは便利なのでなく、自然も豊かで住みやすい所です

高校生には、早いうちから海外に行くことを視野に入れて生活してほしいと思います。海外に行くこと、コミュニケーション能力が確実に上がると思います。

サイ・フレン

台湾
日本に来てもう半年に過ぎた。知りたいことがまだいっぱいあるから、教えてください
スジャットラー・シー・ベット
(ナムナム呼んでください。)

タイ

タイは暑いですが、楽しいことがみんなを待っています。是非タイに行ってください。

フランドー・ティ・フン

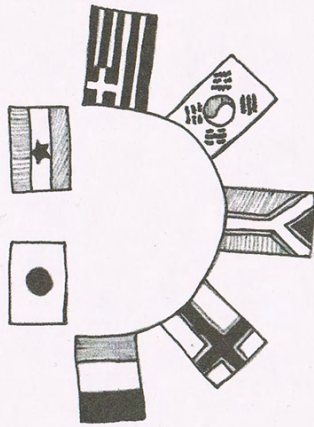
タイ
タイに色々な伝統的な観光地があってぜひ旅行してください
い！！

ハ・トウイ・ティ・フオン

私はベトナム中部にあるフエ外国語大学から来ました。日本に留学するのは初めてです

私は日本の「一期一会」という言葉が大好きです。今日1日楽しくお願ひします。





茨城大学留学生センター
×
茨城キリスト教大学国際理解センター
連携プロジェクト

2012/12/09/SUN

望山 晴重

茨城キリスト教大学 現代英語学科所属
去年アメリカにあるオクラホマクリスチャン大学に
7ヶ月間留学

間違えることは恥ずかしいことではない！

挑戦しないことが恥ずかしいこと!!

前田 花枝

茨城キリスト教大学、文学部現代英語学科
留学先:スウェーデン、リンネ大学
"Experience is the best teacher"

稲田 盛久

茨城キリスト教大学 文学部現代英語学科 4年
アメリカに2年間留学経験あり。
行動あるのみ。

不安などあるでしょうが、やってみないと何も経験できま
せん。海外では沢山の楽しい事が待っています。

鈴木 聖彦

茨城キリスト教大学

駒形 田彦

茨城キリスト教大学

江尻 尚典

茨城キリスト教大学

インターナショナルチームメンバー

新田 晴人

茨城大学 教育学部・国語
「常識とは、18歳までに身につけた
偏見のコレクションである」
by アイシンシュタイン
世界を知って常識を打ち破ろう!!

川崎 孝義

茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科
ニュージージラランドに2週間
去年の夏に2週間だけNZに行きました。短期留学につい
て知りたい人は質問して下さい!!(09* 7* *09))

山中 龍祐

茨城大学 教育学部学校教育員養成課程社会選修
内向きな日本人と言われていますが、
これからの日本を背負う世代として
私たちが外も向ける日本人に変わっていきましょう。

吉田 真子

茨城大学 人文学部人文コミュニケーション学科
出会いは革命、だから
いろんな所に行って色んなものに触れてみてください。

大岡 由佳

茨城大学 人文学部社会科学学科
韓国 アメリカ

後悔しないように積極的に動けば、今日のフォーラムも人
生も爽やかなものになると思います。

DON'T WORRY BE HAPPY (´◡`)

星野 由美

茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科
オーストラリア、グアム
留学生、高校生、大学生との交流を
思いっきり楽しみましょう (*^o^*)

村上 あゆ美

茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科
イタリヤ
楽しみましょう!

(せんぜん風のきくひとことじゃなくすみません<>)

海野 将希

茨城大学 人文学部社会科学学科
海外が気になる
上手く動けないかな

Let's feel foreign countries near!



【別紙資料 1】

じこしょうかい
タスクシートを使って自己紹介しよう!




It's up to you!
 Make your own questions and let's
 ask many people!!

	名前	国	学校名・学年	趣味	好きな○○
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					

【別紙資料 2】

*** 振り返しタイムシート ***

今回の「<海外>」を近くに感じよう!」のイベントを通して出てきた、留学・海外に関する質問・疑問・疑問を書き下ろして下さい!この後の振り返しタイムで、さらに留学生や留学経験者に話を聞くことができます♪



回答者を指名することもできるよ♪

あなたの質問を、司会が PICK UP します!<><!

匿名ですのご安心を!

※時間の問題上、全員の質問を掲載することはできません。ご了承ください。記入が終わったら近くのスタッフに渡して下さい!

茨城大学留学生センター・茨城キリスト教大学国際理解センター
連携プロジェクト 国際交流 学生フォーラム

「〈海外〉を近くに感じよう！」

～今、新たなマドを開ける時～

開催日：

平成24年12月9日(日)

場所：茨城大学
人文A棟201号室

※参加無料

※定員：50名

※対象：水戸市内の高等学校、ならびに
茨城キリスト教学園高等学校の在籍者

※申込方法

○各高校にある申し込み書に記入
の上郵送

※申込締切：10月31日(水)
(定員に達し次第締切)

〈アクセスマップ〉



〈プログラム〉

12:30 開場(受付)

13:00 開会

ゲストスピーチ
～異文化体験談～

座談会

グループワーク

16:40 閉会

留学生や海外渡航経験のある
茨城大学・茨城キリスト教大学学生に
異文化体験や留学事情などを
聞くことができるチャンス！
積極的に話しかけて交流してみよう！



もっと知りたい方はHPへ！ →
<http://ibadaiproject2012.blog.fc2.com/>

〈お問い合わせ〉



留学交流課

〒310-8512
茨城県水戸市文京2-1-1
TEL029-228-8593



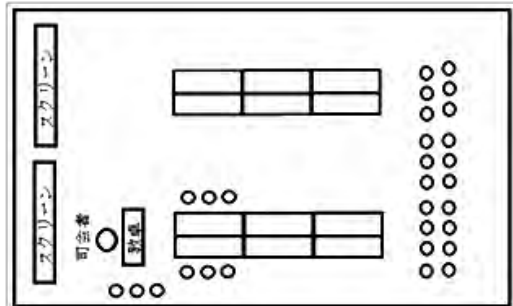
茨城キリスト教大学
IBARAKI CHRISTIAN UNIVERSITY

国際理解センター

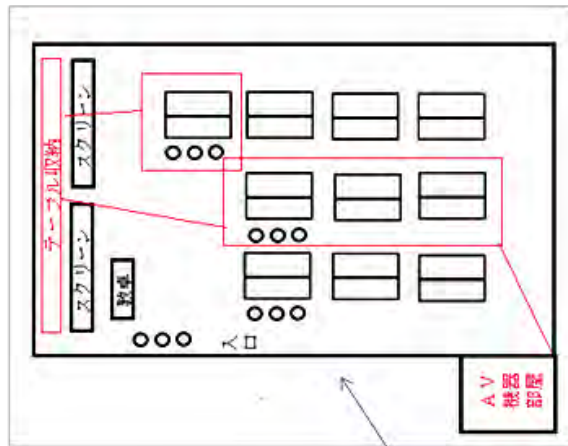
〒319-1295
茨城県日立市大みか町6-11-1
TEL0294-52-3215

別紙1 「テーブル形成」

第一部 開会～アイスブレイク～体験談

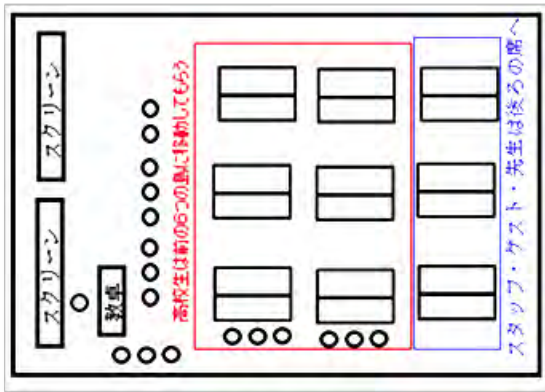
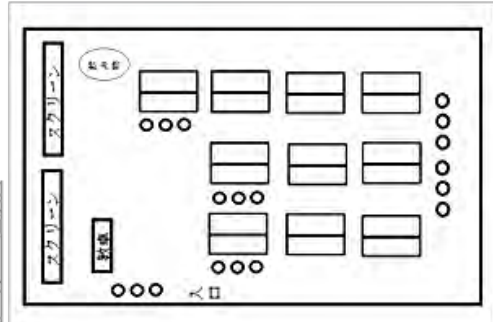


- 体験談の時に、スタッフ・ゲスト・先生が座るために、後ろにイスを10列×2置いておく。
- 開会の時点で後ろにイスを用意しておく。



- テーブルを切り離し、4つの島を付け加える。
- テーブルはスクリーンの後ろと、部屋の後方・もしくはオーディオ室から持ってきて下さい。
- 飲み物がスクリーンの前付近にあるので、飲み物と紙コップをテーブルに並べる。
- 余裕があったら、イスを何個か後ろに用意する。

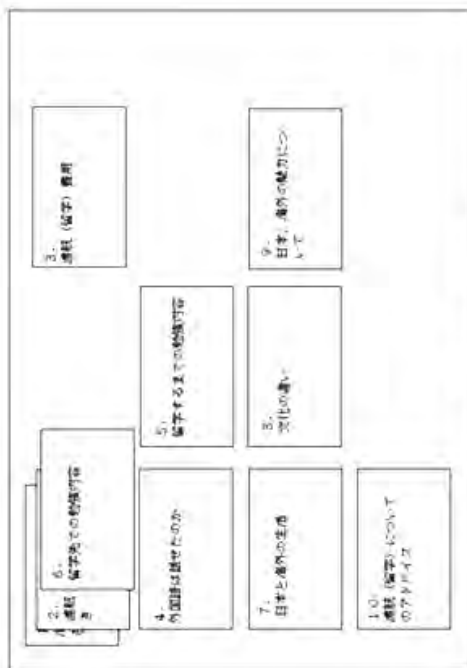
第二部 座談会



- 振り返りタイムではゲストが前に8人座る。
→8人：茨キリ4人（日本人2人+留学生2人）+茨大4人
- 高校生は、ゲストが見えるように、前の6つの島に移動してもらう。
- この事を司会にアナウンスしてもらう。
- 後ろの島3つは、先生やスタッフ・ゲストが座る。

個別質問タイム

- 個別に質問したい高校生が混雑しないように、ゲストを2列に並ばせる。帰る高校生が多ければ、ゲストを1列だけ残り、臨機応変にゲストにテーブル・イスの片付けなどをまわってもらう。
- 帰るか帰らないか、迷っている高校生がいたら、帰宅を促したり、一緒のグループになった子であれば最後の挨拶など、声をかけてあげたりして下さい。



質問が書かれたカードが10枚すべて用意されています。(図2)
カードはA4の半紙にするのが大きいです。

【基本的な座談会の流れ】

- ①自己紹介
 - ②高校生に聞きたい質問を1つ選択してもらう
 - ③オーストラリアの質問の答えについて話す
 - ④高校生からの質問等について答える
 - ⑤話し終わったらカードを箱に戻す(図2)
 - ⑥他の高校生にまた質問を選択してもらう
 - ⑦⑧⑨の繰り返し
 - ⑩20分経過後司会がアナウンス
 - ⑪次のサークルへ移動
 - ⑫移動する際、カードはまた図1のように箱の中に用意しておく
- ※最初は高校生に質問を選択してもらいますが、高校生が積極的であれば、司会者(司会補助)も質問を場からあげてください。
- ※座談会1回30分以内には、質問紙の用意などはありません。自由に話して下さい。
- ※この質問項目はあくまでも型紙例を基にしています。高校生からどんな質問が来たらいいかをあらかじめ考えておいてください。
- ※座談会上がることを大切に!!

別紙2 全体アイスブレイク：タスクシート

使用方法

- ・全体アイスブレイクの時に、タスクシート1枚を持って全体で自己紹介を行います。
- ・最後の項目の、「好きなOO」については、好きな質問を自分で作って下さい。
- ・順番は、スタッフ・ゲストの自己紹介→高校生の自己紹介をお願いします。

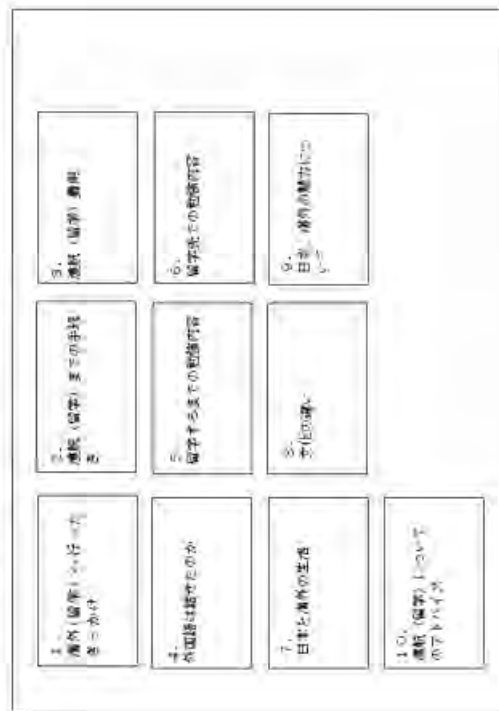
日本人スタッフへ

- ・最初から積極的に皆さんのところへ行く高校生は少ないと思います。スタッフが率先して高校生の皆さんへ自己紹介をしに行ってください。
- ・1対1で自己紹介をしなければいけないわけではないので、グループを作って自己紹介をしても構いません。1人でぼつんとしている高校生が居たら、グループの中に入れてあげてください。
- ・日本人の皆さんは、留学生の自己紹介のお手伝いもお願いします。

別紙3

1. 座談会：質問カードの使い方

図1



振り廻りタイムシートの使い方

座談会が終わった後の休憩時間（15分）で、

コンテナーの1人（ ）

① 高校生が前の6つの島に移動することをアナウンスで促す

② 振り廻りシートを配る

③ 高校生にシートに書く内容の説明、回収

④ 1人1回収するのは大変なので、島ごとに回収します。

コンテナーのもう片方（ ）

机を移動しているスタッフ、前に立つてもらってスマートフォンに指示を出します。

司会の武田がコメントを一通り読むのにも分程度必要だと思うので、高校生の記入時間は10分とします。

m. 誘導マニユアル

誘導の役割とは…参加者である高校生を迷わぬように誘導することはもちろんのこと、彼らが茨城大学に来た初めての茨大生は誘導の皆さんです。皆さんの挨拶で高校生のアフォーラムに対するモチベーションはもとより茨大生への印象にも影響があります。笑顔で親身になって接するようにしてください。

※誘導詳細…図の☆は位置を示します。

基本的には誘導の人から人へ高校生を受け渡していく形となります。高校生の中には初めて茨城大学に来る子もいます。茨大生にしか分からないような固有な慣習は用います。初めて茨城大学に来た人に説明するということを念頭において下さい。

【誘導①】正門前（ ）

一時は看板を持って高校生を誘導する他、高校生に配布するミニマップの配布を行います。高校生には積極的に聞きに来る子から断ってキョロキョロしているような子まで様々な声かけがあります。こちらから積極的に声をかけ安心させてあげましょう。

【誘導②】廊下の横前（ ）

一時は看板を持って高校生を誘導します。

【誘導③】人文学部A棟入口（ ）

高校生を人文学部A棟内に誘導します。入口入ってすぐの階段を2階へ上るように伝えます。

II. 座談会での質問に関する資料（司会者・司会補助・ゲスト用）

主役となる10個の質問事項に、更に細かい質問をつけ加えました。必ず1項目にこの2個の質問をしなければいけないわけではございません。高校生から質問がでなかった時、話がいまづまった時には参考程度に使う下として。

- 1 海外（留学）へ行ったきっかけ
 - ・その国に興味をもったきっかけ
 - ・その国を選んだ理由や経緯
- 2 渡航（留学）までの手続き
 - ・渡航してから「準備しておけばよかった」と思ったこと
 - ・一番大変だった準備
- 3 渡航（留学）費用
 - ・生活の中で日本との物価の違いはどのように感じましたか（果物が安い、交通費が安いなど）
 - ・一週間の生活費や、出発前にとれくらくらい費用を用意していたか
- 4 外国語は話せたのか
 - ・渡航前と実際に渡航してみたときのギャップ
 - ・現地で「聞く」「話す」「書く」「読む」「読む」のなかで一番何が大変（苦痛）だったか
- 5 留学するまでの勉強内容
 - ・語学スクールに通ったか
 - ・おやすめの勉強法はあるか、または話さなくても何とかなるのか
- 6 留学までの勉強内容
 - ・何を専攻したのか、一番好きな授業はなんだったか
 - ・授業をどれくらい理解できたのか
- 7 日本と海外の生活
 - ・時間の使い方の違い（ライフスタイルの違い、サークルに動く時間など）
 - ・町の様子
- 8 文化の違い
 - ・食文化の違い
 - ・タブー
- 9 日本、海外の魅力について
 - ・残念に思ったところ、イメーজが違ったところ
 - ・日本人にとって住みやすいところかと思うか
- 10 渡航（留学）についてのアドバイス
 - ・留学での失敗談
 - ・渡航して得たもの



【誘導③】図書棟2本の木の所（ ）

【誘導②】廊下の横前（ ）

【誘導①】正門前（ ）

n. アンケート

国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう！」
 ~アンケート~ スタッフ用

名前

I. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう！』はどうでしたか？
 悪い → 5 4 3 2 1 → 悪い
 ①楽しかった ②つまらなかった

*理由も教えてください。

II. 国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう！」での思い出を教えてください。

III. こんなイベントをやってほしいという考えがあったら教えてください。

ご協力ありがとうございました。

国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう！」
 ~アンケート~ スタッフ用

名前

I. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう！』はどうでしたか？
 悪い → 5 4 3 2 1 → 悪い
 1 2 3 4 5

II. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう！』全体を通して印象に残ったことは何ですか？

III. 当日の展開・運営で良かったことがあったら教えてください。

IV. 当日の展開・運営で改善すべきと感じたことがあったら教えてください。

V. 今後こんなイベントがあったら参加したい・運営として参加してみたい と思うようなことがあれば教えてください。

ご協力ありがとうございました。

国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう！」

～アンケート～ 参加者用 (B)

学校名 _____
学年 _____

男・女 _____

I. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』」をどのようにして知りましたか? (複数回答可)

- ①学校でのアナウンス ②先輩・友人から ③ホームページから ④図書館
⑤その他 ()

II. 「ゲストスピーカー～異文化体験～」で聞けて良かったという話がありましたか?

- ①外国からの留学生による『自国紹介』 ②日本人留学経験者による『留学の思い出』
③日本人留学経験者による『留学に就いての失敗談』

④日本人留学経験者による『帰国までの手帳について』 ⑤全部 ⑥ない

III. 『座談会』で聞けて良かったという話がありましたか?

- ①海外 (留学) へ行ってきたきっかけ ②帰航 (留学) までの手続き
③帰航 (留学) 費用 ④外国語は話せたのか ⑤留学するまでの勉強内容
⑥留学先での勉強内容 ⑦日本と海外の生活 ⑧文化の違い

⑨日本・海外の魅力について ⑩帰航 (留学) についてのアドバイス
⑪ない ⑫その他 ()

IV. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』」の全体を通して印象的だったことを教えてください。

V. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』」の全体で直した方がいいと思ったところがあったら教えてください。

- ①会場について (狭い、場所が分かりづらい など)
②内容について (分かりづらい、ためにならない など)
③スタッフについて (対応が親切でない、手帳が悪い など)
④その他 ()

*具体的に何があげれば教えてください。

VI. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』」はどうでしたか?

- 悪い → ぶつう → 良い
1 2 3 4 5

VII. こんなイベントを行ってほしい など要望がありましたら自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

○. 高校宛お礼状

茨城県立水戸第二高等学校 井坂博子先生

2012年12月11日

茨城大学・茨城キリスト教大学連携プロジェクト
国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう！」
実行委員会代表 武田暁人(茨城大学教育学部)

拝啓 師走に入り一段と寒くなってまいりましたが、井坂先生、水戸第二高等学校の皆様におかれましては、ますますのご清栄の事とお喜び申し上げます。

12月9日に、以前よりご案内しておりました国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう！」を無事開催いたしました。本フォーラムでは多くの高校生に参加していただき、茨城大学と茨城キリスト教大学の大学生・留学生の積極的なご協力もあり、予想以上の活気が見られるフォーラムとなりました。参加された高校生からは好評の感想を戴き、高校生に「海外を近くに感じてもらう」という本企画の目的は達成できたのではないかと感じております。

水戸第二高等学校の先生方には、ご多忙の中参加者を募っていただき、沢山のご助力を賜りましたこと、心から感謝申し上げます。私どもの不手際でご迷惑をおかけすることもありましたが、皆様の温かいお力添えのおかげで、本フォーラムはやり遂げることができました。誠にありがとうございました。

本企画についての今後の展望は立っておりませんが、チーム内で反省をし、これからの機会に繋げていこうと考えております。もし今後もしもご縁がございましたら、ご助力いただけたらご幸甚に存じます。

略儀ながら、書中をもちましてご連絡させていただきます。

敬具

学生フォーラム実行委員会代表

武田暁人(茨城大学教育学部 Email: akito0aurora@gmail.com)

芦田真子(茨城大学人文学部) Email: 1011007f@mc.s.ibaraki.ac.jp

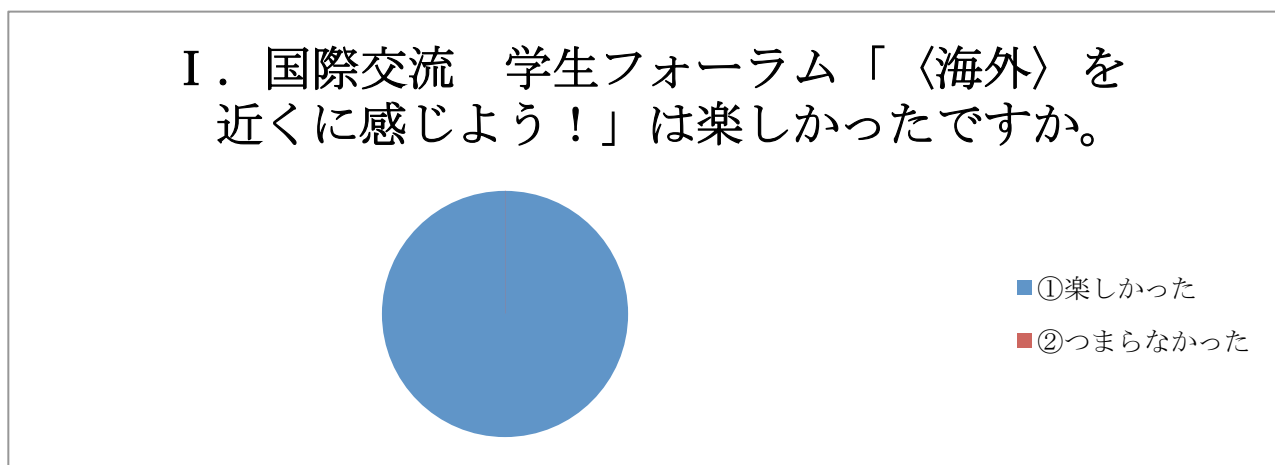
4. 成果

a. アンケート分析

山中健佑

〈ゲストアンケート〉

I. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉近くに感じよう!』」は楽しかったですか。*理由も教えてください。



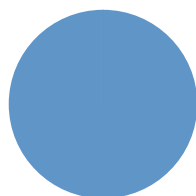
[理由]*原文のまま

- ・高校生や茨大スタッフ、留学生の方々とたくさん交流して過ごせたからです。留学の話も、みんな真剣に聞いてくださって楽しかったです。
- ・とてもたのしかったです。高校生は本当元気ですから。
- ・実際高校生と話して、質問を聞かれた、今までいろんな考えことができた。
- ・いろいろな自分の国をしょうかいさせてとても楽しかったです。そして、いろいろな高校生とはなしあっていいです。
- ・きんちょうしたけど、いろいろなことを話しかけてとてもたのしかったです。こうこうせいたちがかわいくて、さいしょ Europe だけきょうみを持っている人らしいでも、話しかけた後で、アジアのことのきょうみをもっとたくさんになりました。うれしいです。へへ
- ・高校生たちと話すチャンスや自分してることを share するのがすごくめずらしいから、今日来てよかった。Seneng banget bisa ngobrol banyak sama anak SMA Jepang. Berbagi hal , berfokar cerita. bila ngeliat keceriaan anakz, SMA, saya pon Jadi metasa Moda qan punya semangat lagi!
- ・一日本に留学した前に、だいたい年上の家族と会いました。今日は新しい大学生と高校生と話して、考え方もわかりました。
- ・自分の経験を後輩に伝えることができ本当によかったと思う。

(分析) 回答数は9。アンケート結果から協力していただいたゲスト9名全員がこのフォーラムを楽しかったと振り返っている。楽しかったとする理由として単純に日本に来てこれまでにあまり接する機会がなかった高校生と触れ合うことがあったり、ゲストである留学生、スタッフである日本人大学生、そして参加者である高校生が交わって話し合ったり、質問をし合ったりすることがあったりした。さらに海外についてヨーロッパにのみ関心を示していた高校生が留学生らと話すうちに他の地域にも興味・関心を抱いていた様子を見受けたという回答もあった。このような回答から今フォーラムは参加者のみならずゲストである留学生にとっても有意義な機会であったと考える。

Ⅱ. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉近くに感じよう!』」が開催する日にちはどうでしたか。*理由も教えて下さい。

Ⅱ. 国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう!」が開催する日にちはどうでしたか。



- ①ちょうどよかった
- ②別の日にすべきだった

[理由]*原文のまま

- ・ちょうど良かったです。たくさんじゅんぴをしまったから。
- ・日曜日に開催してよかったと思う。
- ・この日、行っていいと思います。
- ・休みの日だから、いいと思います。でも、もっと時間をながくならたくさん話せるかもしれません。
- ・Unexpected ことがあっても、show most go on だからあ、スタッフがせいっぱい頑張ってで開催して、すごかったと思う。おつかれさま～
- ・ずいぶん前にこのフォーラムがすると教から、この時に勉強があっても、なかなか時間が作られました。
- ・日曜日だ。

(分析) 回答数は9。アンケート結果からゲストにとっては休日である日曜日にフォーラムが行われたことから調度良かったとする意見が多くみられた。時期としての意見はなかったが、あらかじめ日程を伝えていたことを評価する声や自他含め長期間にわたり準備を進めていたことを称賛する声もあった。しかしながら今回フォーラムに参加したいというありがたい声をかけて下さっていても日本語能力試験の日程が重なる等の事情からやむなく不参加となってしまった留学生も数多くおり、時期については次回以降今回のようなフォーラムを行う場合は協力していただく方々の予定等をあらかじめ把握した上で計画的に準備を行っていくべきであると考え。

Ⅲ. 国際交流 学生フォーラム「〈海外〉を近くに感じよう!」での思い出を教えてください。

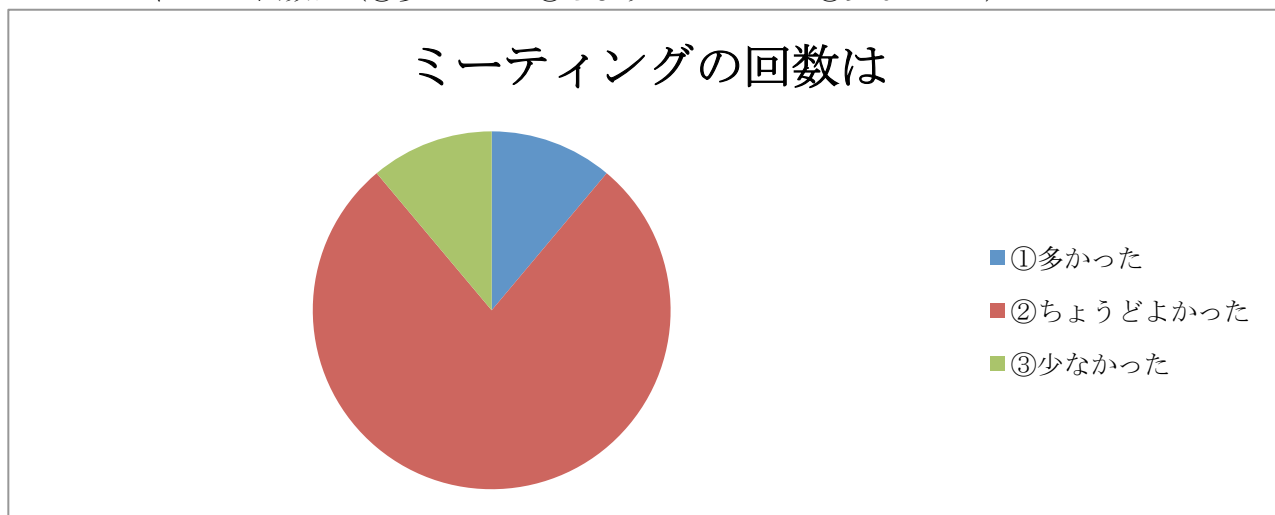
[思い出]*原文のまま

- ・最後にみんなでフリートークできたことです。
- ・僕とアナさんは自分の国のことをしょうかいしてあげました。たとえば、アメリカのお金を説明してあげて、みんなの高校生は「えええ!すばらしい」のかんじがあつて、とてもいいけいけん。
- ・日本に来て、いろいろな経験をしたいから、今は初めて日本の高校生と会話して、自分が、高校生の時、考えてなかったことを知ってとてもいいと思う。
- ・いろいろなことを高校生とはなしあつたのしかつたです。高校生たちがあかるくて、いろんなしつもんしてくれて日本語の会話いいれんしゅうだと思ひます。
- ・いろいろな自分のけいけんなどをアドバイスして、よかったと思ひます。新しい友達もできました。
- ・いろいろ高校生と話して、さっしんとつて、高校生たちが帰る時悲しいなあ～と思う。
- ・楽しくて良かった。いろんない新しい友達がつつて、できればまた会いたい。
- ・日本に来てばかりのことは今までもうだいたい忘れてたけど、今回のきっかけにいろいろなことは

- ・自分の経験が他人に伝えたいという気持ちを持って、今回の活動を参加したわけだ。ゲストの方は同じ問題はだいたい3回以上答えた。もし繰り返す各班の問題が違ったら、もっと面白くて違う経験ができると思う。
- ・大学生のプレゼン大会とか何か人の経験談をもっとたくさん聞きたいです。

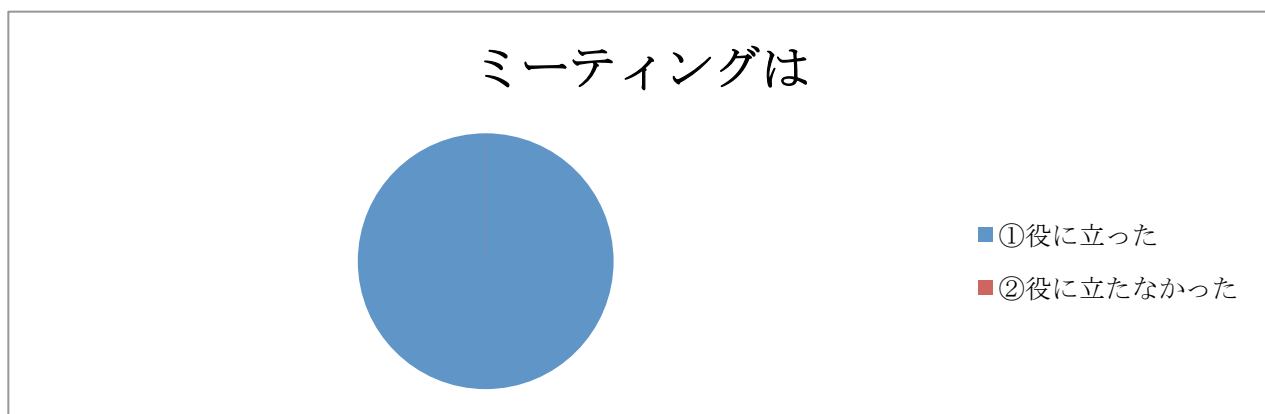
VI. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉近くに感じよう!』」開催までのミーティングについてお聞きします。

1. ミーティングの回数は (①多かった ②ちょうどよかった ③少なかった)



(分析) 回答数は9。大多数の人が調度良かったと回答している。

2. ミーティングは (①役に立った ②役に立たなかった) *理由も教えてください。



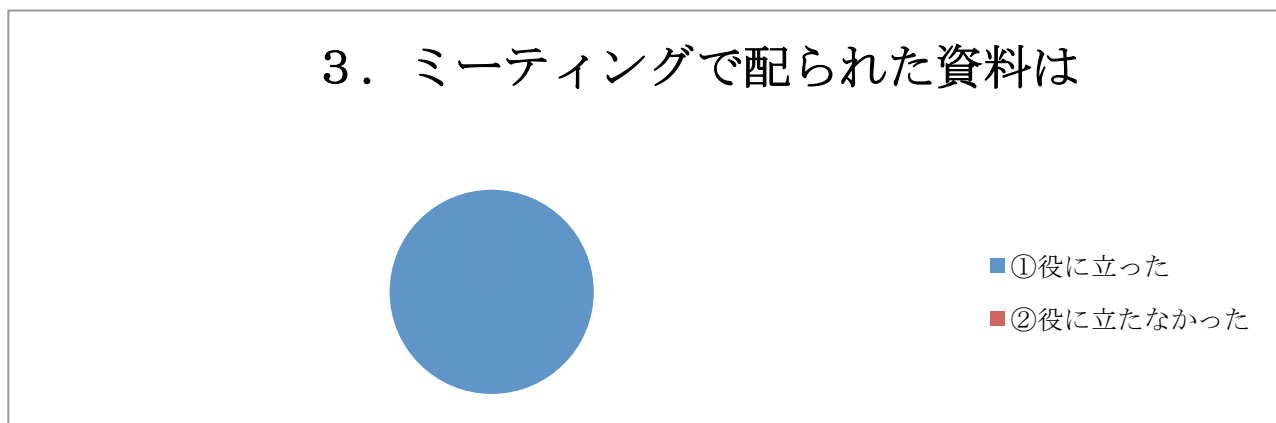
[理由]

- ・MTG すべて参加できませんでした。本当に申し訳ありません。MTG には参加できませんでしたが、みなさんが温かく迎え入れて下さり、いろいろと教えて下さったことがとてもありがたかったです。
- ・いいれんしゅうでしたから。
- ・開催する前、流れをもっと確認するため、何回ミーティングをやる必要があると思う。
- ・理由は今回のミーティングはさんかする人がちょうどいいと思います。
- ・れんしゅうすることができます。
- ・スタッフだけではなくて、ゲストも Forum で何をやらなきゃいけないことや何をじゅんびしなきゃいけないことや、本日のながれがわかるようになった。

- ・ゲストたちについて話が役に立ったけど、このような情報はメールで教えてもいいともう。ミーティングでゲームの練習などはそんなに必要ではないと思う。
- ・ノリでできていたように思う。リハは役に立った。

(分析) 回答数は 7。ミーティングが役に立ったとする声ばかりであった。フォーラム当日の流れや行う活動の把握・練習等が出来るとのことであり、ミーティングを行うそもそもの主旨はこれである。しかしながらそのような情報ならばメール等で伝えるだけで事足りる、わざわざ練習するまでもないという声もあり、人によって捉え方はまちまちである。ただ、ミーティングをすることで本番のことをイメージできるという利点もあり、何よりスタッフ一人一人が直接顔と顔を突き合わせることでフォーラムに対する意識が高まるはずであるので今後も重視していくべきと考える。

3. ミーティングで配られた資料は (①役に立った ②役に立たなかった) *理由も教えてください。

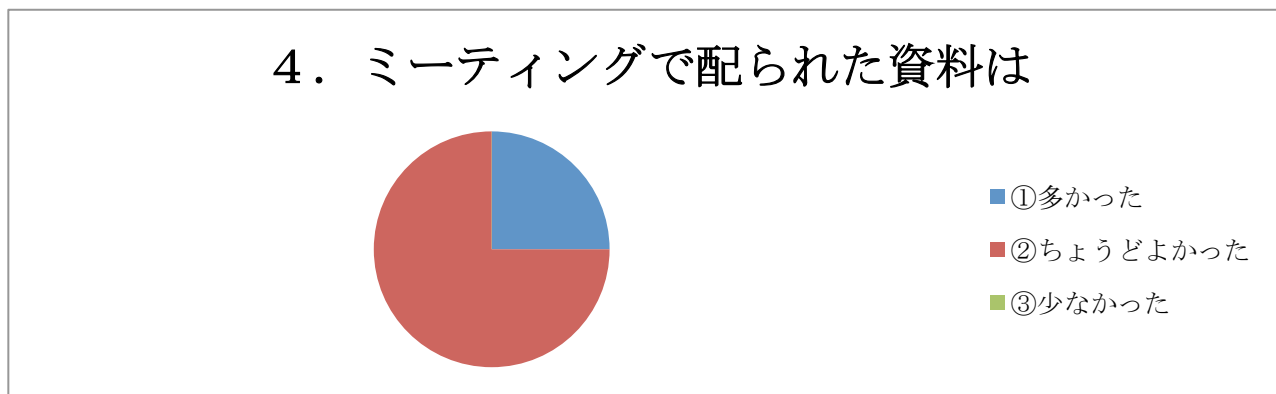


[理由]

- ・このしりょうにてつだってもらいましたから。
- ・流れについて詳しくわかる。
- ・いいと思います。理由はみんなにミーティングのながれをしっているために
- ・くわしいところをわかりました。
- ・ぐたいた的に分かるようになった。忘れたらまた見て、べんりだと思う。
- ・たまにミーティングの内容が忘れるから、あって良かった。
- ・形に残るのはいい。

(分析) 回答数は 9。全員が役立ったと回答している。

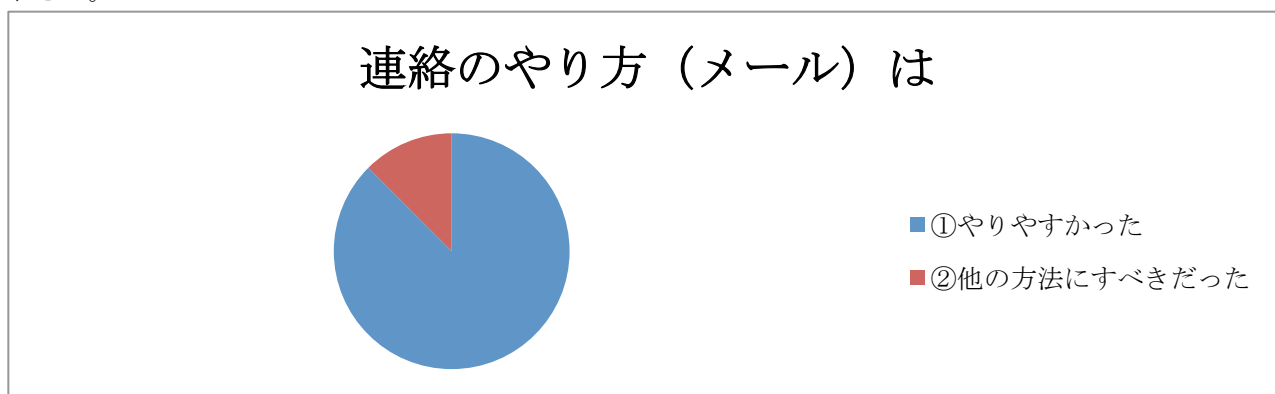
4. ミーティングで配られた資料は (①多かった ②ちょうどよかった ③少なかった)



(分析) 回答数は 8。若干名多かったと回答しているものの、ほとんどが調度良かったと回答している。

Ⅶ. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉近くに感じよう!』」開催までの連絡についてお聞きします。

連絡のやり方(メール)は(①やりやすかった ②他の方法にすべきだった) *②の方法も教えてください。



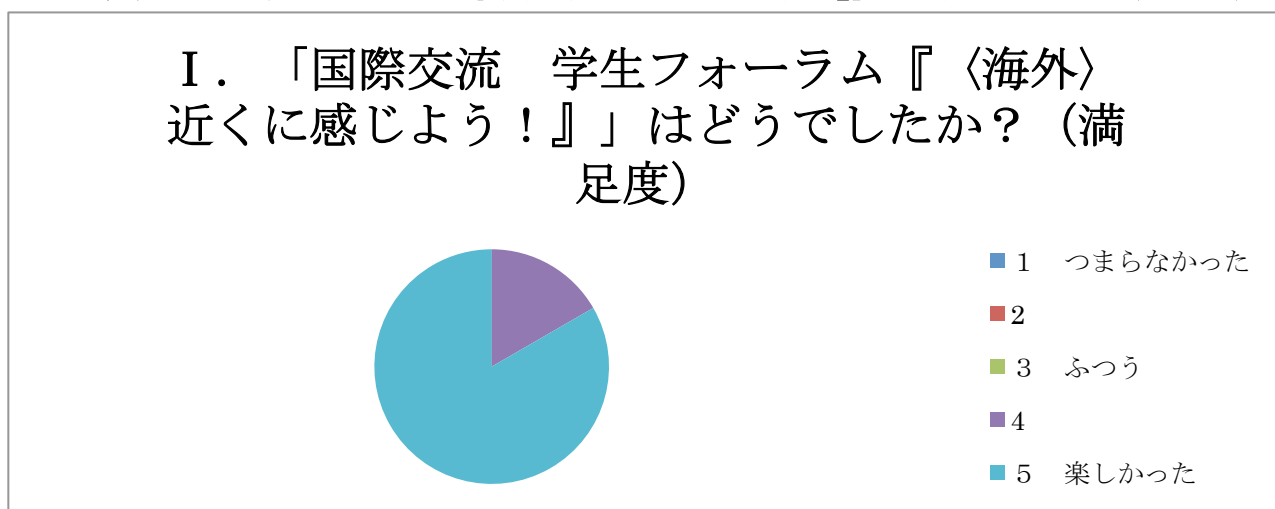
[他の方法]

・Facebook

(分析) 回答数は8。ほぼ全員が特に連絡の手段に不便を感じてはいないようであるが、Facebook等を利用すべきという意見も上がった。

〈スタッフアンケート〉

I. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉近くに感じよう!』」はどうでしたか? (満足度)



(分析) 回答数は18。多くのスタッフが最高評価をしており、満足度としては高かったと考える。

Ⅱ. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』」全体を通して印象に残ったことは何ですか?

[印象に残ったこと]*原文のまま

- ・楽しかった。高校生が思ったより積極的だった。
- ・高校生とのコミュニケーションは結構難しい。自分たちが、相手が知りたいだろうな、と考えていたこと、相手の知りたいこと、興味を示すことが異なっていた。
- ・人数が少ないくらいでちょうどよいということ。5~6人で話をするのはちょうどよい。
- ・高校生ばかりだと質問など挙がらないと思っていたが皆積極的に質問していたこと。

- ・海外について「勉強」するだけでなく「高校生と大学生の交流」という意味でも意識されていたと思いました。
- ・みんな楽しそうだった。“留学生の対象にアジア圏もいいかも”って考えるようになったっていう意見が出てうれしかった。
- ・高校生が大絶賛して帰って下さったことが印象に残っています。
- ・すごく高校生のみなさんの考えがまとまっていたことに驚きました。自分が高校生のとき、このようなイベントがあったら、少しは自分が変わったと思い、うらやましかった。
- ・高校生が若い！話題は2人いると事欠かない。やっぱり自主的に来る人は少ない。
- ・高校生がしっかりした目的意識を持って「留学」または「海外」に対して考えていること。自分達は常識と思っていたこと（留学に関して）が実は高校生にとっては知らないことであったことが多かったと感じている。
- ・海外、留学を考えることの大切さ。
- ・昔の自分を含め、高校生の欧米思考から、少しでもアジアに目を向けてくれる子がいたのがとても嬉しかったです。世界は広いんだ、って実感してくだされば、さった人がいたことが良かったです。
- ・高校生が思った以上に元気だった。和やかな雰囲気の話しがはずんだ。
- ・茨大生の留学生が多くて、予想以外に色々な国から来てることなどを知れて良かったです。高校生の意識が高くて驚きました。
- ・「カリフォルニアに留学してディズニーランドに通いたい」というかなり具体的な夢を持っている人がいたこと。
- ・しっかりと将来のビジョンを持った高校生達に圧倒された。
- ・振り返りタイムの高校生の感想発表（留学先としてヨーロッパだけでなくアジアにも目を向けられるようになったとってくれたこと、海外へ行こうと思ったとってくれたこと。
- ・高校生が意外と積極的でした!!!心配いらず…。やっぱり英語圏に留学したいと思う高校生が多かった。

（分析）フォーラムにおいて参加者の海外への視点が一部（欧米圏等）から他の地域（アジア等）へと広がる様子を見たことが印象的であったとする回答がある一方で、高校生と交流して、コミュニケーションの難しさを感じたり、高校生の考えに感嘆したりと参加者との交流そのものが印象的であったという声もあった。

Ⅲ. 当日の展開・運営で良かったことがあったら教えてください。

[回答]

- ・武田くんの司会が良かったと思う。留学生との仲の良さで、フォーラムもなごやかになれた。
- ・あまりだらだらしなかったところ。
- ・スムーズな流れですばらしかったです。
- ・時間はたっぷり使えたのにスケジュール通り進んだこと。
- ・高校生に丁寧かつ楽しく対応している姿が印象的でした。司会者や座談会の際の司会者やその他全体を調整してくれている人々が頼もしかったので、安心して臨めました。
- ・明るく楽しい雰囲気で運営できたこと。
- ・みんなが発話する機会があったこと。堅苦しいだけでなく、ところどころに笑いが生み出されていたこと。
- ・場の雰囲気づくり。
- ・ふりかえりを聞くことで、自分達がやってきたことの成果がかいまみることができた。高校生と話す機会、意見をかわしあう場が多くもうけられていたので活発に会が進んだのではないかと思った。
- ・準備もしっかりしていたし、大きなトラブルも感じなかった。少ない打ち合わせですごい！

- ・スムーズに進行できていたと思います。
- ・タイムスケジュールをスタッフがちゅうじつに守っていたこと。
- ・高校生が中心に話せるような雰囲気になったこと。
- ・スタッフの方々が積極的に高校生に話しかけていて、楽しく明るい雰囲気がつくられていてよかったと思います。
- ・全体として展開が円滑だったこと。
- ・進行が滞ることなく進み、全員が楽しそうだった。無駄というか、ダラッとした時間があまりなかった。
- ・高校生がずっと同じ、大学生スタッフ&ゲストもずっと同じメンバーと島を周れたのは、気心や面白い話を把握できてとても助かった。高校生、ゲスト、スタッフの割合が調度よく、仲良くなる十分な時間と機会であった！！
- ・対応が丁寧だった。各テーブルをまわって、ゴミの回収など、気遣いができていて良かった。

IV. 当日の展開・運営で改善すべきと感じたことがあったら教えてください。

- ・1グループでの座談会の時間がもう少しあってもよかったかなと思う。
- ・お昼休憩の有無、昼食の有無をもっと早く知りたかった。前半の留学生たちのスライドの後、質問タイムでは、事前に用紙か何かで受付し、その中で抜粋して聞けば、盛り上がったと思う。事前打ち合わせのメールがとどかなかった。タイムテーブルに名前がなく困った。
- ・キャンパスツアー
- ・特に感じませんでした。
- ・留学生と司会の人たちの交換がなかったので、お互い同じ話・流れだったこと。
- ・今やっていることから他のことを始める時に、できれば司会の人から指示を出したら、それをゲスト・スタッフがみんなで協力したらもっとスムーズだと思いました。
- ・会場が少しせまかったと思いました。あとは、ゲストの感想(留学生)がもっと聞きたかったです。
- ・トイレのアナウンス(あったのかな?)(それ以外は)すっごくよかったと思います。PERFECT!
- ・「海外を近くに感じよう!」なら、なにも「留学」の一点にしばらなくてもよかった。そこまで留学に意識が強くない人にとっては、少し面喰った感もあったと思う。「大学に行けば、海外をより強く感じる」ぐらいのスタンスで進めたら、より広く高校生の関心に沿うこともできたのではないかな。完全なる私見ですが。
- ・来賓の方々が少し窮屈そうでした。会場の関係もあるとは思いました。もう少しゆったりとした会場が借りられればいいのかあと感じました。
- ・受付で慌ててしまった。スタッフ用と高校生用を始め間違えて渡してしまいました。
- ・メールに関してなのですが、宛先を書いてここに返信して下さいと書いてあると分かりやすかったです。送り主に直接返信したら、全員にメールがいきってしまうか心配でした。
- ・フリーのコーヒーやお茶を飲む機会がもちにくかったです。でも部屋が温かかったから良かった。キリスト大の人とももっと交流を持てたら良かった。
- ・大きな問題はなかったように思います。
- ・…あつかった?
- ・始まる時はスタッフに連絡が欲しかった。突然始まっていて驚いた。

(分析) 改善すべきという指摘があった点は、

- ・スタッフへの情報発信について
- ・会場について
- ・設定した展開そのものについて であった。

スタッフへの情報発信については、フォーラム開催に向けてのゲスト・スタッフミーティングが3回という少ない機会しかなかったことが影響したと推測される。また当日の情報共有や発信もなかなか

することができなかったということも影響されたであろう。次回以降は当日についての情報共有・発信の機会を増加し、当日のシュミレーションをよく行い、不測の事態にも対応し円滑に進めることができるようにするべきである。会場については、もっと広いスペースのある会場を用意すべきであった。設定した展開そのものについて座談会をもっと長く設定すべきだったということから、そもそものこのフォーラムの主旨内容についてまで幅広い意見があった。

V. 今後こんなイベントがあったら参加したい・運営として参加してみたいと思うようなことがあれば教えてください。

[回答]

- ・おんなじようなの。その他何でも。
- ・留学生と交流するイベント。
- ・また同じようなイベントがあったら運営として参加したい。
- ・今回、「海外」に焦点を当てていて、高校生の好奇心を誘うことができている、とても楽しかったです。その基盤は変えずに、違うアプローチ（例えば国ごとにグループを作ってみる？）などがあったら参加してみたいです。
- ・何かの議題について、留学生がディベートし合う会。
- ・もっと高校生達と交流したい。（出張授業）とか。別に「高校」にこだわる必要はないと思う。地域とか日本語学校・大学と提携して、活動の輪を広げて、大学の名を売ろう！（笑）
- ・高校生との座談会（今回みたいのがベスト）高校に行きたい。
- ・参加したいです。
- ・参加したいです。次回は司会ではなくみんなと一緒に意見交換したいです。
- ・留学生と交流。
- ・「高校生と大学生の交流」の場を、より増やすことができたら良いと思います。
- ・欧米圏の国や英語に興味を示す学生が多かった。逆に海外では日本の文化を紹介できないと×。国際関係のイベントであれば、英語以外の言語や、日本文化を外国人と共有し、日本を見つめ直す機会があっても新鮮でいいと思う。

VI. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう！』」開催の時期について

VI. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう！』」開催の時期について



【①意見】*原文のまま

- ・時期は良かったのですが日曜日じゃないほうが人が集まりやすいと思います。
- ・ただし高校生（特に大学進学を考える3年生）にとっては受験目前で辛かったかもしれない。

【②具体例・意見】*原文のまま

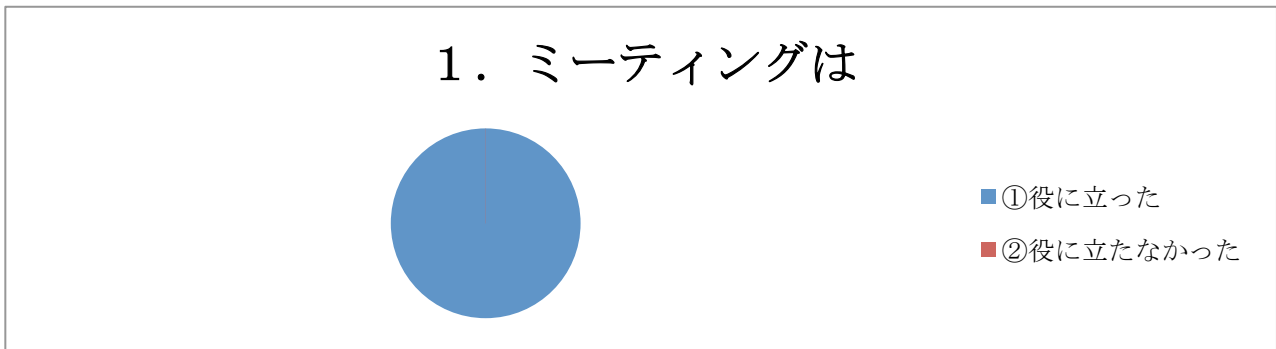
- ・土曜日がいいです。

- ・就活が大変、さむい。
- ・11月（12月は就活にかぶります）
- ・就活イベントを逃してしまった……笑

（分析）回答数は17。大体のスタッフは適切と感じたようであるが、やはりスタッフに3年生は多かったことから就職活動の関係で別の時期にすべきだったという意見も多かった。次回以降今回のようなフォーラムを行う際には計画的に進め、携わる人の都合のよい時期に開催できるようにすべきと考える。

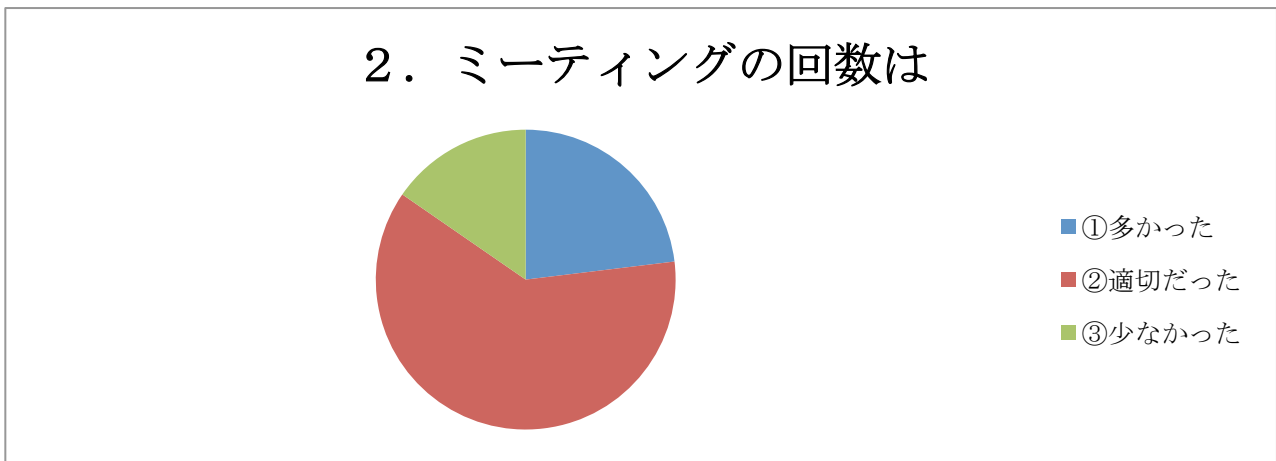
VII. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』開催までのミーティングについてお聞きします。

1. ミーティングは（①役に立った ②役に立たなかった）



（分析）回答数は13。全員が役に立ったとしている。

2. ミーティングの回数は（①多かった ②適切だった ③少なかった）



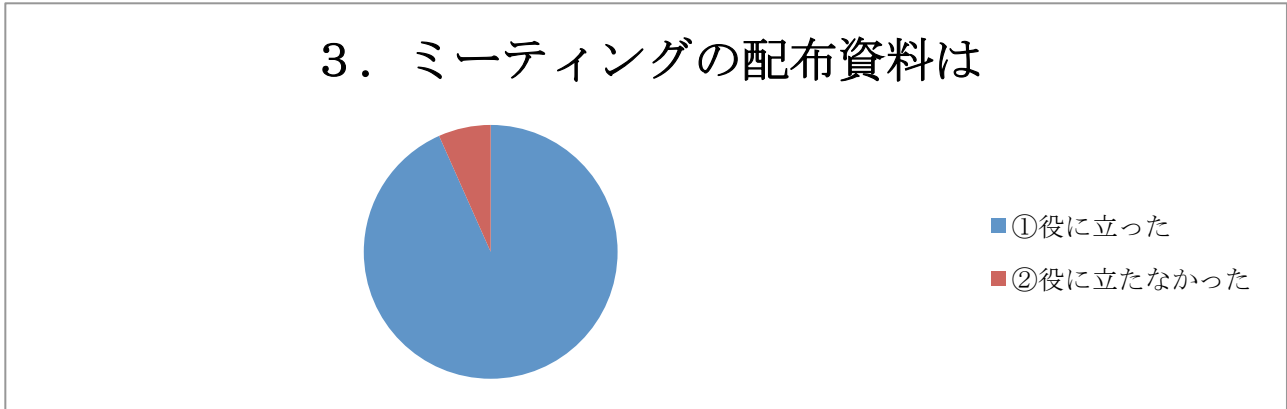
（分析）回答数は13。大体のスタッフが適切だったとしているが、多少の意見も見られた。

【1. 2. 総じての意見】*原文のまま

- ・メールが一切届かず参加させていただけなかった。土日はいそがしいので早めに。
- ・いけなかった (><)

（分析）そもそもミーティングに都合が合わず参加できなかったということがあり、さらに回数を増やす等対応をすべきであった。

3. ミーティングの配布資料は (①役に立った ②役に立たなかった)

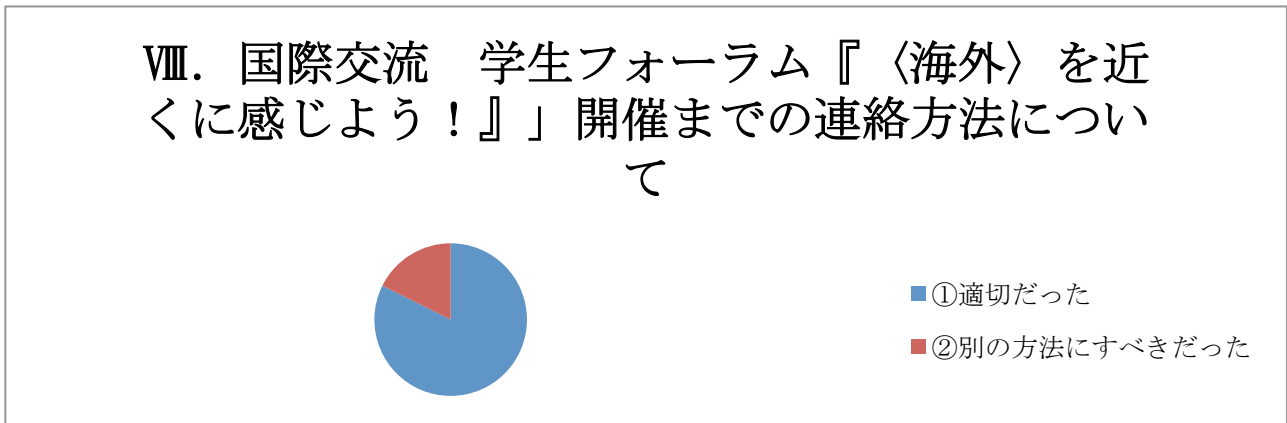


【意見】

・せっかく分かりやすく作ってもらったので PDF ファイルでも送ってほしい。グラフや文字がハチャメチャになって利用できなかった。

(分析) 回答数は 15。多くの人が役に立ったとしているが、見づらさの指摘等があった。

VIII. 「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう!』」開催までの連絡方法について (①適切だった ②別の方法にすべきだった)



【①意見】 *原文のまま

- ・方法には不満はないが、メンバーリストをきちんと更新、確認してほしい。送られたメールアドレスもうちまちまいがあり、戻ってくるがあった。
- ・メールでデータがまわってきた際、ファイルを開けない時があった(たぶんこちらの PC の具合がわるかったと思うのですが)。こまめな連絡ありがとうございました。

【②具体例】 *原文のまま

- ・LINE がいいな!
- ・LINE とか、MTG を SKYPE でやるとかがいいかな。
- ・LINE、スカイプ

(分析) 回答数は 17。大体のスタッフが適切としているが、メールアドレスの管理や別の方法の提案等様々な意見が寄せられた。

b. 関係者一覧（敬称略）

参加高校内訳

【申込】計 35 名

茨城キリスト教学園高等学校	14 名
茨城県立水戸第二高等学校	16 名
常磐大学高等学校	2 名
茨城県立常北高等学校	3 名

【出席】計 23 名

茨城キリスト教学園高等学校	10 名
茨城県立水戸第二高等学校	9 名
常磐大学高等学校	2 名
茨城県立常北高等学校	2 名

インターナショナルチーム

武田暁人	教育学部	3 年次	代表	取締役部門
芦田真子	人文学部	3 年次	副代表	取締役部門
海野侍郎	人文学部	2 年次		縁の下の力持ち部門
大河由佳	人文学部	3 年次		コンテンツ部門
山中健佑	教育学部	3 年次		縁の下の力持ち部門
川崎奈菜	人文学部	3 年次		コンテンツ部門
井上あゆ美	人文学部	3 年次		高校部門
星野由季菜	人文学部	1 年次		高校部門

ご協力いただいた方々

【先生方】

鈴木敦		茨城大学留学生センター長・人文学部教授
池田庸子		茨城大学留学生センター教授
藤原智栄美	顧問	茨城大学留学生センター准教授
栗田稔		茨城大学学務部留学交流課長
伊郷康隆		茨城大学学務部留学交流課留学生支援係長
上野尚美		茨城キリスト教大学国際理解センター長
東海林宏司		茨城キリスト教大学文学部長・現代英語学科教授
鈴木龍夫		茨城キリスト教学園中学校高等学校校長
関和彦		茨城キリスト教学園中学校高等学校副校長
秋山久行		茨城県立水戸第二高等学校校長
井坂博子		茨城県立水戸第二高等学校教頭

【日本人学生】

◇茨城大学

上原誠博	人文学部	4年次
豊澤吉憲	教育学部	3年次
寺岡重文雄	人文学部	3年次
若松雅夫	人文学部	3年次
内山和彦	教育学部	3年次
高岩和博子	人文学部	3年次
藤田祥嗣	人文学部	2年次
吉田純博	理学部	2年次
藤崎雄一	人文学部	1年次
藤原博範	人文学部	1年次

◇茨城キリスト教大学

岡田泰弘	文学部	4年次
伊藤昌典	文学部	3年次
梶山しづ子	文学部	4年次
北尾純典	文学部	3年次
高志純博	文学部	2年次
前田花穂	文学部	4年次
原山明里	文学部	3年次

【留 学 生】

◇茨城大学

南原正典	インドネシア
藤田 正平	オーストラリア
藤田 雅之	台湾
藤田 隆之	台湾
藤田 隆之	アメリカ
藤田 隆之	タイ
藤田 隆之	タイ

◇茨城キリスト教大学

藤田 隆之	ベトナム
藤田 隆之	ベトナム

平成 24 年 12 月 24 日

取締役部門報告書

取締役部門 武田暁人(茨城大学教育学部)

芦田真子(茨城大学人文学部)

I 部門の目的

本企画実施において先生や外部関係者と交渉・連絡を行ない、関係者とチームとを繋げる。また、チーム全体の動きに関して指示、統括を行ない、チームの作業が円滑に進むように努める。

II 部門の役割

(1) 先生、外部関係者との交渉、連絡

交渉、連絡は主に、①鈴木先生や藤原先生、茨城キリスト教大学の関係者等と行なうことと、②水戸第二高等学校や茨城キリスト教学園高等学校の先生方と行なうことと、③協力をしてくださるゲスト・スタッフと行なうことの3種である。

(2) ゲスト・スタッフ MTG 企画

本企画に参加してくださることとなったゲスト・スタッフに本企画趣旨や内容等を理解してもらうこと、さらには積極的に高校生と打ち解けてもらえるように打ち合わせる必要があると判断したため、ゲスト・スタッフ MTG を企画した。

(3) チーム全体の統括

本企画実施のために率先して全体を考察し、必要に応じて他部門に仕事を依頼する。また、定期 MTG 等で他部門から受けた意見・要望に応じて先生や外部との交渉、連絡を行なう。また茨城キリスト教大学開催の講演会のための無料送迎バスや、本企画での茨城キリスト教学園高等学校無料送迎バスの管理を行なう。

III 反省

(1) 先生、外部関係者との交渉、連絡

①では本企画実施における交渉が主であった。鈴木先生、藤原先生とは、チーム内で出た問題に対する相談や、ご助力やご指導のお願い、教室使用等許可申請の事前連絡をすることもあった。茨城大学留学生センターや茨城キリスト教大学の関係者へは、ポスター作成に際しロゴ使用の許可申請や、試作の確認等をお願いすることもあった。②は本企画における参加者を募るために上記の二校に案内状や、訪問後に行なった報告に際して文書の作成や連絡を行なった。③はゲスト・スタッフの募集を行ない、ゲスト・スタッフ MTG 実施のための案内や出欠確認や資料送付等のメール連絡を多く行なった。さらに必要に応じてチームとゲスト・スタッフを繋ぐためにあらゆる場面で交渉・連絡を行なった。

交渉、連絡手段は主にメールで、電話はほとんど使わなかった。また本企画用のアドレスを作成し、外部との連絡を取りやすくし、チームで確認しやすいようにした。茨城大学留学生との連絡は LINE アプリを使用していた。

本企画は多くの方々と交渉、連絡が必要であり、またその方々の協力がないと成り立たない企画であるために、メールのやり取りをするときに重要であったのはマナーを守る事と、ご協力をもらっているということを忘れない感謝の気持ちであった。準備不足や想定不足による作業の遅延や、連絡が遅れ事後報告になることも度々あり、関係者や他部門の作業に影響が及ぶことがあったことが反省である。取締役部門は関係者とチームを繋ぐ重要な役割であるために、万全な交渉や連絡が行なえるような体制をしっかり整えておく必要があった。具体的にはチーム全体のスケジュールを管理し、期日までに行なわなければならない連絡を把握し実施すること、また、備忘のためのリストを作成することである。

(2) ゲスト・スタッフ MTG 企画

10月28日に第一回、11月17日に第二回、12月8日に第三回の計三回を企画、実施した。ゲスト・スタッフ MTG は役に立ったというアンケート結果も出ており、効果があったと思われる。しかし連絡方法や実施内容等の検討時間が短く不十分であったため、ゲスト・スタッフへ確実な連絡が行なえない時や返信がもらえないときに十分な対応が行なえなかった等の改善すべき点も多く見受けられる。また、MTG 時に受け取ったアンケートにおいて当日ペアになるゲスト・スタッフ同士の交流の場が欲しいという意見があったため、昼食会を新たに企画・実施した。茨城大学の学生のみで自由参加であったため参加者は少なく、交流の目的は十分に果たせなかったため、別の方法を検討すべきである。茨城キリスト教大学からのゲスト・スタッフの学生とはスケジュールが合わず、何度か茨城キリスト教大学ゲスト・スタッフ向けの MTG も企画したが、本番まで実施には至らなかった。メールで代表者とやり取りし無料バスの打ち合わせを行ない、本番当日の直前の時間で最低限の打ち合わせを行なうに留まってしまった。ゲスト・スタッフ全員のスケジュールを早めに確認し、日程を組むべきであった。

(3) チーム全体の統括

部門メンバーにリーダーがおり、チームを代表して交渉、連絡を行なうため、チーム全体の統括を行なうこととなった。初めての企画で参考になる例がなく、必要な作業を事前に把握することができず初動が遅れたり直前になって追加がでてしまったり、作業の遅延からスケジュールが崩れそのフォローができなかったりし、実施までの作業を円滑に進めることはできなかった。どこまでできているのか、今後どのような作業が必要なのかの把握を行なう必要があったが、不十分であった。部門を立ち上げてしばらくの間は仕事内容を明確に配分することがうまくできておらず、他部門の作業を行なうこともあった。部門内、チーム内での打ち合わせの際に企画をよりよく仕上げていくため沢山の意見を出し合えるようなディスカッションの場を設ける必要があった。他部門からの積極的な意見を求め、部門内での打ち合わせを綿密に行なっていれば、他部門へ作業を明確に配分することができ、十分なスケジュールを立て、またどこかでミスや遅延があった場合にも素早い対応が行なえたと思われる。

IV 取締役部門として獲得したもの

(1) 交渉、連絡の基礎

先生や外部関係者との交渉、連絡を取り合う中で、必要なマナーや礼儀を身につけることができた。例えば、メール文章の体裁の整え方や言葉遣い(敬語の遣い方)、添付文書の作り方や送り方(データ便を使うこと)、挨拶状やお礼状等の文書の作り方や送り方等である。また、Cc や Bcc を使って関係者にメールを共有することや早めに返信を行なう等メールを送る上での気配りも考え、身につけることができた。これらの知識、技術は交渉、連絡を行なう上で最低限身につけておくべきものであり、今後さまざまな場面でも応用していけるものである。

(2) リーダーシップ

取締役部門として他部門から積極的な意見・要望を十分に求めることができなかつたり、企画全体を把握して作業を想定することができなかつたり等、反省点も多くあるが、ゲスト・スタッフ MTG 企画やチーム全体を統括するために、率先して企画実施に対して行動をすることが必要であったため、リーダーシップを発揮する場面が多く設けられていた。先生や関係者から受けた連絡やゲスト・スタッフからの意見・要望を取り入れて企画に反映していくためや、問題や新しい課題が生じたときに全体を見渡しながらか解決策を考察し実行するために他部門に指示を出すこともあり、企画に対して責任感や使命感を持って行動をするようになった。本能力は能率や企画内容の向上が見込めるため、各個人が積極的に身につけていくべきであると考えられる。

個人レポート

リーダー・取締役部門

茨城大学 教育学部 3 年次 武田暁人

①本プロジェクトに対する全体的満足度

65 点

②自己内省

- ・プロジェクトの目的達成に向けてどのような行動・実践をしたか。

目的達成に向けては、リーダーとしてチームの動向の舵役を担いながら、取締役部門として連携した茨城キリスト教大学の学生と連絡をとったり学生の協力をあおぎ、必要事項の連絡など行なった。また、フォーラム当日においては総司会として交流全体の進行を行なった。その他、チーム結成前後に達成すべき目的をどのように設定すべきか、チームの存在意義をどう定義するか積極的に提案した。

- ・これまでの自分の取り組みについて、評価できる点と改善すべき点。

プロジェクトを白紙の状態からスタートさせ、さらに具体的意識の共有のない学生が集まった中、今回のような成果につながるまで紆余曲折しながらもチームで形作れてきたことはかなり評価できるのではないかと感じる。メンバーのつながりが希薄な中、つまり共通認識がお互いに乏しい中、プロジェクトの実質的結果はともあれ、チームとして動く基盤を作ることができていたこと、前例がない中自分たちでプロセスを作り上げてきたことは今回の成果のひとつとすることができると思う。リーダーという立場では、チームが機械的に機能するのではなく、個人の判断が生かされるようにチームが有機的に機能するように心がけたが、このことは評価できる点でもあり改善すべき点でもあると感じる。

改善すべき点は、正直なところ枚挙にいとまがないという状態である。このことは、今になったからこそ見える改善点と、そうではなく回避可能であった改善点と大別することができると思う。前者に関しては下記にかぶる内容である。特記するのであれば、目標としていた参加人数を大きく下回ったということだが、これは事前にもっといろいろな予測をしておくべきであった。後者に関しては、コンスタントな動きができなかったこと（メールへの素早い確実なレスポンスや業務の集中、納期直前での動きなど）や、茨城キリスト教大学学生との綿密は打ち合わせができなかったことなどが挙げられる。また、さらに特記しておくべきこととしては、フォーラム当日はリーダーであるにも関わらず総司会という役目を担ってしまったということである。

- ・このプロジェクトを通して学んだことや成長したこと。

これに関しては記述できる事柄よりも無意識的に身についたことのほうが大きいのではないかと感じる。例えば、他者と関わる時の礼儀礼節（表面的なものだけでなく）や、協力者への感謝の心、物事が進む上で起きるであろう事象への予測力などが挙げられる。しかし、記述できる事柄が少ないわけではない。むしろ細かい点においては数多くあり記述しきれないという状態である。また、今回一番大きく学んだこととしては、共通した基盤を作っていかなければならない学生たちがどのようにして同じ目的にむかって進んでいくか、どのような方法を取りチームを作っていくかということである。今回がベストな方法とはとても言えないが、かなり貴重な経験になったと思う。良くも悪くも、得難い経験を今回することができた。

③客観的分析

- ・本プロジェクトの目的達成率

55%

・上記の数値の理由

今回のプロジェクトの目的として「国際交流」と「地域貢献」をキーワードに次の内容が目的されていた。「日本人学生と留学生、水戸市内と近隣の高校生との相互交流を行い各々のグローバルな視野を広げるとともに、海外渡航への関心を高める。」「茨城キリスト教大学との連携を図り、大学をより地域に開放したものにする。」今回のフォーラム自体の満足度は参加者・ゲスト・スタッフのアンケートのどれも見ても高いのは明らかと言える。しかし、なぜ目的達成率がこの数値かということ、満足度が直接評価対象とならないからである。今回のフォーラムでは確かに各々視野を広げることが出来ていたようだし、満足度では「不満」という評価が1%もなかった。しかし、目的には「海外渡航への関心を高める」という文言がる。これは、当初海外留学を中心に企画しようと考えていた時の名残であり、フォーラム実施を企画する段階でもこれを払拭できなかった。つまり、どこかの段階で目的をチームで見直す必要があった。そうすれば目的達成度も上がったと思う。これは反省点でもある。早くこの軌道修正ができていればフォーラム内容ももっと柔軟な、あるいは明確な手段を用意することができたのかもしれない。ただ、「〈海外〉を近くに感じよう！」というコンセプトは、座談会という形式をとったことで体現できたということを示していると思う。

また、「地域貢献」という意味においては、茨城キリスト教大学との連携の強化が課題であった。このことはアンケートにも記載されている。また、参加者の目標人数が50名であったのに対して実際は23名となってしまい大きな課題となった。申込に比べて参加人数が少なかったこともまた課題である。これらのことを踏まえると「地域貢献」度は低くなってしまっていると感じる。しかし、一方で今回の試みを最後まで通しきることができ、実際にアクションを起こしたという意味においては大きく評価できるのではないかと感じる。つまり目的達成に近づくことができたと思う。

・来年度同じプロジェクトを実施すると仮定した場合、何を改善すべきか。

こちら細かい改善点を上げれば枚挙にいとまがない。さらに、アンケートからも改善点を抽出することが可能である。しかしまず、上記達成率の記述内容に関連させると、プロジェクトの存在意義である目的と、実際に行うコンテンツの整合性を確認する必要がある。その上で、アンケートにある要望に応えるようコンテンツを見直し、会場も設定しなおす必要がある。また、特記すべきこととして参加者の動員である。今回、確かに初の試み（大学生として）であり勝手がわからないことが多々あり、さらに高校側の受け止め方も予測不明だった。来年度を仮定した場合、この点を反省ととらえ、高校へのちがったアプローチの仕方や出席率の向上を念頭に段取りを考えていくことが可能である。

取締役部門

茨城大学 人文学部3年次 芦田真子

I 自己内省

- 1 本プロジェクトに対する全体満足度 80%
- 2 プロジェクトの達成に向けてどのような行動・実践をしたか

(1)記録として

インターナショナルチームの記録として、MTG時に議事録を取りまとめ、先生方やチームに共有した。

(2)取締役部門として

外部と交渉、連絡を行った。交渉では特に、ポスターに使用する茨城大学・茨城キリスト教大学のロゴや住所の使用の交渉を担当した。自分は主に茨城大学・茨城キリスト教大学のゲスト・スタッフへの連絡を担当し、チームとゲスト・スタッフを繋げられるように尽くした。必要に応じてスケジュールを立ててまとめる作業も行い、プロジェクト全体の作業の流れを整備した。また依頼されたゲスト・スタッフ MTG やフォーラム当日に向けての配布資料の一部を作成した。本企画のコンテンツに関すること以外の内容を取締役部門内で検討し、他部門に指示等を行った。

(3)万事屋として

フォーラム当日は万事屋として欠席者への連絡、飲み物やお菓子の管理、環境の整備を担当し、参加者である高校生やゲスト・スタッフが快くフォーラムを楽しめるよう努めた。

3 これまでの自分の取り組みについて、評価できる点と改善すべき点

(1) 記録として

議事録を共有するときには、出席者が覚えているうちに行なった方がいいと考え、自分のスケジュールが許す限りで、早急に作成し共有できたことは良かったと思う。時には別紙資料を付け加えたり、重要な部分に線を引く等、議事録を利用して担当やスケジュールの共有や確認を行なえるように工夫できた。また、私用で MTG を欠席する際に記録の役割を予め委託しておいたことも良かった。

しかし議事録をまとめる際、参考になる資料等を調べることなく、最初から最後まで自己流で行なっていたが、自分のやり方や書き方が正しいものであるのか、また共有した時に分かりやすく十全に伝わるものであったかを確認することなく行なってしまった。何度か議事録の把握不足のために作業に支障をきたした場面があったが、そのときに自分の議事録の在り方について反省すべきでなかったかと考える。

(2) 取締役部門として

先生方や外部と連絡を取る際、今までに習った知識(メールの作成方法や言葉遣い等)を活用することができ、また知識不足な部分は学び指導をいただいて徐々に改善していった。

自分の性質上、初めから全開で物事に取り組むことや人に関わっていく力が乏しく、本企画を作り上げていく際に他のメンバーの裁量に委ね、発言や行動を控えてしまうことがあった。時間が立つにつれて取締役部門としての責任や作業をこなしていった自信から、企画を成功させるためには一層励まなければならないことを自覚したが、初めからその気持ちを持って臨めていたら企画達成のためにできることが多くあったと思われる。今後努力して改善していくべき部分である。

(3) 万事屋として

どんな事態にも対応できるよう心配りをしていたが、会の雰囲気が良かったため最低限の仕事でおえることができ、遅刻者への対応も行えた。欠席者に対しての連絡が繋がらないままで終わってしまい、事前の対策を立てておくべきであったと思われる。

4 このプロジェクトを通して学んだことや成長したこと。

(1) 現状に合わせた企画をつくるということ

企画を立ち上げる際には、理想と現実を擦り合わせる作業がなかなか難しく、自分たちの能力や前例がないことやイメージ不足等壁に多くぶつかり葛藤した。結果的に規模は膨らまなかったが、なんでもできる状態から何が求められているかを見極め、現状現実にあったものを行なうという思考を学んだ。

(2) 積極性と責任感

初めのころは自分の性質により発言や行動を控えチームに貢献できないことが多かったが、物事が進むにつれて改め、プロジェクト成功に向けて積極性を実につけることができた。自分の担当箇所の仕事のみならず、全体を見渡しながら今自分に求められていることを確実に行うこと、という責任感も育むことができた。

(3) 交渉・連絡を行う上での知識やマナー

普段の生活では身につけることができないメールや文書の作成技術やマナーなども身につけることができ、またすぐに実践できた。

II 客観的分析

1 プロジェクトの目標達成率 70%

2 上記の数値の理由

参加者である高校生を 50 人集めることをひとつの目標にしていたが、高校生に本フォーラムをアピールするためのポスターやビラの作成が大幅に遅れてしまい、高校生に向けての広報期間を十分に持つ

ことができたとは思わず、本フォーラムの周知度は低いと思われる。参加者のほとんどを最終的には先生方やメンバーのつてに頼ってしまい、参加者 50 人を集めるための活動はうまく行えなかった。

結果的なアンケートでは良い意見が多数見受けられ、参加者満足度 100%ではなかったもののおおむね達成されたものと思われる。フォーラム自体は成功したと思われるが、しかし「地域貢献」に関しては本企画を地域に広めさらに参加者や広報等における協力者を募るなど、できることはまだあったと思われる。

3 来年度同じプロジェクトを実施すると仮定した場合、継続すべき点と改善すべき点。

(1) 学生主体で企画し、学生の力を生かすこと。

茨城大学と茨城キリスト教大学の学生と留学生に協力を仰ぎ、学生主体で企画を進めることは学生自体の力にもなり、また自分の経験を生かすという形も良いものであるので継続すべきだとか考える。その上で、今回は協力をさせていただくゲスト・スタッフ同士の打ち合わせや交流が十分でなかった。コンテンツ部門が伝達してほしいと要望があったものを確実にゲスト・スタッフに伝達できていなかったと思われる。特にゲスト・スタッフへの連絡方法やゲスト・スタッフ MTG の立て方には多くの改善点がある。アンケート上では指摘されていなかったが、連絡に関しては簡単でかつ返信がしやすい方法を、MTG では日程の立て方や人の集め方等を課題に考えてほしいと思う。またゲストとスタッフの交流の場を設けてほしいという要望から昼食会を行ったが効果が得られなかったので、他の方法を検討すべきである。

(2) 作業に関する基礎的な知識や技術を身につけること。

初めのうちに必要である基礎的な知識や技術を身につけるために調べるという作業が必要であると思われる(議事録の取り方やメール・文書の作成方法、交渉におけるマナー等)。知らないままで作業を行なうことで不都合がおこり余計な時間と手間がかかり、チーム全体の能率が下がってしまう。一般的な型通りにやる必要はないので、初めに学んだその上で個人やチームに合わせて応用し、さらにはチーム内にもその知識や技術を共有できるような場面を設けることができるとチーム全体の能力向上になると思われる。

(3) 定期 MTG の開催とスケジュールは早期に立て、作業を整理すること。

定期 MTG を一週間に 1 回、決まった時間に行なえたことは、作業を進めるうえでの軸にもなり、確認作業や物事の決定が行ないやすかったので継続すべきである。しかし MTG の時間が超過する場合や話し合いが十全に行なえないこともあり、MTG 内容の立て方や進め方についてはチーム全体で検討し改善していくべきである。また、先のスケジュールを立てる際、しっかりとディスカッションやシミュレーションをするべきであり、定期 MTG で積極的に行うのがいいのではないかと考える。今回の場合は広報のためのポスター作りやゲスト・スタッフ MTG の立ちあげなどの作業に大幅な遅れがあった。前例がないことによる想定不足でもあるが、作業工程の整理が行えていなかったことにより効率が悪かった。MTG で検討し作業を進める事と並行して次の作業に向けての準備や日程の調整を行なっていたら、スムーズに物事を動かさず、不測の事態が起こった際に狂いを最小限に抑えられると思われる。

.....

平成 24 年 12 月 27 日 (木)

コンテンツ部門報告書

コンテンツ部門 大河由佳 (茨城大学人文学部)

川崎奈菜 (茨城大学人文学部)

I 部門の目的

- ・フォーラムを通じて、渡航や留学はもちろん、日本社会や世界の諸問題にも関心を持ってもらえるように、高校生の視野を広げる。

II 部門の役割

(1) フォーラム当日の内容決定

“高校生に対して、渡航・留学説明会を行う”ということが決定してから、どのようなことを行うことが、高校生にとってベストなのか、ということを一に考え、内容を決めていった。その結果、フォーラムは4部構成になり、第1部では日本人で海外に留学した学生と、海外から日本に留学している学生の体験談発表、第2部は座談会、第3部は振り返りタイム、第4部は個別質問タイムを行うことになった。また、参加者の緊張を解くために、第1部では、何を聞くかをあらかじめ決めた紙を配り、その紙を使った自己紹介(アイスブレイク)を行うことにした。

(2) 高校生が他の高校生や、大学生、留学生とたくさん交流できるようにし向ける

このフォーラムの目的の一つに、“高校生が普段の生活の中で交流しない人々と交流できる場を設ける”ということがあり、それを実現するために、全体アイスブレイクを行ったり、座談会の際に、一つのグループの人数が多くなりすぎないように設定したりした。

(3) 参加者が退屈しないような時間配分と内容にする

(4) 当日の流れがスムーズにいくように、机の配置や、移動について決める

(5) 自分たちしかできない、学生だからできる説明会にすること

III 反省

(1) 他部門との連携不足

当日使う資料の作成や、座談会での席移動の順番決めなど、他の部門に任せることができることもすべて部門内で消化しようとしたことで、決定が遅れたり負担が大きくなったりしてしまった。また、コンテンツ部門は、特に他部門との結びつきが強かったにもかかわらず、その認識が十分ではなかった。

(2) 想像力

当日人数が少なかった場合の対処法や、座談会の際に高校生が同じ国の留学生の話聞くのはあまりためにならないかもしれないと言うことを想像できなかった。

IV コンテンツ部門として得たもの

(1) 提案力

このプロジェクトを、“フォーラムを開催した”と事実や、結果に対して“自己満足”で終わらせないためには、高校生や参加者にどれだけ充実した時間を共有してもらうか、ということや、内容に満足してもらうか、ということが重要であり、プロジェクト開始当初からそのことが念頭にあったため、自分が「いい!」と思ったことはためらわずに提案するようにした。また、他の人の意見に対しても、良い意見を受け入れるだけでなく、人間関係が気まづくなることを恐れずに自分の意見を述べたり、議論をしたりするようにした。

そのように、責任感を持って積極的に発言していくことにより、提案力がついたと考える。

(2) 行動力・実践力

今回のプロジェクトではフォーラムを開催する会場が決まったあと、実際にシミュレーションを行うまで時間があり、紙の上で議論する時間が長かった。しかし、実際に会場を使ってみないと分からないことはたくさんあることを、シミュレーションを通じて実感した。また、限られた時間の中で、何を優先してやるのかということや、何に時間を割くのか、どれくらいの人数ならどれくらいの時間が必要なのか、ということを経験したシミュレーションを通じて予想することができるようになった。それにより、時間をうまく有効に使う力がついたし、そのことが行動力や実践力につながっていると考える。

(3) 柔軟性

フォーラム当日は、予定より時間が巻いたり押ししたり、高校生的人数が少なくなったりと不測の事態がたくさん起こったが、有効に時間をもたせるために何をするかを指示したり、ひとグループあたりの高校生的人数を適度に調整したりすることができた。それは、スタッフとして、しなければいけないことや、当日の流れ、何が目的なのか、ということを知っていたからであり、冷静にフォーラム全体を見ることができていたからだと思う。それにより不測の事態にも瞬時に対応することができたのだと考える。また、フォーラム当日の内容について、メンバーに意見を求める事も多くあったが、コンテンツ部門として提案したことが受け入れられなかったり、そのほかに良い意見が提案されたりした際に、様々な意見を組み合わせる新しい意見を生み出したり、いろいろな視点から他部門の提案に意見したりすることができた。それは週に一回のミーティングの中で物事を客観的に考え判断し、柔軟に対応する力がついたということだと考える。

(5) 思いやりの心

今回のフォーラムを成功させるに当たって最も重要だったのは、“いかに発言しやすい場を作るか”ということだったと思う。コンテンツ部門としては、アイスブレイクや質問カードを事前に準備するなど、高校生も積極的に動いたり、発言したりしやすいような仕掛けを盛り込むように心がけた。また、座談会で司会者とゲストが話題に困らないように工夫したり、チームのミーティングの中でも、相手の意見を否定せず、話をしっかり聞いたり、提案を受け入れたりすることで、できるだけ話しやすい場を作るように心がけた。特にコンテンツ部門内では、お互いによく連携し、役割分担し、負担を軽減し合うことができたと思う。それらは相手を思いやる心から生まれる協力であり、高校生もフォーラム当日、予想以上に活発に明るくしてくれ、私たちに協力してくれたと考える。そして、そのおかげで、フォーラムは良いものになった。また、今回のプロジェクトでは、とにかく外部の方々にたくさんのご協力をいただくことができた。それらもまた、私たちの“高校生のために”という思いやりの気持ちに感化された部分が少しでもあったと考えるので、何かを行う際、他人への配慮の気持ちと思いやりの心をもつことの重要性を学んだと考える。

個人レポート

①大河由佳（人文学部社会科学科 コンテンツ部門）

②本プロジェクトに対する全体的満足度 87点

③自己内省

・プロジェクトの目的達成に向けてどのような行動・実践をしたか。

「国際交流」という、プロジェクトの大きな目標の一つを達成するために、高校生を対象とした海外留学・渡航説明会を催し、日本人学生と留学生、水戸市内の高校生が相互に交流し、参加者のグローバルな視野を広げるとともに、主に高校生の海外渡航への関心を高めることができるようなフォーラムの内容を考えた。

具体的には、高校生にも能動的にフォーラムに参加してもらえるように、個別質問タイムを設けた

り、質問リストを作成し、それをカードにしたりしたことで、司会者やゲスト・高校生の負担を軽くすることができた。

また、「地域貢献」という、二つめの目標を達成するために、茨城キリスト教大学での催しに参加したり、フォーラムの参加者と、ミーティングの段階や、フォーラム当日の閉会後に積極的にコミュニケーションを採るようにしたりしたことは、高校生を含む参加者に茨城大学や大学生、大学の持っている人材や機会などの資源を地域住民で共有する点で有効だったと考える。

・これまでの自分の取り組みについて、評価できる点と改善すべき点

プロジェクトの発足当初、まだ留学・渡航説明会を行うということしか決まっていなかった時点で、「大学生が主体で開催するからこそ出来る留学・渡航説明会」にするための特色づくりとして、“高校へ直接出向いて参加の募集を呼びかけよう”ということや、“座談会形式を取り入れよう”ということを提案した。そのほかにも、ミーティングの際に、積極的に発言したり、議論に参加したりするようにした点はチームに貢献できていたと思う。

また、こうした方がよいと思うことを提案するだけでなく、メンバーから出た意見を受け入れたり、いくつかの意見を組み合わせることで、よりよい内容にしたりすることができたと思う。自分の意見や部門としての意見が全体では通らなかつたり、何度もやり直しになったりした際にはとても辛かったが、プロジェクトの成功はフォーラムの出来映えに大きく左右され、フォーラムの成功はコンテンツにかかっているということを念頭に置いて、高校生に満足してもらえる内容にするために献身的に提案を繰り返した点は評価できると考える。

一方、他部門の進行状況について、関心が薄いところがあったり、送られてくる資料を確認しても、内容を十分に記憶していなかつたりしたために、状況把握が出来ていないことがあった点は改善すべきだと考える。

・このプロジェクトを通して学んだことや成長したこと

今回のプロジェクトは、教員の方々や、留学交流課の方々をはじめ、スタッフやゲストなど、学内の方々に留まらず、高校関係者の方々など、外部の方々の協力を得たり、連携をとったりしなければ成り立たないものであった。そのため、自分の行動や発言に対する責任や、フォーラム開催にあたってのプレッシャーも感じていたが、多くの方々と真剣に向き合う機会を得られたことで、普段の大学生同士の付き合いでは育たない、社会人として求められる力が鍛えられたと考える。例えば、高校に訪問し、フォーラムの趣旨を説明させていただいた際には、高校関係者の方々が予想以上に私たちの話に興味を持ってくださったことが嬉しかった一方で、質問されたことに適切に応えることが出来たのか不安に思うこともあり、プロジェクトの詳細の把握や、プレゼンテーションをすることへの認識の甘さを痛感させられる場面もあった。そのようなことにならないためには、自分の部門のことだけでなく、全体の進行状況や、プロジェクトの軸となっているものを明確にしておく必要性があったと感じた。

また、フォーラムを迎えるまでの課程では、メンバーに対して憤りや物足りなさを感じることもあったが、そのような場面で無駄に衝突したり、妥協したりするのではなく、議論したり、自分の主張も伝えたり、相手に求めるだけでなく、自分が行動したりすることなどによって、感情的になることなく対処することができるようになった。

最後に、謙虚な姿勢と思いやりの気持ちをもってプロジェクトに臨むこと、またその気持ちを忘れずに、真剣に取り組むことが、プロジェクトの成功につながることを学んだ。

④客観的分析

・本プロジェクトの目的達成率

64%

・上記の数値の理由

高校生やスタッフ、ゲストのおかげで、フォーラムは盛り上がったが、会場が狭かったことで、周

りの音がうるさく、話に集中できないこともあったのではないかと思います。また、高校生に他の学校の高校生や大学生、留学生と交流する機会を提供できた点はとても評価できたと思うが、話が盛り上がり、楽しんでもらえたぶん、「楽しかった！」という感情だけが残りに、内容に“深まり”が足りなかったのではないかと思います。

具体的には、「では実際自分はどのタイミングで海外に行ってみたいのか」、「海外に行くという事のハードルはどれくらい高いのか、なぜ高いと思うのか、または、今回のフォーラムを通じてどれくらい下がったのか」ということを考え、書いてもらったり、グループで話し合ってもらったテーマとして、「ゲストの出身の国や、それ以外の各国が抱えている問題（貧困、紛争、戦争、格差社会、ネット依存、肥満人口増加など）」や、「日本人で海外に留学する人や渡航する人が少ないと言われ、問題視されているが、これについてどう思うか」ということを上げ、議論したりしてもらったと考える。そのように何か一つ、真剣な話題について考え、複数の人と意見交換をして、それを全体で共有することによって、世界のつながりや、各国々とのつながりというものを感じてもらうことができ、結果として、「海外を近くに感じよう！」という目標をより達成することができたのではないかと思います。

留学生と話をし、聞きたいことを聞いただけでは、実際に十分視野を広げた、ということにはならない。普段は深く考えることのない議題を、今回のフォーラムのような特別な場で考えることで、その後、ニュースなどで関心を向けてもらうきっかけを作らなければいけなかったのではないかと考える。学生の間は、議題に対して明確な答えが出せなくても良いし、国が違い、いろいろなバックボーンを持った人が集まる場所であるからこそ、答えのない問題にも真剣に考え、議論していく必要があったのではないかと考える。

また、反省する点として、高校生の来場者人数の少なさが上げられる。今回は、会場が狭く、高校生の来場者数が目標より少なかったことが結果としてはプラスに働いていたが、当初の達成目標である、「高校生の来場者 50 人超過」を大幅に下回ってしまったのは、大きな反省材料であると考え。50 人という目標を達成するためには、高校訪問や、募集期間、開催時期、宣伝の方法をより工夫するべきだった。しかし、一方で、人数が少なかったことにより、座談会の際など、高校生が積極的に質問できる、あるいはしなければいけないという環境を作ることができたし、そのことは、目標としていた、高校生の視野を広げる、ということや、高校生と大学生や留学生の交流の場を提供する、ということの達成につながったと考える。

・来年度同じプロジェクトを実施すると仮定した場合、何を改善すべきか

今後同じプログラムを行うとすれば、高校訪問を行ったことや、フォーラム全体の流れ、内容については、今回の例を大きく変えることなく、柱として使っても良いのではないかと考える。

加えて、フォーラム終了後、参加者に記入してもらったアンケートを参考にすると、海外のゲームや料理を体験したい、という意見があり、実際に海外の“文化”の面に触れることができるような時間を設けられたら、参加者により楽しんでもらうことができると思う。また、座談会の時間がもっと長くても良かった、という意見や、自由に話せる時間がもっとほしかった、という意見が多かったので、座談会の時間を一回何分、と細かく設定するのではなく、グループの話の盛り上がり具合によって、司会者に裁量を持たせられるような時間設定にすべきだったと考える。

次に、高校生が会場に着く時間はバラバラなので、先に来た高校生が手持ちぶさたにならないために、ということや、高校生に、よりどんな国の人がいて、誰が誰なのか、ということを知ってもらうためにも、ゲストとスタッフの顔写真と出身の国を書いた模造紙などを会場に貼っておけば良かったと思う。

最後に、先に述べたように、普段一人ではなかなか考えられないようなことについて、テーマを設け、議論してもらったことで、内容を深めることができ、参加者の充実感を高め、フォーラムをより意義のあるものにするのではないかと考える。

①川崎奈菜 茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科3年 コンテンツ部門

②プロジェクトにおける全体的満足度 70点

③自己内省

・コンテンツ部門としての役割・活動

「プロジェクト実習」の授業を始めから履修しておらず、遊撃という役職で途中から本プロジェクトに参加したが、コンテンツ部門として役割をしっかりと果たせたと思う。高校生にとっていかに良いフォーラムになるかを一番に考え、より良い内容になるよう試行錯誤した。フォーラムは四部構成からなり、第一部はアイスブレイク（参加者全員主体）、第二部は体験談（ゲスト主体）、第三部は座談会（ゲスト、高校生主体）第4部は振り返りタイム（高校生、ゲスト主体）という内容で、ボリュームがありながらも上手く対象が振り分けられた構成になった。他に高校生にとって丁度良い時間配分を重視し、また高校生が座談会で交流する留学生の、国籍がかぶらないように配慮をした。

これらの内容も、ミーティング前までにコンテンツで話し合いをその都度行った。ミーティング時にチームへある程度まとまった意見を提案することによって、全体で1つの意見をまとめるよりも時間を省略でき、同意や批判もすぐに得ることができ、効率の良いやり方だったと思う。コンテンツ部門以外のメンバーの意見を聞きながら、コンテンツとしての考えをハッキリと伝えることができ、チーム内での議論は活発に行うことができた。

またコンテンツに関する資料を作成した。インターナショナルチーム以外にも、チームミーティング時にスタッフ・ゲストへ説明するための資料も作成した。インターナショナルチーム以外の、スタッフ・ゲストは全員が、毎回ミーティングへ参加できていたわけではなかった。そのため、初めて参加するスタッフ・ゲストにも理解しやすいような、図式などを取り入れ、細かい説明を加えた資料を作成することができた。また、留学生に対してコンテンツ内容の説明も行った。留学生側に立場に置き換えた分かりやすい日本語を使用することを配慮し、留学生との交流も上手くできたと思う。

・コンテンツ部門としての反省

コンテンツ部門だけで内容を最終まで煮詰めてしまうことが多く、他部門との連携が上手くできていなかった。他部門との間で誤解が生じ、体験談で話してもらった内容についてゲストを混乱させてしまうこともあった。また、ロールプレイングや机移動の練習などの反省点を考慮してから、内容を変更することが多かった。ロールプレイングや机移動練習はある程度コンテンツ内容が決定してから行ったため、変更する部分が後から多く出てきたことは反省点である。頭の中で考え話し合っても、実践しながら内容を作り上げていく方がより効率が良いのだと気付くことが遅かった。

第4部に関しては前日になって内容が変更になり、資料の訂正を手書きで行うことも起きてしまった。他部門への負担が大きかったことを事前に見抜くことができなかったことが原因だが、それも話し合いが足りなかったためである。

高校生の参加人数が、当日減ることを予想しなかったのも反省点である。座談会での、高校生とゲスト・司会者・の人数比率を重視していたが、事前に考えていた比率とは大きく異なってしまった。受付前、高校生にテーブル移動をお願いしなければいけない場面があった。

3. 全体を通しての反省と成果

全部門が密に連携してプロジェクトを作り上げることがあまりできなかった。他部門が何をしているのか、部門同士で把握していることは少なかったように思われる。そのために起こった問題も多かった。各部門の進捗状況などを共有し、仕事を振り分けることが必要だった。コンテンツ内容に関しても、もっと他部門とより連携を取りながら、発展していける形が他にあったと思う。ミーティングも本来ならば、インターナショナルチーム・司会者・司会補助・ゲストが毎回全員参加するべきであった。チーム以外の協力者の間で、フォーラムについての認識がバラバラだったため、ミーティングごとに説明する時間ももったいないと感ずることがあった。リハーサルも1回しか行うことができず、準備不足であった。

また高校生に取った事前アンケート結果では、英語圏に興味がある高校生が多く、このフォーラム

はアジア出身の留学生が多かったため、不安に感じていた。しかし第4部の振り返りタイムで高校生の感想を聞いてみると、「当初は英語圏に留学したいと思っていたが、アジアに興味を持つことができた」という意見が多くみられ、このフォーラムを通して高校生に新たな視点を得ることができたのだと分かる。フォーラム後のアンケート結果も同様で、留学生・日本人ゲストとの交流から、海外を近くに感じてくれたことが分かる。高校生が交流しやすい雰囲気を作ってくれた留学生・日本人スタッフと、予想以上に積極的な交流を行ってくれた高校生のおかげであると言える。

アンケート結果だけではなく、実際に会場の雰囲気を体験して感じたが、高校生だけではなく、スタッフ・ゲスト・インターナショナルチーム、参加者全員が楽しむことができるフォーラムを作り上げることができたと思う。

平成 24 年度 12 月 27 日

高校生部門報告書

高校生部門 井上あゆ美（茨城大学人文学部）
星野由季菜（茨城大学人文学部）

I 部門の目的

本企画実施において募集人数である 50 人の参加者を招集すべく高校生への宣伝、参加者の確定と管理、当日の案内の告知をする。当日の高校生、スタッフ、ゲストを含む参加者の確認。

II 部門の役割

(1) 高校への宣伝・高校生の招集・

参加対象高校を水戸市内の高校に決定。高校生への宣伝を、①主要参加高校への訪問、②参加対象高校へ宣伝のポスターや文書等を送付、により行った。本企画は初めての試みであったため、どれほどの参加希望が得られるか予想できなかった。確実に参加者を集めるために、まず、主要参加高校を設定しある程度人数を集め、その後、他の高校から募集した。全ての対象校への訪問は困難であったため、海外交流活動に積極的である水戸第二高等学校と、今回の企画の連携校である茨城キリスト教大学を通しての宣伝が可能な茨城キリスト教学園高等学校の 2 校を主要参加高校に決定。そして 10 月、茨城県立水戸第二高等学校、茨城キリスト教学園高等学校を訪問。水戸市内の全ての高校と茨城キリスト学園高等学校にフォーラム書類を送付。外部への宣伝の手段としてホームページを作成。10 月末日第一回の参加申込締切。結果水戸第二高等学校、茨城キリスト教学園高等学校、常磐大学高等学校から計 32 名の申込みがあった。募集人数の 50 人に満たなかったため、11 月中旬に第二回締め切りを設定。知り合いの教員や、卒業生がいるなど伝手のある高校、茨城高等学校・常北高等学校・水城高等学校・水戸第一高等学校へ再度アナウンスした。茨城大学、茨城県立図書館、にポスターを掲示。第二回の申し込み締め切り。常北高等学校から 3 名の申込み。参加者への案内状を作成、送付。12 月、フォーラム参加者名簿の作成。フォーラム当日、参加者の確認。

III 反省点

- ・ 第一回締め切りの前に、その後のアナウンス方法について考えていなかったためすぐに行動出来なかった。第二回締め切りの決定、伝手を通しての宣伝が遅くなってしまった。あらかじめ様々な場合を想定し、その対策を考えておくべきであった。
- ・ 案内状を送付するのが遅かった
フォーラム 3 日前、住所の書き損じのため参加者 2 名に届いていないことが判明。書類を再送

し、電話による連絡を試みる。連絡がとれず留守番電話サービスを利用したが、当日は欠席であった。電話番号だけでなく、メールアドレスも控えておくべきであった。

- ・ 宣伝がきちんと高校生に届いていなかった

送付した書類が事務所止まりで、高校生へ伝わっていない高校があった。送付後、書類が届いたかどうかの確認の連絡を入れておけばより多くの参加者に宣伝が届いただろう。

個人レポート

- ① 井上あゆ美 茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科、インターナショナルチーム（高校部門）

- ② 70点

- ③ ・プロジェクトの目的を達成するため、まず第一段階として、高校部門が高校生へのアナウンスを行う必要があった。より多くの高校から参加して欲しかったので、水戸市内の全ての高校と茨城キリスト教学園へアナウンスを行った。

・評価できる点は、アナウンスとして有効だと考えたことは全て実践した点だ。第一回の締め切りまでに行った活動は、各高校に対するフォーラム開催のお知らせ送付と電話での連絡、水戸第二高等学校・茨城キリスト教学園高等学校への訪問である。第二回の締め切りまでは、呼びかけの範囲をより狭くした。狭くした理由は、第一回の締め切りの結果を受け、第二回の締め切りまで時間が少なかったこと、対象を絞り集中的にアナウンスを展開することで、より多くの参加者を集めることができると考えたからである。

・反省すべき点は、動くのが遅かった、準備が浅かったという2点が挙げられる。まず動きが遅かったという点だが、高校部門としての活動全てに当てはまる。初めの、高校への文書送付が遅れてしまったため、その後の活動が全てずれこんでしまった。この原因は、計画の立て方が大まかであったこと、危機感が足りなかったということだ。もう少し計画を細かく立て、高校部門内で打ち合わせをしておくべきだった。

次に準備が浅かったという点だが、これは、「もしも」の時を考え行動出来ていなかった、ということである。具体的には次のことが反省すべき点として挙げられる。参加する高校生から参加申込書を提出してもらった際、連絡先として電話番号のみ記述してもらったのだが、案内状が届かなかった参加者や当日欠席の参加者に対して、電話で連絡をすることとなった。しかし実際電話での連絡となってしまったため、連絡が取れたのは数名であった。こうした事態に備えて、メールアドレスも控えておくべきだったと感じた。

・プロジェクトを通して、大学生活では経験できない様々な活動を行うことができた。サークル活動で大学生を相手にしたイベントの手伝いをしたことはあったが、今回のように高校生や高校の先生、大学の先生を相手にイベントを行ったことはなかったため、どうすべきかわからない点や失礼なことをしてしまったこともあった。高校部門では文書を送ることが多かったのだが、公式な手紙や封筒の書き方さえわからなかった。しかし、チームのメンバーから助言を受けたり自分で調べるなどして、そうした基本的なことを身につけることができた。

- ④ ・70%

フォーラム後に提出してもらった、参加者、スタッフ、ゲストからのアンケートを集計した結果、フォーラム自体に不足を感じていたり、スタッフの対応に不満を感じていた人がいなかったため、それぞれ活発な相互交流が出来たと考えた。そこで一つ目の目的である国際交流は達成できたとして70%とした。しかし二つ目の目的として挙げた地域貢献においては、茨城キリスト教大学と上手く連携・交流して万全な体制を整えるということは出来なかったため、マイナス30%とした。それぞれの大学でイベントがあったり、メンバーの予定が合わなかったり、直接ミーティングを行うことがほとんど出来なかった。

・来年も茨城キリスト教大学と連携してフォーラムを開催するとしたら、もう少し早めに動いた

方が良いと思う。また、より連携を深めるためには、電話でミーティングに参加する等、直接会わなくても様々な方法でミーティングを開催したり、ミーティングだけでなく交流会等の場を設けても良いのではないだろうか。さらに、今回のフォーラムのアンケートでは、部屋の広さや使用した名札など、施設や道具の改善を指摘されていたので、様々な場所を下見してリハーサルをしたり、自分達で当日使うものを事前に使用する等、本番前に出来ることは全て完璧にこなしておく、と心がけ取り組んで欲しい。

① 星野由季菜（茨城大学人文学部 高校生部門）

② 本プロジェクトに対する全体的満足度 90 点

③ 自己内省

・プロジェクトの達成に向けてどのような行動・実践をしたか。

高校生部門を担当するうえで、同部門の井上あゆ美さんと積極的に連絡を取り合い、参加対象高校の決定、高校生への宣伝などを行った。宣伝の手段として、ホームページの更新や、母校である水戸第一高等学校への訪問、案内状や書類送付案内状などの外部向け資料の送付、茨城県立図書館へのポスターの掲示を行った。また、フォーラム参加者名簿の作成を行った。フォーラム当日、スタッフとして会場の準備、運営に取り組んだ。参加者の確認をし、多くの高校生、ゲストと積極的に交流した。

・これまでの自分の取り組みについて、評価できる点と改善すべき点。

案内状や書類送付案内書の作など任されたことをしっかりこなすことができた。チーム内でも意見を求められた際積極的に述べるように心がけた。また、高校生の知人や後輩への積極的な宣伝もすることができた。しかし、私の知人や後輩からの参加希望を得ることができなかったのは残念だった。意見を求められなくともチームのために良いと思うことは積極的に述べていく姿勢が必要だった。特に反省したいのが先輩方に甘えて、大変な作業に積極的に関与しなかった点について。どこか、自分は一番年下だからと思っている部分が少なからずあったためであると思う。また、自分は忙しいから、と言い訳をし、積極的に他のメンバーのフォローにまわれなかった。忙しいのはみんな同じであるし、工夫して時間を有効に使えばフォローにもまわられたはずだ。チーム内では年齢も関係ないし、実際私のことをチームの一員として分け隔てなく扱ってくれた。自分のことだけでなく、視野を広げ自分が出来る事を探し、他のメンバーを積極的にフォローする姿勢が必要だった。また、フォーラム開催の3日前に住所の書き損じにより案内状が2名の参加者に送付できていないことが発覚した。再送し、同時に電話での連絡を試みたが通じず、結局その2名は当日欠席した。書き損じがないかの確認をきちんすべきだった、そして、参加者の電話番号だけでなく連絡の取れるメールアドレスを控えておくべきだった。

・このプロジェクトを通して学んだことや成長したこと。

常に「もしも」の場合を想定して動くことの大切さや、外部を巻き込んだプロジェクトにおいて、アポイントメントやマナーがとても重要であることを学ぶことができた。案内状や送付書類案内書などの案内文書の作成をしたのは今回が初めてだった。書類1枚作成するにも、書体は何を使うべきか、書き出しや結びはどのようにすべきか、送付時期はいつごろがいいかなど多くの点で気を使い、改めて協力を依頼した側の負担の大きさを知った。今後、外部との連携が必要なプロジェクトを実行する時のためにも良い経験になった。今回私はスタッフとしてこのプロジェクトに参加したが、参加者と同様に、多くの留学生や高校生と交流して様々な発見があった。私は座談会のグループでタイ人の留学生とペアだった。タイの水は沸騰させてから飲まないとお腹をこわすこと、日本に留学するためには日本語検定に合格しなければならないこと、タイのおいしい食べ物についてなど他にも多くのことを知った。日本の文化との違いを知ることで、今日本で通用している「常識」が必ずしも世界で通用するとは限らないことに改めて気づかされた。フォー

ラムに参加して自らの海外に対する視野がさらに広がった。

④ 客観的分析

・本プロジェクトの目標達成率 70%

・上記の数値の理由

アンケート結果を見たところ、フォーラムの内容に関して多くの人が満足し、楽しめたことがうかがえた。ミーティングの開催回数やフォーラムの開催時期、当日の流れに関して概ね多くの人から満足が得られたと思う。一方、当日の参加者がチームとしての到達座談会の目標であった50人を大きく下回る23人、出席率65.70パーセントという結果に終わった。しかし、当日プログラムを実行していく中で、今回の人数は部屋の大きさからしても適切であったように思われる。また、アンケート結果から改善すべき点もいくつか挙げられる。しかし、本プロジェクト実施にあたって掲げた「海外」に行った人の体験を聞き、また座談会という形で直接コミュニケーションすることを通して、「海外に興味を持つ人」とつながることによって、参加者自らの視野を海外へと広げることを目指す。というコンセプトに関しては概ね達成することができた。実際、座談会を終えた高校生の感想の中にも「行ってみたい国が増えた。」「留学生と交流し、色々な話を聞くことで視野が広がった」等の感想を得ている。以上のことから、本プロジェクトの目標達成率を70%と設定した。

・来年度同じプロジェクトを実施すると仮定した場合、継続すべき点と改善すべき点。

会場について。今回できるだけ多くの高校生の参加を得、且つ全体の把握が可能だと思われる50人を参加人数として設定した。当日の参加者は23人であったが部屋はちょうどよいぐらいだった。つまり、来年度50人参加するとなった場合はさらに大きい部屋が必要だったと思う。パワーポイントや机が使えたのは良かったので、次回もそれらがある部屋を選ぶべきだと思う。経費に余裕があれば、高校生の名札はシールではなく、スタッフやゲストと同様のネームカードを使用すべきだと思う。座談会の時お菓子や飲み物があったのは参加者たちの緊張を和らげてとても良かったと思う。茨城キリスト教大学との連携を強めるべきだと思う。フォーラム前最後のスタッフ・ゲストミーティングの茨城キリスト教大学の欠席を受け、正直茨城キリスト教大学の協力は必要ないのではないだろうかと思った。しかし、当日一緒にプログラムを進めていく中で、茨城キリスト教大学のスタッフ・ゲストは積極的に行動し、会場の雰囲気を盛り上げてくれた。実際、茨城キリスト教大学の協力があったからスタッフ・ゲストの人数を十分に確保できたのだと思う。お互いに欠席の場合の連絡を余裕をもって事前に行うことや、連絡がしっかり取れる環境の整備など改善点はあるが、それらを改善し、茨城キリスト教大学との連携を強められれば次回も良いフォーラムになると思う。

平成 24 年 12 月 25 日

縁の下の力持ち部門報告書

縁の下の力持ち部門 海野侍朗（茨城大学人文学部）
山中健祐（茨城大学教育学部）

I 部門の目的

本企画実施において他部門の補助や物品発注、会場管理などを行い、全体の進行を補助する。また、他部門の取りこぼしを防ぐよう一つの型にとらわれない働きをするよう努める。

II 部門の役割

(1) 会場の手配 (企画当日会場、ゲスト・スタッフミーティング会場)

→当初企画をどこで行うか決まっていなかったため茨城大学内で大人数を収容できる施設を探し当日会場のシュミレーションを行うなどしていたが企画会場が人文学部 A 棟 201 教室に決まってからは会場手配を担当。

(2) 準備物用意 (企画当日並びにゲストスタッフミーティング配布資料準備 (印刷)、当日必要になるモノの準備 (ex. 参加者用・ゲスト用・スタッフ用アンケート、誘導係用マニュアル、ミニキャンパスマップ、持ち看板))

→企画当日用、ゲスト・スタッフミーティング用の配布資料の印刷を担当。また当日に必要なモノとして参加者・ゲスト・スタッフ用のアンケートの作成を行う。裏方として当日必要となるであろうモノを予想し準備していた。

(3) ミニキャンパスツアー企画・運営

→自分達が茨城キリスト教大学の企画に参加した際学内を案内していただいたことと大学紹介の一環として企画運営を行った。

(4) 物品発注 (フォーラム事務用品、インク代等)

→授業内で割り当てられた予算を使いフォーラムに必要なものを購入し、全体の進行を補助し、フォーラムがより満足のいくものにしました。

(5) 予算の管理 (物品発注、送迎バスの費用、ポスターの発注)

→物品発注や送迎バスの手配などで使った金額、もしくはこれから使うであろう金額を把握しまとめることで全体が授業内予算の枠に納まるよう気を配った。

III 予算

(1) 茨城キリスト教大学等との連携事業経費

”10/21 「グローバル教育を語る」講演会+トークセッション@茨キリ大 “
→108,150¥

(トークセッション参加者、スタッフ学生、教員 36,750¥)

(講演会、トークセッション聴講学生、教員 71,400¥)

”10/5、11/2、12/7、12/8 準備会@茨キリ大サテライト “
→3,240¥

”12/9 学生フォーラム@茨大人文 201 “
→117,325¥

計 214,960¥

(2) 上記のうち”茨大学生フォーラム”内の予算

”ポスター市内・大学内周知用 40 枚 “
→7,500¥

”ポスター高校送付用 30 枚”
→7,300¥

”リーフレット高校・市内各所周知用”
→4,770¥

“送迎バス茨キリ高-茨大 25 名小型バス”
→63,450¥

“ネームラベルほかフォーラムに係る事務用品”
→34,305¥

計 117,325¥

IV 反省

・会場が人文 A 棟 201 教室になってからというもの全体運営の取締役部門に会場準備の要請があっ

てから動くというようなことが続き積極的な行動ができなかった。

・準備物に関しては最低限の準備を当日を見越して準備できたと思う。しかし他部門と連携をさらに密にとっていけばさらに明確に当日を予想でき、余裕をもって当日を迎えられたと思う。

V 今後の活動に向けて今回の企画を通して得たノウハウ

・準備段階において本番だったらどうなるのか予想し備えるという経験は今回の企画中でも多角的な視点をもつことに役立った。企画をつくりあげるには企画を行う自分達の視点だけでなく参加する高校生、協力してくれる留学生・留学経験者・運営スタッフなど様々な視点を持つことが必要不可欠である。本番を見越しておくことにより当日スケジュールが出来上がっていく中で「その時高校生への配慮はどうするのか」「本当に想定した流れで上手くいくのか」と考えることができた。この感覚は今後自分が何を行うにしても役立つことだろうと思う。

・当時は場当たりの対処が多かったのですが、かえって長期的な視点の重要性が理解できた。今後は大まかにでも今後の流れを意識することでよりスムーズにやり取りをできるようになるでしょう。

VI 感想

・この企画をつくる途中の段階からの参加だったが実質的な企画の実施に携わることができたことには先ほど述べたように良い経験をすることができた。しかしながら企画というものは一番初めに決める企画理念を柱にしてつくりあげていくものであることから最初から加わりたかったというのが本音である。

個人レポート

① 海野侍朗

茨城大学人文学部所属

インターナショナルチーム縁の下部門

② 本プロジェクトにおける満足度 75点

③ 自己内省

・プロジェクトの目的達成に向けてどのような行動・実践をしたか。

縁の下部門では全体の補助を大きな目的として行動した。その際に海野が物品購入依頼や予算の管理を行い、山中君が印刷物の準備や会場管理を行うというように役割分担をした。それに加えて山中君には名刺作成なども行ってもらった。

当日の活動においては茨城キリスト教大学の学生の会場への誘導や、フォーラム中の照明担当や全体の補助を行いました。

・これまでの自分の取り組みについて、評価できる点と改善すべき点。

部門内で役割分担をしたのはよかったと思っている。役割分担をすることにより迅速に行動することができたしそれぞれの担当しているものに対してより強い責任感をもって行うことができた。しかし役割分担をしてしまったことによりそれぞれの担当していること以外の仕事があった場合、対応が遅くなってしまいました。このようなことがないように互いの連絡を密にし、互いのやるべきことを把握すべきだった。また各部門の要請を受けてから動くことが多かったのである程度全体の流れを予想して行動すればよりスムーズに進めることができたでしょう。

今までのことを反省すると対応が遅い部分や把握していない部分があり、より一層のメールの素早い確認や早い対応を行うべきだった。対応が遅く周りの人に助けられることが多かったのも、逆に周りの人をちゃんと手伝えるようになりたいと思います。

・このプロジェクトを通して学んだことや成長したこと。

全体での活動を通してチームでの活動に必要なことを学びました。具体的には、自分の担当している部分を把握しつつも他のメンバーの担当している仕事を把握するべきだということ。それをしなければ全体の流れを知ることはできないし、特に今回担当した部門は他の部門の補助であったのででき

る限り把握する必要がありました。

このプロジェクトを進めるに従い、メール対応の仕方や礼儀といったものを学びました。このことは社会に出てからも役に立つだろうと思います。何度か対応を間違えてしまい先生に謝りましたが、このことを踏まえて今度は同じ間違いをしないようにできるでしょう。

④ 客観的分析

・本プロジェクトの目的達成率

75%

・上記の数値の理由。

アンケートを見た結果、参加者の満足度は非常に高かったように感じられました。しかし、いくつかの改善したほうが良いという点を指摘されましたし、何よりも当初の目的の人数よりも大幅に少ない参加者数でした。結果的には教室の広さがちょうどよかったとはいえ、このような点から上記の数値にしました。

・来年度同じプロジェクトを実施すると仮定した場合、何を改善すべきか。

今年の進行状況を参考にして物品の購入やバスの手配といったものを少し早めにしておくべきだし、何よりより多くの参加者が来るように早い時期に参加者の募集をかけたリ連絡をして、関係者の予定が合うようにするべきだと思います。

今回の企画は直前になってだいぶ駆け足で作業をしました。結果的には何とか終わりはしましたが、今度やる機会があるのならば早めに行動し、時間に余裕をもって終わらせたいと思います。

10P1121Y 山中 健佑

【今回のプロジェクト全体での満足度】

80%

【自己内省】

1. 縁の下の力持ち部門としての役割・活動

縁の下の力持ち部門として海野侍郎君とプロジェクト全体を通じて他部門のバックアップの役割に携わった。具体的な活動としては縁の下の力持ち部門は二人がそれぞれの役割を主に担い、海野君が必要物品の購入依頼・予算管理を行い、自分は会場の予約や印刷物の準備等を行った。自分個人としてはプロジェクト活動当初は企画で使用する会場探しや茨城キリスト教大学や県内の高等学校等、学外団体とのかかわりが多いことからチームメンバーの名刺作成・準備等を行った。またプロジェクトを本番に向けて仕上げていく段階では当日に協力していただく留学生・スタッフとの打ち合わせで使用する資料の印刷・部数準備、会場の予約・管理等を行った。プロジェクト当日はオーディオビジュアルの管理を担当したが、ミニキャンパスツアーの企画、実行を行ったり、参加者の会場までの誘導の全体統括を行ったりした。それだけでなく参加者やゲストとも積極的にかかわり、交流を深めた。

2. 縁の下の力持ち部門としての反省

縁の下の力持ち部門はバックアップを主に行ってきたため他部門から必要と要請されたものを準備すると言うことが主な活動となる部門であった。プロジェクト当日の様子をふりかえってみてもプロジェクト全体として必要最低限の活躍はできたと思っている。しかしながらそれ以上の活躍も可能であったとも思っている。縁の下の力持ち部門の中で実際に行った以上に今後必要になるであろうと考えられるものを予想することもできたであろう。さらに他部門に積極的にかかわり他部門が行っている事柄に精通してればさらなる活躍をすることができたと考える。

縁の下の力持ち部門内の役割分担も問題があった。各々が自分のすべきことを明確に理解していたことはそれぞれの活動に対する責任感の向上に役立ったが、自分が普段から行っていないことを頼まれた際段取りが分からず失敗しチーム全体の信頼にかかわる大きな失敗をしてしまった。部門内で役割分担をしたとしても部門として行うことに関しては共通理解が必要であった。

3. 全体を通しての反省と成果

今回のような企画を一からつくりあげ実行することは大学入学から携わっているサークルの活動で慣れているつもりであった。しかしながら所詮は学内での活動であり学外団体とのかかわりは初めての経験であった。特にEメールを利用し学外団体の方々と連絡を取り合う際の文書の形というのは明確には理解しておらず今回のプロジェクトを通して獲得することができた知識であると思う。学外団体とのかかわりは初めてだったとしてもそれまでの経験が役立たなかったということはなくこれまで自分の経験を改めて確認する良い機会になった。また自分のこれまで行ってきた企画と今回のプロジェクトが同じような内容だったにもかかわらず辿った経過が違ったことも良い経験だった。自分の経験から言えば今回の企画はあまりにも計画と準備、本番に向けての練習が足りないという印象があったがおおむね満足な形で終えることができた。一つの成功体験から人は確実に成功した時はその時と全く同じ行動をとりがちである。今回のプロジェクトを行う上で自分はそのようになり他の人の意見に批判的な印象をもつことが多かった。どんなことでも失敗の後取り返しがつかないことはそうそうにない。ならば自分が経験したことのないことでもやってみるべきであると考えることができた。

5. 総括

取締役部門

教育学部学校教育教員養成課程国語選修3年次 武田暁人



本総括にあたり、かつて幼かった自分の体験を思い出した。今では当たり前のように毎日歯を磨いているが、自分で磨かなければならなくなった頃はとても面倒なことに思えた。そして、正しい磨き方をまともに知ろうとしなかったために近所の歯医者にはよくお世話になった。これはいわゆる習慣というものであるが、何事も初めての頃はわからないことが多く面倒であり右往左往してしまう。

今回のプロジェクト遂行にあたり組織にある習慣や伝統が、たとえそれらが形骸化されていたとしても価値を持っているということを痛感した。接点がほぼ皆無の学生が集まった時、何かに取り組むに際して既存の「習慣」はなかった。自分たちが組織として「習慣」を作っていくということはとても容易ではなかった。白紙から何かを始める。今回の経験はメンバー全員にとって貴重な経験になったと思う。

取締役部門

人文学部人文コミュニケーション学科3年次 芦田真子



頭の中にある理想や立てた目標や目的を現実と擦り合わせていく作業に苦労しました。企画を進めていく中でも計画を形にしていく作業がなかなか思うように行かず、実行力の試練だったと思います。結果的に全ての目標実現はなりませんでしたが、自分たちが企画に対して投入した行動に対する結果としては妥当ではないかと考えています。しかし個人にはもっと実力が発揮できる機会があったにも関わらず、その能力を使いこなせていなかった点は惜しかったです。今後この企画が展開していくのは分からず、自分たちの活動が何かの問題を解決し影響を与えたのかをはっきり知ることができないのが残念ですが、少なくとも短い間で限られた周囲の環境を動かし、自分自身を磨いていけました。今後この経験を生かして、各々が他の機会でも貢献していくことができたらいいと思います。

人文学部社会科学科3年次 大河由佳



本フォーラムを振り返って、私は楽しかったことよりも、辛かったことの方が多かったように思う。フォーラムの内容について何度もゼロから考え直したり、大量のメールのチェックをしたり、メンバーに対して憤りや物足りなさを感じたり、それらをどのようにして乗り越えるのか、苦悩の日々だった。しかしそれは私だけでなく、多かれ少なかれ、チームのメンバー全員が感じていたことだと思う。よって、誰もこのプロジェクトを投げ出さずに、最後まで取り組んでくれたこと、役割を果たして切れたことにはとても感謝しているし、いなくていいメンバーは一人もいなかったと考える。

また、前例のないプロジェクトをゼロから企画・運営できたことは、「自分にも何かできるんだ」という達成感と自信につながったし、今後、社会に出てからも今回は様々な場面で生かすことができると思う。多くのことを学ばせていただいた本企画に参加できたことを大変うれしく思う。

縁の下の力持ち部門

教育学部学校教育教員養成課程社会選修3年次 山中健佑



私がプロジェクト実習（スタッフ編）に加わったのは各チームがそれぞれにテーマをもち活動を始めた後であったため、インターナショナルチームではどのような理念をもって活動するのか既に存在するものを頭に入れて活動することとなった。今回「国際理解」と「地域協力」という理念の下「国際交流 学生フォーラム『〈海外〉を近くに感じよう！』」を開催し、多くの人とかかわることができ、またこの開催までの過程でこれまで自分の経験したことのない活動をすることができこれから社会に出る人間として少なからず成長をすることができた。しかしながら唯一の心残りとしてはプロジェクト実習（スタッフ編）開始時に参加し、自分自身で行う活動を一から考えつくりあげたかったということである。活動理念から自分自身も携わった上で生み出し実現させるという一連の過程を経験することによって、今回フォーラム成功によって得た達成感よりも大きな達成感を得ることができたのではないかと思う。

高校生部門

人文学部人文コミュニケーション学科1年次 星野由季菜



国際交流に興味があるという理由で軽い気持ちで参加したフォーラムの企画と運営。企画を実行するためには多くの協力と時間、マナーや責任感、最後までやり抜く気力など本当に多くのことが必要であることが分かった。企画を実行することの大変さを思い知りました。忙しく大変なこともたくさんあったが、それ以上に参加しなければ得られなかった経験や新しい人間関係などの方が大きかった。参加して本当に良かった。

チームを部門に分けたのは、各々が自分の役割を意識して行動できた点では良かったと思う。その一方で、自分の担当以外のフォローがお互いにできていなかった点については課題が残ったように思える。

報告会においても多くの反省が挙げられたが、参加者のアンケート結果からも、国際交流という点においては満足のゆくものであったように感じる。今後各々がこの企画の実行の過程で得たことを活かしていければ良いと思う。

高校部門

人文学部 人文コミュニケーション学科 3年 井上あゆ美



私はインターナショナルチームの一員として12月のフォーラムを成功させることを目標に半年以上前から準備を行ってきた。半年と言うと、長く、準備期間は余裕があるように感じるかもしれないが、実際は忙しい時期が集中してしまっていたり、他の予定とも重なってしまい慌てて分担をこなしていたことが多くあったように思う。最初の段階でもう少し長期的な計画を立てておけばよかった。

今回のフォーラムだが、授業自体初めての試みであったので、迷ったりわからなかったりしたこともあった。しかし様々な方の協力で無事フォーラムを開催させることができた。その中で特に感じたのが、人との繋がり大切さだ。もちろんチーム内の協力は不可欠なものだが、周囲の多くの人の協力がなければ成功させることは出来なかった。プロジェクト実習を新たに受講する学生に、困った時には一人で解決しようとせず、周りの学生や先生等、誰かにアドバイスを求めることも大切だということを伝えたい。

コンテンツ部門

人文学部人文コミュニケーション学科3年

川崎奈菜



「実習プロジェクト」という茨城大学初めての試みに携われたことを嬉しく思う。私にとっても初体験のことが多い活動だったが、メンバーや先生との準備期間を通して、参加者の高校生との交流を通して、様々なことを学べた。

日時・規模・内容・高校生の募集方法など、何もかも0からのスタートということで、「まず何を考えていけば良いのか」という点に最初は苦労した。その中で、地道に話し合いを重ねることの重要性を知った。会議をしていく上で、自分の意見を相手に上手く伝える方法や、全員の意見を取り入れられるような解決案を見つけることに苦労した。加えて、他のチームよりも会議数が多いので、チーム全体で「会議力」という根力がついたのではないかと思う。また、学生主体でイベントを開催するのは、サークル活動においても多い。だが、サークルでのイベント開催と、この実習プロジェクトのフォーラム開催は、「授業の一環」「連携プロジェクト」「大学の公式活動」である点で大きく異なり、大学を代表して行動しなければならなかった。

参加者の高校生は皆気さくで明るく、私が想像していたよりも積極的に私たちと交流してくれた。フォーラムが大成功に終わったのは、高校生が楽しんでくれたおかげでもある。高校生の「大学生が優しくて、とても楽しく過ごすことができた」「英語圏だけではなく、アジアへの留学にも興味を湧いた」という感想を聞いた瞬間の、嬉しさと達成感を、私は未だにハッキリと覚えている。こうした喜びを感じられる授業はめったにないため、実習プロジェクトが今後も茨城大学に普及し、全国でも有名になるような授業になって欲しいと思う。

縁の下部門

人文学部社会科学科経済経営コース2年次 海野侍朗



このフォーラムを実現するのに様々な困難がありました。企画の目的やその内容、最終的にどのような形にもっていくかなど何もかもが手探りの状態であり、正直うまくいかないことばかりでした。フォーラム自体に関してはまずまずの出来であったと思いますが、後から振り返れば同時に至らない点も多く存在していました。スケジュールに関しての余裕や組み立て、自分の担当の正確な把握、メールの確認等々といった作業、これらに関してはもう少しうまくやれたのではないかという後悔もあります。

ですがその過程でこの活動でしか得られることのできない貴重な経験を得ることができたと思います。この経験は将来の社会活動において役に立つと思います。メンバー全員がこの経験を生かし、何かに役立て、そのうえで楽しんでいただけたならばいいと思います。

6. 顧問教員より

茨城大学・茨城キリスト教大学連携プロジェクト 「国際交流学生フォーラム」を終えて

留学生センター准教授
藤原 智栄美

国際交流学生フォーラム「＜海外＞を近くに感じよう！～今、新たなマドを開ける時」は、茨城大学留学生センター・茨城キリスト教大学国際理解センター連携プロジェクト（今年度が初の取り組みである）の一環として、平成24年12月9日に開催された。フォーラムの実行委員会としてインターナショナルチームが5月に結成され、約7ヵ月間、企画・運営に当たった。以下、活動の特徴と意義について述べたい。第一に、本事業が「国際交流・地域貢献・高大連携」という3つを組み合わせた新しい交流形態で行われたことである。留学生と日本人学生との交流を目的とした行事は学内でいくつか行われているが、海外に興味を持つ高校生・海外留学経験を持つ日本人学生・多様な国籍の留学生を対象とし、他大学との連携を軸に参加型の活動を実践したケースはこれまでにない。第二に、フォーラム当日は、留学経験者・留学生が話題提供者となり、海外留学や異文化での生活に関する情報と意見を交換し合う協働的な取り組みがなされたが、フォーラム後のアンケート調査結果によると、参加者の企画内容に対する満足度は高く、海外留学に対する意欲の向上や、「海外＝欧米」という固定したイメージから異文化の多様性に対する視野への広がりを示すコメントが見られた。このような実践参加型の異文化間交流は、近年求められているグローバル人材育成の要件としての異文化間コミュニケーション能力・異文化対応能力向上にもつながるものと思われる。第三に、キャリア能力向上の観点から述べたい。インターナショナルチームのメンバーは、連携プロジェクト第一弾「グローバル教育を語る」の当日運営スタッフとして参加するとともに、学生フォーラムの実施及び成功という目標を共有し、日々の作業に向き合った。その過程では、チーム内の話し合いに加え、高校への宣伝活動、茨城キリスト教大学の方々とのメールでのやり取り等の様々な作業に取り組み、その都度メンバー間の意思決定の場に直面した。時には異なる意見をいかに相手に伝え、それぞれの意見をいかにすり合わせて決定するのかという合意形成能力、相手に分かりやすく伝える説明・交渉能力は、将来的に仕事をしていく上でも常に必要とされる能力であろう。アメリカの哲学者ショーンは、自分の行動や現状を後から思い返し、フィードバックを受けて多種多様な視点を受け入れ、次の行動を環境に適したものに変わっていく「振り返り」の重要性を指摘している。チーム内で対話を重ねたプロセスは、まさにこうした「振り返り」の連続だったのではないだろうか。

本フォーラムは、初めて直面する作業に試行錯誤しながら取り組んだこともあり、各担当者が本報告書で挙げた課題も残る。しかしながら、国際交流という観点から高校・地域と大学をつなぎ、将来的にグローバル人材となる可能性を持つ高校生に海外を少しでも身近なものとして感じてほしいというチームの思いは多くの参加者に伝わったものと感じている。今後は、今回課題となった点を、メンバー一人一人が様々な活動・場面で活かしていくことを願っている。また、自分自身、茨城という地域の特色を国際交流にいかにつけていくのかという、今回の活動を通じて改めて感じた課題により深く目を向けていきたいと考える。

おわりに

学生フォーラム スタッフ代表
教育学部 3年次 武田 暁人

私たちがチームを結成した当初は、大学生である私たちが果たしてどのような取り組みができるのか悩み右往左往していました。結果的にはこのように評価できるイベントをやり遂げることができましたが、決してまっすぐに進んだ先に到達したものではありませんでした。もし到着地点を目指してまっすぐに邁進していたのであれば、もっと違った結果を残すことが出来ていたのではないかと思います。

ただ、今回は回り道をしたからこそ見えたもの、遠回りしたからこそ学んだことが多々ありました。このことは今回実施にあたり協力した学生たちが手にしたことではないかと思えます。今後の大学生活、あるいは社会に出ていくにあたってとても貴重な経験を今年度にしたのではないかと思えます。

何にも増して参加された高校生の皆さまには、スタッフとして見ていてとても楽しい時間、そして非日常的な時間を過ごして戴けたのではないかと思いました。また、各自の立場で「海外」を近くに感じることができたのではないかと思えます。私が高校生の頃を想像すると、このような機会、出会いは無く、勉強と部活で毎日が流れていました。かつて高校生の頃にこのようなチャンスがあれば、現在とは違った選択をすることが出来たからかもしれないという思いも抱きながら企画を進めてまいりました。今回の体験を日々の勉強、あるいは今後の進路に役立てていただけたら幸いです。

最後になりましたが、本プロジェクトを進めていくにあたって多くのご理解、ご協力、ご助言を数多くの方々からいただきましたことを記させていただきます。まず、本プロジェクトを立ち上げる機会を与えてくださった茨城大学の鈴木敦先生、顧問の藤原智栄美先生、池田庸子先生、また茨城キリスト教大学との連携の中でお世話になりました茨城キリスト教大学の国際理解センター長上野尚美先生、文学部長・現代英語学科教授東海林宏司先生、さらに大学の窓口となってくださった茨城大学学務部留学交流課、資材を提供くださった茨城大学学務部入学課、そして要であった対象の高校においては、本プロジェクトの趣旨にご理解、ご賛同いただきご協力いただいた茨城キリスト教学園中学校高等学校校長の鈴木龍夫先生、同じく副校長の関和彦先生、茨城県立水戸第二高等学校校長の秋山久行先生、同じく教頭の井坂博子先生、これらの方々のお力がなければ本プロジェクトは決して遂行できませんでした。この場を借りて、本プロジェクトに携わってくださった多くの方々に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

IV : 学生表彰

学生表彰

板垣 里沙

学生表彰は、学術又は教育の分野で、顕著な成果を挙げたと認められる者、課外活動において、文化・芸術の分野で文化の向上発展に顕著な功績を挙げたと認められる者、又は体育の分野で優秀な成績を挙げたと認められる者、ボランティア活動等により、地域社会に多大な貢献をしたと認められる者、人命救助、重大事故の未然防止など、社会福祉の維持増進に顕著な貢献をしたと認められる者、その他、他の模範とするに足る行為があったと認められる者を対象として、学長が表彰する制度です。
(茨城大学ホームページより引用)



池田学長



会場の様子



表彰状授与の様子

今年度の学生表彰では、プロジェクト実習（スタッフ編）から「震災チーム」、「里美 Café チーム」、「インターナショナルチーム」の3チームが受賞されました。1年間の活動がこのような形で認められることは大変素晴らしいことです。学生表彰を受け、今まで各チームが行ってきた活動に自信が持てるようになったと思います。

授賞式は、厳かな雰囲気、受賞者たちは少し緊張している様子でしたが、堂々と表彰状を受け取っていました。



授賞式の様子



表彰されている齋藤さん

受賞者の一人、里美 Café チーム代表の鈴木愛実さんは、「様々な方にご協力いただきながら、なんとか進めていった活動ではありましたが、このような形で評価されたことを大変光栄に思っています。」と受賞した気持ちを語ってくれました。



受賞直後の鈴木さん

これからも各チームの活動を継続し、チームが努力していくことで、さらによいものが出るのではないかと思います。今年度の活動を元にこれからも頑張っていきましょう。



桜の木の下で



左：藤原先生、右：蜂屋先生



学生表彰受賞おめでとうございます。

V : 平成 24 年度の成果と今後の課題

V：平成24年度の成果と今後の課題

プロジェクト実習担当 鈴木 敦

本書の最後に、今年度の成果と今後の課題を整理しておきたい。

1：今年度の成果

今年度のプロジェクト実習は、初開講にも拘わらず学生たちの積極的な活動と関係各位のご尽力により、初期の目的を達成できたと判断している。主たる成果を以下に列記する。

(1) PBL 科目の立ち上げ

プロジェクト実習は、本学根力育成プログラムの柱の一つと位置づけられている。PBL 技法に基づく正規科目は、少なくとも本学人文学部においては初めての開講であった。担当教員の専門は中国考古学でありいわば素人芸による運営であったが、履修学生の積極性と関係各位のご尽力により、ともかくも年間を通じて破綻無く運営できたことは大きな収穫であった。

昨今の財政事情の逼迫を考えれば、残念ながら PBL 教育の専門家をパーマネントの教員として迎えることができる可能性は低いと言わざるを得ない。筆者のような「その道の専門教育」を受けていない教員であっても、それなりの体制を整え周囲のご助力が得られれば、どうにかこうにか運営が可能であることを示せたのは、何よりの収穫であったと思う。

(2) 普及への「芽」

根力育成プログラムは、本来であれば本学の全ての学生に受講して貰いたいカリキュラムである。しかしながら、これは学生の志向もさることながら大前提となる開講科目のラインナップの制約から、一朝一夕に成し遂げられるものではない。根力育成プログラムを構成する各科目（＝多くの場合、既存の教員の専門性とは直接関係しない、あるいはかけ離れた内容を持つ）を、自己の専攻から「一歩踏み出して」担当して下さる方がどれだけ出てくるかが普及の鍵となる。幸いにして今年度は4チームのそれぞれについて「顧問」をお引き受け下さる先生方に恵まれた。このような形で関与して下さる先生方が増えてくれれば、自ずと PBL 科目の裾野は広がる。今年度は普及の芽を探すことの困難さと同時に、芽は確かに存在すると実感することができた。

(3) 学部間連携・大学間連携・地域連携への拡大の可能性

今年度の活動内容には、学部間連携（＝インターナショナルチームにおける教育学部学生の参加）・大学間連携（＝里美 Café 並びにインターナショナルチームの活動における、常磐大学・茨城キリスト教大学との関わり）・地域連携（＝4チームの全てが、それぞれのスタンスで学外・地域との関わりの中でプロジェクトを推進）の「芽」も内包されていた。まだまだ小さな芽に過ぎないが、来年度以降の継続・発展により、大きく成長させることができるのではないかという手応えも感じている。今後の展開に期待したい。

2：今後の課題

今年度のプロジェクト実習開講により、今後の課題も浮上してきた。主な物を以下に列記する。

(1) 「客観的な評価」を巡って

① PBL 科目の評価を巡る現状

PBL 技法に基づく正規科目は、少なくとも本学人文学部においては初めての開講であったが、一方で教育課程外での PBL 「的」な取り組みであれば、筆者自身のそれを含めて人文学部の実績には枚挙に遑がない。両者を隔てる物、換言すれば後者の事例が多数ありながら前者への移行例が絶えて無かったのは、いかなる理由に拠るものであろうか？

思うに両者を隔てる最大の差異は、後者が教育課程外で「自由に運用できる」のに対して前者は正規科目として「最後に評価、それも＜客観的な＞評価を求められる」所にある。「正解」がはっきりしている理科系の科目に比して、人文系の科目における「客観的な」評価が難しいことは、今更言うまでもない。PBL科目となればその困難さはさらに増大する。一方で、「客観的な評価」を求める「圧力」は益々高まっている。これが教員を躊躇させ、PBL科目の普及の足枷になるのは、至極当然のことである。

同志社大学 PBL 推進支援センターは、日本における PBL 教育のメッカとも言うべき組織である。同センターが平成 24 年 2 月 18 日に開催した GP シンポジウムは、「学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！ ー誰が何をいかに評価するのかー」と題して、PBL 科目の評価に纏わる問題を真っ向から論じようとしたものであった (<http://pbl.doshisha.ac.jp/blog/201201.htm>)。席上、様々な知見や実践例が披露されたが、当然ながら「こうすれば全て解決」といった決定的な手法はもとより存在しえず、改めて「PBL 教育における客観的評価の重要性と、実際の評価方法の難しさ」を実感することとなった。同時にまた、ベテランの担当教員といえども評価の客観性を担保するためにご苦勞を重ねながら工夫を凝らしておられることを知り、大いに勇気づけられたものである。

②学生による相互評価導入の試み

とはいえ、現実に正規科目として開講する以上は某かの「客観的評価」を示さねばならない。今年度のプロジェクト実習の履修生は 20 名余と少ないものの、チームごとの自発的活動を重視するという科目設計に照らして、個々の学生の全ての取り組みを直接目にし、客観的な評価を行うことは不可能である。そこでより多くの評価者による判断を求め、それらを集約・勘案して少しでも「客観性」を高めようと考えた。即ち

a : 実習担当教員の評価

に加えて

b : 顧問教員の評価

c : 学生自身による相互評価

という 3 通りの評価を集め、(1) を主としながらも (2) (3) を援用して最終的な評価を下す、ということ構想した。

具体的には、事前アナウンスの上で 1 月 30 日の最終講の席上、図 1 に示すフォームを配布して、チームごとに学生自身に相互評価をさせると共に、各顧問の先生方にも、ご担当戴いたチームについて同様に評価して戴いた。また、筆者も同一フォームで評価を下し、その結果を対比することとした。

③結果と課題

学生による相互評価の結果を概観すると、以下の傾向が見て取れた。

a : 評価者の如何に関わらず、「上位に評価される学生のグループ」と「下位に評価される学生のグループ」に二分される。

b : 各グループ内での順位は評価者によって微妙に変動するが、同一学生が評価者によって上位グループに位置付けられたり下位グループに位置付けられたりする、というケースは極めて希である。換言すれば、評価者による揺らぎが上位／下位グループの枠を越えるほど大きくなるケースは滅多にない。

筆者は、過去に担当した主題別ゼミナール（以下「主ゼミ」）においてもほぼ同様の形で、学生による相互評価を実施した経験を持つが、その際の傾向もこれと似通ったものであった（主ゼミでは「上・中・下の 3 グループ」に分化した。これには、1 クラス約 20 名を一つのグループとして実施したため、今回に比べて母集団が大きかったことが影響している）。引き続き実施例を蓄積していかねばならないことは勿論であるが、学生による相互評価の信頼性は思ったより高いと考えてよさそうである。

上記の結果を顧問の先生方による担当チームの学生に対する評価と付き合わせてみると、（これもまた実施例に限られているという留保条件はあるものの）ほぼ同一と見てよいと判断された。

例外的に評価が分かれたケースにおいては、例えば「意欲的かつ有能でありリーダーシップもある

が、時としてそれが強引に過ぎることもある」というような、「同一事象のプラス・マイナスの、どちらをより大きく見るか」といった性質の問題に対する判断の差違が原因と思われた。相互評価に当たっては「貢献度の高さ」という甚だ漠然とした基準しか示していない。一方で、闇雲に基準を細かくすれば客観性が高まるというものでもなかろう。引き続き検討して行くことが必要である。

チーム内相互評価表 評価者氏名：

* この表は「チーム内メンバー同士」での相互評価用です。自分自身を含めて貢献度が高いと判断した人から順に氏名と役割分担を記入して下さい。隣接する上位と下位の間隔を、それぞれ1～5の数値で記して下さい。その際、「同一順位」は厳禁です。また、最上位から最下位まで間隔が全て同一、というのも通常はあり得ません。判断根拠欄の記述内容と整合が取れるよう十分意を用いつつ、大小のメリハリを効かせた数値を定めて下さい。

* 皆さんにとっては、将来「管理者・評価者」として「公平・公正な評価」を下せるようになるためのトレーニングになります。仲良しを最優先せず、自分のことも変に謙遜せず、ひたすら「公平・公正な評価」に努めて下さい。皆さんから提出された相互評価表の、鈴木にとっての意義は2つあります。1つは、鈴木が評価を下すに当たって、客観性を高めるための参考資料。もう一つは、提出者の「公平・公正な評価能力」を評価するための判断材料です。つまり、「評価を下した皆さん自身が、自らが下した評価の公平性・公正性によって評価される」ということです。恐らく、今回の授業で一番イヤ～な作業になるとは思いますが、頑張ってください！

順位	氏名	役割分担	間隔(1～5)	判断根拠
1 (高)				
2				
3				
4				
5				
6				
7 (低)				

図1：チーム内相互評価表
(顧問教員・担当教員用評価表としても使用)

一方で、筆者による評価結果を学生並びに顧問による評価結果と付き合わせてみると、概して同一の傾向を示すものの大きくずれるケースも散見した。当該ケースを検討してみると、ほぼ全てが「学生並びに顧問の先生方による評価において上位グループに位置付けられている学生を、筆者は下位グループに位置付けている」というケースであった。当該ケースについて更に子細に検討してみると、ズレの原因は概してチーム内での裏方仕事での貢献に対して十分目が届いていなかったために、これを正当に評価できなかったという所にあるようであった。一言で言えば「実習担当教員として学生の自主的活動部分に十分目が届いていなかった」ということになる。

言い訳がましくなるが、学生・顧問による評価は当事者が深く関わった特定のチームに限定してなされたものであるのに対して、筆者のそれは実習の担当教員として4チーム全ての学生に対して行ったものである。僅か4チーム・20名余を対象とした評価でもこのような事態が生じている。来年度以降、受講生が増加すれば「目が届かない」範囲がさらに膨らむのは避けられない。具体的な方法については更に検討を重ねる必要があるが、前述の「(実習担当教員一人の評価に拠るのではなく)より多くの評価者による判断を求め、それらを集約・勘案して少しでも客観性を高める」という方針を堅持しなければならないことは疑いない。

3：顧問のあり方と評価・普及

今年度の顧問の先生方には、漠然と「チームの相談に乗って戴く」ことをお願いした。その結果、「恒常的に・極めて密接に」関わって下さった方から文字通り「相談があった時だけ対応する」という形を取って下さった方まで、そのスタンスは様々であった。現状では、顧問就任はあくまでその先生方のボランティアな意志に頼る形になっている。そのような体制である限り、「漠然としたお願い」にならざるを得ないのは当然である。

とはいえ、たとえボランティアであってもお引き受け戴いた先生方には相応のご負担をおかけすることになる。引き続きご好意に頼るだけで済ませられるとは思えない。また、今後「評価の客観性」を担保する上で顧問の先生方に評価面でも深く関与して戴く必要が高まれば、そのスタンスについても某かのガイドラインの統一措置が必要になってこよう。一方で、PBL科目の裾野を広げるという課題に照らせば、顧問就任が過重な負担となるような体制は避けねばならない。これはもはや一担当教員の意志でどうこうできる性質の課題ではなく、今後学部レベル・全学レベルでの検討をお願いしなければならないと考える。

4：予算措置

今年度は周囲のご支援と幸運も重なり、予算措置については全く心配なく運営することができた。しかしながら、見方を変えれば「単年度限りの予算をかき集めて何とか凌いだ」という表現も可能である。継続的な科目運営のためには、安定的な予算措置が不可欠である。こちらについても、今後学部レベル・全学レベルでの検討をお願いしなければならないと考える。

5：学外活動と安全確保

PBL科目の性質上、学生が学外で活動する機会も多い。個々の学生による学生保険への加入は当然の大前提として、大学としてその安全と万一の際の十分な対応を担保する体制の整備が急務である。引き続き全学レベルでの対応を強く働きかけていく必要がある。

初開講ということで、万事手探りで進めざるをえなかった今年度のプロジェクト実習であったが、学生たちの頑張りや周囲の方々の暖かいご支援により、成功裏に終了することができたと思う。一方で、解決すべき課題も多数浮上してきている。これまでのご支援に厚く御礼申し上げますと共に、より一層のご支援をお願い申し上げます。

おわりに

プロジェクト実習担当教員 鈴木 敦

本報告書の刊行を以て、今年度の「プロジェクト実習（スタッフ編）」は全ての計画を無事完了することとなる。思い返せば一年前の今頃は、開講を目前にしながらなお細部が詰め切れていないことへの焦りと初開講の不安に苛まれる日々であった。今、最後の原稿となるこの文章を書きながら、学生達の頑張りと多くの方々のご支援に支えられて何とかここまで辿り着くことができたことへの深い感謝の思いに包まれている。来年度からは「リーダー編」も開講され、いよいよプロジェクト実習の本格的な運用が開始される。最後に、ここまでご支援下さった全ての皆様に改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。引き続き、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成25年3月27日 記

編集後記

人文学部社会科学科 2年 板垣里沙

私は編集委員長として、報告書作成までの段取り、報告書全体のとりまとめをしました。報告書の編集作業は初めてのことで戸惑ってしまうことも多くありました。しかし、鈴木先生をはじめ、編集委員の皆さんに支えられてなんとかこのような形にすることが出来ました。

チームの活動紹介のページは、各チームの特色が出るように、内容は各チームの裁量に任せるようにしました。活動に対しての熱い思いや活動して感じたことを実際に体験した学生の素直な言葉で書かれているので、リアルでバラエティーに富んだ報告書になっていると思います。この報告書は、各プロジェクトチームが1年間頑張ってきた証になるものになりました。

来年度も新たなプロジェクトチームが始まります。この報告書が、今後のチームの活動の発展のために参考になるものになってほしいと思います。

人文学部社会科学科 2年 仁木陸

みなさんお疲れ様でした。こういった報告書作りのノウハウを知っている鈴木先生のお力添えがあったからこそ上手くいったのだと思います。それに、編集委員のみなさんが優秀だったおかげで、すすると編集作業が進みました。一方私は、一応副編集長という役についていながら、それらしいことを何もできませんでした。特に編集長には頭が下がる思いでいっぱいです。申し訳ありませんでした。震災チームの報告書の編集作業も、メンバーが文章を書き慣れた3年生だったこともあり、スムーズに行うことが出来ました。ここでこの報告書作りに携わった方に感謝の意を表します。ありがとうございました。

編集作業を通して、自分達がやってきたことを振り返ることができました。震災チームの目標として「震災を風化させない」ということを挙げています。この報告書はまさしくその目標を達成するのうってつけだと思います。この報告書が一人でも多くの人の目に触れることを願っています。

人文学部社会科学科 2年 伊藤美保子

こうして編集委員として里美 Café チームのずらりと並べられた活動の一覧を見ていると、本当に感慨深いものがあります。もちろん、議事録にも載せられないほど幾度も集まった会議、失敗に終わってしまった地域参画プロジェクト、頭をひねりながら何度も作り直したパワーポイント、寝る間も惜しんだ出店準備など、今回の報告書にはページの関係で載せられなかったものも多々あります。授業内で行ったブレインストーミングの、ただ「出店しよう！」と何もないところから始まった私たちが、どうやって里美地区とつながっていったのか。そしてどのように輪が広がっていったのか。里美 Café チームの編集委員として、編集していく上でそれが上手に伝えられない事がもどかしくもありました。しかし、この報告書によって少しでも私たち五人がこうして一年間努力してきたという事が残り、そして次に繋がっていくきっかけの一つとなることが出来たら幸いです。

人文学部人文コミュニケーション学科 2年 藤根麻里

私は、報告書などの編集をするのは初めてだったので、少し緊張しながら作業を進めました。編集委員長の板垣さんをはじめ、編集委員のみなさんにはたくさんのご迷惑をおかけしてしまったと思います。また、報告書をまとめるにあたって一緒に原稿を作成してくれた同じチームのみなさんにもご迷惑をおかけしました。文章の編集について不勉強な私が編集委員としての仕事をできたのは、周囲の皆さんのご協力があったからこそです。しかし、一つの授業をまとめた報告書を作成するというとても貴重な経験をすることができて、非常に光栄に思います。このような機会を与えてくださった鈴木先生に、この場を借りて感謝の気持ちを表したいと思います。ありがとうございます。最後に、編集という作業は大変であると同時にとてもやりがいのある作業でした。この報告書の作成に編集委員として関わることができて嬉しいです。ありがとうございました。

人文学部人文コミュニケーション学科 2年 海野侍朗

はじめまして、インターナショナルチームの海野と申します。このたびは同チームの報告書編集を担当いたしまして大変恐縮な思いです。このチームの活動に関しましては、フォーラムを開きまして、ほかのチームとは異なりチームメンバーが参加者というよりは外部に参加者を集い満足してもらい、チームの目的を果たすというものでした。ですので、ほかのチームよりも関係資料が多く存在しております。できれば結果やアンケート分析だけではなく、関係資料にも目を通していただければ幸いです。

フォーラムにおいては、大学生だけではなく高校生にも参加していただきました。その点でより広い層にこの活動を認知していただけたと思います。またこのフォーラムは日本人と外国人が互いを知る機会の一つとなることを期待して行われたものでもあります。その点に留意してこの報告書を読んでいただければ幸いです。

人文学部人文コミュニケーション学科 3年 渡辺紗代

私自身、就職活動中ということもあって、会議に参加することが難しかったというのが反省です。ほかの編集委員への負担も多くなってしまって、会議にも参加できないのなら、辞退することも早い段階で考えるべきだったと思います。編集委員の皆さんには、任せっぱなしにしてしまって申し訳なかったです。

会議などの全体のことが参加するのが難しかったので、その分、チーム内の編集作業には積極的に参加したつもりです。チーム内での報告書に関する話し合い、メーリスにはなるべく参加・返信することを心がけました。

製本作業のアルバイトの書類作成の際のアクシデントに関しても、就職活動中で自分は出先にいたのですが、チーム内への呼びかけはやったつもりでいます。合間での呼びかけだったので、呼びかけっぱなしだった感は否めませんが、そこは、藤根さんがフォローしてくれていたのが、本当にありがたかったです。

2012 年度 根力育成プログラム

「プロジェクト実習（スタッフ編）」

活動報告書

平成 25 年（2013）3 月 27 日刊行

編集 鈴木敦 板垣里沙 仁木陸 伊藤美保子
藤根麻里 渡辺紗代 海野侍朗

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

茨城大学人文学部

e-mail suzukia@mx.ibaraki.ac.jp